共学化と「二人の校長」

1. 「二人の創設者」

『久留米大学附設高等学校50周年・附設中学校30周年記念誌』（平成12年11月３日発行）の冒頭には、第８代樋口忠治校長先生が書かれた「二人の創設者」と題する文章がある。その冒頭は「久留米大学附設高等学校の創設について語るには、初代校長板垣政参博士*について語ることになるのは勿論であるが、もう一人の人物、すなわち当時の久留米大学学長小野寺直助博士についても語らなければならない」と書き起こされている。これは、樋口校長ご自身が「二人の創設者」の出身地を遠く岩手県に尋ね、母校旧制盛岡中学（現岩手県立盛岡第一高等学校）はじめ所縁の地を実地踏査され、その生涯にわたる親交を明らかにされたもので、校内の職員研修で詳しく紹介され、一同大いに啓発された。機会があれば是非ご一読いただきたいと思う。

＊同文中「２．板垣政参博士小伝」の略歴に「昭和18年４月25日ジャカルタ医科大学長（任陸軍司政官）」とあるIka Daigakuは、国立インドネシア大学の起源としてProf. Itagakiの名と共に今日でも語り継がれている。

2. 二人のOB校長先生

さて「二人の創設者」ではないが、平成時代前半の「二人のOB校長先生」に注目してみよう。第７代 鹿毛勲臣校長先生（1993(平成５)年度～1997(平成９)年度）と、その後任の第８代 樋口忠治校長先生（1998(平成10)年度～2006(平成18)年度）である。お二人はともに附設高校OBで、鹿毛先生が附設高校創立43年目にOBとして初めて校長になられたことになる。当時の附設は、１学年の定員200人の、独自の校風をもつ中規模「中高一貫男子校」として一つの成熟期を迎えていた。今日に続く附設の特色や特徴の主要なものはすでに備わっていたという意味である。世間や周囲は、OBも含めて、そう見ていたであろうし、附設への期待は年々高まっていたといえる。その一方、昭和から平成にかけての頃には、運営上のいろいろな課題も出現していて、それらを上手に克服し、次の段階へ如何に成長できるか、附設に期待すればこそ厳しく問われていた。その舵取り役となる校長には大きな期待と要請が寄せられていたといえる。

1998（平成10）年頃の校舎空撮

鹿毛校長の時代には、高校44～48回生が入学し、42～46回生が卒業した。生徒はまだ昭和生ればかりとはいえ、平成の時代になり、21世紀も近づき、これまでの蓄積を土台として次の段階を目指そうとする空気感があった。

1998(平成10)年頃の空撮写真に見える校舎を見てみよう。当時から豊かな緑の中にある校舎で、管理棟といえる「１号館」（写真❷）は、１階に

事務室、校長室、技術教室、２階に地理教室、歴史教室、合同講義室、LL（兼情報）教室、３階に音楽教室、美術教室、進路指導室、図書館などがあった。教室棟といえる「２号館」（写真❸）は、１、２階中学、３、４階高校教室のほか、１階に保健室、２階に職員室、１～４階東側に理科室などがあり、「正門」（写真❶）からの長いアプローチの先に聳え立つファサード（建築物の正面）は附設を象徴する景観であった。「中学寮」（写真❾）の位置はそのままだが、「高校寮」（写真❽）部分は新校舎「東棟」になった。

私には鹿毛校長の印象深い思い出がある。鹿毛校長は職員朝礼のあと、校長室へ戻られる途中の進路指導室によく立ち寄られ、短時間を過ごされることがあった。その場には大抵教師たち数名が出入りしていて、朝の何気ない会話がある。ふとある生徒の話題が出たりすると、鹿毛校長は高校生でも中学生でも、その生徒のことをよくご存知であることに驚愕させられた。私自身それまでに複数の学校を経験し、「校長」にも何人も出会ったが同様の経験は無かった。OBでもある鹿毛校長ならばこそ、後輩でもある生徒一人ひとりに向き合うにも、一層深い心情があられただろうし、同様に母校附設の諸課題にも誠実に取り組まれたのだろうと改めて推察される。

3. 「躍動の附設」

樋口校長の時代には高校49～57回生が入学し、47～55回生が卒業した。時代は、20世紀から21世紀へ、附設も高校創立50年という大きな節目の頃だった。世間では「ゆとり教育」から「脱ゆとり」へという状況があって一種の社会問題にもなっており、附設といえども他人事という訳ではなかった。教師たちの間にも附設独自の問題意識があったし、各教科や校務分掌の各部の中、またそれらの代表が集まって、行事や教育の中身を検討する委員会も設けられた。21世紀、次の新しい時代に向けて「附設ブランド」のようなものを掲げたいろいろな工夫が模索され、少しずつ実行に移されたものもあった。学習指導要領に関連して各教科科目に限らず、「情報」は樋口校長自ら授業を担当されたし、「総合的な学習の時間」、「家庭科」など制約を感じながらも附設は適切な対応をした結果、全国的に問題になった「必履修の未履修」問題を指摘されることはなかったことを明記しておきたい。

一例に、学期制、定期テストの回数の変遷をみると、

・　　～H.13('01)年度＝３学期、５回定期
・H.14('02)～16('04)年度＝**２学期、４回定期**
・H.17('05)～23('11)年度＝**２学期、６回定期**
・H.24('12)～　　＝３学期、５回定期

のようになる。一般的な３学期制に対して、２学期制は、「前期（途中に夏休み）」、短い「秋休み」、そして「後期（途中に冬休み）」となり、学期の兼ね合いで、４回定期テストあるいは６回定期テストとなる。簡単なように見えるが、授業の進度予定や教務的な取り扱いにいろいろあったことは言うまでもない。年間を等分するので時間的なバランスがよさそうだが、前期の後半に夏休みが入り、その前後で実質的には「授業の流れ」が中断したり、外部の行事等との関連が合わなくなる問題も出てきた。６回定期テストは「奇数月ごとに定期テスト」というハードなスケジュールになった。

こんなこともあった。毎年正月の宮中伝統行事「歌会始」で附設からの入選が相次いだのだ。1997(平成９)年お題「姿」で大津留敬先生が入

選されると、1999(平成11)年「青」で中尾裕彰君が「史上最年少」で入選、2000(平成12)年「時」で中尾裕彰君が「連続入選」、2009(平成21)年「生」で北川光君が入選、また、2011(平成23)年「葉」で浅原健一郎君が佳作となった。全国的に大きな話題になっただけでなく、附設の生徒たちの中には瑞々しい優れた感性の持ち主がいること、そういう生徒同士の日々の教科学習、課外活動も含めた附設での日常の切磋琢磨が、稀有の教育環境であることを雄弁に物語る出来事だった。

4. 「男女共同参画社会」

学校説明会は、本校のほか、福岡、北九州、さらに宇部、大分、熊本などで開催され、入学希望の生徒・保護者の参加は年々増加していた。別表に示すように近隣他校で「共学化」の動きが始まると、附設はいつ共学化するのか、真剣な問い合わせが届くようになった。「附設レベルの女子が入る高校がない」ともいわれた。

社会的には「男女共同参画社会」が議論され、1999(平成11)年「男女共同参画社会基本法」が制定され、男女共同参画社会の実現に向けた取り組みが本格化していた。国民の責務として「男女共同参画社会づくりに協力することが期待される」とされ、各分野における女性参画目標として「2020年までにあらゆる分野における指導的地位を占める女性の割合を30％程度に」とされた。

樋口校長が附設の「共学化」の方針を最初に示されたとき、教師たちは「全員反対」だった。自身が男子校出身だったり、「男子校」附設の経験しかない。つまり、女子高生を教えたことがなかったから、どうなることか想像もつかなかったのだろう。しかも「附設レベル」だ。

樋口校長は、附設が「男女共同参画社会の実現に寄与する」ことを目指す方針を示され、平成14年度に高校入試、すなわち外部中学出身の高校入学者から女子を受け入れる具体的な準備をするよう指示された。

現実には「見切り発車」のようなものだが、附設が自問自答するような格好で共学化の準備が始まった。機会あるごとに共学校や共学に移行した他校の状況を学び、附設ならどうするのか考えた。「高校入試で女子を受け入れる」とき、入試の仕組みに男女の差を設けず、同じ問題、同じ基準で合否を判定して選抜すべきことに異論は無かった。本校入試は、問題作成から選抜まで教師全員が莫大な精力を注いでいるものであり、それ自体が附設を目指す生徒たちへの強力なメッセージともなっている。緻密かつ単純な選抜の結果、合格となり、本校に入学する生徒たちと、ともに附設の学びを始めたい、という共通認識はあったと思う。

平成５年～30年における附設と近隣他校の共学化（網掛け）の状況
（附設高56～66回生は「外部中学」出身の高校入学から共学化）

						附設		青雲		愛光		弘学館		ﾗｰｻﾗｰﾙ	
平成	西暦	高1	高2	高3	校長	高	中	高	中	高	中	高	中	高	中
5	1993	44	43	42	豊手敏臣	□	○	□	○	□	○	□	○	□	○
6	1994	45	44	43	豊毛敏臣	□	○	□	○	□	○	□	○	□	○
7	1995	46	45	44	豊毛敏臣	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
8	1996	47	46	45	豊毛敏臣	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
9	1997	48	47	46	豊手敏臣	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
10	1998	49	48	47	樋口史治	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
11	1999	50	49	48	樋口史治	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
12	2000	51	50	49	樋口史治	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
13	2001	52	51	50	樋口史治	□	○	■	○	□	○	□	○	□	○
14	2002	53	52	51	樋口史治	□	○	■	○	■	○	■	○	□	○
15	2003	54	53	52	樋口史治	□	○	■	○	■	○	■	○	□	○
16	2004	55	54	53	樋口史治	□	○	■	○	■	○	■	○	□	○
17	2005	56	55	54	樋口史治	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
18	2006	57	56	55	樋口史治	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
19	2007	58	57	56	吉田智信	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
20	2008	59	58	57	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
21	2009	60	59	58	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
22	2010	61	60	59	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
23	2011	62	61	60	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
24	2012	63	62	61	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
25	2013	64	63	62	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
26	2014	65	64	63	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
27	2015	66	65	64	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
28	2016	67	66	65	吉川　敦	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
29	2017	68	67	66	町田　健	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○
30	2018	69	68	67	町田　健	■	○	■	○	■	○	■	○	□	○

「附設が女子校になってしまうのではないか」と危惧する声もあった。しかし、本校入試を突破する女子が男子数を大幅に上回ることはなかろうと予測された。逆に、もし「女子の志願者０」が数年続くようなら共学化をやめるまっとうな理由になっただろう。

5. 共学化の始まり

初め、2004(平成16)年入試から実施を予定したが、施設・設備の準備の都合を理由に、１年延期がアナウンスされ、2005(平成17)年の実施に変更された。最初に入学した女子生徒は21名、附設の新時代が始まった。

高校入試の入学生は、附設中出身の「内進」に対して「外進」とよばれた。中高一貫の教育課程の途中から入る関係から、外進生は高１の１年間で内進生に「追いつく」必要があり、教科によっては「倍速」が当たり前だった。女子にそれが通用するかどうか、慎重に確認され、やがて教科、学年、全体で共有された。

学校も変化の中にあった。2005(平成17)年は、３年間実施した「２学期・４回定期テスト」から初めての「２学期・６回定期テスト」への移行と、高校女子の指導の始まりが重なっていた。振り返ってみると、学校全体が初めてのことに取り組む状況が幸いして、教師も生徒も、一層集中して新しい生活を醸成できたのかもしれない。

学校祭「男く祭」や体育祭にも、女子が加わることで必然、大きな変化があった。コーラスの女声パートは衝撃的だったし、「全員役員・全員選手」の伝統や応援合戦に加えてチアや演舞など、女子の積極的な参加と女子の感性の発揮により年々多彩で素晴らしいものになった。

2008（平成20）年頃の校舎空撮

6. 「新校舎」へ

附設は、現久留米大学御井キャンパスにあった校地から、第４代久留米大学理事長石橋正二郎氏の寄贈による現在の校地へ1969(昭和44)年に移転、附設中学校が創立された。当時は「50人学級」が一般的だったが、平成の初めころには「40人学級」が普通になっていた。ところが旧校舎教室棟「２号館」で「40人学級」化するには教室が不足するのが実情だった。

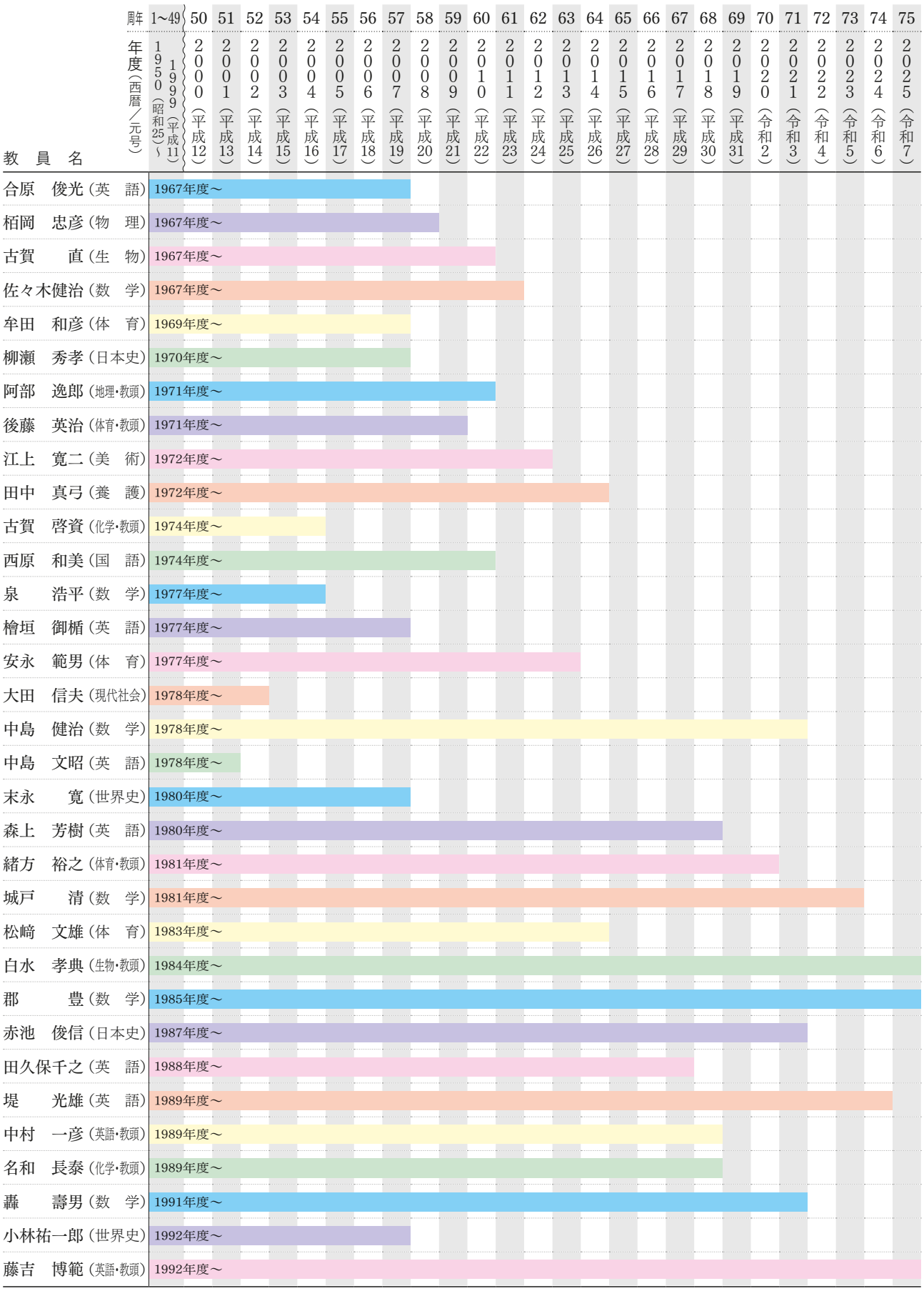
2005(平成17)年３月には「福岡西方沖地震」が発生、学校施設の耐震補強・改修が必要になった。築36年の「２号館」のコンクリートはサンプル試験の結果、強度に問題はなかった。強固なフレームを取り付けて補強する案もあったが、教室不足の解消にはならなかった。この時期、建築設計の専門家OBのご協力で、生徒希望者とのワークショップが開催された。共学化に伴う施設整備も、当然将来予想される「中学校共学化」まで考えれば、全面「新校舎」建設が必須であることが明確になった。

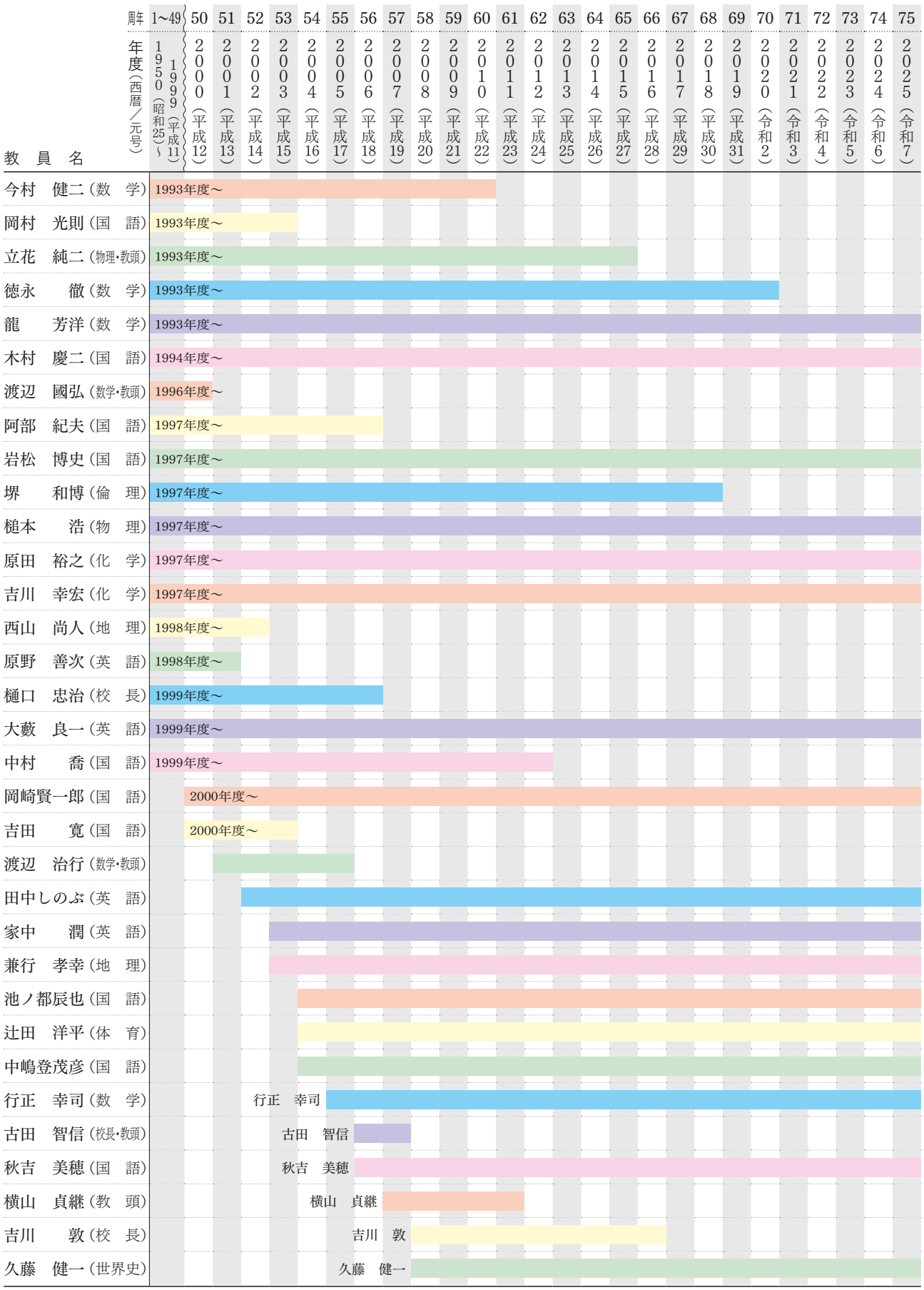
新校舎の実現は「二人の校長」、第９代古田智信校長、第10代吉川敦校長に引き継がれた。とりわけ吉川校長は、もう一度ソフト、ハード両面から見直しを果敢に実施された。黄金分割や錯視も取り込んで「真善美の理想郷」たる新校舎を実現され、さらに中学校共学化まで実現されたことには驚愕と畏敬を禁じ得ない。

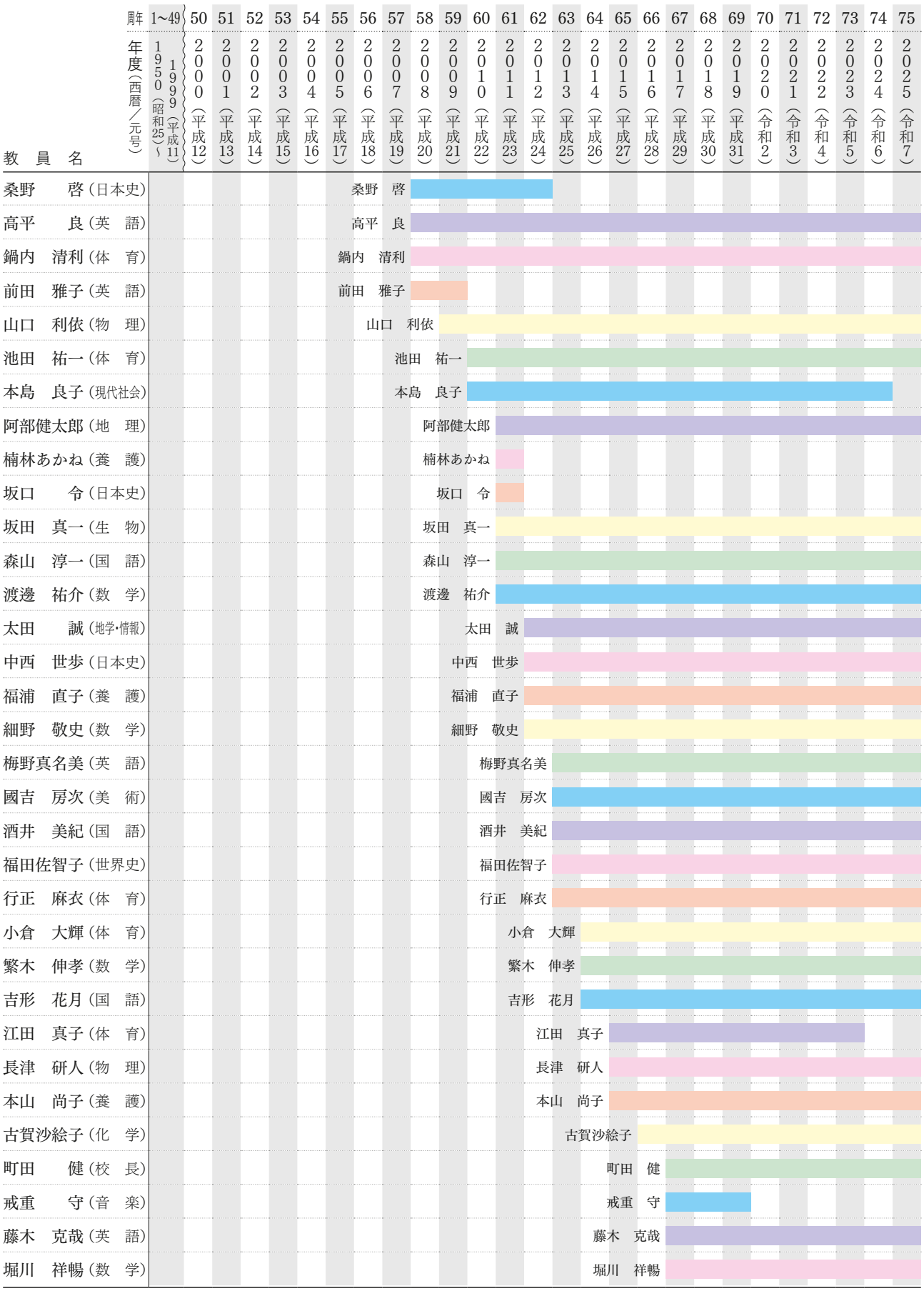
（文責：前高校教頭　名和長泰）

教員の在職期間

※着任年度、退職年度、50音順。非常勤期間は含まない。




期年
1～49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
年度（西暦／元号）
1950（昭和25）～1999（平成11）
2000（平成12）
2001（平成13）
2002（平成14）
2003（平成15）
2004（平成16）
2005（平成17）
2006（平成18）
2007（平成19）
2008（平成20）
2009（平成21）
2010（平成22）
2011（平成23）
2012（平成24）
2013（平成25）
2014（平成26）
2015（平成27）
2016（平成28）
2017（平成29）
2018（平成30）
2019（平成31）
2020（令和2）
2021（令和3）
2022（令和4）
2023（令和5）
2024（令和6）
2025（令和7）
教員名
今村　健二（数　学）
1993年度～
岡村　光則（国　語）
1993年度～
立花　純二（物理・教頭）
1993年度～
徳永　徹（数　学）
1993年度～
龍　芳洋（数　学）
1993年度～
木村　慶二（国　語）
1994年度～
渡辺　國弘（数学・教頭）
1996年度～
阿部　紀夫（国　語）
1997年度～
岩松　博史（国　語）
1997年度～
堺　和博（倫　理）
1997年度～
槌本　浩（物　理）
1997年度～
原田　裕之（化　学）
1997年度～
吉川　幸宏（化　学）
1997年度～
西山　尚人（地　理）
1998年度～
原野　善次（英　語）
1998年度～
樋口　忠治（校　長）
1999年度～
大藪　良一（英　語）
1999年度～
中村　喬（国　語）
1999年度～
岡崎賢一郎（国　語）
2000年度～
吉田　寛（国　語）
2000年度～
渡辺　治行（数学・教頭）
田中しのぶ（英　語）
家中　潤（英　語）
兼行　孝幸（地　理）
池ノ都辰也（国　語）
辻田　洋平（体　育）
中嶋登茂彦（国　語）
行正　幸司（数　学）
行正　幸司
古田　智信（校長・教頭）
古田　智信
秋吉　美穂（国　語）
秋吉　美穂
横山　貞継（教　頭）
横山　貞継
吉川　敦（校　長）
吉川　敦
久藤　健一（世界史）
久藤　健一


期年
1～49
50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75
年度（西暦／元号）
1950（昭和25）～1999（平成11）
2000（平成12） 2001（平成13） 2002（平成14） 2003（平成15） 2004（平成16） 2005（平成17） 2006（平成18） 2007（平成19） 2008（平成20） 2009（平成21） 2010（平成22） 2011（平成23） 2012（平成24） 2013（平成25） 2014（平成26） 2015（平成27） 2016（平成28） 2017（平成29） 2018（平成30） 2019（平成31） 2020（令和2） 2021（令和3） 2022（令和4） 2023（令和5） 2024（令和6） 2025（令和7）
教員名
桑野　啓（日本史）
高平　良（英　語）
鍋内　清利（体　育）
前田　雅子（英　語）
山口　利依（物　理）
池田　祐一（体　育）
本島　良子（現代社会）
阿部健太郎（地　理）
楠林あかね（養　護）
坂口　令（日本史）
坂田　真一（生　物）
森山　淳一（国　語）
渡邊　祐介（数　学）
太田　誠（地学・情報）
中西　世歩（日本史）
福浦　直子（養　護）
細野　敬史（数　学）
梅野真名美（英　語）
國吉　房次（美　術）
酒井　美紀（国　語）
福田佐智子（世界史）
行正　麻衣（体　育）
小倉　大輝（体　育）
繁木　伸孝（数　学）
吉形　花月（国　語）
江田　真子（体　育）
長津　研人（物　理）
本山　尚子（養　護）
古賀沙絵子（化　学）
町田　健（校　長）
戒重　守（音　楽）
藤木　克哉（英　語）
堀川　祥暢（数　学）

教員名	期年 1～49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
年度（西暦／元号）	1950（昭和25）～1999（平成11）	2000（平成12）	2001（平成13）	2002（平成14）	2003（平成15）	2004（平成16）	2005（平成17）	2006（平成18）	2007（平成19）	2008（平成20）	2009（平成21）	2010（平成22）	2011（平成23）	2012（平成24）	2013（平成25）	2014（平成26）	2015（平成27）	2016（平成28）	2017（平成29）	2018（平成30）	2019（平成31）	2020（令和2）	2021（令和3）	2022（令和4）	2023（令和5）	2024（令和6）	2025（令和7）
伊藤　省吾（英　語）																	伊藤　省吾										
岩﨑　聡子（英　語）																	岩﨑　聡子										
尾崎　純子（体　育）																	尾崎　純子										
佐々木雄飛（化　学）																	佐々木雄飛										
宗　弘昭（公　共）																			宗　弘昭								
藤江　哲男（地　理）																		藤江　哲男									
今里　綾香（体　育）																			今里　綾香								
尾倉　穂高（数　学）																			尾倉　穂高								
桑野　浩二（体　育）																			桑野　浩二								
牛島　淳一（情　報）																					牛島　淳一						
小川　正裕（数　学）																					小川　正裕						
神田　美咲（日本史）																					神田　美咲						
原野　浩之（数　学）																					原野　浩之						
原田和香子（英　語）																						原田和香子					
上原　愛結（体　育）																							上原　愛結				
工藤　俊玄（国　語）																							工藤　俊玄				
國﨑　圭一（英　語）																								國﨑　圭一			

国語科の25年

1. 人員構成

現在の国語科は教諭10名の体制であるが、前回の記念誌（50周年）刊行の時点で既に着任されていたのは、木村慶二先生、岩松博史先生、岡崎賢一郎先生であった。その後25年の間に、岡村光則先生、吉田寛先生、阿部紀夫先生、中村喬先生、西原和美先生がご退職になられている。

平成16年度に中嶋登茂彦先生、池ノ都辰也（中学25回生・高校47回生）、平成18年度に秋吉美穂先生、平成23年度に森山淳一先生が着任された。

平成17年度に附設高校の共学化が開始され（高校56回生高1Ａ組として21名の女子生徒が入学し）て以降、「男女共同社会の実現に貢献」するという附設の理念に基づき、国語科にも女性の先生方が着任されるようになった。中学45回生（高校67回生）の中１学年が初めて共学化した平成25年度には酒井美紀先生が、翌平成26年度には吉形花月先生が着任された。

中学共学化と同時にこれまでの50人学級を40人学級とし、中高６学年が１クラス増（中学４クラス・高校５クラス）の編成となったが、その際、大幅な授業時間増に国語科の定員増が追いつかず、以降、多くの非常勤講師の先生方のご助力を請うこととなった。熱意ある教科教育を通して21世紀の国語科を支えて下さった、田中欣一先生、諸岡三佳先生、頴川智先生、清水裕香先生、檀周子先生、友岡美津子先生、武藤ゆう先生、中島由美子先生、飯田一彦先生、工藤俊玄先生、諏訪原研先生、川口勝久先生の12名に厚く御礼を申し上げたい（工藤俊玄先生は、令和６年度に教諭として着任されている）。

2. 附設における国語教育

附設における国語は、中学１年生から高校２年生までは週６時間が必修となっており、高校２年進学時に文系・理系が分かれた後も授業内容に差をつけないこととしている。但し、高校３年生においては、大学入試二次試験の受験科目を踏まえ、授業時間に文理の差を設けており、理系選択で二次対策が必要な生徒は志望大学別の特講を受講することになる（後述）。

中学１・２年生においては、国語Ⅰが現代文、国語Ⅱが古典及び文法の授業となる。附設においては中３から高校の課程を学習するので、国語Ⅰ～Ⅲの内容は事実上、Ⅰ「現代文」・Ⅱ「古文」・Ⅲ「漢文」となる。高校３年生理系の授業は共通テスト対策となり、文系が現代文・古文・漢文とそれぞれ１時間ずつ多い授業については国公立二次対策授業が行われる。高３理系の授業には（東大・京大などで課される）二次試験への対策が含まれていないので、必要な生徒は放課後の特講を別途受講することになる。

現在、附設高校の３年生の特講として開講されるのは主に以下の講座である。

・東京大学理系現代文
・東京大学文系現代文
・東京大学理系古文

附設における国語教育

	国語Ⅰ	国語Ⅱ	国語Ⅲ
中１	４時間	２時間	
中２	４時間	２時間	
中３	３時間	２時間	１時間

	現代文	古文	漢文
高１	３時間	２時間	１時間
高２	３時間	２時間	１時間
高３（文系）	３時間	３時間	２時間
高３（理系）	２時間	２時間	１時間

・東京大学理系漢文

上記５つの特講は毎年必ず開講され、年度によって（志望する生徒数が多い場合）は、更に京都大学現代文・古文や一橋大学現代文などの特講が開講されたこともあった。特講においては、受講生は毎回特定の年度の過去問を１題解き、その後に教員の解説を受ける。教員は回収した答案を添削して受講生に返却する。高校３年生の授業・特講を担当する教員が抱える添削の分量は毎年膨大なものになる（浪人中の卒業生にも郵送やFAXのやり取りで添削を行っている）が、この添削の往還こそが生徒の「書く力」及び志望校への憧れを高めるということを国語科一同は信じ、科の伝統としている。放課後18時に終了した特講の答案を翌朝のSHRで返却するためには、深夜若しくは未明の長時間に及ぶ添削が必要となるが、ご退職なさる最後の年度まで毎朝３時起床で添削を続けられた西原和美先生のお姿を鑑として、科を挙げた努力を続けていく所存である。首都圏と異なり有力な塾・予備校を持たない地方の進学校においては、大学入試対策を自前で行わなければならないが、附設においては特講及び添削がその役割を担っていると言える。実際、東京大学等の中央の大学に進学した卒業生は、高校の教員が大学の過去問を丁寧に添削するという文化を知った中央出身の友人から驚かれるという経験をよくすると聞いている。

3. 入試・模試作成

国語科の重要な仕事の一つとして、附設高等学校・中学校の入試問題作成がある。

平成21年度の高校入試では、古文において現古融合問題（現代文・古文の両方を本文として用い、その関係性を問う問題）が出題され、以降、古文のみ・漢文（書き下し文）のみ・現古融合の形式が毎年ランダムに出題されている。また、翌22年度の中学入試では、それまでの200字作文に代わって初めて放送による聞きとりテストが出題され、以降、第１問では200字作文・聞きとりテストが毎年ランダムで出題されている。聞きとりテストは、附設生の「聞く力」の低下を肌で感じられた西原先生を始めとする教諭一同の提案で始まったものであるが、今後も、定期的に改訂される学習指導要領、共通テスト（旧センター試験）・国公立大学二次試験の出題傾向等を注視し、附設入学を目指す受験生のどのような力を測るべきかを考えながら出題形式・内容が探られなければならない。因みに、共通テストの国語は複数文章の横断的読解を特徴とし、「様々な文章の内容を把握したり、適切に解釈したりする力等」（大学入試センター「2025年度大学入学共通テストの問題作成の方向性及び試作問題等について」）を評価するという方針を掲げているが、これは附設国語科が、入試・校内模試（後述）・定期テスト等の作問において既に20年以上前から行っている方式であることも付言しておく。

それ以外にも、中学１年生対象の確認テスト（嘗ては中学１・２年生対象の実力テスト）、高校３年生を対象とした校内模試、等々の作成を通じ、生徒の発達段階や大学入試までの到達度などを国語科全員で確認・応援する姿勢も重視されている。

高校３年生の校内模試は、６・８・10・12月の年４回行われる附設独自の模擬試験で、国語は現代文２題、古文１題、漢文１題の計４題構成である。第１・２回は学年全員が受験をし、共通テスト（客観問題）の要素を一定以上の割合で含む問題が作成される。第３・４回は文系及び国公立二次試験で国語を必要とする理系の

生徒のみが受験し、出題形式内容ともに二次試験（主に東京大学）を意識した出題がなされる。

4. 文集・創作課題

科の取り組みの中には、学年ごとにまとめる文集、それに加えて、中学１・２年生の生徒に対して夏休みにほぼ毎年課す創作課題がある。優れた作品は「夏休み作品展」に出品されるが、その内容は、「オリジナルいろはうた」、小説執筆、デザイン書道、宮中歌会始詠進歌など様々である。そしてその創作活動が、中学の卒業論文へと接続する。

中学の卒業論文で国語科が関わる主な部門は「文学部門」である。毎年、小説の執筆を希望する生徒が多いが、それ以外にも評論や日本語研究など分野は多岐に渡る。小説については、中学１年・２年の夏の創作課題で挑戦した小説執筆がそのきっかけになることもあるようである。卒業論文は、中学９回生の関本善和氏が書いた『二人の画家』が昭和54年度の旺文社全国学芸コンクールで総理大臣賞に輝き、書籍として出版されたことを契機に中３全員が取り組むことになったものである。毎年、20人弱から多いときで30人強の生徒が小説創作や作家評伝、作品評論、方言研究などを行っている。小説だけでもSFや歴史小説などジャンルが多彩で、紀行文と短歌を組み合わせた作品などもある。取り組みは基本的に一人で行うものだが、25年の間には共同制作を行ったケースも一つある。

以下に、2000年度以降の卒業論文の中の、旺文社主催の「学芸サイエンスコンクール」受賞者を記す。

- 2015年　中学45回生　伊藤悠介
  「手続き不用　異世界体験場」
  （小説部門　早稲田大学総長賞・金賞）
- 2018年　中学48回生　家入颯志
  「一球につなげ！」（小説部門　入選）
- 2019年　中学49回生　白倉諒子
  「英語教育と自動翻訳との関わり」
  （社会科自由研究部門　銀賞）
- 2019年　中学49回生　牟田口俊
  「衣替えの季節」（小説部門　入選）
- 2019年　中学49回生　中川太貴
  「鳥兜」（小説部門　入選）
- 2020年　中学50回生　江森優
  「雲晴るる山で」（小説部門　金賞）
- 2020年　中学50回生　田子裕太郎
  「僕のしあわせ」（小説部門　入選）
- 2023年　中学53回生　川口永眞
  「点睛と黎明」
  （小説部門　金賞・文部科学大臣賞）

5. 短歌・和歌への取り組み

21世紀になっても、ご退職後の大津留敬先生のご厚意で、毎年各学年への短歌のご指導を続けていただいた。

あかときのひかりのなかに髪を梳く白寿の母の姿しづけし（平成９年「光」／大津留敬）

平成９年の宮中歌会始にご入選なさった大津留先生は、毎年歌会始の録画映像を生徒に見せ、短歌についての講義を行われた上で、夏休みの課題として歌会始詠進歌実作を課された。そして、全校生徒から提出された短歌の全てをお読みになってこれぞという歌を選び、生徒と共に歌の表現を吟味なさった。

新しき羽を反らして息づける飛翔間近の青スジアゲハ（平成11年「青」／中尾裕彰／中学28回生・高校50回生）

指先に打鍵の重さ兆しつつショパンの「革命」弾くとき迫る（平成12年「時」／中尾裕彰）

一人見る花火はさびしいものだよと赴任の地から父は電話す（平成20年「火」／田中雅邦／中学38回生・高校60回生）

熱線の人がたの影くつきりと生きてる僕の影だけ動く（平成21年「生」／北川光／中学39回生・高校61回生）

風吹けば同方向になびく葉の中に逆らふものはゐないか（平成23年「葉」／浅原健一郎／中学38回生・高校60回生）

中尾・田中・北川くんの４首は入選、浅原くんの歌は佳作に選ばれた。大津留先生の授業において、附設の先輩が実際に入選した歌を例に展開される短歌の講義に、生徒達が熱心に聴き入っていた姿が思い出される。

また、附設中学では、別の角度の「歌」への取り組みとして、中学１年次から百人一首の学習を国語カリキュラムに取り入れた。入学前の春休みの課題に歌の暗記を取り入れたり、中１～３年の学年行事として百人一首大会などがなされた。百人一首大会はコロナ禍のために一時途絶した（令和７年度より再開されている）が、その代わりに中学生有志により百人一首同好会が発足し、中嶋先生を顧問として日々の練習や大会への参加など活発な活動がなされている。

6. 部活動

前述の百人一首同好会のように、部活動を介した生徒との交流も教育における重要な意義を持つ。秋吉先生が顧問のディベート部は毎年夏に行われる「ディベート甲子園」の全国大会に度々出場して優秀な結果を残している。2024年度の「第29回・全国中学高校ディベート甲子園」では、附設中学校が全国３位の成績を収め、更に秋吉先生が個人として最優秀指導者賞を受賞されている。

池ノ都が顧問を務める高校クイズ研究部は、TBS『東大王』や日本テレビ『高校生クイズ』などに出場したり、地元テレビ局や福岡県からの依頼で（番組・広報映像の中で出題される）クイズの作成を請け負ったりしている。2025年５月、芸人の友田オレ氏（松延季氏・高校68回生）が『R-１グランプリ』で優勝に輝いた後に初めて附設を凱旋訪問した際には、TV番組収録でクイズ研究部とのクイズ対決が行われた。

特筆すべきは岡崎先生が顧問の高校演劇部で、2014年には『女子高生』（岡崎賢一郎作）が「全国高等学校演劇研究大会」で最優秀賞に輝き、2023年には『戯王【gi:oh】』（岡崎賢一郎作）が同大会で舞台美術賞を受賞する等の華々しい結果を残し、多数のメディア取材を受けるなど学校外からも高い注目を集めている。『女子高生』は優勝した年度にNHKで全国放送され、その後リクエスト多数でアンコール放送もされている。

（文責：池ノ都辰也）

社会科の25年

社会科のあゆみ

2019年5月より令和

	年	2000 平成12	2001 13	2002 14	2003 15	2004 16	2005 17	2006 18	2007 19	2008 20	2009 21	2010 22	2011 23	2012 24	2013 25	2014 26	2015 27	2016 28	2017 29	2018 30	2019 31	2020 2	2021 3	2022 4	2023 5	2024 6	2025 7
	月	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4	3 4
	卒業回生	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74
小林　祐一郎	世界史																											
柳瀬　秀孝	日本史																											
大田　信夫	公民																											
西山　尚人	地理																											
阿部　逸郎	地理																											
末永　寛	世界史																											
堺　和博	公民																											
赤池　俊信	日本史																											
堀　登茂彦	地理																											
兼行　孝幸	地理																											
黒岩　陽逸	公民																											
本島　良子	公民																											
桑野　啓	日本史																											
久藤　健一	世界史																											
阿部　健太郎	地理																											
長久　孝浩	日本史																											
坂口　令	日本史																											
中西　世歩	日本史																											
福田　佐智子	世界史																											
久保田　澪	地理																											
宗　弘昭	公民																											
藤江　哲男	地理																											
坂口　秀俊	日本史																											
神田　美咲	日本史																											

※任期は非常勤や芙蓉学寮の舎監なども含む　※坂口令先生は桑野先生の代替で着任　※坂口秀先生は中西先生の代替で令和２年の秋に着任

この25年間で社会科を取り巻く環境は大きく変化した。特に、新学習指導要領の全面導入にともなうこの数年の変化は大きいものであった。2020(令和２)年度より小学校で、2021(令和３)年度より中学校で新学習指導要領が全面導入となり、思考力・判断力・表現力などの育成が求められるようになった。そこで、社会科でも受験生が深い学びを実現できているかを入試で問うべく、2023(令和５)年度より中学入試の試験時間を40分から45分に、高校入試を40分から50分に拡大した。

大学入試も変革した。1990(平成２)年度よりはじまったセンター試験は、2021(令和３)年度大学入学者選抜より共通テストへと変化した。試験内容は、資料や文章を読む力がより求められるようになり、問題数が36問から32問へと減ったものの、ひとつひとつの問題に時間を要するようになった。そのため、センター試験時は20〜30分もあれば解き終わっていた生徒たちも、共通テストでは40〜50分程度かかるようになった。兎に角、問題を読むのに疲れる。資料・文章、全てに目を通さないと解けない。なかには、世界史の知識は不要で、資料と文章を解読するだけで解ける問題までもが出題されている。センター試験では100点を続出させていた世界史選択者も、共通テストではこれまで以上に気を引き締めて掛からなければ、100点は取れなくなってしまった。

総合・探究・公共の新設という指導要領の変化にともない、附設の社会科としても大きな変革を求められた。2022(令和４)年度より高校１年次に歴史総合・地理総合が必修となり、翌年の高校２年次より公共が必修、地理探究・世界史探究・日本史探究が選択科目となった。総合科目の新設により地理の授業の絶対数が増加したため、兼行先生・阿部先生のお二方では補いきれず、新たに藤江先生をお迎えし、３人体制で臨むことになった。また、これまで中学３年次に世界史Ａを先取りしていたコマを中学社会に戻して日本史の先生に担当して頂き、高校１年次で日本史に特化できない分を補填してもらうことになった。

これまでの高校２年次の理系は、地理・世界史・日本史・公民から１科目の選択であったが、改訂により公共が必修となったため、地理・世界史・日本史から１科目を選択した上で、高校３年次に、これまでに選択していたものと公民とから１科目を選ぶことになった（次頁参照)。令和２年度より宗先生が本校に着任して下さっていたことは、公民科も大変革のこの時期において社会科の心強い支えとなり、大きな幸運であった。

地理総合では、交通・通信（グローバル化)、民族とその地域的特徴・生活、環境問題など、地誌に通ずる基礎知識に加え、日本の自然環境や防災についても学習し、その後の地理探究では、自然環境（地形・気候)、資源と産業（農林水産業・工業)、人口・都市問題、生活圏の拡大、貿易などを扱う。

歴史総合では、近現代の歴史を扱い、現代社会の基本的な構造がどのような歴史的な変化の中で形成されてきたのか、それは生徒自身が向き合う現代的な諸課題とどのように関わっているのかなどを生徒が課題意識をもって考察することが求められており、世界とその中の日本を相互的な視野で捉える力を養うような学習内容となっている。令和４年に共通テストの試作問題が提示されたものの、方向性をしっかりと示してくれるものではなかったため、共通テストで歴史総合がどのように出題されるか全く予想が立たないまま初めての試験当日を迎えた。蓋を開けてみれば、世界史の知識を問うものに

偏っており、日本史は中学の知識でも解けるものであった。しかし、その反動で２年目がどうなるのかは見通せず、どのような形に落ち着くのか明らかになるまでは、数年を要するかもしれない。

世界史探究では、諸地域の歴史的特質の形成、諸地域の交流・再編、諸地域の結合・変容という構成に沿って、世界の歴史の大きな枠組みと展開について理解を深め、地球世界の課題とその展望を探究する。

日本史探究では、歴史総合の学習で獲得した技能や歴史の学び方を活用し、我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを考察し、歴史的経緯を踏まえて、現代の日本の課題を探究する。

公共では、倫理や哲学、宗教、文化などの基本的な事項、憲法、私法、国家や地方自治の仕組み、市場経済、国家単位の経済、国際政治や国際経済を学ぶ。その後、倫理や政治・経済で更に深い学びを行っていく。

新学習指導要領の導入のみならず、2019(令和元)年末に発生し、令和２年以降にパンデミックをおこしたコロナ禍により、学習環境も大幅に変わり、職員・生徒一人一人がiPadを使用するようになった。それにともない、調べ学習の作業をクラウド管理にすることで生徒間での分担がしやすく、動画も活用しながら楽しく相手に伝わりやすいプレゼンを行う生徒が増えた。また、各クラスにプロジェクターが設置されたことで、映像を使った授業を展開しやすく

科目選択一覧

改訂前

	高校１年	高校２年		高校３年	
		文系	理系	文系	理系
世界史	必修(２単位)	必修(３単位)			
日本史	１科目選択	１科目選択	１科目選択	２科目選択	１科目選択
地　理	(２単位)	(３単位)	(２単位)	(４単位×２)	(３単位)
倫　理		必修(２単位)			
政治経済		必修(２単位)			
現代社会			必修(２単位)		
合計単位	4	10	4	8	3

改訂後

	高校１年	高校２年		高校３年	
		文系	理系	文系	理系
地理総合	必修(２単位)				
歴史総合	必修(２単位)				
世界史探究		必修(４単位)			
地理探究		１科目選択	１科目選択	２科目選択	１科目選択
日本史探究		(４単位)	(２単位)	(４単位×２)	(３単位)
公　共		必修(２単位)	必修(２単位)		
倫　理					
政治経済					
合計単位	4	10	4	8	3

なったのも利点である。一方で、板書を写真に撮り、自分でメモをしない生徒が出てくる問題も生じた。また、調べ学習の際には、必ず本を読み、その情報も入れるということを条件にしなければ、情報元の信憑性の有無に関わらず、ネット上で調べたものをコピー＆ペーストして終わりにする生徒が増える、という問題も出てきた。この問題が、次の100年史でどのように取り上げられているのか、楽しみでもある。

コロナ禍で中断してしまったが、社会科内での研鑽と親睦のために１泊２日で旅行も行った。企画は輪番でそれぞれの教科が担当し、毎回、各教科の特色のある旅行が実現した。国東半島をめぐった際には、田染荘や富貴寺、豊後高田などを散策し、長崎では軍艦島へ上陸した。門司を訪れた際には、水飴を練りつつ紙芝居を見て、昔懐かしのひとときを過ごした。佐世保ではポットホール公園を散策し、平戸の田平教会や川内峠を訪れた。土曜日の終業後、皆で博多港へ移動し、そのままヴィーナスに乗船して壱岐を訪れ、黒崎砲台跡や鬼の窟古墳などを見学したこともあった。諫早では干拓堤防に圧倒されつつ漁業と農業との問題に思いを致し、南島原市の土石流被災家屋保存公園では災害の凄まじさに心を痛めた。2016(平成28)年４月にマグニチュード7.3の地震が発生した熊本を同年秋に訪れた際には、阿部逸郎先生がここは絶対に見ておかなければならないと仰り、地層がずれたことが一目瞭然でわかる場所へ案内して下さり、地殻変動の凄絶さを目の当たりにした。

75周年事業で１号館がついに撤去されることになり、社会科研究室も2025(令和７)年夏に新棟へ引っ越すことになった。その準備で、令和６年の夏に片付けを行い、長年愛用されてきたソファも廃棄した。普段利用しない上の方の本棚からは、古い教科書や問題集も発見され、1957(昭和32)年度の大学入試問題も出てきた。挟まれていた旺文社宛の葉書をみると、切手代が５円であった（なお、2024年10月には63円から85円に値上げ)。その当時の東京大学の入試は、現在のような論述形式ではなく、文章の穴埋めと下線部から問を立てる問題であった。私と同じように発見した次の世代に楽しんでもらえるよう、箱に詰めることにした。また、72回生の思考廻廊にも描かれているように、本の山となっている机がある意味トレードマークだった赤池先生作のプリントも発掘された。この日本史プリントは、生徒にとっては神プリントであった。長年、社会科研究室を見守ってきた時計も12月に突然動かなくなり、その役目を終えた。

今後、社会科でどのような新たなエピソードが紡がれるのか楽しみである。

（文責：福田佐智子）

倒壊した阿蘇神社

修築中の熊本城と「くまモン」　2016年11月撮影

数学科75年

1. 20世紀の数学科

「附設高等学校50年史」において佐々木健治先生が記された“数学科50年”を読むと、附設の建学の精神とともに、附設の数学科の伝統を様々な形で垣間見ることができ、数学科の教員の数学教育への情熱と、附設生の輝かしい圧倒的な実績に驚かされる。具体的にはやはり中学10回生から始まった卒業論文・制作での研究が目を引く。数学という学問の特性を考えると、卒業論文は研究の恰好の舞台ではあるものの、新しい数学の仕組みを見出したり定理を証明したりすることは、中学生にとっては非常に高い壁である。しかし、附設生の数学への資質と、多岐にわたる数学に精通されている諸先生方の数学力と卓越した技術、そして数学への情熱が、中学生という段階でもそれを可能にしている。卒論に限らず、ありとあらゆる「時に」・「場合に」・「場所に」数学を見出し、数学的に思考し表現するという姿勢を、教師も生徒も貫いているからこその文化が附設にあることは、50年史に記されている教育実践報告や数学オリンピックでの生徒の活躍から明らかである。「アクティブラーニング」と称される思考型教育の目玉とも言うべき教育目標が世間に知られるようになって久しいが、新教育課程の目指す方向性はすでに附設の創成期から育まれているものと言ってよい。草創期の数学科、躍動期の数学科、平成期の数学科としてその歴史がまとめてあるので、詳しくは本校50年史を参照されたい。

2. 21世紀の数学科

新たな数学科の教員の着任については今村健二先生、徳永徹先生、龍芳洋先生が着任された平成５年から少し間が空いている。平成17年に行正幸司先生、平成24年に渡邊祐介先生と細野敬史(文責)、平成26年に繁木伸孝先生、平成29年には堀川祥暢先生が着任されている。さらに、令和になり令和２年に尾倉穂高先生、令和４年に原野浩之先生、小川正裕先生が着任された。

21世紀に入っての附設の数学科としての教育活動は、時代と共に軽微な修正や変更はあるものの、長年に亘り培ってきた伝統を踏襲した形になっている。そこには数学科の教員がその伝統を重んじて次世代に繋げようとする暗黙の了解と、科としての強固な結束力が確実に存在している。附設中・高における数学科の根幹は、中学での『Ａクラス代数問題集』、『Ａクラス幾何問題集』、中２の終盤からは高校での教科書と教科書傍用問題集による授業であり、分野別の学習を丁寧に進める。更に中学では１週間のまとめとしての週テスト、高校では数研の『青チャート』を用いて例題やexercisesを試験範囲とする数丙テストという週単位の試験を行うことで、数学の諸分野の基本の完成を目指すというスタイルである。これにより、担当者の裁量によらず毎年どの回生も確実な数学力が身につくことが約束され、結果的に安定的な進学実績の下支えになることに繋がっているものと思われる。その上、担当者独自の活動、例えば轟壽男先生の数学随筆「えうれか」の配布などに代表されるような数学好きの生徒を刺激するものであったり、郡先生の「楽しい演習（通称“楽演（らくえん)”)」のような週末の時間が許すときに発展的な数学の内容を考えさせるための課題プリントであったりと、その学年の生徒の様子に即して随所に工夫を凝らした指導が行われている。また数学科の教員間での意見交換も活発であり、各自が担当する学年により良いものを提供できるように日々研鑽に励んでいる。

共学化と数学科についても触れておきたい。

高校56回生に附設史上初めて女子が入学、中学45回生から中学にも女子が入学するようになり、現在では全校生徒における女子の割合がおよそ４割になっている。女子が入学した当初は、特に数学について男女間で少なくない学力差が生じるものと危惧されていた。数学科の対策としては、高２で数Ⅲを履修する際に、教科書傍用問題集を『4STEP』から『オリジナル・スタンダード』に変更、後者は見開き１ページのコンパクトさで問題が節別にまとめられており、問題数も適度で取り組みやすいため採用した。また、高３では通常、「東大数学」「標準数学」という２本の特別講座を開講していたが、「数Ⅲ基礎」という特別講座を新たに設ける学年が増え、主に九州の地方国公立大学医学部志望の女子が数Ⅲの基礎からの理解に努めた。近年の医学部合格実績の推移から、これらの取り組みは十分に機能したものと思われる。

21世紀に入ってからも、多くの生徒が校内、校外を問わない活躍を見せている。中学の卒業論文についてはここでは詳しく述べないが、例えば高校62回生の熊谷悠道君の卒業論文は吉川敦元校長の指導の下生まれた優秀な仕事の一つである。熊谷君は数学オリンピックにおいても高１時に国際数学オリンピック（IMO）の代表候補になっている。数学オリンピックでの実績としては、高校45回生の松崎公紀君、高校48回生の大里健太君、高校52回生の亀井哲君、豊福悦史君がIMOの代表候補になっている。そして、何といっても高校59回生の岸川滉央君の国際数学オリンピック（IMO）２年連続金メダル獲得である。すでに中学時代に日本ジュニア数学オリンピック（JJMO）で金メダルを獲得するなどの活躍を見せていたが、高校２年生、３年生時におけるIMOでの２年連続金メダルの快挙は、附設の数学関係の実績において最も秀でたものであると言える。この快挙を伝える西原和美先生が作成されたプリントが、今現在も数学科の掲示板に残っている。

日本数学オリンピックの一次予選の結果（合格者の人数）は、平成12年以降、5，5，1，1，0，1，4，2，0，2，1，1と推移し、平成24年は５名で、合格者のうちの１人である高校62回生の鳥巣美貴さんは第12回中国女子数学オリンピック（CGMO）への出場資格も得ている（中国国内の鳥インフルエンザ問題のため招待状が届かず不参加）。次の年は高校63回生を中心に予選通過者が９名（うち女子１名）を数え、平成26年は高校64回生の中尾亮介君が本選も突破し、IMOの代表候補になっている。これ以降も予選通過者の人数は、2，3，8，10，8，4，10，5，８と、毎年50名を超える生徒が挑戦して好成績を収めており、第32回大会では高校72回生の福山月君がIMOの代表候補に選出された。女子の大会でも本校の生徒が活躍しており、高校72回生の山之内望花さんがヨーロッパ女子数学オリンピック（EGMO）に第10回、第12回の２度にわたり出場し、両大会で見事に銅メダルを獲得している。

日本ジュニア数学オリンピック（JJMO）も中学３学年から毎年総勢50名を超える応募数で、こちらも多くの生徒が予選を通過するなどの活躍をみせている。第12回大会では中学44回生の本田創太郎君が本選でも優秀な成績を収め銀賞を獲得し、JJMOの成績優秀者上位５名にも与えられるIMOの代表候補になっている。

ここまでで附設校内での教育活動の取り組みと数学オリンピックでの生徒の活躍を中心に述べてきたが、学校祭には有志で数学の催し物が設けられ、また数学に興味のある生徒が数学愛好会（部活や同好会ではないが）のようなものを作って教室で問題を仲間と解くなど、様々な

場面で附設生の数学への情熱が見て取れる。生成AIや教育系YouTuberなどの台頭もあり、近年における中学校、高校での数学の授業や活動はカリキュラムとともに内容が変化するだけでなく、その需要にも変化が生じている。学校教育における数学教育は、少子化も相まって不安定な様相であると言わざるを得ない。そういった時代の流れの中で、令和５年におよそ25年ぶりに、ピーターフランクル先生を本校にお招きできたことは大きな出来事であった。これはひとえに繁木先生の人脈の広さの賜物である。本校体育館でのピーター先生のご講演に中高の多くの生徒が興味を示し、聴講に集まり書籍を購入するなど、貴重な機会となった。先生は講演の中で、この新しい時代において何が武器になり何が生き残るために必要かと切り出され、その答が「コミュニケーション能力」と「数学の力」であることを熱く説かれた。生徒諸君にとって大変有意義な時間であった。附設の数学科がこれまで紡いできた重厚な数学の伝統を、これから先も若い世代に伝えていかなければならないという義務があると、改めて実感した次第である。

（文責：細野敬史）

第50回国際数学オリンピック（ドイツ大会）日本代表選手

第50回国際数学オリンピック（ドイツ大会）日本代表選手を下記のように決定しましたのでお知らせいたします。

保坂 和宏	開成高等学校	3年	東京都
今村 志朗	灘高等学校	3年	大阪府
石川 卓	北摂三田高等学校	3年	兵庫県
岸川 滉央	久留米大学附設高等学校	2年	佐賀県
副島 真	筑波大学附属駒場高等学校	3年	東京都
滝聞 太基	筑波大学附属駒場高等学校	3年	東京都
		計6名	

（学年は2009年4月現在、アルファベット順）

第50回IMOドイツ大会日程

7月	10日（金）	各国団長到着
	13日（月）	各国選手団到着
	14日（火）	開会式
	15日（水）	コンテスト（1日目）
	16日（木）	コンテスト（2日目）
	17日（金）	観光・国際交流（採点会議）
	18日（土）	観光・国際交流（採点会議）
	19日（日）	50周年式典
	20日（月）	国際交流
	21日（火）	閉会式・晩餐会
	22日（水）	各国選手団ドイツを出発
	23日（木）	帰国

詳細は、ドイツ大会オフィシャルウェブサイトを参照して下さい。（General Information 内の Programe に記載）

本の気持

第50回国際数学オリンピック日本代表決定おめでとうございます。知の楽しさを満喫してきて下さい。

数学オリンピック財団

久留米大付設高・岸川さん 国際大会出場 ~~目指す~~ 決定!!

日本数学オリンピック

お見事 銀賞

数学放浪記

ピーター・フランクル

著者紹介

ピーター・フランクル（Peter Frankl）

Peter Frankl

※今年の学校祭で講演して下さった上田氏が生徒会長のときピーター・フランクル氏の講演が、当時の在校生 加藤氏の御力も有り実現した。

おめでとうございます、国際数学オリンピック2年連続(金)・岸川漠央君!

金2、銀3で国別7位＝日本の高校生ら－国際数学五輪　2年連続 金 の高3男子も

文部科学省は12日、カザフスタンで開かれた国際数学オリンピックに日本代表の男子高校生6人が参加し、金2、銀3のメダルを受賞したと発表した。国別では7位。好成績だが、過去最高の金5、銅1で国別2位だった昨年を下回った。関数、幾何などの問題の難易度が全体としてかなり高かったという。

今回の大会には95カ国・地域から617人が参加。成績上位12分の1に授与される金は、久留米大付設高(福岡)3年岸川漠央さん(18)と灘高(兵庫)3年井上秀太郎さん(17)が受賞した。岸川さんは2年連続の金獲得。

続く上位12分の2に与えられる銀は、灘高2年水元喜さん(17)と甲陽学院高(兵庫)2年越山弘規さん(16)、灘高1年北村拓真さん(15)が受賞した。(2010/07/12-18:05)

Contestant	Country	P1	P2	P3	P4	P5	P6	Σ	#	Award
[illegible] Nie	People's Republic of China	7	7	7	7	7	7	42	1	Gold medal
[illegible] O'Meara	United States of America	6	7	5	7	7	7	39	2	Gold medal
Teodor von Burg	Serbia	5	7	4	7	7	7	37	3	Gold medal
[illegible] Ozer	Turkey	7	7	7	7	7	1	36	4	Gold medal
Max Sevenman	Germany	7	7	7	7	1	7	36	4	Gold medal
Haitao Li	People's Republic of China	7	7	7	7	1	7	36	4	Gold medal
Victor Onishyanenko	Russian Federation	7	7	7	7	7	0	35	7	Gold medal
Robin Chung	Canada	7	7	7	7	7	0	35	7	Gold medal
[illegible]	Japan	7	7	7	7	6	0	34	9	Gold medal
[illegible] Wei	People's Republic of China	7	7	0	7	7	6	34	9	Gold medal
Nurzeldeg Khaliullin	Kazakhstan	7	7	1	7	3	7	32	11	Gold medal
Hunter [illegible]	Canada	6	3	2	7	7	7	32	11	Gold medal
Mathias Bak Tejs Knudsen	Denmark	4	7	1	5	7	7	31	13	Gold medal
[illegible] Ovchinnikov	Kazakhstan	7	7	5	7	0	5	31	13	Gold medal
Stanislav Ershkin	Russian Federation	7	7	2	7	7	1	31	13	Gold medal
Luca Ghidoli	Italy	7	7	1	7	7	1	[illegible]	16	Gold medal
[illegible] Zhang	People's Republic of China	7	7	7	7	2	0	30	16	Gold medal
Szymon Kanonowicz	Poland	6	7	0	7	7	2	29	18	Gold medal
Aaron Wen Yu Chong	Australia	7	7	1	7	7	0	29	18	Gold medal
George C. Arzeno	Puerto Rico	7	7	1	7	7	0	29	18	Gold medal
Bogdan Vokhych	Ukraine	7	7	7	7	1	0	29	18	Gold medal
José Gustavo Garcia Sulca	Peru	7	7	1	7	7	0	29	18	Gold medal
Shiang-Chih Hsu	Taiwan	7	7	0	7	7	1	29	18	Gold medal
[illegible] Prinmasuree	Thailand	7	7	7	7	1	0	29	18	Gold medal
Donát Nagy	Hungary	7	7	1	7	2	5	29	18	Gold medal
[illegible] Panchev	Bulgaria	7	7	0	7	1	7	29	18	Gold medal
Shun Inoue	Japan	7	7	7	7	0	0	28	27	Gold medal
Piotr Suwara	Poland	7	7	0	7	0	7	28	27	Gold medal
Magnel Matdinov	Russian Federation	6	0	2	7	6	7	28	27	Gold medal
Ngô Ngọc Trung	Vietnam	7	7	7	7	0	0	28	27	Gold medal
Felix Dritzler	Austria	7	7	0	7	7	0	28	27	Gold medal
Kanat Satylkhanov	Kazakhstan	7	7	7	7	0	0	28	27	Gold medal
[illegible] Mokin	Russian Federation	7	7	0	7	0	7	28	27	[illegible] medal

2010・百冊の本宇宙　2010.7.12

【テーマ】数学の面白さをケータイする			
中1	その数学が戦略を決める	イアン・エアーズ	文春文庫
中2	はじめての現代数学	瀬山　士郎	ハヤカワ文庫ＮＦ
中3	無限を読みとく数学入門	小島　寛之	角川ソフィア文庫
高1	ガロアと群論	リリアン・リーバ	みすず書房
高2	美しい数学のはなし（上・下）	大村　平	日科技連出版

スタート

……世の中には3種類の人がいる。
　　数えられる人と、
　　数えられない人。

14歳のとき、僕はノートに書き込みを始めた。数学のノートだ。気の毒に思われる前に急いで付け加えておくけれど、学校の数学のノートじゃない。数学について、学校では教わらないけれど自分で面白いと思ったことを、片っ端から書き込んだノートだ。気がついたら書くことが山ほどあって、すぐにもう一冊買うはめになった。

気の毒に思っていただいて結構。でもその前に、この不潔なエピソードで僕がいいたかったことがお分かりだろうか？　数学は、学校で教わるものだけじゃない。それどころか、学校で教わらない数学の方が面白い。テストを受けたり正しい答を出したりする必要がなければ、面白いことがたくさんあるんだ。

僕のノートは6冊まで増えた。今でも取ってある。それ以降は、コピー機を買ってコピーをしまくったせいで、本棚がいっぱいになってしまった。その本棚から、興味をそそるあれやこれやの数学ゲーム、パズル、エピソード、作り話を選び出したのが、この本だ。ほとんどの項目は読み切りなので、どこから読んでも大丈夫。短い話きものも少しある。後はいつも、オムニバスはオムニバスに徹することにしていて、この本もそうだ。

ゲームやパズルの中には、昔からよく採り上げられているものもあるけれど、改めてやってみるとまた違った興奮を覚える。「車とヤギ（ヤギを選ぶな）」と「コイン12枚計量パズル（偽コインを見つける）」は、それぞれアメリカとイギリスでマスコミをにぎわせた。この本の題材は、特別に考えた新しいものが多い。バリエーションが多くなるように工夫したので、論理パズル、幾何パズル、数字パズル、確率パズル、数学界のこぼれ話、そして実際に手を動かしてもらうことも並べてある。

数学をちょっと知っていると、友達に一目置かれるというメリットがある。（忠告、やりすぎないように。嫌がられることもあるから。）それには、流行りの専門用語に乗り遅れないようにすることが大切だ。だからこの本にも、そんなに専門的ではないくだけた文章で、短い「エッセー」をところどころに入れた。そこでは、マスコミで採り上げられた最近の発見について説明してある。フェルマーの最終定理――テレビ番組を覚えているだろうか？――、四色定理、ポアンカレ予想、カオス理論、フラクタル、複雑系科学、ペンローズパターン。数学はまだ道半ばだと分かってもらうために、未解決の問題も採り上げた。気晴らしみたいなものもあれば、P＝NP?問題のように、100万ドルの賞金がかかった大問題もある。聞いたことのない問題かもしれないけれど、賞のことは知っておいてほしい。

もっと短くて面白いのいい項目では、π、素数、ピタゴラスの定理、タイリングなど、親しみはあるけれど興味深いテーマについて、面白い事実や発見のことを書いてある。歴史を知ってもらうために書いた、有名な数学者の愉快なエピソードを読めば、彼らの愛らしい欠点を笑って許してやれるはずだ。

どこから読んでも大丈夫といったけれど――その通りだから信じてほしい――、でも正直にいうと、初めからページどおりに読んでもらうのが一番だと思う。前の方の項目が、後の方の項目を読むのに役に立つこともある。しかも前の方が少し簡単で、後の方は……少し……難しいものもある。でも、簡単な項目をところどころにちりばめたので、すぐに頭が痛くなってしまうことはない。

この本で僕が狙ったのは、数学の楽しいところや興味深いところをたくさん紹介して、あなたの想像力をかき立てることだ。楽しんで読んでもらえたらいいが、希望としては、あなたが数学の道に足を踏み入れて、発見のスリルを味わい、4000年前、先週、そして明日の重要な進歩についていく手助けができれば、とても嬉しい。

「数学・秘密の本棚」より

イアン・スチュアート
イギリス・コベントリー、2008年1月

↑今回のリストアップは数学科の徳永先生からいただいた。

図書館にも数学関係の新刊が入っています。どんどん希望を出して下さい。

シリーズ　数学を切りひらいた人びと　全5巻
マイケル・J・プラッドリー著／[illegible]

1　数学を生んだ父母たち　[illegible]
登場する数学者　タレス／ピタゴラス／エウクレイデス／アルキメデス／ヒュパティア／アールヤバタ／ブラーマグプタ／アルフワーリズミー／ウマル・ハイヤーム／フィボナッチ

2　数学を育てた天才たち　[illegible]
登場する数学者　アルキンシー／ヴィエト／ネイピア／フェルマー／パスカル／ニュートン／ライプニッツ／オイラー／アニージ／ハネター

3　数学を拓げた先駆者たち　[illegible]
登場する数学者　ジョルマン／ガウス／ヤヌヴィル／アーベル／ガロア／ダ・グレース／アイチンゲール／カントール／コワレフスキー／ポアンカレ

4　数学を現代化した予言者たち　[illegible]
登場する数学者　ヒルベルト／ケンダ／ジェルビンスキー／ネーター／ラマジャン／ウィーナー／フォン・ノイマン／ホッパー／チューリング／エルデシ。

5　数学[illegible]になった[illegible]者たち　[illegible]
登場する数学者　ロビンソン／ウィルキンス／チャンドラセカイ／ルーキング／ヤウ／チューン／ワイルズ／ドブレー／クラウター

[illegible]社

実験観察重視の理科教育の25年

1. 男子校から共学化へ

—平成13(2001)年から平成19(2007)年—

平成13年時点では理科教員は古賀啓資先生（化学）、古賀直先生（生物）、栢岡忠彦先生（物理）、平田昌之先生（地学）、名和長泰先生（化学）、立花純二先生（物理）、原田裕之先生（化学）、吉川幸宏先生（化学）、槌本浩先生（物理）であった。

第８代校長樋口忠治先生の決定により男子校だった附設を共学化することが決まり、不安の声が上がる中、平成16年４月に高校女子１回生（56回生）が入学した。男女が切磋琢磨しながら互いに高め合うようになり、附設に新しい風が吹き始めた。女子の入学に驚きながらも、若い３人の先生の加入により平均年齢が大きく下がった理科の先生方は附設の大きな変化に上手く対応していった。平成19年には高校全学年に女子が在籍するようになり、高校の男女共学化が完成し、附設のさらなる飛躍につながった。

平成19年に第８代校長樋口忠治先生が退任され、附設高校教頭だった古田智信先生が第９代校長となった。

古賀直先生は平成12年度より平成14年まで教務部長の仕事をされた。立花純二先生は平成平成15年より平成21年まで総務部長として仕事をされた。白水孝典先生は平成16年より平成22年まで進路指導部長として仕事をされた。名和長泰先生は平成18年より平成23年まで教務部長として仕事をされた。

この時期の先生方の着任、離任

平成14年３月	古賀　啓資	先生（化学）離任
４月	井上　智紀	先生（生物）就任
平成15年３月	井上　智紀	先生（生物）離任
平成16年３月	中村　孝也	先生（生物）離任
	平田　昌之	先生（地学）離任
４月	榊　昌宏	先生（地学）着任
平成18年３月	榊　昌宏	先生（地学）離任

古賀ケ先生

古賀ス先生

栢岡先生

中村先生

白水先生

平田先生

井上先生

榊先生

槌本先生

吉川先生

原田先生

2. 学校制度の変革期

―平成20(2008)年から平成29(2017)年―

平成20年３月に第９代校長古田智信先生が退任されたのち、同年４月に第10代校長吉川敦先生が就任され、様々な学校制度が一新され、附設中学校・高等学校の大きな変革期となった。

平成21年４月から、学年のクラス数が変更されることとなった。中学３クラス50人学級が４クラス40人学級に、高校４クラス50人学級が５クラス40人学級に変わった。先生方の授業時間数の増加になったが、１クラスあたりの人数が減ったことによって授業時間中における一人ひとりへの細やかな理科指導に磨きがかかるようになった。

平成24年には新校舎が建てられ、理科室は移転することとなった。新校舎には物理、化学、生物、地学の各実験室、準備室に加え、すべての科目の講義室が整備された。また、実験設備、器具の充実も同時になされることになり、実験や観察の実習が十分に実施されるとともに、理系・文系の多くの選択科目に対する授業もスムーズに行えるようになった。また、新しい化学講義室にはICT教育におけるAV機器も整備され、より柔軟な授業形態をとることができるようになった。

同年、これまで前期・後期制だった授業制度が３学期制に変更された。これにともない、中学理科の授業形態は１年間のうちに前期２科目、後期２科目の合計４科目（物理、化学、生物、地学）が行われていたものが、３学期制になると、通年で２科目の授業を行い、学年によって科目が変わるという新しい形になった。授業形態の変更と同時に、総合科学という新しい科目を創立し、アクティブラーニング型の調べ学習を行う授業を採り入れた。調べ学習に生徒自身が積極的に取り組むようにさせることで、知的好奇心や課題解決能力を育みながら、中３で行う卒論に向けて社会における課題や時事問題などにも興味関心を持たせることが出来るようになった。

平成19年に完成した高校共学化から遅れて、平成25年に中学女子１回生（45回生）が入学した。クラスの増加によって教員全体の数も増加し、理科にも初の女性教員が採用された。女子生徒へのサポートが万全な状態で中学共学化が

この時期の先生方の着任、離任

平成17年４月	崎村　奈央	先生（生物）着任
平成21年４月	山口　利依	先生（物理）着任
平成23年４月	坂田　真一	先生（生物）着任
平成24年４月	太田　　誠	先生（地学）着任
平成25年３月	栢岡　忠彦	先生（物理）離任
４月	田尾　聡明	先生（物理）着任
平成26年４月	田川　順登	先生（化学）着任
平成27年３月	田尾　聡明	先生（物理）離任
４月	長津　研人	先生（物理）着任
平成28年３月	古賀　　直	先生（生物）離任
３月	田川　順登	先生（化学）離任
４月	古賀沙絵子	先生（化学）着任

崎村先生

山口先生

田川先生

長津先生

古賀先生

田尾先生

進み、男女がお互いに刺激しあった結果、例年よりも良い結果を残すことで共学化の完成を飾った。

日本国内のICT教育推奨の流れを受けて、平成27年に教員、翌平成28年には生徒にタブレットが配付され、中学高校で行われる各科目での指導への導入が期待された。手探り状態でスタートしたICT教育では、研修などを受けながらの実践の積み重ねや、指導の工夫を考えながらの授業組み立てなどで、難航を極めつつも、新しい理科教育の可能性が感じられた。

立花純二先生は平成22年度より平成23年まで中学教頭、平成24年度より平成25年度まで高校教頭の仕事をされた。名和長泰先生は平成24年より平成25年まで中学教頭として仕事をされた。白水孝典先生は平成23年より平成30年まで教務部長として仕事をされた。

3. コロナの脅威

—平成30(2018)年から令和７(2025)年—

平成30年に第10代校長吉川敦先生が退任され、同年４月に第11代校長町田健先生が就任された。この時代はコロナウイルスの蔓延や過去に類を見ない大きな自然災害など激動の時代であった。

令和２年度に文系の選択科目が物理基礎、化学基礎のうちから１科目、生物基礎、地学基礎のうちから１科目をそれぞれ選択するという形態から、物理基礎、化学基礎、生物基礎の３科目から２科目を選択するという形態にかわった。ここには地学基礎の選択者の減少という背景があった。

附設の小さな変化がある最中、世界では大きな社会現象が起こった。令和２年に世界を襲ったコロナウイルスのパンデミックである。コロナウイルス蔓延防止のためのロックダウンが日本中で起こった。附設もコロナウイルスの脅威に襲われ、長期的な学校閉鎖、各行事の中止など、例年にない動きになった。特に令和２年度の学校祭“男く祭”が中止になったことは、多くの生徒にショックを与えたが、その厳しい社会情勢のなかでも先生方は生徒に寄り添うことを忘れず、また、大学入試に向けて郵送物で課題の配布、回収をするなど出来る限りの手厚い指導を行った。教員の負担軽減や緊急時の対応のためにもこの頃からICT教育の普及が本格化していくことになった。

令和元年８月から高校で採用された、教室でパワーポイントや教材を電子黒板に映す授業をしたり、プロジェクタで波の動画を見せたりと、ICTを活用する先生も増え始めた。令和５年には全館がWi-Fi化され、より多様な授業のやり方ができるようになった。

令和７年現在でもまだまだICTの活用方法は無限にあり、どうすればより教育へ活用することができるのかを模索している最中である。教員の負担増加が叫ばれる世の中で、教員の負担

この時期の先生方の着任、離任

平成30年４月	佐々木雄飛　先生（化学）着任
平成31年３月	立花　純二　先生（物理）離任
３月	名和　長泰　先生（化学）離任
４月	内野孝一郎　先生（生物）着任
令和２年３月	崎村　奈央　先生（生物）離任
	内野孝一郎　先生（生物）離任

立花先生

名和先生

佐々木先生

減少や効率のよい指導のやり方を、各教員が考え、共有していくことでよりよい環境をつくることが必要である。その上でいかに生徒へ還元できるかは教員が常に考え続けなければいけない課題である。これからの附設中学校・高等学校は様々な変化があり、多くの課題にぶつかり続けるだろう。その中でも我々は常に前に進み続けなければならない。

名和長泰先生は平成26年より平成30年まで高校教頭の仕事をされた。白水孝則先生は平成31年度より高校教頭の仕事をされている。原田裕之先生は平成29年度に総務部長の仕事をされた。坂田真一先生は令和５年度より生徒指導部長の仕事をされている。

古賀直先生（76）が令和元年９月に御逝去なされました。昭和39年４月より平成28年まで49年にわたり附設でご活躍をされました。ご冥福をお祈りします。

4. 附設中学校・高等学校の科学分野における輝かしい実績

最近の附設の活躍は学校内だけにとどまらず外部の大会等でも大いに活躍をしている。その中で科学分野における優れたものの一部を以下に掲載する。このほかにも中３での卒論は様々なコンクールで個人だけでなく学校としても賞をいただいている。

（文責：長津研人）

国際科学オリンピックの功績

2020年	第52回 国際化学オリンピック（トルコ）	柴山礼寛　高３【銀メダル】
2021年	第51回 国際物理オリンピック（リトアニア）	楠元康生　高３【金メダル】
2021年	第51回 国際物理オリンピック（リトアニア）	糸永大樹　高３【銀メダル】
2022年	第33回 国際生物学オリンピック（アルメニア）	川上航平　高３【銅メダル】
2023年	第55回 国際化学オリンピック（スイス）	山之内望花　高３【金メダル】
2023年	第34回 国際生物学オリンピック（アラブ首長国連邦）	井上紗綺　高３【金メダル】
2024年	第35回 国際生物学オリンピック（カザフスタン）	櫻井大聖　高３【銀メダル】
2025年	第25回 アジア物理オリンピック（サウジアラビア）	坂本　翔　高３【銅メダル】

科学の甲子園ジュニア　福岡県チームの功績

第１回	筆記競技第２位　内田洋行賞　総合第６位
第２回	筆記競技第２位　内田洋行賞　総合第２位　科学技術振興機構理事長賞 トヨタ賞　イノベーション予感賞　日立賞
第３回	総合第８位
令和２年エキシビション大会	化学同点１位　協働パートナー賞　情報同点１位　協働パートナー賞

科学の甲子園　福岡県チームの功績

第６回	企業特別賞　埼玉県経営者協会賞
第10回	実技競技②第２位　ヤガミ賞
第11回	総合第６位　共同パートナー賞
第12回	筆記競技第１位　スカパーJSAT賞　実技競技②第１位　学研賞
第13回	筆記競技第２位　内田洋行賞　総合第10位
第14回	総合第４位　つくば市長賞　旭化成賞　筆記競技第1位　スカパーJSAT賞　実技競技①第2位　ケニス賞

体育科の75年

1950年の附設高校創立時に着任された三原正蔵先生によって附設高校体育科の歴史が始まった。旧陸軍舎跡に開校された学校だったので、開校時の体育の時間は柱を倒し取り除き整地する作業に明け暮れ、運動といえば校舎間をただひたすら走り続けることだったらしい。グラウンドが少し整備されてからは、自らラガーマンである三原先生の「逞しい紳士の育成にはラガー精神の教育が一番」との考えでラグビー中心の授業が行われた。

勉強だけでなくスポーツや各行事等やる時はとことん打ち込むという附設魂の伝統を作り育てられた三原先生のご退職後、後任として松山健一先生が着任（1967年）された。先生は附設の伝統を受け継ぎつつ、当時計画されていた校舎移転、中学部創設を踏まえ、中高６か年一貫の体育カリキュラムを確立させようといろいろな工夫をされた。まずは新校舎への移転を睨みながら、土埃と汗にまみれ、覇気溢れる生徒像を体育活動から描き、敵味方入り乱れた種目、身体接触のあるものとの観点からサッカーと柔剣道を中心とした教科経営を考えられたのである。加えて体育祭やクラスマッチ、キャンプ、スキー訓練等の行事も計画・実行された。中高６年間を通した教育計画、年間計画、個々の単元の指導計画と教育的意義、また、附設の活性化等が考慮された体育が確立されたのである。

松山先生の意思もあり、中学併設を意識し、種目の優れた専門性に合わせ、教育大学で学ばれた先生方を中心に、附設の体育教育は、授業は勿論、体育的行事、部活動等さらなる充実がなされていった。

以下は、その当時の「体育科の思い出」を書かれた緒方裕之先生（1980年～2021年在籍）の寄稿文である

大学を卒業した1980(昭和55)年４月に、私は非常勤講師として附設で教職に就き、翌年正教員として採用して頂いた。当時、牟田和彦先生(1969年着任)、田中康之先生（1970年着任)、後藤英二先生（1971年着任)、安永範男先生(1977年着任)、松崎文雄先生（1983年着任）の先輩方がおられ、附設の教員として一から学ばせていただいた。思えば40年間本校で教員生活を送ってきたことになる。この40年、個性豊かな先生方にお世話になり、また才能あふれる生徒諸君に出会い、楽しく仕事ができたこと、本当に感謝しかない。

私が附設に来た当時の高校体育祭は、３日間で行われていて、とても驚いた。１日目が球技と武道の予選、２日目が陸上競技の予選、３日目がそれぞれの決勝と騎馬戦だったと記憶している。そして騎馬戦以外の全てがクラス対抗であった。１日目はすこぶる元気、２日目もまだまだ大丈夫なのだが、３日目になると生徒も教員も疲れ果てていたような気がする。だが終了したときの清々しさ、達成感は何とも言えないものであった。そして閉会式後には生徒自身が作る、附設鍋という豚汁のようなものを食べながら運動場の真ん中で巨大な焚火を囲み、有志による一発芸を競う「イブニング附設」という催しを行った。焚火で燃やすのはクラス単位で作った櫓の廃材である。当時は１学年４クラスだったので、12の櫓が運動場の周りを取り囲んでいたのである。しかも竹や木材を使い、土台や骨組みから自分たちで建てたものなので、廃材はかなりの量であった。なかなか終わらない「イブニング附設」は20時過ぎたころ、全生徒で行う校歌斉唱と万歳でやっと終了するのだった。しかし、１日の休日を挟んで翌週からは何事もなかったごとく日常の授業が行われていて、またもや驚かされた。

クラスマッチは、体育祭でいろんな種目をやるので、当時人気があったバレーボールとサッカーに特化されて、７月にバレー大会、12月にサッカー大会として行われていた。全員がその種目で競うのだから、バレーの場合Ｓチームをはじめとして７チーム、サッカーの場合４チームが１クラスから出場する。どちらも予選リーグから決勝トーナメントまで、２日間かけてやっていた。当時人気種目ということで、どの中学校でも部活動として盛んだったので、内部、外部中学出身者とも経験者が多く、非常にレベルの高い戦いだった。バレー大会にはもちろん教員チームも参加していた（３チーム程)。当時私が一番若く、一番先輩の先生でも30代だった体育科を中心にいろんな教科の先生が参加されていた。体育科中心の教員Ｓチームはかなり強豪で毎回優勝を争っていたように思う。このバレー大会は日程の変更等はあったが、長年続いていたので、藤吉教頭や兼行、坂田、國吉、阿部、行正、池ノ都先生も経験されている。

スキー研修はその当時、長野県の志賀高原に行っていた。新幹線で名古屋まで行って貸し切りバスで向かうのだが、朝出発して到着するのは夜、８時間以上かけていたように思う。その後、もっといい雪質を求め、また往復の時間短縮を考えて北海道に変更されていくのである。

今思うと、当時の体育行事は結構過酷で、健康・安全面にも課題があったかもしれない。し

現在の保健体育科集合写真。
上段左から、福浦・本山・桑野・池田・今里。下段左から、行正・辻田・小倉・鍋内・橋元・上原。

かし、心身の鍛錬、学校全体の士気高揚に加えて、どんな活動にも全力で取り組みつつ自制心を持ちけじめをつける能力や態度の育成等を狙ったものであったと考えられる。規模や方法は異なるにしても、その狙いは附設生の中で十分に熟成され、現在に受け継がれているのではないだろうか。学習だけでなく、何事にも真剣に、本気で取り組むことのできる生徒たち。そういう集団である附設が私はとても好きであり自慢である。

▶2000年～2025年に体育科で授業をされた先生方のご紹介。（五十音順）

池田祐一、今里（今村）綾香、緒方裕之、小倉大輝、尾崎純子、桑野浩二、江田真子、後藤英治、猿渡いずみ、辻田洋平、長野健一、鍋内清利、橋元菜月、廣田哲夫、松﨑文雄、松藤彦太、牟田和彦、安永範男、山田恵士、行正（藤岡）麻衣。

近年では、2013年から中学男女共学化も進み、現在では中高共に男女共学となっている。その中で、体育の授業は、男女別での球技（バレーボール、サッカー、バスケットボール、卓球、テニス、バドミントン、ソフトボールなど）が行われている。武道（柔道・剣道）及びダンスに関しては、クラス別の授業が行われている。

また、新型コロナウィルス感染症の流行による自宅学習やマスク着用での活動期間には、映像を使った授業内容や距離を置いての体育授業（ストレッチ・リズム運動）など、試行錯誤しながら、運動量の確保、自宅学習時のストレス発散ができるように、工夫を行った。

さらに、気温変化の影響も大きく、体育科としても熱中症対策が重要となっている。大きな変化としては、柔剣道場にエアコンの設置が行われた。新設される第２体育館にもエアコンが設置される予定である。そして、高校体育祭に関しては、今まで第一グラウンドで行われていたが、初めて久留米アリーナを借用し、平日開催で行われた。プログラム内容も室内競技中心となり、新たにクラスＴシャツコンテストを行ったり装飾パネルが大旗に変化したりと、今までにない体育祭が開催された。現在、中学体育大会についても、日程変更や場所の変更が検討されている。

体操服・グラウンドシューズ・バッグ等についても、現在はadidas社のものを採用し、デザイン性や着心地、機能性にも配慮して、少しずつ変化させてきている。

（文責：体育科主任　小倉大輝）

体操服・シューズ・バッグデザイン（2025年）

高校体育祭2024久留米アリーナ開催

時間	競技
9：50～10：05（15）	開会式
10：05～10：15（10）	50m走
10：15～10：45（30）	クラス対抗リレー
10：45～11：05（20）	ムカデ競走
11：05～11：25（20）	大玉送り（男子競技①）
11：25～11：50（25）	障害走
11：50～12：05（15）	教員矢の如し
12：05～12：25（20）	玉入れ
12：25～13：00（35）	昼休み
13：00～13：45（45）	応援合戦
13：45～13：55（10）	30mシャトルラン
13：55～14：15（20）	大玉転がし（女子競技）
14：15～14：35（20）	陣地取り
14：35～14：55（20）	蛇の皮むき（男子競技②）
14：55～15：05（10）	選抜リレー
15：05～15：20（15）	閉会式

プログラム

装飾

クラスTシャツコンテスト優勝２－Ａ

21世紀の芸術科

1. 芸術総合選択

本校の芸術科は21世紀に入ると同時に大きな変革を遂げた。開校から半世紀の歴史については、50周年記念誌『和而不同』の中の「芸術科の50年」（p.42～43）に詳しいので割愛するが、その文末で江上寛二先生が記されている通り、平成13(2001)年度から中２～中３の美術・音楽・技術の単位を統合した「芸術総合選択」が、本校独自のカリキュラムの一つとして開設された。

平成10年改訂（14年度から実施）の学習指導要領では、美術・音楽の中学３年間の授業時数はそれまでの140から115となり２割ほどカットされることになったが、同時に「中等教育学校並びに併設型中学校及び併設型高等学校の教育課程の基準の特例を定める件」が布告され、中高一貫教育において特色ある教育課程を編成できるよう、選択教科の設置など柔軟な運用が認められるようになった。

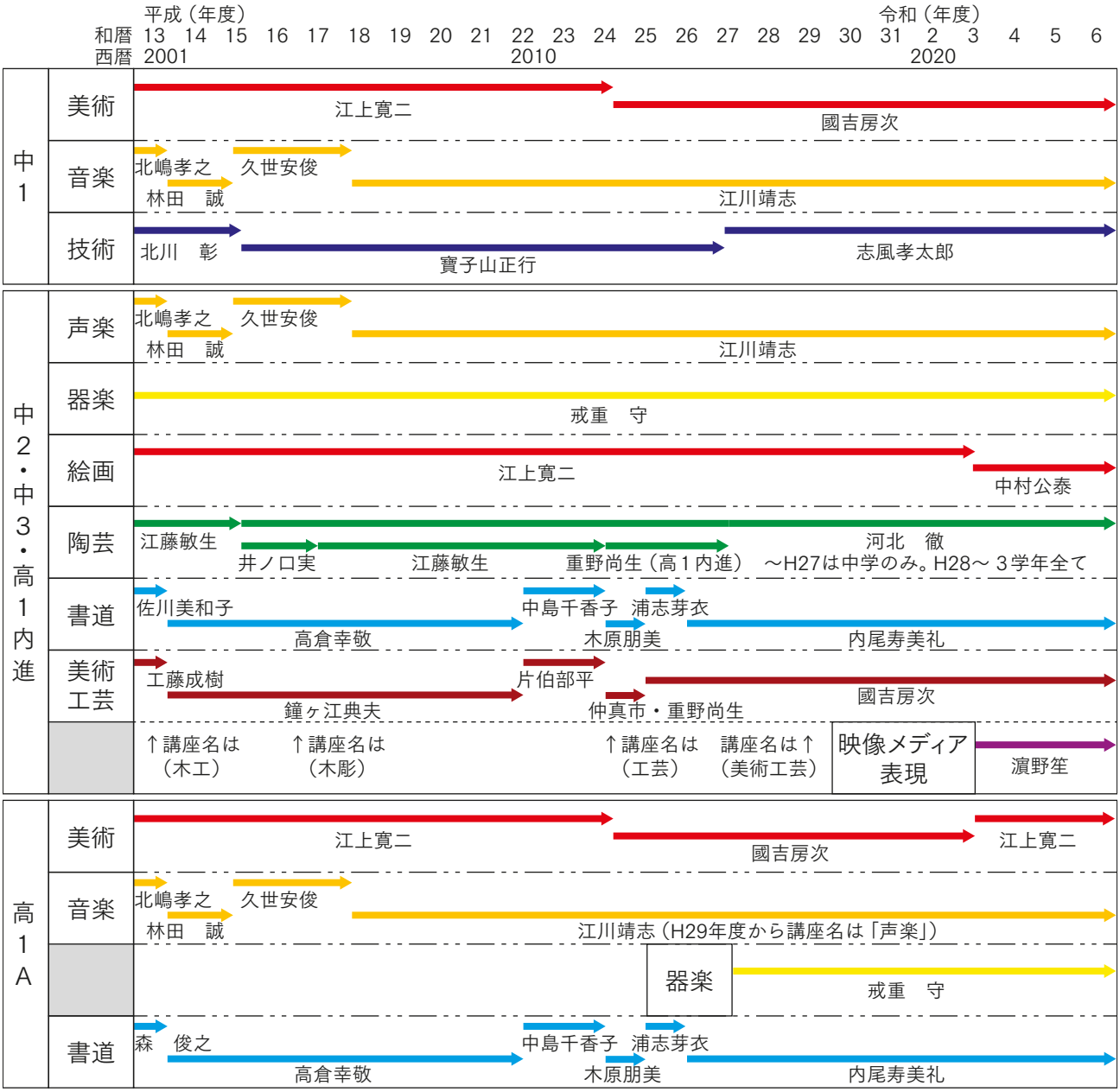
それをうけて本校においては、絵画、木工、陶芸、書道、声楽、器楽の６つから生徒が希望する講座を選択し、少人数クラスで週３時間、一つのことにじっくりと腰を据えて取り組めるようにした。高１でも、それまで「美術」「音楽」の２択だった週２時間の芸術の枠を、附設中学から進学する生徒は原則そのまま持ち上がりで６講座から、高校からの入学生は「美術」「音楽」「書道」の３講座（のちに平成29年度から音楽を声楽、器楽に分けて４講座）から一つを選択できる制度となった。担当講師の交代による講座の名称変更などマイナーチェンジはありながらも、令和３年度まで約20年はこの６講座体制を維持していたが、中学共学化に伴う定員増に対応し、時代のニーズに適応するため、令和４年度からは「映像メディア表現」も加わって７講座体制となった。各講座と担当教員については次ページの表に示す通りである。

仲井勝太郎（中53・高75回生）「暖かい家」
第67回旺文社全国学芸サイエンスコンクール
中学生絵画部門金賞及び内閣総理大臣賞　受賞

2002年完成　陶芸棟・芙蓉窯

選択希望調査時の説明文には、「芸術総合選択は、従来広く浅く実施されていたものを、特定の分野を深く学ぶことで人格を陶冶し、生涯の趣味の領域まで発展させる契機とする。また、学級や学年においてそれぞれの道のスペシャリストがいることで、お互いを尊重し合う情操教育的な効果や、学校行事の質の向上を期待して実施する」と記しているが、そうした設置当初の目論みを超えて、中学卒業制作の質の向上、ひいては外部コンクールでの大きな賞の受賞にも繋がっている。令和５年度の旺文社学芸サイ

芸術総合選択　講座及び担当講師一覧



エンスコンクールでは、中学53回生・仲井勝太郎くんの「暖かい家」と題する絵画作品が、応募総数８万点余りの頂点、内閣総理大臣賞に輝いた。

また、近年は高校62、64、69、71回生からそれぞれ一人ずつ東京藝術大学へ進学する卒業生を出しており、それ以外にも芸術系の大学、あるいは建築学部などクリエイティブな進路を選ぶ生徒も毎年数名ずつ出ている。芸術総合選択を受講した世代からも、すでにその道で活躍している卒業生の名前が聞かれるようになった。無論、直接的に芸術系の仕事に就かずとも、仕事の中でクリエイティブな感覚や技術を発揮したり、趣味として制作や演奏活動を続けていた

萩原芽衣（中47・高69回生）「優しい手」
※東京藝術大学美術学部デザイン科進学

り、日常的に美術や音楽の鑑賞を楽しんだり、という卒業生の割合は高く、その活躍を頻繁に耳にする。

「芸術総合選択」の授業はほとんどの生徒にとって、直接的に受験で役立つ知識を得られる場ではない。しかし、体験的な学びを通して感受性に磨きをかけ、情操を豊かに育むことで、「修羅道の世を救」い、「不朽の真善美」を築いていくための素地を鍛える貴重な機会となっていると言えるだろう。

2. ふせつ美術館 ～校舎内の芸術作品設置～

2012年の校舎建て替えに伴い、当時の吉川敦校長の発案により、高校卒業記念品として芸術作品を購入し、新校舎の各所に設置する取り組みが10年ほど続けられた。各回生の寄贈作品と設置場所は次ページの一覧表の通りである。

このうち58回生が寄贈した野見山暁治氏によるステンドグラス作品「はじめての日」は新校舎建設のタイミングで西棟５階中央階段上の窓

野見山暁治「はじめての日に」

江上寛二先生「いのちの風光」

ガラスに嵌め込みで設置され、新校舎のシンボリックな作品となっている。

また、中１時に美術の授業を江上先生から教わった最後の学年で、中学男子校最後の世代となる66回生から寄贈された江上寛二先生による作品「いのちの風光」は、野の花が咲き乱れる豊かな自然の中、こびとたちが駆け回る姿などが描かれ、生徒たちを優しく激励するメッセージが至る所に散りばめられている。

各回生の寄贈作品と設置場所

設置年	寄贈回生	作品タイトル	制作者	設置場所
2009	57回生	テンペラ画「有志の学舎」「立志の春」	日賀野　健一	西棟２階事務室前踊り場
2010	58回生	ステンドグラス「はじめての日」	野見山　暁治	西棟５階中央階段踊り場
2011	59回生	思考廻廊　陶板パネル	乗富　久哉	西棟中央階段２～５階壁面
2012	60回生	日本画　「四季」	神戸　智行	東棟２階　図書館壁面
2013	61回生	石彫「風のカリアチード」	片伯部　平	東棟１階外
2014	62回生	新校舎模型		西棟２階事務室前
2015	63回生	アールヌーボー調　街灯	浜﨑　誠太郎	正門向かって左側花壇
2016	64回生	モザイク画　「ここから」	鈴村　敦夫	西棟３階廊下突き当たり
2017	65回生	木炭画「65回生　記憶の記録」	馬渡　吟二郎	西棟２階大会議室壁面
2018	66回生	アクリル画「いのちの風光」	江上　寛二	西棟２階廊下突き当たり
2019	67回生	校歌演奏　（CDを額装展示）	九州交響楽団	西棟２階廊下突き当たり

ほかにも、素材や表現主題が異なる多様な作品が揃い、それらを探索しながら巡れば、さながら美術館に訪れたような贅沢な鑑賞体験を味わうことができる。

なお、67回生寄贈の九州交響楽団による校歌演奏音源は、直後のコロナ禍で合唱ができない状況が続いた時期に式典や集会で大いに活用された。

75周年記念事業として建設された特別教室棟には、芸術総合選択の授業が行われる教室が多く含まれる。作品を鑑賞するのみならず、生徒たちの創造力を喚起し、創作の現場として活力に満ちた校舎となっていくことが期待される。

3.　附設芸術展

芸術科の発表の場として、中学３年生による「卒業論文制作展」、高校１年時の保護者会で授業成果を発表する「芸術発表会」、また平成11年度より高校HR委員会主催で行われる「芸術週間」があり、それらは現在も続いているが、いずれも校内向けの行事であり、対外的に発表する場はそれまでほとんどなかった。中学共学化となった平成25年４月、江上寛二先生のご退職に伴い、沖縄の公立中学校で美術教師をしていた國吉房次（41回生）が後任として着任した。江上先生はその後も引き続き講師として中２～高１の絵画の講座を担当され、國吉が中１美術と中２～高１の美術工芸を担当するかたちをとった。美術科２人体制となったことで、江上先生が長年念願されてきた外部での生徒作品展、および演奏発表会の運営が可能になり、平成26年度から「附設芸術展」を開催することとなった。

第１回展は、久留米市一番街多目的ギャラリーで2015年１月14日から18日の日程で開催し

第１回附設芸術展　ミニコンサートリハーサルの様子

第10回附設芸術展コンサートの様子

た。芸術選択講座のうち造形４科目及び中１美術の授業作品、美術部員の作品、及び中３卒業制作と、およそ400点余りを一堂に展示した。また最終日には声楽・器楽履修の有志生徒によるミニコンサートを、電子ピアノでの伴奏というシンプルな形式ながらギャラリー内で実施し、訪れて下さった地域の一般の方々や生徒保護者、卒業生から好評を博した。第３回展までこのスタイルで同じ時期に実施した。

第４回展では、たまたま近くに久留米シティプラザができたこともあり、その４階にある練習スタジオを借用してミニコンサートを行った。第５回以降は同じシティプラザのＣボックスを借用し、グランドピアノ、音響や照明設備も整った本格的なホールで演奏できるようになったことで、呼称も「ミニ」を外し、「附設芸術展コンサート」と銘打って、生徒も参加しやすい冬休み終盤の日程で実施するようになった。これには音楽担当の戒重守先生と江川靖志先生、お二人の熱心なご指導とご尽力、そして事務室を含め学校全体の理解とサポートがあればこそ、実現できているイベントといえる。

展示部門に話を戻すと、コロナ禍にあった第７回はＣボックスエントランスでの展示のみなどと縮小開催せざるを得ない年もあったが、第９回からは、学校行事との兼ね合いや生徒の参加のしやすさを考慮して、展示部門のみ本校入試明けの週にずらし、場所も石橋文化会館１階の「ギャラリーみゅ～ず」に変更して実施するようになった。それまでよりもスペースが広く、学校からも近くなったことで、ジオラマなど大きな立体作品も展示できるようになった。また駐車場などの利便性も良くなり、生徒保護者や卒業生に加え、たまたま立ち寄る一般の方の入場数も増えた。地域との繋がりも深まり、より充実した展覧会となっている。

また、外部での発表の場があることで、生徒の創作意欲や向上心を喚起し、授業での集中力が高まるという良い効果を生んでいる。さらには、違う芸術選択科目を履修する生徒同士が相互の取り組みを鑑賞し合うことで、対話が深まり、多様性を認め、自己肯定感を高める機会にもなっている。

附設芸術展は、芸術科の教員以外にも多くの方々のお力添えを頂戴して成り立っている行事であり、今後の継続的な実施と発展を願い、お世話になっている関係諸氏に改めて謝意を示したい。

（文責：國吉房次）

英語科の75年

1. 御井校舎時代の英語教育

平成12年に発行された附設高等学校50周年・附設中学校30周年記念誌によると、昭和25年の開校から昭和43年までの18年間（1950～1968）がこの時代に相当する。旧陸軍工兵第18大隊の兵舎を改造した建物の中で本校の英語教育はスタートした。本校の草創期、胎動期の英語教育を担った先生として、竹村覚、弥永勝太、初鹿野一郎の３先生がいらっしゃる。

昭和25年には、旧制中等学校が廃止され新制高等学校が完成し、総司令部の命により教育の近代化が着手された。翌26年にはこの時期の英語科の中心的存在となった半田圓三郎先生が着任された。半田先生は平成元年に定年退職されるまで38年間教鞭をとられ、27年に着任された井上武次先生と共にこの時期の附設の外国語教育の中心となった方である。ここで英語教育ではなく、外国語教育と表現しているのは、ドイツ語の磯部幸一先生など英語以外の言語も教える先生が在任されていたためである。これは久留米大学医学部の先生が兼任で授業をされていた影響もあるのではないかとされている。

昭和40年に原巳冬校長が着任されて、ここから附設は胎動期から発展期に入り、旧兵舎の御井校舎から現在の野中町校舎への移転が具体化していく。昭和42年には、合原俊光、寺本俊三の両先生が着任された。合原先生は本校の卒業生で、先述した半田先生、井上先生等に旧兵舎で英語を学ばれ、本校に着任された。図書館長として図書館の充実に取り組まれ、その後は寮監長として寮生の指導に尽力された。福岡県から私学教育功労者として知事表彰されるなど、英語科のみならず附設の発展を語る上で欠かすことの出来ない先生である。私（文責・家中潤）もご退職前の数年間をご一緒させていただいたが、普段の柔和な風貌と語り口、その一方で英語科会で発せられる鋭い一言が記憶に残っている。本校退職後は塾等での指導で力を発揮された。

2. 野中町校舎移転後の英語科

昭和43年７月に現在の野中町校舎に移転し、附設は発展期を迎える。発展期の原動力は原巳冬校長であった。原校長を慕って続々と優秀な先生方が附設に着任してきた。昭和44年に附設中学校が設立され、同年野田三彦先生、野村弘明先生、翌45年には三浦太郎先生、46年に熊懐嘉文先生、47年には小野粋先生、宮崎充保先生が着任された。

附設中学校１回生（附設高校23回生）が卒業した昭和50年、附設は進学面で大成功を収めた。現校長町田健先生が附設中学校１回生であるが、町田先生を始め東京大学への進学者が激増した年であった。先述した半田先生は「日常の教材学習の重要性を強調し、学校の教材を充分勉強すれば、どんな学校にも合格できるよう教材を工夫した」と述べられている。

原校長の発展期はさらに多くの先生方を迎えた。原校長はかつて「旧兵舎が校舎の時代は、口頭で就任に約束を取りつけても、校舎を見てその粗末さに驚かれ、断られる事が多かったが、野中町校舎になってからは教員の採用が楽になった」と述べられている。そのような状況下で、昭和49年に簗取和紘先生、51年に太田昌一先生、52年に檜垣御楯先生、53年に原田純世先生、中島文昭先生、54年に真崎良幸先生が着任された。

檜垣先生は先述した合原先生と同年齢で、私もご退職前の数年間をご一緒させていただいたのだが、ラグビーを特技とされ、本校がスポー

ツで対外試合ができるようになるきっかけを作られた先生である。行動派で、ラグビーの指導をされた後は、長年アウトドア部の顧問として、生徒を登山、釣りに連れていかれたり、自宅に生徒を招かれるなど常に生徒の傍らに立って指導されていた。授業においては、洋楽を取り入れるなど生徒の興味関心を引く授業を実施されていた。定年退職される年まで担任を勤められ、附設の発展に尽力された。本校退職後は、福岡市内の私立学校、久留米市内の私立学校に勤務された。

昭和54年以降は、原先生の後任として、本校生え抜きの国語科世良忠彦先生が校長に就任され「躍動期」が始まる。その躍動期に着任されたのが、森上芳樹先生である。一見温厚に見える森上先生だが、時間を見つけては九州・山口各地をツーリングに出かけられる一面もお持ちである。自己研鑽のために毎月『英語青年』の英文解釈練習と和文英訳練習に投稿され、成績優秀者の常連であった。現校舎建築時代の総務部長もお務めになり、ご尽力いただいた。毎年担当学年であるなしに関わらず、その誠実な人柄と深い学識に惹かれ添削を依頼する生徒も多い。生徒のみならず、私たち後輩教員の質問にも懇切丁寧に対応される人徳者である。現在も非常勤講師として、主に高２、高３の英作文の指導をされており、生徒からの信頼も絶大である。

昭和59年、九州大学大学院から新卒で宮原一成先生が着任された。LL教室を使っての音声教育に熱心な先生であったが、９年の勤務後大学院に戻られ研究者の道を選ばれた。

昭和63年、田久保千之先生が着任された。英語だけでなくフランス語にも堪能で語学に関して幅広い知識をお持ちの先生であった。また本校以外での活動にも積極的で、英和・和英辞典の執筆協力、専門誌への寄稿、学会の運営・発表もされていた。本校在任中より久留米大学への出講もされており、語学のみならずその背景にある文化等にも触れつつ、生徒および学生の学習意欲をかき立てておられた。本校では視聴覚の係を長年勤められ、特にデジタルカメラ等の整備に尽力された。本校退職後も久留米大学でご活躍である。

平成元年、中村一彦先生、堤光雄先生が着任された。先述の田久保先生も含め、他校での豊富な指導経験をお持ちの先生方に激化する受験競争におけるご活躍を期待しての着任であった。中村先生は本校卒業生であり、温厚で英語科主任をお務めの際も決して前に出ることなく、科全員の話をお聞きになった上で話をまとめていく手腕は見事であられた。またパソコン等にも精通されており、そのような分野においてもお力を発揮していただいた。学年主任・総務部長・中学教頭と校内での重職を歴任され、様々な問題に対応された。本校教諭退職後は、非常勤講師としてもご勤務いただき令和７年３月を以て退職された。堤先生は、用意周到かつ実践力のある先生である。本校は平成17年４月に高校56回生として初めて女子生徒が入学したが、学年主任とクラスを担任されたのは堤先生であった。附設高校共学化という世間からの注目の中の担任は非常に苦労が多かったと思われるが、そのような苦労を見せずに学習面・生活面をしっかり指導された。堤先生の厳しくも愛情のあるきめ細かい指導で、附設高校男女共学化は素晴らしいスタートを切ることができた。水泳部の顧問を務められ、ご自身も現役のスイマーとして様々な大会に出場されている。また寮の運営においても、副寮監長として、文字通り寝る間も惜しんで生徒の指導に携わられた。長年学年主任を務められ、本校教諭退職後は本

校嘱託講師として、そして現在は非常勤講師として生徒の指導をされている。

そして、平成元年９月には、LL教室が100インチの大型プロジェクター、レスポンスアナライザーを備えた当時最新の機器に一新された。設置当初は県内外からの見学希望も多かった。

平成４年、藤吉博範先生が着任された。藤吉先生は本校卒業生で、大学卒業後民間企業に勤務された後、大学に戻られ教員免許を取得なさり、関東の有名進学校で勤務された後、母校に戻って来られた。授業への妥協なき準備や紳士的な態度で後輩教員の模範となっている先生である。授業の準備および添削で文字通り「寝る間を惜しんで」の勤務をされている。我々後輩教員が健康を心配するくらいの仕事量を笑顔でこなされるスーパーマンである。学年主任をお務めになり、現在は中学教頭として附設の牽引力としてご活躍されている。文学やクラシック音楽など趣味も多彩である。当然のことながら、誠実な人柄と面倒見の良さで訪ねてくる卒業生も非常に多い。

平成５年、諸江善文先生が着任された。イギリスの大学院留学経験をお持ちの先生で、豪放磊落、ユーモア溢れる先生であったが、４年の勤務後郷里の佐賀に戻られた。

平成10年、原野善次先生が着任された。県立高校で長く勤務された先生で、実用英語検定試験では筑後地区のまとめ役をされるなど広い人脈をお持ちの先生であった。野球や囲碁に興味をお持ちで、生徒への指導に活かされていた。

平成11年、大藪良一先生が着任された。大学院卒業後、福岡市内の私立学校にてご勤務された後の着任であった。若くして学年主任をお務めになるなどリーダーシップを発揮されている。パソコン等にも精通されており、本校におけるICT教育の先駆者としてICT主任を務められ、暗中模索の中でのICT導入に尽力された。校外においても、教科書執筆等の多方面で活躍されている。スポーツでもソフトテニスを長年プレイされており、テニス部顧問としても尽力されている。

3. 男女共学化後の附設

平成14年、西南学院大学大学院から新卒で田中しのぶ先生が着任された。養護教諭以外での女性の専任教諭第１号である。平成17年４月の附設高校共学化元年に高校56回生の学年所属となり、学習面・生活面で附設高校女子１期生を支えられた。豊富な知識と厳しいながらも愛情あふれる指導で生徒からの信頼が厚い。教科指導のみならず、進路指導においても豊富な経験に基づいてのアドバイスを求めて、田中先生を訪ねてくる生徒は多い。その後、平成25年にスタートした中学共学化元年の中学45回生、高校67回生の担任も務められ、学習面・生活面での指導に尽力された。部活動の指導においては、高校時代に野球部のマネージャーだった経験を活かして、長年高校軟式野球部の部長を務められた。スコアブック記入や大会運営ではアナウンスをされるなどして活躍された。

平成15年、家中潤が着任した。大学卒業後民間企業および県立高校での勤務を経ての着任であった。中学女子共学化初年度より４年間生徒指導部長を務め、校則・部活動の整備等に尽力した。また長年中学・高校バスケットボール部の顧問を務め、部員だった卒業生が訪ねてくることも多い。車イスバスケットボールの審判という珍しい資格も持っている。

平成20年、高平良先生、前田雅子先生が着任された。長年ご勤務され退職された、合原先生、檜垣先生の後任である。高平先生は九州大学工

学部を卒業後、国内外で様々な経験を積まれた後に本校に着任された。音声教育に熱心な先生で、常識に囚われないユニークな指導をされる。また学生時代に経験されたバスケットボールの指導もされた。前田先生は九州大学大学院を卒業後、新卒で本校に着任された。授業の準備に参考書を５～６冊準備されるような用意周到さがあり、またベテランの教員も返答に窮するような質問をされる才能溢れた先生だった。高校58回生女子の良きお姉さんとして、生徒に寄り添っての指導をされていた。その高校58回生の卒業とともに前田先生も九州大学大学院に戻られ、現在はご活躍の場を大学へと変更されている。

平成25年、梅野真名美先生が着任された。福岡県内の私立学校および海外での日本語指導を経験された後の着任である。温厚な雰囲気をお持ちであるが、スポーツカーやバイクの運転もされるという一面もお持ちである。学習指導に関しては非常にきめ細かい指導で生徒の信頼も絶大である。またESS部の顧問を務められた当時は、生徒の活躍の場を海外にまで広げられた。

平成29年、藤木克哉先生が着任された。大学卒業後民間企業に勤務された後、大学に戻られ教員免許を取得され、福岡市内の私立学校での勤務を経ての着任であった。京都出身の先生で、持ち前の明るさ、元気のよさを前面に出して授業をされており、生徒も笑顔で授業を楽しんでいる。現在は学年主任をお務めで、生徒の諸分野への興味関心を引き出すような講演等を積極的に実施されている。校外での執筆・講演活動でも活躍されている。

平成30年、伊藤省吾先生、岩﨑聡子先生が着任された。伊藤先生は本校卒業生で、大学卒業後に塾および福岡市内の私立学校勤務を経ての着任であった。英語科の中では生徒と年齢が近いことや本校卒業生ということで生徒から兄貴的存在として慕われていた。もの静かであるが発想のユニークさで学年および英語科を和ませてくれることも多々あった。若きホープとして期待していたが、５年勤務された後新しいチャレンジのために退職された。まだお若いので今後再びご一緒できる機会があることを期待している。岩﨑先生は大学院卒業後、福岡市内の私立学校に勤務され、本校に着任された。教科指導においては生徒にも自分にも厳しく指導され、生徒からの信頼も厚い。また部活動においてはESS部の顧問をされており、模擬国連などレベルの高い校外での活動にも生徒とともにチャレンジされている。プライベートではアウトドア活動を趣味とされており、本格的な登山にも挑戦されている。

令和５年、原田和香子先生が着任された。先生は前職が福岡県警での英語の専門職という異例の経歴の持ち主でいらっしゃる。英語科に限らず様々な先生方とやりとりをするコミュニケーション能力の高さをお持ちで、着任初年度から中学１年生の担当というタフな仕事を任されてもそれを笑顔でこなす期待のホープである。

令和７年、國﨑圭一先生が着任された。國﨑先生は大学卒業後福岡市内の私立学校で長年勤務され、様々な要職も経験された後、新しい活躍の場を本校に求めて着任された。即戦力としてご活躍である。

以上英語科の75年を人物中心で書いたが、これだけの紙幅では書き尽くすことができない多才な方々ばかりである。新校舎移転後10年が過ぎ、現在また新教室棟が建設中である。施設面では充実しているので、これからは教員の教える力、伝える力を鍛えていかねばならない。生徒の資質、保護者の期待、英語教育に対する考

え方など目まぐるしく変化する世の中にあって、附設英語科の教育は「不易流行」をしっかり見極めながら進んで行かねばならない。私は現在附設勤務23年目になるが、世間の附設への注目が年々高くなっていることは間違いないと感じている。附設は、生徒たちの努力や先生方の献身的な指導により日本有数の進学校になりつつある。日本は人口減少に時代に入り、国力維持のためには、海外の国々およびその国の人々との協力が不可欠になっていく。「入試に必要だから」というだけでなく、「日本の発展のため」「世界平和のため」に英語を勉強し、使いこなす素地を持った生徒を育てるべく研鑽を積んで行かねばならないと、英語科一同気を引き締めている。

（文責：家中 潤）

Ad Felicitatem Humanam
人類の幸福のために

扶桑学寮の歩み

1950(昭和25)年、本校が創設された当初の生徒のほとんどは、久留米市及びその近郊を中心とした、西鉄、JR沿線地区からの通学生であった。ところが、高き建学の精神を掲げる私立進学校としての教育実績が全国的に評価され、その名声が知られるにつれ、九州圏内はもとより、中国地方、四国地方からも本校へ入学する生徒が年々増加し、それらの生徒は久留米市内の縁者や下宿先から通学するという状況が生じてきた。学校として寄宿舎を設置する必要が生じたにもかかわらず、校舎そのものが旧工兵隊の建物を譲り受けて使用しているという実情の中では、寄宿舎の新築は不可能であり、また借用できそうな適当な物件もなかった。ところが、折しも、当時ブリヂストン社長であられた石橋正二郎氏より久留米市野中町船塚の地にあった社用施設を無料で貸与するとの申し出をいただき、1963(昭和38)年に開設されたのが本校最初の寮である。入寮生39名、寮監長（当時は舎監長）は、教頭や部長等の職制のなかった本校で実質的に本校の教頭兼教務部長の任に当たっておられた井上武次先生であった。「自由をモットーとし、細かな規制はしないが、人に迷惑をかけるな」というのが、寮運営についての先生の基本的なお考えであった。

1968(昭和43)年、本校は現在地へ移転し、さらに翌年には、中高一貫教育がスタートした。この飛躍的発展過程の中で、遠隔地からの本校入学志願者は急激に増加し、寮もまた本格的な新築移転の計画に取り組むこととなったのである。当初、寮の敷地としては、学校まで徒歩30分程要する、校地とは別の場所（御井町竹崎）が考慮された。それは運動不足になりがちだろうと心配された寮生にせめて毎日１時間くらいは歩かせようという考えによるものであった。ところが予定していた土地は九州自動車道に近く、高速で通行する車の騒音（特に夜間）は寮生の勉学や健康に重大な支障をきたす恐れがあることが判明し、結局校舎南東部のなだらかな丘陵地を整備してこれに充てることとなった。結果的には、寮生の多くが放課後の時間を部活に充てて思い切り汗を流せる、条件としては大変ありがたい決定であった。

さて、新しい寮を如何に発足させるか、いろ

高校寮（１棟）

いろな構想が練られる中で、まずは全教職員にその名称が募られた。いくつかの候補が挙がったが今ひとつ附設のイメージにそぐわないということで、結局、当時の原巳冬校長自らが考案された「扶桑学寮」という名称に決まった。先生からは、日本国の古名にちなみ、全国一の学寮にしようという意気込みを込めたものと伺った。さらに、その名称の由来について、元校長の樋口忠治氏が次のように感慨深い解説をされている。「古代中国では、太陽が毎日東から昇り、西に沈むという現象を次のように考えた。すなわち、東に巨大な桑の木があり、そこに十ケの太陽がぶら下がっている。それが毎日一ケずつ天空を移動して、西に沈み、地下を貫く通路を通って再び桑の木に戻ると。十日間で一巡するわけである。それを旬という。あらゆる生命の源である太陽を支えている木に桑が選ばれた理由は、おそらくこの桑の木がしなやかで、再生の象徴ともいうべき生命力を持っていることによるのであろう。扶はいうまでもなく、支える意であり、太陽を支える桑の木ということになる。従って、扶桑学寮という名称には、寝食を供にする若い生徒達が毎日元気いっぱい学び、かつ動き回り、そして一日の疲労を就寝によって解消し、再び夜明けと共に元気を取り戻していくエネルギー再生の場としての宿舎であって欲しい、という願いが込められているのである」　※「扶桑学寮寮生ハンドブック」(当時)より

扶桑学寮の発足に当たり、舎監長（現在の寮監長）は教頭の日野丈夫先生が兼務され、先生の下で、扶桑学寮の名称に込められている寮としての教育目標を実現するために、寮のあり方、寮生指導の指針に関し、その根幹となるものが扶桑学寮綱領として、次の通り決定された。

◎扶桑学寮は、われら寮生の人間形成の場である。

勉学に励み、教養を高め、自他を愛し、秩序を守り、清潔であたたかい雰囲気をつくり出すように努めよう。

◎扶桑学寮は、われら寮生の家庭である。

校舎に近く、食堂は共用であるが、われら寮生の生活は学校とはっきり区別しよう。

◎扶桑学寮の生活は、共同生活である。

中学寮（2・3棟）

志を同じくする者の共同生活である。綱領、生活基準に則り、共同体の一員として他人に迷惑をかけないよう心がけ、自治的によりよい生活の建設に努めよう。

この綱領に基づき、寮監会議、研修会等の検討や研究を重ねて決定されたのが、寮生活の基準（寮則）である。以降、この基準は社会環境や生徒の生活習慣の変化等につれ、幾度か見直され、変更されたが、上記の綱領そのものは、言わば扶桑学寮の憲法であり、一度も手を加えられたことはない。今、改めて、この綱領を見ると、そこには寮生活のあるべき姿、すなわち、そこで求められる教育的目標の根幹をなすべきものが過不足なく、実に簡潔明瞭に示されている。今後、時代の進展、社会の変化に対応すべく、寮則の見直しは逐次行われるであろうが、寮運営の柱であるこの綱領が大きく修正されるようなことは決してないであろうし、我々は、この綱領の指し示す道をたどりつつ、この精神を深く、広く具現化していく使命を担うものであると確信する。

本校創設75周年の佳節に際し、その記念事業として町田健校長の下で、１号館の建替え、第２体育館の新築が進捗中で、その後、老朽化した中学寮の建替えも計画されている（令和９年建替え予定）。

しかしながら、この四半世紀で九州新幹線、西九州新幹線が相次ぎ開業、通学圏が拡大し、

食堂（体育館１F）

中高男女共学が進んだことで寮生の激減も考えられた。それでも、男女共学が完成したここ数年の状況は、中高合わせて200名前後の生徒が在寮し、遠方はもとより、近隣からの入寮も後を絶たない。また、昭和63年度から平成12年度までの間で計８年間、寮監長であった合原俊光先生のあとを受けて、中島健治先生が18年という長きにわたり寮監長の任にあたり、現在の扶桑学寮の礎を築かれた。その後、阿部健太郎先生が、感染対策等で危機的状況に陥ったコロナ禍の３年間を乗り越えられた。勿論、この３年間だけでなく、扶桑学寮の約60年の歴史は、寮監を始めとする寮スタッフに支えられてきた。今後も、久留米大学附設高等学校・中学校の発展と共に、その教育を支える重要な使命を持つ施設として、扶桑学寮がさらなる充実を図りつつ、その負託に応えて行くことを祈念してやまない。

（文責：寮監長　桑野浩二）

在寮生都道府県別人数　令和７年１月現在

	福岡県	大分県	熊本県	長崎県	山口県	佐賀県	鹿児島県	沖縄県	宮崎県	九州・山口・計
寮全体	130	15	13	12	8	3	2	2	1	186
中学寮	45	6	4	8	4	1	1	1	1	71
高校寮	85	9	9	4	4	2	1	1	0	115

	東京都	香川県	愛知県	大阪府	愛媛県	千葉県	茨城県	他・計	総　計
	4	3	2	1	1	1	1	13	199
	2	1	1	1	1	0	0	6	77
	2	2	1	0	0	1	1	7	122

年　譜

1963(昭和38)年　久留米市野中町船塚に高等学校寄宿舎を開設（入寮生39名）
1971(昭和46)年　校舎敷地内に扶桑学寮（旧第１棟）を開設（定員150名）
1973(昭和48)年　校舎敷地内に扶桑学寮（旧第２棟）を開設（定員100名）
1975(昭和50)年　久留米市御井町池の谷に寄宿舎第１分寮を開設（定員24名）
1976(昭和51)年　久留米市御井町池の谷に寄宿舎第２分寮を開設（定員30名）
1977(昭和52)年　久留米市御井町千本杉に寄宿舎第３分寮を開設（定員30名）
1978(昭和53)年　校舎敷地内に扶桑学寮（第３棟・中学寮）を開設（定員150名）
1985(昭和60)年　扶桑学寮旧第１棟西側部分増築（定員20名）
1991(平成３)年　扶桑学寮第３棟（中学寮）北西部分増築（第２棟・定員90名）
1999(平成11)年　扶桑学寮旧第1・2棟を閉鎖し新高校寮を第2グラウンド南側に新築（第1棟・定員192名）
2027(令和９)年　扶桑学寮２・３棟（中学寮）を解体し現地に新中学寮を新築予定

歴代寮監長

井上　武次	昭和38年４月～昭和46年３月
日野　丈夫	昭和46年４月～昭和52年３月
原　巳冬	昭和52年４月～昭和53年３月
熊懐　嘉文	昭和53年４月～昭和54年３月
高橋　謙輔	昭和54年４月～昭和56年３月
芳野　春生	昭和56年４月～昭和60年３月
野上　優	昭和60年４月～昭和61年３月
太田　晶一	昭和61年４月～昭和63年３月
合原　俊光	昭和63年４月～平成２年３月
松崎　文雄	平成２年４月～平成５年３月
武基　孝公	平成５年４月～平成７年３月
合原　俊光	平成７年４月～平成13年３月
中島　健治	平成13年４月～令和２年３月
阿部健太郎	令和２年４月～令和５年３月
桑野　浩二	令和５年４月～

扶桑学寮スタッフ（令和６年８月１日現在）
川添由　川添広　亀山　稲富　下間　濱田　久保　吉瀬　永野　古賀　坂本　山下　水田
森　水城　枝永　中島　桑野　楢原　清水　吉田　久冨

教務部の歩み

1. 2000年以降の教務部

『附設高校50年史』の教務部では、学習指導要領の変遷及びゆとり教育転換への危機感に加え、附設独自のカリキュラム及びスクールアイデンティティーの確立という難題に取り組んでいたことが記載されている。以下、当時の改革検討員会の提案内容・構想を抜粋する。

＜**行事関係**＞

- 進路指導の一環として、中学２年・３年で社会見学、高校１年で進路研修を新設する。
- 日本を見直し、国際感覚を身につけるために従来の研修旅行と修学旅行の一部を改め、中学３年と高校２年で海外研修を取り入れる。

＜**教科指導関係**＞

- 文理コース分けの前にモラトリアム期間を設け、志望の再確認をさせる。
- その期間までに、社会科と理科では全科目にわたって高校生としての教養をつける。
- そのための制度として、前期・後期の二期制を採用する。
- 芸術総合選択として、芸術・技術を細分化して少人数で中学２年から高校１年の３年間実施し、情操教育的効果も上げる。
- 新教育課程では削減される体育の時間は現在の時間数を維持し、体力の増進に努める。

これらの構想の中で、実現し継続されているものも多い。例えば高校１年での進路研修は、当初は各企業・大学などを直接訪問し実地での体験を通して学ぶ形でスタートし、現在は附設OB・OGを学校にお招きし社会人経験を語っていただく「進路講座」として定着している。また、芸術総合選択の構想はほぼそのままに進み、「声楽」・「器楽」・「美術工芸」・「絵画」・「陶芸」・「書道」・「映像メディア表現」の７講座として定着した。例年12月下旬～１月上旬に発表会・展示会も行われるなど、非常に活況である。

一方、導入後の検討で変更になったものや、導入できなかったものも存在する。例えば海外研修は2001年にアメリカで発生した同時多発テロの影響を受け導入中止となった。また、前期・後期の二期制については2002年度から2011年度に渡って実施された。授業時間を大幅に増やすことや秋期休暇でリフレッシュを図ることなどが導入の目的であったが、一方で附設以外の学校の多くは二期制を採用せず、中体連・高体連日程は三学期制のままで動いていたために附設独自の日程が組みにくかったことや、定期テストの回数設定が難しかった（定期テスト年４回では範囲が広すぎ学力が定着しにくく、逆に年６回では生徒・教師ともにテスト日程に追われ余裕が失われた。定期テスト年８回も検討されたが却下された）こともあり、2012年度からは三学期制へと戻り、定期テストはそれまでの三学期制同様、年５回に設定された。

もっとも大きな変革は、1994年度から実施されてきたコース別授業との決別である。生徒の実力差に応じたコース別授業は学校内での厳しい競争意識を生み出した一方、コース間の厳然たる実力差の固定化を生み出した。同じ学び舎に学ぶ高校生として、素晴らしい才能溢れる生徒と１つの教室内で学ぶことで切磋琢磨し高め合う雰囲気こそが附設として肝要なのではないか。自我に芽生える年齢の生徒たちが、才能を潰すことなく、お互い他者の才能を認め、自己の能力を高めていくきっかけとなることが必要なのではないか。その思いからコース別授業と決別し、2007年度（高校57回生高校２年生）文理別・選択授業別のタイミングで、シンプルなクラス編成へと切り替えた。

このことは、2005年度からの高校男女共学、さらには2013年度からの中学校男女共学開始における完全共学化とも密接に関係する。特に中学男女共学化によって女子の生徒数は学年全体のおよそ４割となり、文系・理系に関わらずどのクラスにも女子生徒をある一定数均等に分けることができるようになった。男女関係なくお互いに高め合う姿こそ、現在の附設のスタンダードである。

2. 学習指導要領の変遷と附設教育

附設教務部長は2000年代以降、古賀直先生（2000～2002年度）、城戸清先生（2003～2005年度）、名和長泰先生（2006～2011年度）、白水孝典先生（2012～2018年度）、兼行孝幸（2019～2024年度）、岡崎賢一郎先生（2025年度～）と移り変わってきた。この間、学習指導要領の改訂が大きく３回に亘って実施された。

1998年に改訂された学習指導要領は、中学は2002年度から、高校は2003年度から年次進行で導入された。歴代で最も授業時数が減少した、いわゆる「ゆとり世代」の時代である。2000年PISAの結果から、家庭学習の時間が３カ国の中で最低であることや、読解力が平均並みであるなどの課題が浮き彫りとなり、問題解決や探究活動を主体的・創造的に取り組むゆとりを持ちつつ「確かな学力」を身に付けさせるという取り決めがなされた改訂であったが、本校を取り巻く環境から言えば、大学入試の難易度は何ら変わることなく、個に応じた指導の充実を図るには厳しい状態であったといえる。学力の格差が国内で拡大したともいえるだろう。

2008年に改訂された学習指導要領は、上記の反省を踏まえての「脱ゆとり」であった。ゆとり教育でも詰め込み教育でもない、「生きる力」の意味や必要性を強調したものであった。授業時数は30年ぶりに増加し、外国語教育の導入や言語活動の充実、道徳教育の充実が図られた。この改訂はむしろ、附設が長年行ってきた教育の方向性を再確認する改訂でもあった。

最も新しい改訂は2018年である。中学は2021年度から、高校は2022年度から年次進行で導入された。2024年度が新カリキュラム完成年度ということになる。この改訂では、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善、小学校外国語科の新設など大きな変動が伴った。特に高校地理歴史科・公民科はその変化が極めて大きく、高校生における地理必修化（「地理総合」必修）、かつての日本史Ａ・世界史Ａを統合した「歴史総合」必修化、かつての倫理・現代社会を統合した「公共」必修化など、高校カリキュラムに大きな影響を与えるものとなった。また、プログラミングとその論理性を問う「情報」が共通テスト受験科目に設定されたことも大きな変動であった。

これらの指導要領改訂に、現在のカリキュラムは全て応じるものとなっている。附設が培ってきた歴史は、教師陣による努力の積み重ねと工夫に満ちた授業によって成立していることは言を俟たない。附設教師陣が長年担ってきた学問への探究心、自ら課題を見つけ解決していく意欲の醸成に加え、入試問題研究によって落とし込まれる先進的な授業の組み合わせこそが、確かな進学実績を生んでいる。以前よりもきめ細やかな生徒への面談指導も、その一助となっている。教職員がこの命題を自らのものとし、先達の歴史に敬意を払いつつも固定観念にとらわれない柔軟な指導をものにすることが、何よりも附設の現場で求められているスキルである。

3. 教務システムの変遷、コロナ時代を越えて

2000年代半ばまで、定期テストの点数管理は城戸清教務部長が開発したシステム上で行われていた。セル数に制限のあるLotus123をフルに使いプログラミングされた画期的なシステムであったが、2015(平成27)年度から実施された40人学級導入によるクラス数増加（中学４クラス、高校５クラスを年度進行）に伴い、このシステムを使い続けることが困難となった。このため、名和長泰先生の時代に別の教務システムが導入された。しかし、このシステムは単位制高校にも対応できるきめ細やかな出席管理が可能であった反面、生徒全ての授業出席やHR出席状況を入力する必要があり、担任にとって煩雑なものでもあった。

このため、2019年度から新システム導入に向けての準備に入り、2020年度後半から現在の教務システムへ切り替えを行った。現在のスクールマスター Zeusはウェルダンシステム株式会社による開発をベースにカスタマイズを重ねたものである。普段のメンテナンスや相談は全てオンライン上で行われ、アップデートなども東京からの遠隔操作で行われている。将来的には、教員個々に配布されるPC上からの日々の出席・欠席状況入力や入試管理システムとの統合なども考えられるが、まずは安定的に成績管理が維持できることを導入時からの目標としており、この目標については達成できたと考えている。

2020年２月末からの新型コロナウイルス感染症蔓延に伴い、学校活動は大きく制限を受けた。2020年３月からの休校措置（１週間弱の登校日を活用しての最終定期テスト実施、成績処理も行われた)、さらに2020年４・５月の休校措置の際には、生徒１人１人にタブレット端末が配布されている状況になく、各家庭における通信状況やPC所有状況も大きく違ったことからオンライン授業も実施できない状態であった。各学年、工夫をこらした課題を取りまとめ、家庭に郵送し、課題をまとめて返送してもらい採点するという突貫工事が行われた。2020年５月最終週から高３のみ先行して授業再開、2020年６月に入学式が行われ、新入生を交えての授業再開と相成った。この時ほど生徒の賑わいが嬉しかったことはない。その後、新型コロナウィルスの感染状況に一喜一憂しながら学校運営をすることが求められた。高校69回生の文化祭及び高校70回生及び71回生の修学旅行が中止となるなどの大きな影響を伴いながらも、2023年度以降はほぼ通常の学校生活に戻ってきたと感じている。

このコロナ禍を経て、生徒たちには１人１台のタブレット端末が配布され、Google Classroomによる課題配布や学年連絡などが行われている。特に高校においては授業プリントやリスニング教材、授業や課題の指示はデジタル配信される割合が高まった。教員にも同様で、会議支援システムによるペーパーレス化や、デジタル採点などが実装され、多くの教員が活用している。ただし、授業配信にまではたどり着いていない。保護者からの要望も高く、将来再び起こり得るパンデミックに対応するという意味では対応すべき事案であり、特別教室棟にはスタジオも建設されることとなっている。附設としては大学入試が紙ベースで実施されている以上、紙の教科書やプリントの重要性を見失うことなく、効率的に教材などのデジタル化を追加してきたというのが実態である。

4. 附設教務部としての思い

中高男女共学化を経て、優秀な男子生徒はもちろんのこと、向学心の高い女子生徒が多く附設中学校・附設高校を志望してくれている。その範囲は北部九州だけでなく、2011年３月の九州新幹線開通も加わり、現在は山口県、熊本県南部、そして鹿児島県なども通学範囲となっている。男子寮生の中には関東・四国・沖縄県などの出身者もいる。多くの優秀で個性溢れる生徒たちが集まってくれる学び舎となり、そのことが進学実績に繋がる好循環となっている。教務部としてはこの流れを途切れさせることなく続けていくことが何よりも大切だと考えている。職員室はいつも生徒たちの相談や面談、質問の声で賑わっている。生徒と教員との距離が近い状態で、生徒の努力を見守りながら伴走を続ける教務部でありたいと願う。

（文責：兼行孝幸）

5. 高校３年生　特別講座

【高校３年生　特別講座】 放課後、希望者に開講　（令和６年度版）

曜　日	文系：講座名	時　限	理系：講座名	時　限
月	東大世界史	7・8	東大（上級）物理	7・8
			九大（標準）物理	7・8
			難関生物	7・8
火	東大数学（文）	7・8	東大数学（理）	7・8
			標準（医）数学	7・8
水	京大英語	7・8	京大英語	7・8
	九大英語	7・8	九大英語	7・8
	標準英語	7・8	標準英語	7・8
			東大古文	7
			東大漢文	8
木	東大英語	7・8	東大英語	7・8
			数Ⅲ基礎	7・8
金	東大日本史	7・8	東大化学	7・8
	二次地理	7・8	京大化学	7・8
			九大化学	7・8
土	東大現代文	5・6	理系数学テスト会（東大京大）	5・6
	文系数学テスト会	5・6	理系数学テスト会（九大他）	5・6
			東大現代文	7・8

6. 現在の教育課程

【教育課程表】 （令和４年度以降の入学生に適用）

○中学

科目＼学年	中1	中2	中3
国語	5	5	5
社会	3	4	4
数学	5	5	5
理科	4	3	4
保健体育	3	3	3
音楽 美術 技術家庭	4	4	3
英語	6	6	6
道徳	1	1	1
総合学習	2	2	2
学級活動	1	1	1
英数テスト	1	1	1
合計	35	35	35

○高校

科目＼学年	高1	高2 文系	高2 理系	高3 文系	高3 理系
現代の国語	3				
言語文化	2				
論理国語		2	2	3	2
古典探究		2	2	2	3
文学国語		1	1	3	
歴史総合	2				
地理総合	2				
世界史探究		3	(2)─①	4	(2)─①
日本史探究		(3)─①	(2)─①	(4)─①	(2)─①
地理探究		(3)─①	(2)─①	(4)─①	(2)─①
公共		2	2		(2)─①
政治経済					
数学Ⅰ	3				
数学A	2				
数学Ⅱ		4	4	3	
数学B		2	2		
数学Ⅲ					5
数学C				3	3
化学基礎	2	(1)─②		(1)─②	
物理基礎	2	(1)─②		(1)─②	
生物基礎	2	(1)─②		(1)─②	
化学			3		4
物理			(3)─①		(4)─①
生物			(3)─①		(4)─①
体育	2	3	3	2	2
保健	2				
音楽Ⅰ	(2)─①				
美術Ⅰ	(2)─①				
書道Ⅰ	(2)─①				
家庭基礎	2				
情報Ⅰ		2	2		
コミュニケーション英語Ⅰ	3				
論理・表現Ⅰ	2				
コミュニケーション英語Ⅱ		4	4		
論理・表現Ⅱ		2	2		
コミュニケーション英語Ⅲ				5	5
論理・表現Ⅲ				2	2
総合的な探究の時間	1	2	2		
HR	1	1	1	1	1
数学テスト		1	1	1	1
合計	35	35	35	34	34

生徒指導部の歩み

附設の校務分掌は原巳冬校長時の昭和40年代初頭に始まった。「教科指導・進路指導の基本は生活指導にある」という基本原理のもとに設置された生活指導部は、初代世良忠彦生活指導部長を中心に教師と生徒、そして生徒同士の信頼関係の確立を目指して本校の生活指導の基本方針を作り出した。1993(平成５)年に生徒指導部に名称を変えて現在に至るが、設立時からの精神は今も受け継がれている。

附設の生徒指導は、校是である「国家・社会に貢献しうる誠実にして気概ある人物の育成」を目指し、「自主自立のもとに立つ自由」の校風を実現することを目標に掲げている。そのため、生徒手帳記載の校則は簡素なものとし、社会情勢の変化にともない、自転車の安全や、スマートフォンやタブレット端末の使い方、インターネット接続など、必要に応じた附則「新年度に当たって」を制定・見直しながら、基本的には生徒自身が「自立」し、道徳や社会常識、マナーに基づく行動をとれる人となることを願い、日々の指導を行っている。

以下、本稿では21世紀に入ってからの動きを中心に、附設生徒指導部の歩みを振り返るとともに、現在の様子を紹介していくことにする。

1. 共学化に伴う変化

附設の大きな転換点となったのが2005(平成17)年、高校56回生からの女子生徒の入学開始である。これにあたり、校則の一部見直しと、女子制服が制定された。

高校女子制服は、冬服が紺の３つボタンジャケットに20本車襞のスカート、夏服は、同様のスカートにブラウスである。指定のリボンを着用し、冬服左襟には校章バッジ（男子のものとは異なる淡青バックのもの）をつける。2021(令和３)年度からは、安全や防寒の観点などからスラックスも導入され、ネックアイテムもリボンまたはネクタイを選択できるようになった。

その後、2013(平成25)年、中学45回生からの中学共学化にともない、中学女子制服も制定された。冬服はセーラー型の４つボタンジャケットにリボンをつけ、下衣は16本車襞のスカート、夏服は、同様のスカートにニット生地のセーラーブラウスである。

同時期に男子制服も見直しが行われ、冬服の詰襟部分は縫い付け型とし、中学の夏服はポロシャツタイプが導入された。

また、中学の制鞄は、20回生までは雑嚢、そ

高校女子制服（瀧本株式会社提供）

中学女子制服（瀧本株式会社提供）

の後は紺の肩掛け鞄を用いていたが、中学共学化のタイミングでリュックとしても使えるスリーウエイタイプとボストンタイプの鞄が導入された。さらに2025(令和７)年度からは、機能性を重視した縦型リュックタイプの新型鞄にモデルチェンジした。

2. 学校行事の変遷と現在

「自主自立」の「自主」にあたるものとして、生徒指導部では、ホームルーム活動や、生徒会役員を中心とした生徒自身の運営による学校行事を重視してきた。大部分を生徒自身に任せることにより、彼らは計画立案や創意工夫の術を学び、ときには素晴らしいアイディアを生み、成長していく。そして生徒たちは、行事を通して友人を理解し、友情を育み、協力の大切さを知る。校是である「和而不同」の体現は、日々の教室においても良好な信頼関係を作り出すと考えている。

1966(昭和41)年、高校16回生のときに始まった高校生徒会は、現在、会長をはじめとする８名の本部役員と文化・図書・体育・HR・風紀・保健・環境・広報の８つの専門委員会の正副委員長17名より構成される総務委員会を中心に企画・運営を行なっている。また、中学生徒会は、1971(昭和46)年に、１回生から始まり、会長・議長ら10名で構成される総務委員会と、風紀・学習・環境・体育・保健・図書の６つの生活委員会の正副委員長12名が役員となり、各クラスの生活班と連動しながら生徒会運営を行なっている。

○文化祭

文化祭は、1957(昭和32)年に「文芸会」として行われたものを源流とし、1971(昭和46)年より始まった。翌年の第２回からは生徒会に文化委員長を中心とした文化祭実行委員会が組織され、現在も続くコーラス大会が始まった。1975(昭和50)年の第５回からは学校だけでなく、石橋文化センター（その後、市民会館・久留米シティプラザ）も会場とし、その後、講演や演劇なども行われるようになった。

文化祭の愛称である「男く祭」は、久留米大学の学祭「あのく祭」にヒントを得て考案されたとされる第３回の「質実剛健・おとこく祭」というテーマに始まり、その後は漢字表記となり、長らく愛称として定着していた。中学女子１期生が高校３年生となり、完全共学化が完成した年に「男く祭」の愛称見直しが検討され、全生徒対象のアンケート・投票も行われたが、男子校時代からの「男く祭」を残すという意見が多かったため、新しい愛称の選定は見送られ、現在に至っている。

2022年 第52回文化祭中央ステージでのヒーローショー

近年の文化祭は「１日目」が学校を会場とし、学校施設のほぼ全てを駆使して行われている。体育館前に設営される「中央ステージ」での趣向を凝らした出し物や、漫才、ダンスなどに加え、2011(平成23)年の現校舎（東棟）建設によって誕生した中庭を会場にして書道パフォーマンスなどの催しも行われるようになった。翌年の西棟完成により、さらに企画は多様性を増大させた。教室だけでなく、体育館やグラウンドなどを会場に行われるエンターテインメントは、附設入学を志す子どもたちにも大好評で、生徒自身の手による食品バザーなどとともに、附設文化祭の「祭」の賑わいを作り出している。

教室で行われる展示は文化部などの同好の士によるものだけでなく、「学術企画」と称した各科の研究発表が充実してきているのも近年の特徴である。主に生徒が講師となる「公開授業」に加え、2023(令和５)年からは学術企画誌「附設のエッセンス」が発行されるなど、附設の「文化」を発信する企画が熱を帯びてきている。

校内での文化祭は校舎の変遷とともに変化してきた。附設創立75周年記念として、特別教室棟と第二体育館が完成した暁に、文化祭がどのような進化を遂げるのかが楽しみである。

学校外での開催は、かつては１日目に行われていたが、現在は「文化祭２日目」として、2017(平成29)年の第47回より久留米シティプラザ、ザ・グランドホールを舞台に行われている。

文化祭で唯一全員が参加する伝統のコーラス大会は、現在は各クラス１曲ずつの披露となったが、共学化による「混声合唱」が新たなハーモニーを奏でている。

1986(昭和61)年の第16回より始まった講演会も現在まで続くプログラムの一つである。講演者の選定や交渉に至るまで生徒自身の手によるのも附設文化祭の特徴である（文化祭ではないが1992(平成４)年には日本人初のノーベル生理学・医学賞受賞者であるマサチューセッツ工科大学教授の利根川進博士に電話で直談判し、熱意が通じて遥々講演に来て頂いたこともある)。

かつて行われていた他校の音楽部の友情出演は事情により1997(平成９)年を最後に行われなくなったが、近年では本校生徒による演奏会が行われている。また、共学化に伴って太鼓やダンスパフォーマンスなどが盛んになり、多くの生徒がコーラス大会以外でも舞台に立つようになった。2000(平成12)年からは自主制作映画の上映、2023(令和５)年からはアニメの製作も始まるなど、新たな試みも続いている。

2022年 コーラス大会

○高校体育祭

2024年 高校体育祭 久留米アリーナでのクラス対抗リレー

草創期には、旧医専グラウンドで開催された久留米大学総合運動会に、商学部などとともに、「附設高」として参加していた。1952(昭和27)年には、校内体育大会が開催され、当初は1日間であったが、1957(昭和32)年からはクラスマッチ形式での2日間となった。さらに、1968(昭和43)年から1992(平成4)年までは全国に類を見ない3日間開催の一大行事であった。校外クロスカントリーや騎馬戦などの他に、サッカー、バレー、剣道、柔道など、現在はクラスマッチで行われている競技も含まれ、予選・決勝と12クラス対抗で競われていた。立体造形を含む12基の櫓が並んだ第一グラウンドは壮観で、最終日、日没後まで行われる「イブニングフセツ」や廃材を使ったファイアーストームも名物であった。

1993(平成5)年からは2日の開催となり、1998(平成10)年まで行われていたクラス対抗は1999(平成11)年より4ブロック対抗、その後、女子1期生が入学した2005(平成17)年より1日となり、紅白2ブロックの時代を経て、2007(平成19)年より赤・黒・青の3ブロック対抗となり、現在に至っている。

2023(令和5)年まで本校グラウンドで行われてきた体育祭は、近年の酷暑などを理由に2024(令和6)年には初めて久留米アリーナで開催された。実行委員たちは周到な準備で臨み、観戦しやすくなったスタンドからの大歓声も相まって大いに盛り上がり、大成功に終わった。騎馬戦やクロスカントリーのような男子校時代の名物競技は時代の流れとともに失われたが、伝統の「20人リレー」は「クラス対抗リレー」となって今も行われている。

○中学体育大会

中学体育大会は1回生が2年生のときに始まり、かつては球技を加えた2日間の開催だったが、現在は高校と同様に1日のみの大会となっている。男子校時代はクラス対抗の縦割りで行われ、3クラス制が完成してからは、青・黄・赤の3ブロック制で競われていた。2013(平成25)年の中学共学化を機に、2クラスずつをまとめた赤・青2ブロック制で行われるようになり、49回生がクラス対抗を復活させる4ブロック制を試みたこともあったが、その後は2ブロック制が定着している。中学体育大会は3年生を中心とした中学生徒会が企画・運営する集大成の行事であり、中学創立時の「全員選手・全員役員」という、全員参加の方針も受け継がれている。

2024年の中学体育大会は例年通り第一グラウンドで行われた（高校同様に久留米アリーナでの開催を検討しているため、校内で体育大会が

2024年 中学体育大会での男女チアと演舞

行われるのはあと数回かもしれない)。100m走などの定番の競技から、借り人競争や玉入れ、棒引きや綱引きなど、グラウンドならではの競技、部活動対抗リレーなどの中学独自の競技も行われ、猛暑の中、生徒たちが躍動する姿が見られた。

高校体育祭、中学体育大会ともに、近年では応援合戦に熱が入っている。男子校時代に行われるようになった演舞に、共学化以降女子のチアが加わり、別々に演じられていたこともあったが、現在では、団ごとに男女チア→女子チア→男子演舞→男女演舞の構成で演じられており、共学校としての多様性が表現されている。

○高校クラスマッチ

高校のクラスマッチは、かつては夏のバレー大会、冬のサッカー大会として行われていた。平成に入る頃にサッカー大会は行われなくなり、バレー大会は1997(平成９)年を最後に、サッカー・バスケットボール・ドッジボールなどを加えて、総合的なクラスマッチとして開催されるようになった。現在では、１年生から３年生までが参加する前期クラスマッチ（６月）と、高校１・２年生で行われる後期クラスマッチ(10月末～11月初め）の年２回開催され、後期クラスマッチは、１年生が企画・運営する最初の行事として行われている。

○中学歓迎行事・送別行事

中学草創期には新入生歓迎行事として遠足が行われていた。５回生の入学からは生徒会運営の歓迎ソフトボール大会、その後高良山への遠足に戻り、運営は一時期生徒会の手を離れていたが、2013(平成25)年の中学女子１期生（45回生）入学を機に、現在はウォークラリー形式でミニゲームを楽しむ歓迎行事が生徒会の企画・運営で行われるようになった。ミニゲームは年度ごとに工夫が凝らされたもので、2024年度は、クイズや大縄、ボウリング、伝言ゲームなどが行われた。

また、中学送別行事は草創期のサッカークラスマッチ（１月開催）を源流に、送別サッカー大会として始まったものが、バレー・バスケッ

2024年 歓迎行事のクイズに取り組む生徒たち

2021年 芸術週間 合唱部演奏　コロナ禍では席の間隔があけられた

トボール・卓球などの競技を加えて送別球技大会となり、現在も第５回定期考査後に行われている。中学の歓迎・送別行事は１年生から３年生までの縦割りで行われるのが伝統で、学年を超えた交流の機会になっている。

○芸術週間

高校ではかつて秋に芸術鑑賞会が行われていた。これが大きく形を変えて復活したのが11月の平日昼休みに１週間わたって開催される芸術週間である。企画・運営は、かつて生徒会に先駆け、各クラスでLHRの計画立案を目的に組織された高校HR委員会があたっている。

ピアノ演奏を中心に、合唱部や器楽同好会、音楽講師の方々も演奏や美声を披露し、秋のひとときに彩りを添えている。

4. 部活動での活躍

高校創立時にはなかった部活動は、生徒会が組織された頃から設立され始めた。21世紀に入ってからも新しい部・同好会が誕生し、現在高校では文化系14運動系12、中学では文化系８運動系10の合わせて37部・７同好会が日々精力的に活動を行なっている。

近年では、文化部を中心に全国大会出場や、入賞を果たしている。高校演劇部は2014(平成26)年の全国高等学校総合文化祭（いばらき総文）で、男子が女子高生、女子が男子高生を演じる男女逆転劇「女子高生」で最優秀賞を受賞したほか、2023年かごしま総文でも優良賞・舞台美術賞を受賞した。中学ディベート部は2024年の第29回ディベート甲子園での３位を含む５回の出場を誇る。機械工作の部として設立されたレゴ部はロボカップジュニア2021, NIPPON Leagueレスキュー部門での２位・ソフトウェア奨励賞受賞を含む複数の出場歴がある。その他、百人一首部（2023年など４回）、合唱部（2020年こうち総文／WEB SOUBUN)、高校ディベート部（2017年)、高校クイズ部（東大王クイズ選手権2022など）も近年全国大会に出場した。

この75年間、附設はその主役である生徒たちによって様々な実績を積み上げてきた。今後も個性と才能あふれる彼らの活躍に期待したい。

（文責：生徒指導部長　坂田真一　高校41回生）

総務部の歩み

1. 総務部の業務

総務部は教頭のもとに教務・生徒・進路以外の学校の業務を行う。主なものには入学式などの儀式的行事、本校の入学試験がある。また、学校説明会などの広報活動も行う。これらは事務室との連携がなければできない。各部の中では最も事務との連携を行う部である。

総務部の一年間を紹介する。

(1) 4月 始業式 入学式

中高合同で4月8日を基本に実施する。

始業式は高校3年生（これ以後は2年生）の指揮・伴奏での校歌斉唱や、校長式辞、進路指導部長講話など年度の初めへの意識を高める重要な儀式である。以後、各学期には終業式、始業式など節目の意識を持たせ、生徒指導部長や教務部長の講話などを行い、学校生活や勉学への意欲を高める工夫を行っている。

入学式は、始業式の午後、中高合同で行っている。

(2) 5月 防災避難訓練

主に火災発生時の避難訓練を行う。2年に一度程度消防署の講話や消火器訓練なども行っている。

(3) 6月 後援会総会、前期保護者会

第二土曜を基本に実施している。後援会は本校の保護者による学校支援組織で、総務部長が後援会総務を兼ねている。

前期保護者会は入学式以来の保護者との会合の場であり、重要な保護者会である。

(4) 学校説明会

6月から9月にかけて、福岡・小倉・熊本において学校説明会を行い、またその最後として本校で授業見学を兼ねて学校説明会を実施している。

(5) 8月 職員研修会

8月後半の二日間、さまざまな学校の課題について職員の共通理解を深め、新たな知識と課題を学ぶ研修会を実施している。近年ではICTのスキル向上や、教育相談・カウンセリングの技法を向上させ、アナフィラキシー・ショックへの対応について学ぶなど、時代と教育課題の変化に応じた職員研修を実施している。

(6) 10月 後期学年保護者会

本校の教育活動の中間的な評価について、各学年から保護者への説明が行われ、懇談が深められる。

(7) 鏡開き ぜんざい会

1月10日前後 後援会のご厚意で、鏡開きとぜんざい会を行っている。

(8) 1月 本校入学試験

大学入学共通テスト（旧大学入試センター試験）の1週間後に、本校の入学試験を実施する。寒さ厳しい時期であるが、金曜日に生徒、職員全員で会場づくりなどを行い、土曜日が中学入試、日曜日が高校入試である。採点を行い、月・火曜で選考委員会、選考会議を開き、火曜が中学の合格発表、水曜が高校の合格発表である。以前は郵送により志願表を受け付け、合格発表も郵送によって行っていた。しかし、現在ではwebによる受験申込になり、発表もwebによる方法に変えた。

(9)　2月から3月中旬まで合格者・入学予定者への説明会

2月上旬には中・高の合格者招集を行う。二年前まで大学本部で行っていたが、昨年から附設校内で実施している。

3月上旬　中学入学説明会　最終的に入学の意志を決定した合格者を集め、入学式から中学1年の内容まで説明を行う。

3月中旬　高校入学説明会　福岡公立高校合格発表日の朝実施する。高校からの入学予定者に説明を行う。

(10)　卒業式

3月1日　高校卒業式

久留米大学理事長、学長臨席の下、高校卒業式を行っている。

3月18日前後　修了式・中学卒業式

高3、中3を除く学年によって、一年間の締めくくりである修了式を行う。

午後からは中学卒業式を行い、その後、高校進学に向けた研修を行っている。

2. 25年間の歩み

50周年以降、本校の歩みの中で総務部に関連するものを取り上げる。

(1)　男女共学化

2005(平成17)年　高校共学化　高56回生入学

2013(平成25)年　中学共学化　中45回生入学

2000年に男女共同参画社会基本法が制定され、本校も男女共同参画社会の実現に資するため高校・中学に女子の入学が始まった。男子校から共学化という流れは少子高齢化の中で、全国的なものであった。本校は女子寮を設置していないが、九州各地から優秀な女子が入学し、男子も切磋琢磨することで優れた進学実績にもつながっている。また、女子も快適な学校生活をおくることができる環境整備も進めた。

(2)　入学定員の変更

2013(平成25)年に中学入学者定員を150名(3学級)から160名(4学級)に変更し、2016(平成28)年に高校定員を200名(4学級)から200名(5学級)とし、そのため高校入学者定員を50名から40名に変更した。それにともない、教室整備などを行った。

(3)　現校舎への移転

2012(平成24)年、現在の校舎東棟(2011年)・西棟(2012年)が完成した。中・高の共学化を含め、新たな教育環境の必要性から新校舎を建設することになった。新校舎への移転については当時の総務部長を中心に進められた。2011年には職員室の移転が行われ、その後時期をおって新校舎に移転した。旧校舎は取り壊され、残った1号館が使用されたが、2025年には特別教室棟の完成と新棟への移転によって、1号館も取り壊されることになった。

(4)　九州新幹線の全面開業

2011年3月、東日本大震災と重なり、九州新幹線の全面開業はひっそりと行われた。しかし、JR久留米駅が新幹線停車駅となったことで、本校に通学できる範囲が飛躍的に広がったといえる。例えば2016年の新幹線通学者は51名(乗車地は熊本、新下関など)、2022年は72名(乗車地は鹿児島中央、厚狭など)、2024年には38名(乗車地は鹿児島中央、川内など)であった。

(5)　新型コロナウイルス感染症拡大

2019年冬に始まった新型コロナウイルス感染

症の世界的拡大は、学校にも大きな影響を与えた。2020年２月27日に政府から全国の学校に３月２日からの一斉休業要請が通知された。このため本校も休業措置をとり、2020(令和２)年度の始業式・入学式は６月１日であった。

総務部関連の学校行事なども以下のように大きく変更することになった。

・始業式、終業式などを放送によって行い、校歌斉唱を取りやめた。
・卒業式での在校生の出席を取りやめ、保護者の出席を制限した。
・入学式も卒業式に準じた。
・高校卒業式の歓送会を取りやめた。
・防災避難訓練を中止した。

本校入試では、受験生のサーモグラフによる全員検温、受験会場を１クラス40名から20名（その後25名）に減らす、発熱者の受験対応を強化する、などの対策を行った。

施設面では、各教室に空気清浄機を導入し、換気を行わせた。

(6)　私学展

県内の私学が中・高校受験希望者に広報を行う機会が私学展である。本校は毎年８月中旬に福岡市のエルガーラホールで行われる福岡・筑後地区の私学展に参加している。ただ、本校の場合は制服、進路実績、生徒の対外的活動の実績などの展示のみである。そのほかパンフレットの配布を行っている。

（文責：宗　弘昭）

Ad 人類の幸福のために
Felicitatem
Humanam

進路指導部の歩み

『25年史』および『50周年記念誌』によると、進路指導部は、附設中学校が開設された昭和44年に校務分掌の中で単独の部として独立し、その後昭和49年に補習科職員室内に進路指導室を開設した。それと同時に専任事務を得て、以後、各種資料の整理、模擬試験関係の事務や調査書作成、各予備校・業者や各大学の担当者との対応などを引き受け、高校３年の学年団が生徒指導や学習指導に専念できるように支援している。また、校舎の建築に伴い、進路指導室は旧１号館の３階、そして西棟の４階と移り今に至っている。発足以来、部長を務められた先生方は下表のとおりである。

現在は主任の槌本浩先生と専任事務の築城梨詠さんの助けを得て、令和４年度から行正幸司が部長を務めている。

次ページ以降に①１～22回生（中高一貫以前）、②23～55回生（中高一貫以後）、③56～66回生（高校共学化以後）、④67～72回生（中高共学化以後）に分けて進学先の統計を資料としてまとめた。①から②の前後で国公立大が占める割合が２割ほど増えたが、その後もこの増加は続き、現在では国公立大への進学が８割を超えている。また、文・理・医の内訳も変化が顕著で、理系だけは①～④のどの区分でもほぼ一定の数値であるが、文系は当初の約５割から減少を続け約４分の１に、そしてその分医学部が増加を続け近年では４割を超えている。医学部への合格実績が世間の目に触れることで、さらに医学部志望者が本校への入学を目指すという循環が形成されているようだ。ただ、注目すべきはこの流れの中でも、東京大学への進学数も③から④で増加し、およそ２割となっている。前述の医学部志望者の好循環に加え、中学から女子生徒が入学し始めたことによって、全体としてより優秀な生徒が本校に集まっているように感じる。その期待に応え、一人一人の進路実現に向けての万全のサポートに全力を尽くしたい。

（文責：行正幸司）

部長を務められた先生方

昭和44～45年度	古田　哲　先生
46～47年度	井上　敏郎　先生
48～56年度	野上　優　先生
56～62年度	福島伊佐翁　先生
63～平成４年度	古賀　啓資　先生
平成５～10年度	佐々木健治　先生
11～15年度	末永　寛　先生
16～23年度	白水　孝典　先生
24～令和３年度	城戸　清　先生

第1回生〜第72回生の大学等の進学先 （海外、専門学校等を除く。50音順。名称は当時のもの）

【国立大】

愛知教育・秋田・旭川医科・茨城・宇都宮・愛媛・大分・大分医科・大阪・大阪外国語・大阪教育・岡山・小樽商科・お茶の水女子・帯広畜産・香川・香川医科・鹿児島・金沢・鹿屋体育・岐阜・九州・九州芸術工科・九州工業・京都・京都工芸繊維・熊本・群馬・高知・高知医科・神戸・神戸商船・埼玉・佐賀・佐賀医科・滋賀・滋賀医科・静岡・島根・島根医科・島根農科・信州・千葉・筑波・電気通信・東京・東京医科歯科・東京外国語・東京海洋・東京学芸・東京教育・東京藝術・東京工業・東京商船・東京水産・東京農工・東北・徳島・鳥取・富山・富山医科薬科・豊橋技術科学・長崎・名古屋・名古屋工業・新潟・浜松医科・一橋・弘前・広島・福岡学芸・福岡教育・福島・北海道・三重・宮崎・宮崎医科・山形・山口・山梨・山梨医科・横浜国立・琉球・和歌山

【公立大】

愛知県立芸術・秋田公立美術・大阪市立・大阪府立・岡山県立・金沢美術工芸・北九州・北九州市立・岐阜薬科・九州歯科・京都市立芸術・京都府立・京都府立医科・熊本県立・高知工科・神戸市外国語・神戸商科・国際教養・札幌医科・静岡県立・下関市立・首都大学東京・高崎経済・東京都立・東京都立科学技術・長崎県立・長崎県立国際経済・名古屋市立・奈良県立医科・福岡県立・山口県立医科・山口東京理科・横浜市立・和歌山県立医科

【準大】

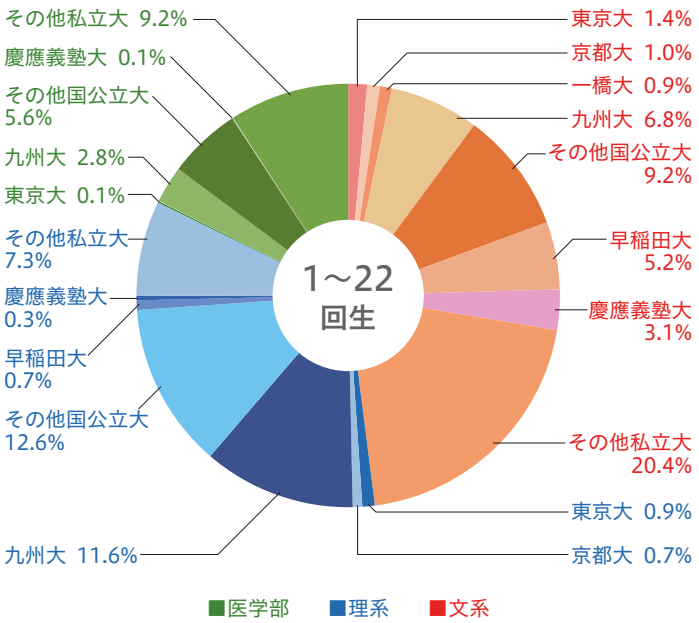
海上保安・気象・航空・航空保安・水産・税務・防衛・防衛医科

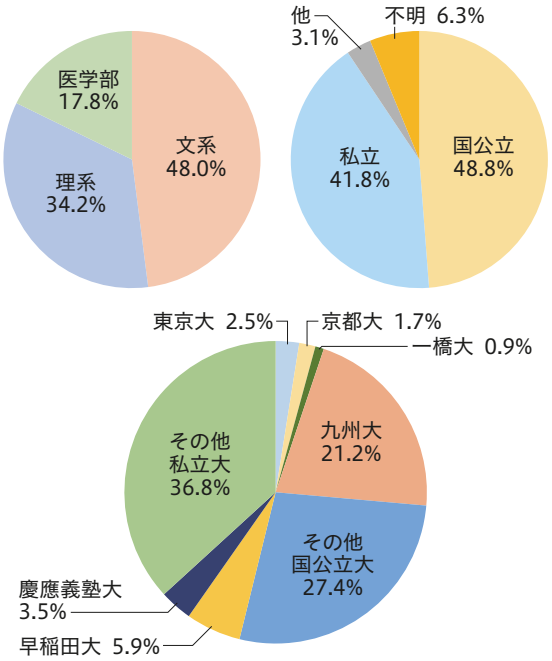
【私立大】

愛知・愛知医科・愛知工業・青山学院・麻布・亜細亜・岩手医科・桜美林・大阪医科・大阪医科薬科・大阪経済・大阪芸術・大阪工業・大阪歯科・大阪薬科・大谷・岡山理科・沖縄・学習院・神奈川・神奈川工科・神奈川歯科・金沢医科・川崎医科・関西・関西医科・関西学院・関東学院・北里・九州国際・九州産業・京都外国語・京都産業・京都薬科・杏林・近畿・熊本商科・久留米・久留米工業・慶應義塾・工学院・甲南・神戸学院・神戸女学院・國學院・国際医療福祉・国際基督教・国士舘・駒澤・埼玉医科・産業医科・自治医科・芝浦工業・純真学園・順天堂・城西歯科・上智・昭和・駿河台・成蹊・成城・西南学院・聖マリアンナ医科・専修・創価・第一経済・第一薬科・大正・大東文化・拓殖・多摩・玉川・多摩美術・千葉工業・千葉商科・中央・中京・津田塾・鶴見・帝京・天理・東海・東京医科・東京経済・東京工科・東京歯科・東京慈恵会医科・東京女子医科・東京造形・東京電機・東京農業・東京薬科・東京理科・同志社・東邦・東北医科薬科・東北歯科・東洋・獨協・獨協医科・豊田工業・長崎総合科学・長崎造船・中村学園・名古屋保健衛生・南山・西日本工業・二松学舎・日本・日本医科・日本経済・日本歯科・日本獣医畜産・日本体育・姫路獨協・兵庫医科・福岡・福岡工業・福岡歯科・福岡女学院・藤田保健衛生・佛教・文教・法政・北海道医療・松本歯科・武蔵・武蔵工業・武蔵野音楽・武蔵野美術・明治・明治学院・明治鍼灸・明治薬科・名城・八幡・酪農学園・立教・立正・立命館・立命館アジア太平洋・龍谷・麗澤・早稲田

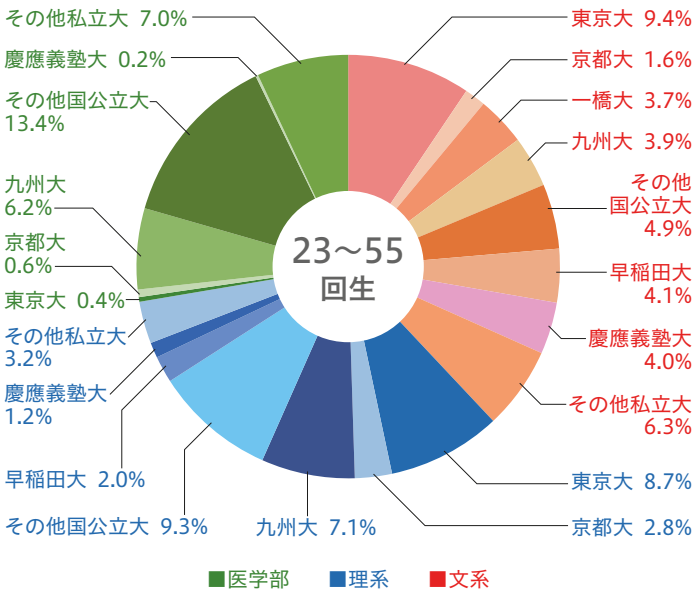
大学進学の統計

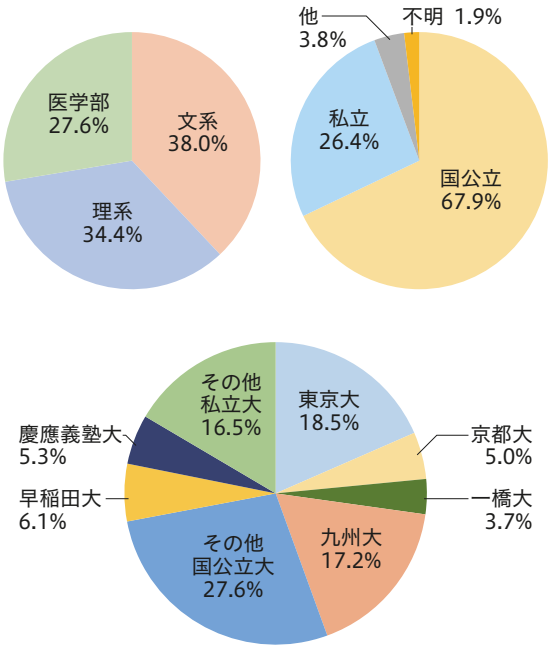
1～22回生



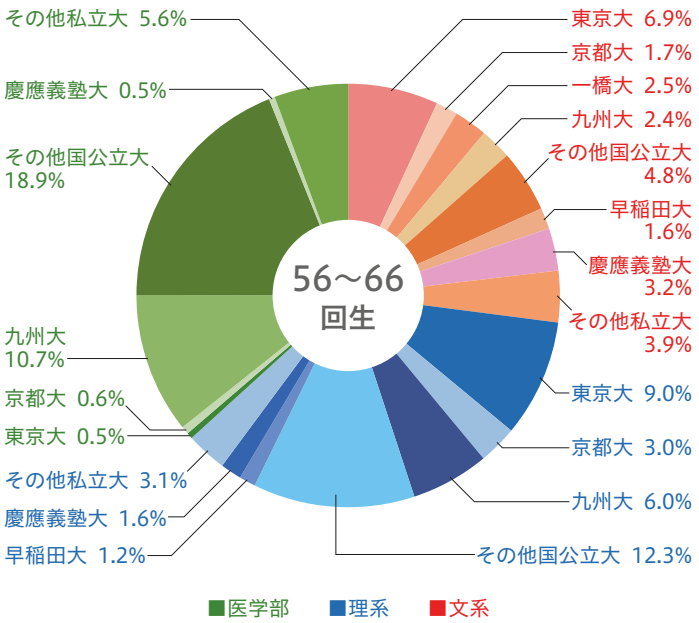


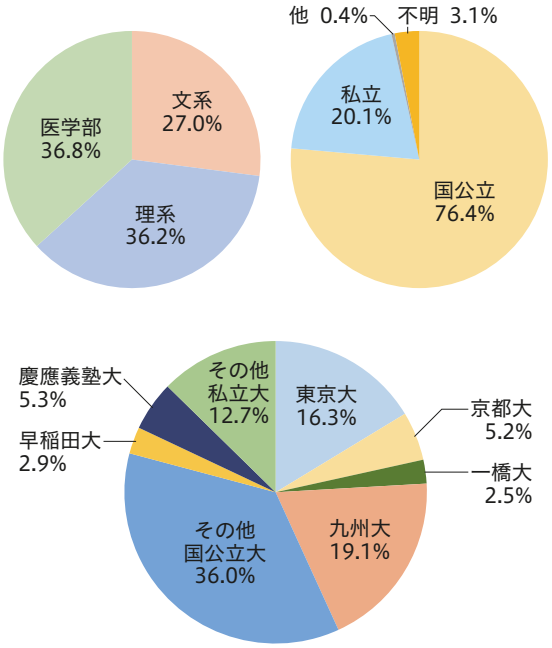
23～55回生



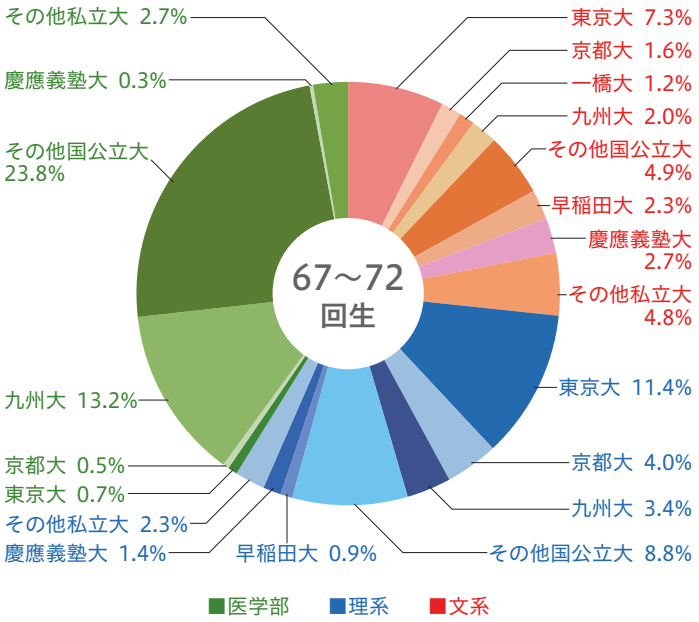


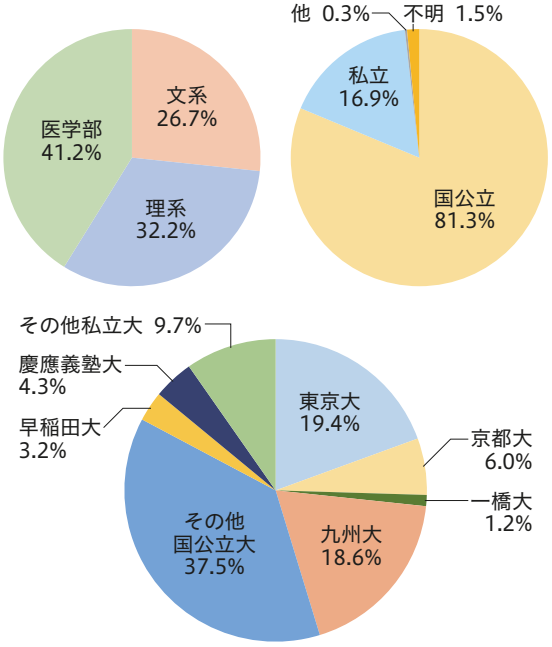
56 ～ 66回生





67 ～ 72回生





合格者数上位5大学（国立）の変遷

年度	卒回生	1位	2位	3位	4位	5位
1953	1	九州 8	神戸 3	京都・熊本 1		
1954	2	九州 15	東京 4	福岡教 3	熊本・大分・商船 2	
1955	3	九州 10	福岡教 6	佐賀・鹿児島 3		東京・大分 2
1956	4	九州 21	福岡教 8	熊本 4	九州工・佐賀 3	
1957	5	九州 23	福岡教 6	熊本 5	長崎・宮崎・山口・鹿児島 3	
1958	6	九州 36	熊本・佐賀 5		山口 4	鹿児島 3
1959	7	九州 47	熊本 9	鹿児島・宮崎 6		九州工・福岡教 5
1960	8	九州 23	熊本・長崎・東京 5			鹿児島・佐賀 4
1961	9	九州 39	熊本 7	長崎 6	大分 5	鹿児島・九州工・山口 4
1962	10	九州 43	熊本 7	九州工 6	鹿児島 5	長崎 4
1963	11	九州 42	山口 7	長崎・九州工 4		東京・熊本・鹿児島 3
1964	12	九州 29	熊本 7	長崎・山口 6		九州工 5
1965	13	九州 36	東京・熊本 8		京都 6	長崎・九州工 5
1966	14	九州 31	東京 9	長崎・大分 6		鹿児島 4
1967	15	九州 14	東京 6	京都・山口 4		一橋・九州工 3
1968	16	九州 27	鹿児島 10	熊本 7	山口 6	東京・神戸・九州工・長崎 4
1969	17	九州 31	鹿児島 12	熊本・大分 6		京都 4
1970	18	九州 47	鹿児島 7	長崎・山口 6		東京・熊本・九州工 5
1971	19	九州 41	鹿児島 17	京都 7	広島・九州工 6	
1972	20	九州 37	九州工 10	鹿児島 9	京都・熊本 6	
1973	21	九州 51	鹿児島 12	佐賀 9	長崎 8	山口 7
1974	22	九州 68	鹿児島 18	九州工 11	熊本・山口 9	
1975	23	九州 58	東京 30	鹿児島・佐賀 8		京都 7
1976	24	九州 56	東京 27	鹿児島 10	九州工 9	山口 7
1977	25	九州 35	東京 34	京都 9	熊本 7	一橋・長崎・鹿児島 6
1978	26	九州 51	東京 31	熊本・山口 10		京都・九州工 6
1979	27	九州・東京 34		熊本 12	京都・山口 7	
1980	28	九州 40	東京 27	山口 8	熊本 7	京都 6
1981	29	九州 36	東京 31	一橋 18	熊本 8	京都 6
1982	30	東京 46	九州 43	熊本 17	京都 10	一橋 9
1983	31	東京 36	九州 32	熊本 12	京都 6	一橋・琉球 5
1984	32	東京 38	九州 33	京都・一橋・長崎 9		
1985	33	東京 44	九州 32	一橋 14	京都 10	熊本 9
1986	34	東京 48	九州 37	一橋・熊本 12		京都 8
※1987	35	九州 65	東京 51	京都 32	大阪 20	熊本 17
※1988	36	東京 55	九州 47	京都 26	熊本 18	大阪 14

年度	卒回生	1位	2位	3位	4位	5位
※1989	37	九州 63	東京 40	熊本 16	京都 14	一橋・名古屋・大阪 5
1990	38	東京 51	九州 31	一橋 10	京都・熊本 8	
1991	39	東京 43	九州 29	一橋 14	京都 12	東京工 8
1992	40	九州 35	東京 20	京都 12	一橋 11	佐賀医 9
1993	41	東京 41	九州 39	京都 15	一橋 11	佐賀医 9
1994	42	東京 32	九州 25	京都 13	一橋 8	横浜国立・熊本・琉球 6
1995	43	東京 41	九州 34	京都 14	一橋 7	熊本・佐賀医 6
1996	44	東京 45	九州 43	一橋 14	京都 12	佐賀医 9
1997	45	東京 35	九州 30	京都 19	大阪 9	一橋・長崎 6
1998	46	東京 40	九州 35	京都 12	一橋 10	熊本 7
1999	47	東京 46	九州 29	京都 13	東京工 8	熊本 7
2000	48	東京 38	九州 33	京都 9	熊本 8	山口 4
2001	49	九州 39	東京 30	熊本 11	一橋 6	大阪・長崎・鹿児島 4
2002	50	九州 46	東京 40	京都 12	一橋 9	横浜国立 7
2003	51	九州 44	東京 31	京都 9	長崎 8	横浜国立 7
2004	52	九州 57	東京 36	一橋 8	京都・熊本 7	
2005	53	九州 38	東京 25	京都 11	熊本 9	大阪・長崎 6
2006	54	九州 35	東京 33	京都 11	一橋 6	大阪・熊本・長崎 5
2007	55	九州 43	東京 35	京都 13	熊本 11	長崎 6
2008	56	九州 29	東京 26	京都・熊本・長崎・佐賀 8		
2009	57	九州 44	東京 38	長崎 11	京都 10	東京工業・熊本 7
2010	58	九州 50	東京 24	京都 14	長崎 8	熊本 6
2011	59	九州 42	東京 36	熊本 12	一橋 10	大阪 8
2012	60	九州 47	東京 35	京都 11	大阪 9	一橋・長崎・佐賀 7
2013	61	九州 26	東京 24	京都 17	熊本 11	佐賀 9
2014	62	東京 38	九州 36	熊本 15	京都 13	大阪 6
2015	63	九州 44	東京 37	長崎 14	熊本 8	京都 7
2016	64	九州 40	東京 37	大阪 11	京都 10	熊本 9
2017	65	九州 48	東京 27	長崎 18	山口 9	熊本 8
2018	66	九州 41	東京 23	京都 13	大阪 11	東京工業・長崎 8
2019	67	東京 50	九州 41	京都 11	大阪・佐賀 7	
2020	68	九州 44	東京 31	京都 14	長崎 13	熊本 9
2021	69	九州 42	東京 36	長崎 17	佐賀 9	大阪 8・山口 8
2022	70	東京 43	九州 37	京都 17	佐賀 10	熊本 7
2023	71	九州 45	東京 37	熊本 13	京都 11	佐賀 7
2024	72	九州 33	東京 32	佐賀 16	熊本 12	京都 10

（注）　※印は入試が「連続方式」で複数受験が可能、例えば東大理１と九大医学部の両方に合格（ダブル合格）できた年を示す

附設の保健室という場所

中学３学年全てが共学になった年の保健室利用者数は、記録に残っているだけで、2999人であった。中学1347人（女子498人）、高校1652人（女子290人）だ。

医療機関の受診に関しては、広域からの通学生が多い、土曜も授業がある、寮があるという点から、自宅からではなく学校から受診させる生徒が多いのだろう（「首から上と手の怪我は医療機関」と教えられた通り、眼や指の怪我が散見される。年間100人を超え、自宅近くの病院で受診した生徒も含めると、もっと多くの生徒が受診していると思われる）。救急車を要請した数は、この十年で２桁に上る。怪我の多い本校生徒を診てくださる周辺医療機関の皆様、保健室前に迅速にタクシーを配置してくださるタクシー会社のお陰で、本校生徒がスムーズに受診できる環境が成り立っている。支えてくださる方々のお陰である事を生徒、保護者、教員には分かってもらいたいし、とても恵まれていると感じている。帰宅後受診になると、自宅近医が開業していない時間になってしまうのだ。

中高が完全共学になって以降、コロナ禍で一時減少したものの、2025年度現在の来室者数は共学完成以前よりもやや増加している。そして来室者の半数以上は女子生徒になっている。怪我の多い月は、６月・９月・11月とクラスマッチや体育祭等の行事のある月が多く、内科的症状での来室者は、２学期に増加する傾向がある。また、人間関係等の相談は１学期当初からで、生活リズムの変化に伴う悩みも多い。通学し始めると、教材の重さと通学時間の長さに疲弊する生徒も多い。鞄の重量は10Kgを超える中学生が多く、通学時間は１時間半程になり、想像していた以上に疲弊していく。しかし、附設に入学してくる生徒は、強靭な精神力と若さと体力で乗り切っていく。文化祭や体育行事絡みのトラブルも多いが、行事や人間関係を乗り越え、精神的に成長していく生徒を多く見てきた。乗り越えた生徒は、より強く、自分の道を邁進していく。入学時から自分の意見をはっきり言える中学生は少ないが、成長と共に言えるようになっていく。

怪我に関しては「学校での怪我だから学校から病院に連れて行くのは当たり前」と言われる事が増えている。救急対応として必要な場合は、本人の過失であっても受診に付き添うのだが、養護教諭の不在時に他の生徒が怪我をする事も多く、保護者や学年の先生方の協力が無ければ成り立たない状況にある。学年の先生方は、授業の持ち時間も多いので、保護者や医療機関へ連絡し、生徒だけで受診する場合もある。勿論、一抹の不安はあるが、思いの外生徒達は、きちんと受診出来る。男子校時代から受け継がれてきた自立の精神の賜物なのだろう。

中１の怪我が多い印象であるが、昨年度の怪我の状況を日本スポーツ振興センターに申請した人数からみると、中学全体の37.3％が中１で、中２・中３も３割程であった。中１が突出して多いという訳ではない。ただ、運動慣れしていないために顔でボールを受ける生徒が多く、眼鏡をかけているための怪我などで保健室に来室することが多いのは中１である。ボールの扱いに慣れていない生徒が散見され、眼科や整形外科の受診に繋がっているのかもしれない。高校生の怪我は、高１が高校全体の43.6％を占めており、高２が３割である。医療機関受診者数は、中学生が若干高校生より多い。歯の脱落や破折も数例起こっている。

また、附設生はやせ型が多いからか、気胸になる生徒が若干多い。過去にバスに座って通学時、振動で気胸になった生徒がいた。入院になり、保護者が来るまで半日かかった事を覚えて

いる。その後も年に複数人が気胸になっている。入院になった場合、広域通学故、保護者の方に負担をかける事も多いが、ご協力いただいて何とか成り立っている。交通外傷も年に数例ある。学校前の道が狭い等の要因もあるが、確認せず横断する生徒もいるため、安全確認を怠らないで大怪我を防いでもらいたいと願っている。男女共学化に伴い、突然の走り出し等は少し減っているかもしれないが、話に夢中になり、階段を落ちてしまう生徒も一定数いる。

どのメーカーの汗拭きシートが良いか男女でワイワイ話している生徒たち、脛や腕の毛剃りをしている男子生徒たち、共学化以前には見られなかった姿である。また、独りで黙々と作業をする生徒と、皆で一緒にという雰囲気の中で学校生活を送っている生徒と、割合に変化が見られてきている。それが今後どのように作用してくるのかは、まだ分からない。

内科的症状で来室が多いのは、発熱・頭痛・腹痛・倦怠感などで、悩みやストレスから症状が出ている事も多い。見えない症状に初めは戸惑っていた教員も、今では、過呼吸やメンタルに関する用語の知識が増えてきている。

保健室に来る生徒は、痛みがあったり、悩みがあったりする状態なので、行事などの際、保健室の外で見る彼らの姿は新鮮である。保健室では見られない茶目っ気たっぷりな様子や、一心不乱に運動や演舞に取り組む様子も愛おしい。テスト明けに友人と商業施設に遊びに行く満面の笑みも嬉しくなる。

普段の保健室は、１日平均15～20人程の来室があるが、附設の保健室は、テスト１週間前になると来室者が減る。テスト直前は、是が非でも授業に出たいという生徒が多い。毎日、一生懸命に過ごせるのが理想なのかもしれないが、なかなか思うようにいかない。普段教室に足の向かない生徒も自発的な活動には積極的だったりする。行事が苦手な生徒も結構いるが、行事や体育の無い座学だけなら、学校とは言えなくなってしまうだろう。失敗を極端に恐れて何もしないより、挑戦し結果に拘らず経過を楽しんだり学んだりしてもらいたいと願っている。その過程で生じた人間関係の悩みや葛藤は、友人の存在や周りの支えによって乗り越えて欲しい。保健室や相談室は、その一助として役に立たなければならない。

保健室は高校棟の１階、日の当たらない風通しの良くない、運動場からも体育館からも教室からも遠い場所にある。私が今から15年前に赴任した時には既に現在の場所だった。どれか一つでも近ければ良かったのにと思うがどうしようもない。１つだけ利点があるとすれば、誰の目にもとまらず来室出来る事だ。こんな場所であるが、利用者は結構いる。人の目が気になる年齢の生徒たちのことを考えて、敢えてこの場所を選んだのだろうかとも思う。

附設の保健室という場所は、仕事内容や構造が他の学校の保健室とかなり異なっていた。赴任時は、郷に入れば郷に従えという心理状態ではあったが、如何せん私学の保健室についての知識が不足していた。今も、附設が掲げる「授業が命」を支えていけたらいいと考えるが、休み時間しか利用できない保健室に何が出来るだろうか。赴任当時、保健室の中には、何故保健室にこんな物がという物が沢山あった。文化・体育祭の行事前に使われるアイロンであったり、大雨の日に活躍するドライヤーであったりするのだが、皆の要望を前任者が１つずつ叶えた物であった。

この15年間で最も変わったことは、保健室が純粋な「保健室」になったことだと思う。嘗てのように、第２の生徒会室のように使用される

ことがなくなった。私の赴任時は、体力測定のデータ入力、「男く祭」における備品、渉外、バザー、チャリティーバザー、講演の裏方……等々、純粋な「保健室」以外の仕事が数え切れないほどだった。元気な生徒であふれ、活気はあったが、共学化という附設自体の変化や個人情報保護などの社会の流れの中で、ここ10年が潮時だったのだろう。保健室は「保健室」になった。

25年後の保健室は、附設は、どのようになっているだろうか。十年前の附設は、色々と無茶な事も多かったが、良くも悪くも開放的で活気があった。生徒も先生方も破天荒な人が多かった。附設が決定的に変わったのは、やはりコロナ禍の影響だと思う。これから先も何があるか分からない。附設の中にも世の中の常識が浸透してきたように、色々なことがじわじわと変化していくだろう。ただ、脈々と受け継がれてきた附設生の精神は、これからも受け継がれていくと思う。十数年しか勤務していない養護教諭に何が分かるのかと思われる方は多いと思う。分からないなりに色々考えて辿り着いた根拠の一つが、親子で附設を卒業されている方々の存在だった。入学前から附設精神に触れている生徒達と、入学と同時に附設に馴染んだ生徒皆で作っている附設の精神を、後輩が受け継いでいるから繋がっているのだ。そう思った瞬間、附設100周年が見えた。

これでまで生徒の健康を支えてくださった沢山の方々への心からの御礼を述べ、輝く未来を支えてくださる皆様への深い敬意を表したい。そして、これから先も、生徒たちにはいつでも安心して保健室を訪ねてもらいたい。

（文責：福浦直子）

Ad Felicitatem Humanam 人類の幸福のために

附設生のこころに寄り添う
～相談室のあゆみとこれから～

1. 生徒相談室の設置とあゆみ

不登校やいじめの増加といった社会の状況を受け、文部科学省がスクールカウンセラー活用調査研究委託事業を開始したのは1995(平成７)年である。これにより各都道府県３校、全国154の公立中学校にスクールカウンセラー（以下、SC）が配置された。その後SCは、校種・校数・従事時間数等において拡大配置されており、地域差はあるものの、現在も多くの中学校・高等学校で活用されている。翻って本校について顧みると、驚くべきことに文部科学省の事業より10年も早い1985(昭和60)年から継続してSCが配置されてきた。

生徒相談室では、2002(平成14)年に向笠章子カウンセラーが着任したことを機に、中学１年寮生の全員面接を開始した。これは、中学入学と入寮という環境の大きな変化に伴う心理面のアセスメントや不安の軽減を目的に現在も継続している。高等学校の男女共学化が開始された2005(平成17)年には、本田由布子カウンセラーが着任し、SCは２名体制となった。2012(平成24)年には新校舎が完成し、生徒相談室も１号館から新校舎に移転した。新しい生徒相談室は、設計時からSCの要望を取り入れてもらうことができ、待望の待合室が設けられた。待合室があることで、相談者同士が顔を合わせずに入退室することが可能となり、より安心して相談できる環境が実現した。2016(平成28)年には、向笠章子カウンセラーが生徒相談室スーパーバイザー（以下、SV）に就任し、髙橋陽子カウンセラーが着任した。2017(平成29)年には國﨑千絵カウンセラーが着任し、現在までSVと３名のSCの４人体制で相談室を運営している。

このように、生徒相談室のあゆみを概観すると、本校が全国に先駆けてSCを導入し、生徒相談体制の充実を図ってきたことが分かる。それは、SCの人数が増えただけでなく、相談しやすい場を提供するために必要な「相談室の環境整備」や、SCが一人で抱えこまずに相談活動を行えるようSVが配置されていることからも窺え、それによって、生徒や保護者の生徒相談室の利用のしやすさに繋がっていると思われる。

相談室の様子（入口・相談室１）

相談室の様子（待合室・相談室２）

2. 男女共学化に伴って

2005(平成17)年、高等学校の男女共学化により、高等学校１年女子生徒の全員面接を開始した。男子生徒に比べて女子生徒の数が著しく少なかったため、学校の設備や対応に不備はないか、学校生活に不安や悩みはないかなどを女子生徒一人ひとりに丁寧に聴き、女子生徒だけでなく男子生徒にとっても過ごしやすい学校生活づくりを目指した。2013(平成25)年には、中学校の男女共学化が始まり、高等学校１年女子生徒と同様に、中学校１年女子生徒を対象に全員

面接を実施した。中学・高等学校の１年女子生徒への全員面接はしばらく継続したが、全学年において共学化したことや、女子生徒の数が増えていったことにより、一旦終了した。生徒の相談内容に、共学化による大きな変化はない。ただし、思春期の女子生徒特有の友人関係や身体の悩み、遠距離通学に伴う心身の負担などには、今後も配慮を要すると思われる。

3. 生徒相談室の活動内容

生徒相談室では、例年①～⑤の活動を行っている。

①生徒、保護者、教職員のカウンセリング
②教職員へのコンサルテーション
③予防的対応（中１寮生を全員面談）
④広報活動（新入生へのオリエンテーション、相談室の案内文書配布、入学式での挨拶など）
⑤職員研修

教職員へのコンサルテーションとは、生徒の学校適応についての協働・連携を意味する。また、事故や災害や不祥事などの不測の事態が起きた際には、緊急対応も行っている。各年度の相談件数は以下の表の通りである。SCが３名に増えた平成29年度から、相談件数は800件を超えるようになった。相談内容は、例年『心身の健康』や『学業・進路』に関するものが多い。コロナ禍には相談件数が1,000件を超え、『不登校』や『対人関係』や『家族』についての相談も増えた。

4. 相談室のこれから

新型コロナウイルス感染症の流行により、2020年３月以降、幾度も緊急事態宣言が発令され、我々の生活は大きな影響を受けた。世界中が未曾有の危機のなか、国からの要請で全国的な一斉休校が決まり、子どもたちは自宅での生活を余儀なくされた。学校が再開された後も部

相談室利用件数

年度	生徒	保護者	教職員	その他	合計
平成21	147	92	254	0	493
平成22	110	113	298	0	521
平成23	132	127	288	1	548
平成24	171	100	284	0	555
平成25	242	90	330	0	662
平成26	193	101	263	0	557
平成27	204	107	273	0	584
平成28	110	77	301	0	488
平成29	206	174	424	4	808
平成30	242	138	393	1	774
平成31	295	192	553	0	1040
令和２	350	210	611	2	1173
令和３	405	266	679	2	1352
令和４	188	114	517	0	819
令和５	253	101	502	1	857

※教職員の利用は、コンサルテーションが主

活動や行事は制限され、子どもたちは昼食時や休み時間の会話さえままならないなかで、新しい生活様式を強いられた。本校でも、生徒の健康や安全を守るという観点から、部活動や学校祭などの学年を超えた活動を実施することが困難な状況が続いた。生徒にとっては行事を通して自主性を発揮する場や、仲間と連携しながら活動することの楽しさやもどかしさを経験する機会が減り、学校生活の醍醐味を感じにくかったであろう。何気ない日常のなかから人間関係を深めていくことも難しい時期であったため、対人関係を築き、維持していく時に必要なスキルを獲得しづらかったのではないかと危惧している。しかし、元は健康な心身をもつ集団であることから、多くの附設生は、その時々の荒波に揉まれながらも、時代に必要なスキルを身に着けていけるだろうと考えている。

コロナ禍のような不条理な状況は、個人や組織の脆弱性が表に出やすく、水面下に潜んでいた問題を顕在化させることがある。近年は、多くの学校で「就学意欲の低下」や「課題遂行の困難」や「対人関係の不和」などから、学校生活に不適応を起こすケースが目立つようになったと言われている。生徒相談室はこれまで、生徒・保護者のカウンセリングや教職員へのコンサルテーションを中心に活動しており、SCはカウンセリングの質を高め、平常時も緊急時も的確な対応ができるようスキルを向上させてきた。しかし、相談件数の増加や相談内容の多様化・複雑化を考えると、今後は生徒が自らSOSを出せることや、ストレスマネジメントスキルを伸ばすことを目的に、集団へアプローチすることの必要性を感じている。また、中高生に関わる大人に対しては、思春期の子どもとの適度な距離のとり方や、思春期心性の特徴などを心理教育する場を今後も継続して設けていきたい。そうすることで予防的対応が可能となり、生徒の学校適応にさらに貢献できると思われる。これらの取り組みは、日頃から生徒対応に尽力されている教職員との連携が欠かせない。附設生の現状について教職員と共通認識を持つことや、子どもからのサインを見逃さないように教職員との協働を続けることは、これまでもこれからも生徒相談室の重要課題の一つと考えている。

（文責：生徒相談室
向笠章子　本田由布子　髙橋陽子　國﨑千絵）

Ad Felicitatem Humanam 人類の幸福のために

図書館の25年

『75年史』は『50年史』と『100年史』との間の“橋渡し役”であろうことをふまえて、ここでは2000(平成12)年から2025(令和７)年までの久留米大学附設高等学校・中学校の図書館の変遷と現在の状況を素描したい。あまり堅苦しい文章にはしたくない（し、書けない）ので、思いつくままにつらつらと書いていくことにするが、図書館という空間は学校の中でもそういう“浮いた”存在でもあるため、お許しいただきたい。

そういうわけでまずは個人的なエピソードから書かせてほしい。この文章を書いている私（国語科教諭・森山淳一）は、2011(平成23)年から久留米大学附設高等学校・中学校に国語科教員として勤めはじめたのだが、実はその前年、図書館長を長年に亘って務められていた国語科の西原和美先生が退職されている。前任校時代から学校図書館の運営や読書指導に関わっていた私は採用試験の際、「とにかく図書館の仕事をしたいんです」ということを（学校側の事情も知らずただ個人の願望として）書面でも面接でもやたらとアピールした。それが奇妙に符合したのかもしれないが、私は運良く採用され、そして西原先生のあとを引き継ぐようにして、初年度から現在まで図書館の仕事に携わらせていただいている。引き継ぎの際には、西原先生から図書館について様々なことをご教示いただいた。

2000年から2012年までの図書館は、施設としては1972(昭和52)年に設置された形をほぼそのまま引き継いでいる。教室棟西側（西棟）二階と新棟（１号館）三階をメインの空間として、その二部屋を渡り廊下がつなぐという構造である。詳細は『50年史』に紹介されているが、当時の図書館の中心は自由に閲覧できる書架が自習用の机をぐるりと取り囲む形で、「自学自習の静寂空間」「自己確立のための高貴なる孤独の空間」を文字通り体現していた。本校の図書館は正確には図書館ではなく図書室である。そしてその主な機能と用途は自習室であるといっても過言ではない（西原先生はその理念の要点を「読まずに読ませる」と仰っていた)。図書室としての役割はもちろん担っているが、たくさんの本に囲まれ、それらの知の集積を感じながら一人静かに自学自習するという体験こそ、本校の「図書館」の正統な利用法だ、ということだろう。実際、室内にはいわゆる「おすすめの本」を紹介するポップや装飾などが目立って配置されているわけではない（現在もその方針は踏襲している)。朝の始業前から放課後まで、特に定期試験前には中学生から高校生まで多くの生徒が黙々と自習している光景は、昔から今まで変わることなく続いている図書館の日常である。

2000年にはバーコードによる蔵書管理システムが導入された。貸し出しと返却の際の手間が省け、蔵書検索も容易になった。2000年当時の蔵書数は既に五万冊を超えていたが、それだけの書籍数に加え、図書館の本は当時、校舎内のいたるところに散らばっていた。各教科の研究室などの書棚はもちろん、なぜか職員会議用の会議室の本棚に図書館の本が並んでいたりするなど、校内のあちこちに“飛び地”が存在していた。それらの本をもれなく集めて点検し、一冊一冊に整理番号を割り振り、バーコードを貼り付けていったわけである。主な作業は専門業者がやったにしても、気の遠くなるような作業だったに違いない。バーコード導入後、「貸出カード」に記名する旧来の方式は廃止されたわけだが、古い蔵書の中には見返し部分に貸出カードが残っているものもあり、2000年以前の先輩達の知的好奇心の足跡がこっそり窺えたりする（ので、あえてそのままにしている)。シ

ステム導入時は図書館内のコンピュータのみで蔵書検索が可能だったが、現在ではオンラインで自由に検索することが可能になっている。また、近年ではバーコードに代わってICタグ（RFIDタグ）による蔵書管理システムが全国的に普及しつつあるが、本校では今のところ導入の予定はない。

2012年、新校舎建設に伴って図書館は新校舎に移転することになる。先にも書いたが久留米大学附設高等学校・中学校で私が勤めはじめたのは2011年からであり、かろうじて移転前の図書館の姿を最後の一年間だけこの目で見て知っている。とはいえ移転前の図書館の実際の様子、その雰囲気のほとんどはわずかな記録と伝聞から想像するしかない（1972年から2012年の間に在籍されていた卒業生の方々は今でもご記憶のことだろう）。しかし、実を言えば、こちらで勝手に想像するまでもなく、図書館がそれまでどういう空間だったのかは、わずか一年間であっても確かに直感的に見て取れたのだった。2000年以前から2012年まで、図書館は図書館長の西原先生の主導で運営されていた（途中、2002年から2004年は吉田寛先生が図書館長を担当された）。図書館には、西原先生の国語の授業で感化された生徒をはじめ、図書館という計り知れない他者の知の存在を感じることのできる空間で（あるいはその存在とは隣の席の誰かだったかもしれない）、自学自習という孤独な作業に向き合ったり、読書という時空を超えた対話に没頭したりした生徒たちの気配が、現在進行形で充満していた。中には図書館の他に居場所がなかったという生徒もいただろう（西原先生は図書館を「生徒たちのアジール」とも呼んでおられた）。また、「わずかな記録」と先に書いたが、西原先生が作成し生徒に配布されていた『本の気持ち』『本の心』『和而不同』『100冊の「本」宇宙』その他のプリントの膨大な原稿が図書館には残されていた（現在も保存書庫に全て保管している）。その原稿を一枚一枚、歴史を辿るように読んでいると、そこに込められた気概と熱意にただただ圧倒され、同時に西原先生もまた、図書館設立時の原巳冬校長、初代館長の世良忠彦先生から二代目の館長である菊池昌孝先生、その次の代の太田昌一先生、高橋謙輔先生、田中豊後先生、合原俊光先生へと受け継がれていった本校図書館の理念と理想を引き受け、深化しようと奮闘されていたことがひしひしと伝わってくる。西原先生が退職された後、図書館長は芸術科の江上寛二先生が2011年と2012年に受け持たれたが、それからは校長が図書館長を兼任することになった（前代の吉川敦校長から現在は町田健校長が館長である）。そのため、名目上はともかく図書館長というポストは実質なくなってしまったわけだが、以降は図書館主任が図書館運営の教員代表として実務をこなすことになっている。移転後の図書館主任は現在まで私が務めさせてもらっているが、まだまだ西原先生の足元にも及ばない。また、移転以前から西原先生の呼びかけによって司書教諭免許を取得した教員が増え、チームで運営する体制もできているが、いまだその体制をうまく活用できていないのが現状である。やれること、やるべきことはまだまだある。がんばります。

とはいえ、図書館の運営においてその実質を担っているのは教員ではなく司書の方々である。カウンター業務から新着図書の登録や配架、蔵書の整理、備品の調達と館内整備など、図書館の運営全般は事務員の司書担当者なくしては一つも成り立たず、一日たりともやっていけない。2000年から2025年まで、下川由紀さんが継続して司書を務めてくださっている（だからこの文章を書くのに相応しいのは私ではない気がして

いる)。本校の学校司書は二人体制であり、下川さんの他にはこれまで石橋扶佐子さん（2000年から2005年まで)、高木いづみさん（2005年から2010年まで)、日野美雪さん（2010年から2020年まで)、今村吉宗さん（2020年から2023年まで)、大安直子さん（2023年から2025年現在まで）が担当された。途中、司書を一人体制にするという話も持ち上がったが、何とかお願いして二人体制を継続してもらったこともあった(あのときは本当に危なかった)。日々の業務に加え、行儀の悪い生徒に手を焼いたり、無理難題を言う教師の対応に困ったりと、司書の方々はさぞかし大変だっただろうと思われる。繰り返しになるが、図書館が図書館として今まで維持できたのは、司書の方々の尽力があってのことである。このことはぜひ強調しておきたい。

ここからは移転後（2012年以降）の図書館について概略を述べることにする。新しい図書館の間取り、デザインには計画段階から携わった西原先生の設計思想が反映されているため、少し詳しく紹介したい。新しく移設された図書館は新校舎の西棟、三階職員室の真下に位置している。西棟の二階に入口があり、入口前の廊下に面した書架には卒業生の著書や寄贈本、歴代校長の記念文庫などがずらりと並んでいる。入口を入ると右手には掲示物と生徒が使えるパソコンが二台、その先にカウンターがある。左手壁面には神戸智行氏による四季の風物が描かれた日本画の連作四幅が掛けられている。正面には雑誌コーナーがあり、その先には新着図書とマンガの書架（2022年には絵本コーナーを増設)、そしてその先の広い空間が自習スペースである。144席ある自習スペースの机は一人一人アクリルの仕切りが設けられ、孤独な空間を確保できるようになっている（コロナ禍の際にもこの仕切りが役立った)。周囲は腰上から開けた窓に囲まれて明るく開放的な空間になっており、腰下の壁面には辞書や事典、図録、大型図書がぐるりと配架されている。自習スペースは中央から十字に配置された書架によって四つに区切られており、その十字の書架には主要出版社の新書（岩波新書、中公新書など）が整然と並んでいる。この階（二階）には他にも新聞閲覧コーナーや東洋文庫の棚、西原先生が選定された「本の宇宙」の書架もあり、カウンター前にはブラウジング（閲覧）スペースも併設されている。このスペースでは大抵中学生がマンガコーナーのマンガを読んでいる。カウンターに沿って進んだ突き当たりには下り階段がある。移転後の図書館は二階構造になっており、下の階（一階）は書庫のフロアである。自習机も54席ある。“図書”という点ではこの一階がメイ

図書館（図書室）の入口。廊下に面した書架には卒業生の著作物や寄贈本、歴代校長の記念文庫などが展示されている。

一階の開架書庫。手前は自習・閲覧スペース。日本十進分類法（NDC）に少し手を加えた順序で図書が整然と並んでいる。

二階フロア。奥の自習スペースは窓に囲まれた明るく開放的な空間だが、本が日焼けしないよう配置に工夫がされている。

一階の保存書庫。普段は施錠されているが申請すれば生徒も入室でき、貸し出しも可能。ハンドルを回すのが楽しい。

ンの空間であり、蔵書の大半がこの開架書庫に配架されている。保存書庫（閉架書庫）の部屋もあり、そこにはハンドル式移動棚がぎっしりと並んでいて、貴重な書籍、年鑑、全集などが収蔵されている（これらの本も貸し出し可能である）。図書館の一階に通常の出入り口はない。そのため、生徒は二階フロアの入口から出入りすることになる。図書館に入るとまず“表の顔”である開放的な自習スペースが目の前に広がり、そこでは他の生徒たちが自学自習に励んでいる。読みたい本を探している生徒は奥の階段を下りて一階に“潜る”。このように上下二つのフロアで棲み分けがなされており、どちらの階も全体的にシンプルで装飾も少なく、落ち着いた空間になるよう設計されている。「アジール」としての隠れ場的な雰囲気は移転前と比べてほとんどなくなってしまったが、机に座って書物やノートを広げれば、各人が静かに孤独と向き合えるように環境が整備されている。図書館が「自学自習の静寂空間」であることは今も昔も変わっていない。

移転後の出来事（事件）のうち主だったものをいくつか記しておこう。移転して間もない2013年の梅雨の時期に、一階書庫の壁面の一部に黒カビが大発生した。その場所に配架していた大量の本にもカビが付着していた。慌てて業者に依頼しカビを除去してもらい、それ以上の被害拡大は食い止められたが、思いがけない、ぞっとする事態だった。カビ発生の原因は湿気によるもので、後になってそれは「校舎が完全に乾いていなかった」ためであることが判明した（らしい）。新校舎は当初、図書館以外でも

奥からマンガ、新着図書、絵本コーナー。
定期テスト期間中はマンガコーナーにカーテンがかかる。

二階のカウンター前。神戸智行氏の日本画が掛けられている。
左手奥と右手前には本宇宙の書架が設置されている。

雨が降ると廊下の結露が目立っていたが、近年はある程度落ち着いている。その後、図書館ではカビが発生したエリアに大型の除湿機を設置した。続く2014年、今度は図書館が「少し狭くなる」という事態に見舞われる。一階フロアに隣接する保健室の拡張工事のためであった。結果的に、保健室側の壁が迫ってきた格好になり、面積が縮小される箇所とその周辺の書架のレイアウトを変更し、図書の並び替えを行った。保存書庫の扉も移設している。新校舎が建って二年あまりで改築工事が行われるとは主任の私も司書のお二方も想像すらしておらず、工事の決定について議論の余地もなかったのでなおさら吃驚した。最終的には図書館長を兼任している校長の判断だったのだろうと思われるが、詳しい事情や経緯はよくわからない（掘り下げる勇気もない）。

2020年、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界的に流行し、長期休校明けの図書館も感染防止対策に追われることになった。一階書庫の机は全面使用禁止、二階の自習スペースも使用可能な席を半数以下に減らした。大型の空気清浄機を四台設置し、換気や消毒も適宜行った。カウンターにもアクリル板を設置し、図書委員の活動も制限されてしまう。その後、感染の収束に合わせて机の使用制限も徐々に緩和し、2024年度には全席使用可能となって元の運用に戻っているが、カウンターのアクリル板は今も残っている。

中学・高校図書委員の生徒による活動は移転後も多少変化しながらその大枠は引き継がれ、自主的、精力的に行われてきた。中学も高校もそれぞれ図書委員会報を作成し、中学図書委員は年毎の書庫整理を手伝ってくれている。高校図書委員は昼休みのカウンター業務の手伝い、読書会の参加や開催、選書ツアー、文化祭での古書バザー、『讀者之言』の発行など、コロナ禍によって制限を余儀なくされた時期もあるが、生徒たちはいつの時代もエネルギーに満ちあふれ、本が好きで、図書館という空間に愛着を持ってくれている。

90年代から2000年代初頭にかけて、インターネットの利用が普及し、「情報化」「デジタル化」が新しいスローガンとして喧伝されていた。図書館も蔵書管理の電子化が進み、館内にパソコンを設置して利用者が自由に検索、調べものができる環境が整備されていった。本校の図書館も同様である。そして2025年現在、生徒たちは手元の情報端末を使いこなし、わざわざ図書館のパソコンを使うことはなくなっている。ちょっとした疑問は検索エンジンで瞬時に解消し、SNSや動画サイトでは虚偽も含んだ無数の情報が日々更新されている。電子書籍も一般化した。情報メディアとしての“本”は、今後ますますその立ち位置を変化させて（させられて）いくだろう。そうした中で、図書館の、そして学校図書館の存在意義は常に問われ、更新され続けなければならない。しかし、「自学自習の静寂空間」という本校図書館の理念は、きっと変わらずに保たれていることだろう。先述の通り2000年の時点で本校図書館の蔵書数は五万冊を超えていたが、2025年現在はおよそ九万六千冊、まもなく十万冊に達しようとしている。ただ、施設の物理的制約もあって、十万冊は所蔵冊数のほぼ限界に当たる。今後は図書の“新陳代謝”を積極的に、かつ慎重に行うことが急務になる。厳選された本に囲まれ、そこからしか辿り着けない場所に開かれた空間としての図書館。そして「自学自習の静寂空間」を維持していくことが、今の生徒のため、未来の生徒のためになると信じている。

（文責：図書館主任・司書教諭　森山淳一）

中学卒論・制作の25年

1. 初めに

卒業論文・制作については、この75周年記念誌に合わせて、50周年誌以降の25年分を特にまとめるというよりも、むしろこの取り組みの伝統と一貫性を尊重し、卒業論文・制作という取り組みが始まってちょうど45年となった中学54回生までをまとめて記すこととしたい。

半世紀を超えて中高一貫教育を充実させてきたわが久留米大学附設高等学校・中学校の大きな特色の一つが、この中学卒業論文・制作である。他の中高一貫校の多くと同様に、わが校でも中学校及び高等学校６年間の学習内容を５年余の期間でほぼ終える。中学での学習内容については、数学、英語、国語について、そのほとんどを中学２年生までに終え、中学３年では、高校レベルの内容に取り組んでいる。中学での社会や理科についても、６年間を見据えての内容の深い授業が展開される。また、芸術科、保健体育科においても、生徒の全人格的成長を考えた優れた教育が展開されている。いずれの授業でもそのレベルは高く、進度は速い。大学入試の事情に精通している教師陣によって精選された教材と授業内容が組まれ、中学１年生から考えられたカリキュラムで授業は進められている。中学生が、このようにレベルが高く進度の速い授業をこなし、学力、思考力、そして、広く知力を身につけていくためには、ただ、黙々と学業に耐えていく、ということだけではなく、なによりも、高いレベルでの知的好奇心を持つことが大切であるとわが校では考えてきた。学問の面白さ、制作の楽しさ、自己発見の喜び、そして、決して短くはない時間とかなりの努力を注ぎ込んだ先に訪れる自らやり遂げることの喜びを生徒が体験できるようになれば、その時、中高一貫校でしか成しえない充実した中学教育が可能となると言えよう。高校進学のための受験勉強に励むことも素晴らしいことである。だが、その間、じっくりと生徒自らが設定するテーマに従って、論文作成や制作に取り組むことも何物にも代えがたい素晴らしい経験である。附設中学校の生徒は、このような理由から、中学校時代の時間を有効に利用し、卒業論文・制作に取り組むのである。

2. 歴史

最初のきっかけとなったのは、中学９回生の関本善和くんの夏休み作品の全国学芸科学コンクールへの応募とその内閣総理大臣賞受賞であった。卒業論文・制作は、それを機に、1980年（昭和55年度、中学10回生）の「研究論文」として出発した。1989年（平成元年度、中学19回生）からは、「卒業論文・制作」と名称を改め、その際、内容も1980年当初の「研究論文」に加え、小説、作曲、絵画、彫刻、書道、工作、デジタルアートなどの制作にまで広げられ、今日に至る。毎年、優秀な論文、制作については外部コンクールに応募し、現在まで、旺文社主催の「全国学芸サイエンスコンクール（旧「全国学芸科学コンクール」）」と読売新聞社主催の「日本学生科学賞」の２つのコンクールを中心に、多くの優れた論文と作品が全国レベルで高く評価されている。

次ページに、これまでの受賞の一覧をまとめる。

受賞一覧

回生	全国学芸サイエンスコンクール				日本学生科学賞			
	金賞	銀賞	銅賞	入賞	中央審査	最優秀賞	優秀賞	努力賞
10				3		1	3	
11				2		2	2	1
12				16		1	2	3
13	1	1		2		2	2	4
14	2		1	9				10
15	2	1		11		2		3
16	2	1	1	9		2	3	1
17	1	1	2	10		1	3	2
18	1	1		6	1	1	2	4
19	1		1	7		1		2
20	1	1	2	8			1	1
21	1	2	1	10		1	1	1
22	1		1	8			1	1
23	1		1	5				1
24	1	1		4			1	2
25	1	1	1	11				
26	1	1	3	11				1
27	1	1	1	9			1	
28	1	1	3	6				2
29	3	2	3	3				1
30			2	5			3	5
31		2	2	4			1	3
32	2			4		1		1
33	1	1	1	2				1
34	2	1		4				
35	2		1	5			1	2
36		2		4			1	1
37		1	1	7			1	1
38	1			3				1
39	3			3		1	2	2
40	1	1		5			2	1
41	1	1		3	1	1	1	
42	1	1		4			2	3
43		1		2				2
44	1			1			3	2
45	1		1	1	1	1	1	2
46				2				
47				3		1		3
48	1			3		2	3	1
49	1	1	1	3		1	7	
50	2			4		4	1	
51		1		1	1	4	1	3
52	1			5	1	4	2	2
53	2		1	3	1	4	4	9
54	1	2		3	1	4	1	1

3. 生徒の取り組みと附設中学校幹線行事としての表彰式・発表会

卒業論文・制作については、現在、５部門が設定されている。「人文科学（歴史）部門」、「人文科学（地理・公民）部門」、「自然科学（または自然科学・情報）部門」、「芸術部門」、「文学部門」である。中学53回生（高校75回生）を例として挙げると、「人文科学（歴史）部門」に取り組んだ生徒が24名、「人文科学（地理・公民）部門」が42名、「自然科学・情報部門」が49名、「芸術部門」が33名、「文学部門」が28名であった。各部門への取り組みにバランスがとれており、各部門内の研究、作品を見ても、多種多様である。附設中学校らしい個性の尊重、多様性の重視がはっきりと見られる。

前述のように、論文・作品の一部は外部コンクールに応募するが、それ以上に重要な取り組みとして、部門ごとの審査を附設中学校として行い、各部門の金賞、銀賞、銅賞、佳作の表彰を行っている。毎年２月上旬に、久留米大学理事長、学長の御来席のうえ、表彰式を実施している。卒業論文・制作についての大賞として、各部門の金賞受賞者に、「理事長賞」「学長賞」「校長賞」「板垣賞」「小野寺賞」を授与している。表彰式は、中学校全校集会の形をとって行っているが、コロナ禍にあった令和元年～令和４年度は集会ではなく、校長による表彰の模様の映像配信などの形式をとった。その後、令和５年度は全校集会での校長のみによる表彰式を行い、令和６年度からは、理事長、学長からの表彰など、従来の形態に戻している。

表彰式のあとには、大賞受賞（各部門の金賞受賞）者による、発表会を実施している。コロナ禍、そして、その後も２月という寒い時期であることを考慮し、近年では、各教室へのライブ配信、または、ビデオ配信の形をとっている。この大賞受賞者５名の発表を聞くことで、中学１年生は、初めて、卒業論文・制作というものがどのようなものであるのかを具体的に知ることとなる。また、中学２年生は、中学３年生の夏休みまでの残り半年間の取り組みに、改めて意欲を高めることとなる。

4. 卒業論文・制作の進め方

前述したとおり、中学１年生は、中１の２月に、中学３年生の大賞受賞者の発表を聞くことで、卒業論文・制作への準備が始まる。その後、中学２年のゴールデンウイーク前後にテーマの設定や指導をお願いする先生探しが始まる。対象の教員は附設高等学校・中学校すべての教員となる。教員は、自分の専門分野だけでなく、関心があるテーマや趣味に及ぶまで情報を公開し、生徒はそれをもとに全教員の中から担当教官を探すこととなる。中２の夏休み前には可能な限り指導の先生を確定し、夏休み以降の研究、制作の進め方の相談が始まる。その後、中学３年生の夏休み明けの提出に向けて、本格的な取り組みとなる。

指導教官が決定した後は、随時、指導の先生とのやり取りが行われる。53回生の例を見ると、指導に当たった教員は、「人文科学（歴史）部門」で11名、「人文科学（地理・公民）部門」で13名、「自然科学（または自然科学・情報）部門」で12名、「芸術部門」で７名、「文学部門」で６名となっており、延べ43名の教員が指導に当たっている。もちろん、当該学年の教員が多くの生徒を担当する傾向があるが、それ以上に、どうしても、社会、理科の教員がたくさんの生徒の指導にあたることとなり、この問題は、長期にわたって、卒業論文・制作指導の教

員サイドの課題となっている。

卒業論文・制作の提出までのおおまかな流れ、学年での指導計画を、参考として以下にあげておきたい。

5. おわりに

終わりに、2023年度（中学53回生）の卒業論文・制作集にある、町田健校長の巻頭言を引用したい。ここには卒業論文・制作という附設中学校での取り組みの目指すものの本質が示されている。そして、この素晴らしい附設中学校の伝統が今後さらに発展していくことを願ってやまない。

「……絶えず未知の事態が生じる現実社会において、最大の効果を与える判断を得るためには、習得した知識を利用して最適の解答を導き出すことができなければなりません。さらに、社会を進化させ人類の存続に貢献する成果を上げるためには、人類が蓄積した知識に含まれない事実や推論を提示することを可能にする独創性が必要となります。人間が単に生きるだけでなく、よりよく生きることを実現させる確実な手段となるのが、附設中学生がここに作り上げた諸作品であることは間違いありません。……附設の生徒たちが、自分の持つ知識と創造力によって作品を完成させたという経験が、人類の実質的な進化と発展に資する高度な知恵の進化をもたらすことを確信しています。」

（文責：久留米大学附設中学校教頭　藤吉博範）

3年間の生徒の取り組み・学年での指導

中 1	4 月	2 回生上の生徒の卒論文集配布
	2 月	卒論表彰式・発表会・展示会
	3 月	卒論文集配布・テーマ決め指導
中 2	4 月	全教員の専門・趣味など調査
	5 月	卒論集会（GW＆指導教員）テーマ決め　担任団相談
	6 月	指導担当教員割
	7 月	指導担当教員調整　卒論集会
	9 月	指導教員相談
	2 月	卒論集会（大賞者による中 2 向け説明会）
中 3	9 月	卒論提出＆提出チェック
		外部コンクール出品調査＆準備
	12月	卒業論文・制作集指導
		外部コンクール結果＆部門別選考会議
	1 月	卒業論文・制作集原稿提出
	2 月	卒論表彰式・発表会・展示会
	3 月	卒業論文制作集完成・配布

同窓会の歴史

1. はじめに

附設高等学校の設立は1950(昭和25)年４月であるが、同窓会は1957(昭和32)年８月14日、当時22才の１回生が中心となり設立された。同窓会の活動は理事評議員会、定期総会、同窓会報に集約されるのだが、理事評議員会資料は1994年以降、総会資料は1977年度以降しか保管がなく、会報１～３号も紛失し、設立後しばらくの様子がよくわからない。会報は20号（2013年５月）以降は毎年発行されているが、それ以前は２～３年に一度の発行であったため情報の連続性が欠けている。他には母校発行の25年史(1977年11月)、40年史「仰慕帰心」(1989年11月)、50年史「和而不同」(2000年11月)、後援会発行の「教育のこころ」(2011年６月）があり、情報を補完してくれる。こうした資料を読み返し、同窓会の歴史を整理しながら、母校100周年に向けた同窓会活動への糧としたい。

附設生なら誰もが知っている「校歌」、「附設」、「芙蓉」、「扶桑」など、母校に関わるキーワードを復習することから始める。

2. 建学の精神 (学校HP、久留米大学HP)

母校の建学の精神は「国家社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成」（板垣政参校長）である。久留米大学は「国手の衿持（ほこり）は常に仁なり」（北原白秋作詞、前身の九州医学専門学校の校歌）である。

同窓生は懇親会の最後に合唱する校歌の「修羅道の世を救うべく　平和の偉業任として　築く不朽の真善美　見ずや　我らの大使命」（大石亀次郎作詞）を胸に、何かあればこの歌詞を復唱するのである。

3. 校歌（同窓会報27号。2020年12月）

会報27号の丸山剛弘氏（37回生）の論文「校歌のルーツを訪ねて」に詳しい。論文詳細は同窓会HPお知らせ欄（2020年10月12日、又はキーワード検索「校歌」）に収められている。即ち、高校創立翌年の1951年５月に大石亀次郎先生による作詞、滝田卯夫先生作曲による４拍子にて作られたが、歌われなかった。そして僅か３週間後の６月22日に藪文人先生作曲の３拍子に変更され、今の校歌が完成した。

また、旧制高校時代の寮歌が起源と思われる「新逍遥歌」があり、御井校舎時代には回生から回生へと歌い継がれていた。他には経緯不明だが「附高生節」もあった。これらの歌詞は2009年７月の福岡支部総会パンフに掲載されており、その頃までは校歌と共に歌われていたようであるが、その後のパンフには掲載されなくなった。

4. 附設（同窓会報27号。2020年12月）

1886(明治19)年４月に中学校令が公布され、第一（東京)、第二（東北)、第三（関西、中国、四国)、第四（北陸)、第五（九州）の高等中学校が設立されたが、翌年、これらに医学部が追加され、その時「附設」するという文言が使われた。即ち、同格の部門を追加し設置するという意味である。附設高等学校創立を計画した久留米医科大学理事長兼学長の小野寺直助博士が、医学部および新設の商学部に「附設」する高等学校は、大学の教授により大学と同程度に高いレベルの教育を行う学校にしたい、との念願から来たとされる。

5. 芙蓉（40年史、教育のこころ）

芙蓉は暑い夏の盛りに白やピンクの大輪の花を咲かせるアオイ科の落葉樹であり、芙蓉峰とは富士山の異名でもある。校章は1951年３月１日に制定されたが、附設の前身、久留米医科大学予科の校章を引き継ぎ、芙蓉の葉を３枚組み合わせ、「附高」、「附中」の文字を配していた。2012年10月の現校舎落成を機に「附設」になった。1982年３月に30回生が卒業時に校旗を寄贈したが、これが校旗の始まりとされる。

奨学金制度の「芙蓉奨学会基金」、高校創立２年目の1951年７月14日に創刊された文芸誌名も「芙蓉」である。

6. 扶桑（40年史、50年史）

扶桑学寮の名前は原巳冬校長が考案したもので、日本国の古名にちなみ、全国一の学寮にとの意気込みからきている。古代中国では、太陽が東から昇り西に沈む現象を、東にある巨大な桑の木に十個の太陽がぶら下がっており、毎日１個ずつ天空を移動し西に沈み、地下通路を通って再び桑の木に戻ると考えた。桑の木が再生の象徴ともいうべき生命力を持っていることによるとされる。扶は支える意であり、太陽を支える桑の木となる。寝食を共にする生徒達が元気いっぱい学び、動き廻り、そして一日の疲労を就寝によって解消し、再び夜明けと共に元気を取り戻していくエネルギー再生の場としての宿舎であって欲しい、という願いが込められている。ちなみに、扶桑学寮は1963年、ブリヂストン社長の石橋正二郎が野中町船塚の社用施設を無償貸与することで開設された。その後、扶桑学寮は1971年４月、野中校舎敷地内に新築移転した。

7. 男女共学化

1969年４月、中学１回生(高校23回生)が入学し中高一貫校となり、1975年３月卒業時には東大に30名の合格者を出すなど大きな成果を収めた。

2005年４月、高校の共学化が始まり、女子21名を含む外進高校１年生（高校56回生）が入学した。少し間を置いて2013年４月、中学生（高校67回生）の共学化が開始され、2018年４月に中高完全共学化が完了した。女子１期生（56回生）は高校創立75周年の2025年度に36才となる。

8. 久留米大学芙蓉奨学基金（25年史、教育のこころ）

近年、奨学金を利用する生徒は減ったそうだが、奨学金制度は同窓会から始まった。同窓会は1958年、新入生に毎月１千円の奨学金を貸与することにした。財源は同窓会費積立金の利息だったが、その後の物価上昇により1965年に２千円とし、事務の手間から給付に切り替えたが、同窓会財源不足により中止に至った。1972年、原巳冬校長の発案により後援会と同窓会が協力し芙蓉奨学会が設立された。その後、財団法人化など幾多の変遷の後、2010年３月末をもって「財団法人芙蓉奨学会」を清算し、４月に「学校法人久留米大学芙蓉奨学会基金」を設立した。同窓会は所期の目的を果たしたとして基金運営委員会には加わらなかった。

後援会、同窓会は奨学会への寄付金を使って学校施設・設備の拡充、教育研究も望んでいたが、財団化による定款の問題があり叶わなかった。そうした中で、2000年の高校創立50周年事業の剰余金と後援会からの新たな寄付金を原資に、2001年４月に「教育振興基金」を設立することになった。

9. 教育振興基金（学校HP）

基金運営委員会は校長が委員長として、後援会や同窓会も委員として運営に加わっている。目的は教育環境の整備及び財政基盤の充実である。基金は保護者、後援会、同窓生などによる寄付を財源としており、同窓会も毎年一定額を寄付してきたが財政難により2008年度を最後に中断した。しかし2011年に60周年事業の一環として５千万円を寄付したこと、2020年には春からのコロナ禍への緊急支援として寄付したことは記憶にある方も多いだろう（会報20号、28号、29号）。

基金による事業としては、2015年度に「情報教室整備」、2018年度に「LL教室更新」を実施した。2020・21年度にはコロナ対策を、ポストコロナには、食堂ベランダへのウッドデッキ設営、体育館演台カバー設置など、母校施設の改善事業を実施している（会報30号、31号）。

10. コロナ禍への母校支援

2020年春から未曾有の事態となったコロナ禍だが、同窓会は2020・21年度に計１千５百万円を教育振興基金に寄付した。母校は、時差通学用の臨時バス運行、全教室への空気清浄機設置、食堂座席のアクリル仕切板設置、在宅授業用タブレット端末リースなど、２年間で２千５百万円を基金から支出した。同窓会活動が制限される中で同窓会報だけは発行し、例年通りの広告協賛に協力していただいた結果、同窓会活動費と広告協賛金から資金を捻出できた（会報28号、29号）。

11. 学校法人久留米大学の評議員

同窓会は、学校法人久留米大学の評議員として法人運営に貢献している。1977年11月創立25周年の成功を機に、社会の第一線で活躍する同窓生も増えたことから、同窓会の組織や活動を久留米大学の役員・教員陣に理解してもらい、ひいては母校の教育にも貢献できるとして、大学法人の理事及び評議員への就任を要望した。10年後の1987年６月17日に國武格・副会長（３回生）が大学の評議員に就任するに至った（会報６号）。以来今日まで同窓会は評議員として大学の運営に加わることになった。

12. 同窓会の発足（25年史、40年史）

1956年夏、大学生だった１回生数名が母校に板垣政参校長を訪ね、同窓会設立を訴えたことに始まる。1957年３月に代表者が集って設立準備会を開いた後、８月14日に設立総会を開催した。同時に同窓会規約を審議し、会報や名簿も発行した。同窓会最初の大事業は1959年の高校創立10周年祭の主催であった。1977年の高校創立25周年では学校が主催者となったが、同窓会はシンポジウムを計画するなど母校を支援した。

同窓会の活動は「会員間の互助親睦および母校の発展を図る」（規約第２条）ことを目的としており、互助親睦の身近な主体は支部にあり、本部（執行部）は支部をサポートする。本部は会員への情報提供としての同窓会発行、ホームページの運営、卒業生名簿管理などや、母校の発展を図るために男く祭・体育祭・部活等への資金補助、周年事業支援や募金活動などを行っている。また前述の通り、教育振興基金の運営委員や大学の評議員として学校運営の支援活動を行っている。

註）1954年９月10日に最初の卒業生名簿が発行され、中に同窓会規約が掲載されており1954年８月22日施行となっている。しかし、会長を始めとした役員、会費、予算、等を決議した記述はなく、同窓会発足、活動開始とはならなかったようである。

13. 支部の設立

1975年春の東大合格30名（高校23回生）以降、首都圏への進学者が増え、また卒業生総数も4000名を超えたことから、支部設立のニーズが高まってきた。同窓会設立から20年後となる1976年11月の東京支部を皮切りに、同年12月大分支部、1977年６月久留米支部、同年７月福岡支部が発足した。1977年11月の高校創立25周年事業以降には、1978年12月に関西支部、1982年11月に有明支部、1984年11月に中・四国支部が発足し、支部体制が整っていった。その後、1989年６月に北海道支部、1993年６月に長崎支部、1996年４月に佐賀支部、2010年５月に熊本支部、2012年７月に山口支部（中・四国支部から分離）、2015年12月に中部支部、2024年４月に沖縄支部と、これまでに12の支部が誕生した（福岡支部に合流しOB会となった久留米支部、有明支部を除く）。

こうした間の1994年10月に規約改定が行われ、支部設置は都道府県を最小単位とし、会員数50名以上を基準とした。

福岡県内には福岡支部、久留米支部、有明支部が存続していたが、2010年７月に有明支部は有明OB会として、2015年９月に久留米支部は久留米OB会として再発足した。また、2008年に筑後OB会、2010年７月に朝倉OB会、2015年６月に筑豊OB会、2019年３月に北九州OB会が発足し、現在、福岡支部は６つのOB会を抱えることになった。

2015年12月、東北６県に計25名の在住者がいたが、支部設置基準の50名に満たないので東北OB会を発足させた。

2025年度現在、同窓会は全国に12の支部、７つのOB会を抱えている。

最大会員数を抱える福岡支部内には前述の地域別OB会をはじめ、職域別同窓会、回生代表世話人会、サロン・ド・附設（1993年１月発足）、ゴルフ懇親会などを通して互助親睦の場を提供している。急速に会員が増えつつある東京支部内でも中央官庁同窓生による霞ヶ関芙蓉会（2015年６月発足）、回生代表世話人会、新人歓迎会、就職セミナー、附設塾、ゴルフ会など互助親睦の場を提供している。他の支部でも、新人歓迎会、卒業生追出し会、医会、ゴルフ会などが開催されている。

同窓会の組織的活動ではないが、SNSでも2012年頃からFacebook上に「附設同窓会交流グループ」という交流の場が提供されている（メンバー2500人）。

14. 同窓会規約
（規約詳細は同窓会HPに）

1957年の同窓会設立と共に規約もできたようだが資料が残っていない。確認できる最古の規約は1964年のもので、以降改定が行われたが、「第２条　本会は会員間の互助親睦並びに母校の発展を図る、を目的とする。」は現在まで変わっていない。

1977年11月に終身会費制度（３万円）を導入し、50年近くが経過した現在も会費３万円は変更されていない。

1994年10月に定期総会を３年に１回の開催から２年に１回の開催とした。また、支部の設置は都道府県を最小単位、会員数50名以上を基準とした。

2012年７月に定期総会を毎年度の開催とした。

2013年７月に会計細則を新設し、終身会費会計を特別会計に、同窓会費会計を一般会計に名称変更した上で、特別会計の使途を「母校の記念行事、設備資金の支援や一般会計の赤字充当など」と明確化した。

15. 特別会費会計（旧終身会費会計）

現在の在校生は３年間で入会金・年会費・終身会費を納入しているが、卒業後には会費を徴収していないこともあり同窓会収支は決して十分ではない。在校生からの終身会費は、便宜的に特別会計に入れずに一般会計の不足を補っている（会計細則３条２にて、特別会計は一般会計の赤字補填に利用可能と定めている）。

1977年11月６日の総会で終身会費制度の導入を決定した。会報４号（1980年７月）掲載の趣意書によると「1968年の野中校舎移転及び創立25周年の図書館棟建設につき母校に協力した経験を生かすべく、母校のこうした発展を心から喜び、できる限りの協力を尽くしたい。」との考えであった。

最近では、65回生以降は校納金と一緒に全員が納入しているが、１～64回生の2023年度末の納入率は62％と伸び悩んでいる。

使途については、1998年６月の総会にて答申された。即ち「終身会費は寄付金ではなく全同窓生が義務的に払うもの。使途は、母校周年記念事業に関連する費用および同窓会発展のために必要と認められる費用。東京支部発展にできることあれば活用可。」としたものの、支出限度額は今後の議論として残った。その後、2013年７月の総会で規約を改定し、「会計細則第３条２）特別会計は、母校の記念行事、設備資金の支援や一般会計の赤字資金充当等を目的とし、総会の決議をもって支払いに充当することができる。」を新設した。

特別会費の使途実績は1997年度に初めて取崩しが発生し、2024年度までに８千８百４十万円を取り崩した。即ち、1997～1999年度に創立50周年事業活動費に１千５百４十万円（名簿発行を含む）、2003年度に名簿発行費として８百万円、2008年度に一般会計赤字補填に１千５百万円、2011年度に創立60周年への寄付として５千万円を取り崩した。

16. 思考廻廊（会報20号、21号）

高校創立60周年事業による校舎新築に併せ、同窓会の事業としての思考廻廊パネルが2012年８月に新校舎中央塔部の階段に完成した。その目的は「各回生の思いを具体的なメッセージとして陶板パネルに表現し、附設の未来につなげていく」である。１回生から60回生までを対象に、計51回生分のパネルと吉川校長による年表が掲示された。また、高校創立75周年事業の一環として、2025年３月に、前回間に合わなかった回生と、その後に卒業した73回生までを対象にパネルを追加し、合計で68枚となった。

17. 新橋有薫酒蔵の高校よせがきノート

東京・新橋の九州郷土料理酒場「有薫酒蔵」は、高校同窓生が寄せ書きを綴る「高校よせがきノート」を置いてある店として知られている。2024年12月にはノートを作った高校が3500校まで増えたが、その始まりは附設にある。１回生の隈正之輔氏が前身の銀座１丁目のお店に通い続け、今の新橋店に移転した後の1987年７月に、店を訪れてくる附設同窓生のための伝言ノートを作ったのが１校目であった。1988年２月24日、大石亀次郎先生（当時100才）に巻頭言を揮毫してもらい、同じ１回生の同窓会長・西牟田忠志氏、東京支部長・豊田勝業氏と３人で署名し、ノートの体裁が整った。女将は岩国高校出身だが祖父は久留米出身の画家、青木繁であり、大将は久留米商業出身である。女将のノートに捧

げる情熱と執念なくしては今の姿はない。お店主催のゴルフコンペには附設も毎回出場し、同窓会報にも毎年広告協賛を頂戴している。

18. 東京高牟礼会と くるめつつじ会（東京での活動）

高牟礼とは高良山の別称で、東京高牟礼会は久留米市にある９高校（明善、南筑、久高、久商、三潴、浮工、高専、信愛、附設）の在京同窓会の連合体として、情報交換と親睦、久留米と東京をつなぐ役割を目的に1996年から活動している。久留米市は1993年から東京交流会を主催してきたが、1999年に久留米市東京事務所が開設されたのを機に東京高牟礼会と統合し、翌年「くるめつつじ会」を設立した。くるめつつじ会は、久留米市東京事務所が中心となり、首都圏在住の郷土出身者と久留米市の交流の場として活動している。附設同窓会は当初から東京高牟礼会のメンバーであり、東京支部を窓口とし、各高同窓会の東京（関東）支部総会には互いに招待しあうなど懇親を深めている。毎年１月発行の会報「東京たかむれ」には東京支部総会の様子を掲載している。他には、昭和初期から続く久留米同郷会の主催で、毎年１月10日に、日本橋近くの水天宮（久留米水天宮の分社）に昇殿参拝し、賀詞交換会が催されている。

19. 同窓会報（40年史「仰慕帰心」）

残念ながら１～３号が紛失したままである。40年史のＰ38には同窓会設立時に会報が発行されたとあり、１号は1957年８月14日の発行と思われる。Ｐ10には会報２号の写真があり、1959年８月５日の発行で「附設高校10周年記念祭開かる（1959年８月17日（前夜祭）18日、附設高校同窓会主催）」とある。Ｐ38には会報３号の写真もあり1959年12月15日発行とある。４号以降は全号が同窓会室に保管してある。

20. 広告協賛金

2006年６月に福岡支部総会・久留米支部総会・定期総会が同時開催され、そのパンフに初めて広告が登場した。東京支部総会では2010年から寄付を募っていたが、2012年の支部総会パンフで初めて広告協賛を募ることになった。会報も20号（2013年５月）から広告協賛を募ることにより会報発行費用の一助とした。当初は福岡・東京支部総会の幹事学年（27・33回生）が別々に広告を募っていたが、2016年から両支部総会幹事学年が会報と併せて広告協賛を募り始め、本部・福岡支部・東京支部の運営財源として多大なる貢献をいただいている。

21. 同窓会報のトピック

▶会報４号
高校創立25周年――――――1980年７月

21年振りの会報発行となる。1977年11月６日には高校創立25周年事業、図書館新築、元東大総長の大河内一男氏による記念講演「学問のすすめ」が実施された。

▶会報５号
板垣校長の胸像建立――――1986年11月

1980年12月に初代校長の板垣政参先生の胸像を寄付金により建立した。

▶会報６号
高校創立40周年――――――1988年11月

会報はタブロイド版モノクロだが、最後の１

ページをカラー刷とした。創立40周年に向け、8月に解体された武道場と翌年9月竣工予定の新体育館建設の様子を空撮カラー写真にて紹介した。

1988年1月15日に大石亀次郎先生が満100歳を迎えられたが、同年8月25日に原巳冬先生が逝去された。

1987年春の東大合格51名と初の50名超え、1988年春は55名が合格した。

▶会報7号
高校創立40周年――――――1989年10月

11月3日に落成したばかりの体育館にて記念式典、講演会（糸川英夫博士）、同窓会総会、シンポジウム、祝宴を予定する。

▶会報8号
附設揺籃之地記念碑建立――――1991年1月

1990年11月17日、久留米大学御井キャンパスのテニスコート南面、旧校舎南通用門付近に「久留米大学附設高等学校揺籃之地」（世良忠彦前校長筆）の記念碑が創立40周年寄付金により建立された。

▶会報9号
利根川博士による講演――――――1993年4月

1991年7月14日に実施した利根川進博士（1987年ノーベル医学・生理学賞）による講演とその経緯（2年前、41回生が高1の時に交渉開始）が誌面を飾る。

▶会報10号
サロン・ド・附設はじまる――――1994年9月

福岡地区の同窓生が1500人を超えたのをきっかけに定例会「サロン・ド・附設」が福岡にて始まった。

財団法人芙蓉奨学会の設立目的は、同窓会の立場からは、久留米大学の経営に影響を受けずに寄付金が母校の財源として残ること、後援会の立場からは、奨学金事業と教員への研究助成事業が安全に行なえることであった（教育のこころ）。

▶会報11号
エネ庁長官・川田氏の講演――――1996年4月

1994年10月8日、資源エネルギー庁長官の川田洋輝氏（8回生）による特別講演「日本のエネルギー対策」を福岡国際ホールにて実施した。

1995年10月15日、附設高校野球部が第9回九州大会県大会で優勝したが、11月4日の九州大会では準決勝で無念の涙であった。同窓会長崎支部は大量の平戸牛とドリンク剤を持ち込んで応援した。

▶会報12号
高校創立50周年事業――――――1998年5月

高校創立50周年・中学創立30周年事業として、寮の改築、正門付近の整備が4月に着工された。募金目標は同窓会1億円、後援会1千5百万円とした。

サロン・ド・附設は1994年1月に福岡で始まった。その後1997年に久留米、1998年に東京でも始まった。東京支部では、就職支援活動、医療援助活動、法律相談なども始めた。

1998年4月に附設高校生徒会は第28回男く祭記念文集「Kháos」を刊行。マンネリ化した文化祭を根底から問い直そうと、同窓生に投稿を依頼し、1年かけて編纂した。

▶会報13号
高校創立50周年事業――――――2000年10月

高校創立50周年・中学創立30周年記念の教育シンポジウムの一環として「21世紀を拓くリーダーの育成～教育基盤に関する報告書」を刊行した。

募金活動の結果、2000年９月末現在で1695件7572万円が寄付された。

▶会報14号
高校創立50周年事業――――――2001年３月

久留米大学の支出は校門等景観整備・扶桑学寮建築に８億９千万円、記念事業に４千４百万円だった。50年史「和而不同」や同窓会名簿を刊行し、進路シンポジウム、記念講演、記念式典・祝賀会を開催した

▶会報15号
教育振興基金設立――――――――2002年５月

福岡支部は支部総会を毎年開催に変更し、サロン・ド・附設を北九州でも開催した。

東京支部は、サロン・ド・附設、就職セミナーを実施した。

2001年４月に教育振興基金が設立された。教育環境の整備・充実化に向けた議論の場として母校と大学、後援会、同窓会による協議会が発足した。

▶会報16号
高校男女共学化へ――――――――2005年１月

孫正義（24回生）氏がホークス球団のオーナーに就任した。

３月の53回生卒業により同窓生総数は１万人を突破し、４月の56回生入学により男女共学がスタートする。

▶会報17号
高校創立60周年事業――――――2007年２月

高校創立60周年・中学創立40周年事業（大学80周年）として校舎建設を発表した。旧高校寮の跡地に校舎を新築し、耐震構造対応、40人学級対応、共学化対応などを図る。

▶会報18号
高校創立60周年特集――――――2009年３月

2007年７月に同窓生有志が「アーキテクツ21」を結成し校舎建設への助言を大学に行う。

2008年12月、同窓会名簿CD版を製作した（個人情報保護、経費節減）。

2008年の宮中行事「歌会始の儀」に中学生が入選、翌年も中学生が入選した（４度目）。2008年３月に高校女子１期生（56回生）が卒業した。2008年７月の高校総体では高３生が100Mで４位入賞した。

▶会報19号
会報がＡ４版カラーに――――――2011年11月

2011年４月、60周年募金の一環として終身会費会計から母校の教育振興基金に５千万円を寄付した。

新校舎は2011年８月に東棟（高校）が、2012年末に西棟（中学）が完成し、2013年３月までに１号館を改修し全面供用開始予定である。同窓会の記念事業としては思考廻廊パネル設置を計画した。

2011年３月11日の東日本大震災に対し６月から「修羅救世募金」を開始した。

▶会報20号
会報がＡ４冊子カラー刷広告付に
――――――――――――――――2013年５月

「附設アーキテクツ21」による新校舎及び思考廻廊の設計経緯が報告され、旧校舎の思い出を隈正之輔氏（１回生）、藏守俊昭氏（18回生）、図書館長の西原和美先生が語っている。

高良随想、卒業生への支援、進路講座の記事が始まり、「高良随想」は、國武豊喜氏（２回生、化学者、2011年瑞宝重光章受章）、および、中野三敏氏（２回生、日本文学研究者、2012年

瑞宝重光章受章）を紹介した。「卒業生への支援」では、東京支部による就職セミナー、新人歓迎会の様子を紹介した。「進路講座」は2000年の50周年記念行事から始まったが、目的は卒業生から社会における活躍の様子を語り、本校卒業生にふさわしい職業観、人生観の確立への一助となす、ことにある。

2011年に開始の東日本大震災への修羅救世募金の中間報告を行なった。

▶会報21号
1回生の思考廻廊が表紙に登場
――――――――――――――――2014年8月

2013年11月、新校舎竣工記念講演会が母校、福岡、東京で開催された。母校では川嶋文信氏（19回生、三井物産㈱・副社長）、福岡では西鉄ソラリアホテルにて、高橋精一郎氏（22回生、㈱三井住友銀行・専務）が、東京では品川プリンスホテルにて河村浩明氏（23回生、㈱シマンテック・社長）が講演した。

会報記事として、同窓会長、久留米大学の理事長・学長、附設校長、後援会長のあいさつ、支部だより、高良随想、海外だより、会務報告、卒業生への支援、在校生への支援、社会への支援、母校のいま、古希祝い、還暦祝い、広告協賛、編集後記、とその後も続く内容が確立された。

▶会報22号
國武豊喜氏が文化勲章受章――2015年8月

國武豊喜氏（２回生）が2014年秋に文化勲章を受章した記念講演会を、2015年２月22日福岡で、４月24日東京にて開催した。

2014年７月、全国高等学校総合文化祭「いばらき総文2014」にて附設高校演劇部が演劇部門最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞、８月31日、国立劇場にて優秀校公演会が開催され、その前日に祝賀会を行った。

▶会報23号
周期表手ぬぐいを母校に寄付
――――――――――――――――2016年8月

福岡・東京の支部総会幹事学年（27･33回生）が共同して広告協賛を募り始めた。会報史上最大ページ166頁を記録した（表紙と本文95頁、広告71頁）。2015年に４つの新元素が誕生し、113番がニホニウムと命名されたことを記念した「周期表手ぬぐい」を作り、母校へ寄付した。

▶会報24号
中学１回生の町田健校長就任
――――――――――――――――2017年8月

2017年４月、町田健校長が就任した（中学１回生・高校23回生）。また、久留米大学90周年事業募金を開始した。

▶会報25号
中高完全共学化完了――――――2018年8月

2018年４月の中１の共学化により中高完全共学化が完了した。

中野三敏氏（２回生）が、2016年秋に文化勲章を受章、ご本人からも投稿いただいた。國武豊喜氏に次ぐ、２回生から２人目の受章となった。

高校２年生が「第５回高校生ビジネスプラングランプリ」にてファイナリスト10校となる優秀賞を受賞し、2018年１月７日、東大にて最終審査会に出場した。

▶会報26号
久留米大学90周年記念事業――2019年8月

大学90周年募金に１千６百７十万円の寄付が集まった。

▶会報27号
コロナ禍はじまる――――――2020年12月

2020年春から猛威を振ったコロナ禍により同窓会活動は大きな制限を受けた。５月の理事評議員会と７月の定期総会は延期し、緊急事態宣言が一旦解除された９月26日に同時に行った。母校も新学期は６月開始となった。同窓会は母校からの緊急要請を受け可能な限りの支援を行った。樋口忠治氏（２回生、第８代校長）による「附設」のいわれが紹介された。校章は「附高」に始まり「附中」が追加され、今は「附設」になった。

丸山剛弘氏（37回生）による「校歌のルーツを訪ねて」の論文は、東京支部総会にて発表予定だったがコロナ禍により誌面および同窓会HPでの発表となった。

▶会報28号
在校生が大活躍――――――2021年12月

コロナ禍継続となり、本部の定例会議、定期総会や福岡・東京の支部総会はオンラインでの開催となった。母校のコロナ対策に2020年度は７百６十万円を寄付した。

高３生が国際物理オリンピックで金賞を受賞するなど、15もの大会で大活躍の年だった。

▶会報29号
高校創立75周年委員会発足
――――――――――――――2022年８月

表紙の思考廻廊について回生の順番が早く回るように２学年ずつに変更した。

2021年度も母校のコロナ対策に７百５十万円を寄付した。

江上寛二先生の個展「壺中天～いのちのふるさと～」が2022年５月に朝倉市の画廊にて開催された。

４月８日、高校創立75周年・中学創立55周年記念事業委員会を学校・後援会・同窓会の三者にて立ち上げた。

▶会報30号
高校創立75周年募金開始―――2023年８月

コロナ禍から解放され、同窓会活動のリアル開催が戻ってきた。

７月から高校創立75周年・中学創立55周年事業への募金活動を開始した。

記念事業の一環として思考廻廊パネルの続きを企画することにした。

▶会報31号
沖縄支部設立――――――――2024年12月

2024年４月14日、沖縄県那覇市で39名の有志が集まり懇親会を開催、12番目の沖縄支部設立を表明した。

（文責：吉田清隆（23回生））

歴代同窓会長氏名

	氏　名	回　生	年　度
初　代	西牟田 忠志	１回生	1957～1992
第２代	國 武　　格	３回生	1993～1999
第３代	井 手 和 英	８回生	2000～2005
第４代	古 賀 暉 人	10回生	2006～2009
第５代	長谷川 房生	13回生	2010～2014
第６代	川 嶋 文 信	19回生	2015～2017
第７代	高 橋 友 作	19回生	2018～2019
第８代	吉 田 清 隆	23回生	2020～

同窓会の歴史年表

西暦年度	和暦年度	入学回生	同窓会のイベント（一部に母校、後援会を含む）
1928	S 3		久留米大学の前身、九州医学専門学校設立。
1950	S25	1	4/8、１回生入学式。
1951	S26	2	3/1、校章制定。 ５月、校歌制定（４拍子）。 6/22、校歌改定（３拍子、大石亀次郎詞、藪文人曲）。 7/14、井上敏郎先生、文芸誌「芙蓉」創刊。
1952	S27	3	1953/3/11、１回生99名卒業。
1953	S28	4	6/6、後援会発足。
1954	S29	5	8/21、最初の同窓会開催、名簿発行。
1955	S30	6	
1956	S31	7	4/11、補習科開講。 夏に１回生の西牟田、隈、森山、高松、中野、末永等は板垣校長を訪ね同窓会設立を提案した。
1957	S32	8	8/14、同窓会設立総会、西牟田忠志①初代会長就任。同窓会報１号発行。 ２回目の名簿発行。
1958	S33	9	同窓会が奨学金制度を発足させ、新入生に同窓会から奨学金月１千円を貸与した。
1959	S34	10	8/5、会報２号発行。 8/17、第２回総会。 11/15、第３回総会。 12/15、会報３号発行。
1960	S35	11	8/17、総会。
1961	S36	12	
1962	S37	13	３回目の名簿発行。
1963	S38	14	扶桑学寮、野中町船塚に開設。
1964	S39	15	
1965	S40	16	同窓会は奨学金月２千円に増額、貸与から給付に変更（その後中止）。 1966/3、14回生が初めての卒業アルバム作成。過去の卒業写真は組単位で撮影した。
1966	S41	17	
1967	S42	18	４回目の名簿発行。 文芸誌「芙蓉」19号にて廃刊。
1968	S43	19	7/20、野中校舎へ移転。 8/16、総会。５回目の名簿発行。
1969	S44	20	４月、中学１回生１クラス入学。
1970	S45	21	高校創立20周年、小規模式典実施。
1971	S46	22	４月、扶桑学寮が野中校舎内に新築移転。
1972	S47	23	芙蓉奨学会設立。
1973	S48	24	
1974	S49	25	1975/3、高校23回生（中１回生）卒業、東大30名に躍進。
1975	S50	26	同窓会は、25周年（大学50周年）事業、図書館棟建設に２千万円を寄付。
1976	S51	27	11/27、東京支部発足（豊田勝業①支部長）。12/4大分支部発足（高松史朗①支部長）。
1977	S52	28	6/18、久留米支部発足（伊藤博明①支部長）。7/16、福岡支部発足（鹿毛勲臣①支部長）。11/6、総会、終身会費制度導入を決議、大学へ役員（理事、評議員）としての参画要望書提出。11/6、25周年記念行事、高校25年史発行。
1978	S53	29	12/16、関西支部発足(田中康弘①支部長)。
1979	S54	30	
1980	S55	31	7/10、会報４号発行。12/13、総会。 12/13、高校創立30周年記念事業として板垣政参初代校長胸像建立（寄付953名、656万円）。
1981	S56	32	４月、「人格なき財団 芙蓉会」設立、理事長は原巳冬、役員は後援会３名、同窓会２名、高校３名。1982/3、30回生が校旗を寄贈（校旗の始まり）。
1982	S57	33	芙蓉会、職員１名採用、給与は後援会・同窓会が毎年拠出。11月、有明支部発足(江崎温①支部長)。
1983	S58	34	６月、「財団法人芙蓉奨学会」発足（後援会45百万円＋同窓会５百万円）。後援会が運用資金として87百万円寄付。以後、同窓会は毎年１百万を寄付。12/3、総会。
1984	S59	35	11/25、中・四国支部発足(森康②支部長)。
1985	S60	36	
1986	S61	37	11/3、会報５号発行。1987/1/３、総会。
1987	S62	38	6/17、国武格③副会長が学校法人久留米大学の評議員に就任。 ７月、新橋有薫酒蔵に高校よせがきノートを設置。
1988	S63	39	11/25、会報６号発行（１ページのみカラー刷り）。
1989	H01	40	6/3、北海道支部発足(末永義圓②支部長)。10/3、会報７号発行。11/3、総会。 11/3、高校40年史（仰慕帰心）発行。
1990	H02	41	11/17、附設揺籃之地記念碑建立。 1991/1/31、会報８号発行。
1991	H03	42	7/14、利根川進博士（1987年ノーベル医学・生理学賞）による講演。
1992	H04	43	4/1、中村昌子事務員、学校から同窓会・後援会に移る。
1993	H05	44	4/30、会報９号発行。5/22、総会、國武格③第２代会長就任。5/22、長崎支部発足(柿本末人③支部長)。1993/1、サロン・ド・附設、福岡にて始まる。 1994/3、補習科廃校(?)。
1994	H06	45	9/20、会報10号発行。10/8、臨時総会を開催し、総会を３年に１回から２年に１回に、支部設置は都道府県を最小単位とし会員50人以上を基準に。
1995	H07	46	
1996	H08	47	4/20、佐賀支部発足(副島恵治①支部長)。4/30、会報11号発行。6/1、総会。 東京高牟礼会の活動が始まる。

西暦年度	和暦年度	入学回生	同窓会のイベント（一部に母校、後援会を含む）
1997	H09	48	5/17、臨時総会。 1998/1/10、「東京たかむれ」第１号発行。
1998	H10	49	5/30、会報12号発行。6/27、総会。
1999	H11	50	1997～1999年度に50周年活動費として終身会費会計から15.4百万円を取崩し（名簿発行を含む）。
2000	H12	51	6/24、総会、井手和英⑧第３代会長就任。10/20、会報13号発行。 11/3、50年史（和而不同）発行。金）。 2001/3/15、会報14号発行。
2001	H13	52	4/1、教育振興基金設立、基金に620万円寄付(50周年募金残)。
2002	H14	53	同窓会HPを開設。基金に120万円寄付。 5/15、会報15号発行。6/15、総会。 ９月、國武格③第２代会長逝去。
2003	H15	54	基金に120万円寄付。名簿発行に終身会費会計から８百万円を取崩し。
2004	H16	55	基金に120万円寄付。6/6、総会。 2005/1/20、会報16号発行。
2005	H17	56	４月、高校共学化開始。 基金に120万円寄付。６月、会長選考委委員会を設置。
2006	H18	57	基金に120万円寄付。6/25、総会、古賀暉人⑩第４代会長就任。福岡支部総会パンフに初めて広告掲載。2007/2/28、会報17号発行。
2007	H19	58	７月、「アーキテクツ21」を結成。 基金への毎年寄付中止。
2008	H20	59	6/15、総会(一般会計赤字補填に終身会費会計から15百万円を取崩し)。 12月、CD ROM名簿発行。 筑後OB会発足。 2009/3/18、会報18号発行。
2009	H21	60	7/4、総会。2010/3、「財団法人芙蓉奨学会」清算（2010/4、学校法人久留米大学芙蓉奨学会基金が設立されるも、同窓会は所期の目的を果たしたとして基金運営委員会に加わらず）。
2010	H22	61	5/20 熊本支部発足(石川浩一郎⑩支部長)。60周年募金48百万円を母校(大学)に寄付。7/3、総会、長谷川房生⑬第５代会長就任。７月、有明OB会、朝倉OB会発足。
2011	H23	62	4/29、60周年向けに終身会費会計から教育振興基金に５千万円を寄付。 6/1、後援会が「教育のこころ」（芙蓉奨学会の歴史、教育の理念、等）を発行。 11/1、会報19号発行（タブロイド版からＡ４版に変更）。
2012	H24	63	7/1、規約を改訂し、総会を２年に１回から毎年開催に。 7/27、山口支部発足(小柳信洋⑭支部長)。 ８月、思考廻廊完成。10/9、新校舎落成式。 11/29、西牟田忠志①初代会長逝去。
2013	H25	64	４月、中学校共学化開始。 5/1、会報20号発行（毎年発行に）、会報に初めて広告を掲載。 7/7、総会（会計細則を新設し特別会計使途を明確化）。WEB名簿発行。
2014	H26	65	7/21、総会。８月、会報21号発行（表紙に１回生の思考廻廊を掲載）。 國武豊喜氏(２回生)が2014年秋に文化勲章を受章。
2015	H27	66	６月、霞が関芙蓉会発足。 6/9、筑豊OB会発足。 7/26、総会、川嶋文信⑲第６代会長就任。 ８月、会報22号発行。 9/12、久留米OB会発足。 12/4、中部支部発足(石井三紀㉑支部長)。 12/27、東北OB会発足(小川進⑳幹事長)。
2016	H28	67	7/18、総会。福岡・東京の支部総会幹事（27/33回生）が共同して広告協賛を募ることになった。８月、会報23号発行。 中野三敏氏(２回生)が2016年秋に文化勲章を受章。
2017	H29	68	7/16、総会。８月、会報24号発行。
2018	H30	69	４月、中高完全共学化達成。 6/16、川嶋文信⑲会長急逝。 7/29、総会、高橋友作⑲第７代会長就任。８月、会報25号発行。WEB名簿改訂。2019/3/９ 北九州OB会発足。
2019	R01	70	7/14、総会。８月、会報26号発行。
2020	R02	71	9/26、コロナ緊急事態宣言の合間を縫って理事評議員会と総会を同日開催、吉田清隆㉓第８代会長就任。12月、会報27号発行。コロナ支援として母校(基金)へ706万円を寄付。
2021	R03	72	7/18、理事評議員会と総会をオンラインにて同時開催。12月、会報28号発行。 コロナ支援として母校(基金)へ749万円を寄付。
2022	R04	73	4/8 高校75周年中学55周年記念事業委員会発足。7/17、総会。８月、会報29号発行。
2023	R05	74	7/16、総会、75周年募金開始。 ８月、会報30号発行。
2024	R06	75	4/14、沖縄支部設立(清水明㉓支部長、12番目)。7/28、総会。12月、会報31号発行。2025/3、思考廻廊(２回目)完成。
2025	R07	76	7/20、総会。 11/2、75周年記念式典（予定）。

同窓会各支部寄稿

北海道支部会

北海道支部会は1989(平成元)年に2回生(故)末永義圓さんを中心に、3回生松永直幹さん、20回檀浦龍二郎さんらにより、卒業生だけでなく、道内の各大学に勉学のため来道された学生さんの応援も兼ねての支部創設となり、今日に至っています。久留米を出て遠く北海道で一人生きていくぞと気持ちを定めても、ふと高校時代の友人や、先生に相談したいなと人寂しく思う時がありはしないかと、2024年8月24日に88歳で亡くなられた末永さんは創設の当時を振り返り、お酒を飲みながら楽しく、うれしそうにお話しされていました。

それから36年が経過しました。現在支部の所属名簿には20数名の方々のお名前があり、社会人となって働いておられる方は12名ほどです。学生の方は北大進学の方が多く、そのほかには札幌医科大学、帯広畜産大学などの学生さんが居られます。学生さんは常に若さに溢れた気概を持ってお話ししてくれますが北海道に「上陸」される方々の多くは、その後本州や九州に帰られる方も多く、3月は寂しい気分になります。

同窓会では、久留米で勉学に励んでどうしてこんな遠い北海道に来たの？　とそれぞれの人生選択を伺うことが楽しいです。初めはその寒さや雪に囲まれた生活が楽しくもあり、嬉しそうですが、2年、3年と日々を重ねると、久留米が恋しくなるようです。反面、生活の拠点をこの冬の大地に築く人も出てきて、私や同級の檀浦君は“やはり女性は強い”とその決断をウフフッとみて喜んでいます。反面、北海道から附設中・高に進まれる方もおられるようで、早く帰って来られるのを待っています。

北海道支部の活動は年1回、6月の北大祭ごろに札幌の飲みどころススキノでビール乾杯を行っています。コロナ禍の時代を通り抜け、昨年はなんと久留米から同窓会役員の方々の出席をいただき、久留米弁が飛び交う賑やかな会になりました。ご出席本当にありがとうございました。道内で仕事に従事されている方は札幌ばかりではなく、函館、名寄、士別、帯広にもおられます。皆久留米弁を忘れずにお仕事されていることと思います。附設高校が創立75周年を迎える年になり、今一度心を改めて遠く久留米を思い出しながら、日々を過ごしていきたいと思っています。現在支部では私が支部長ですが、43回生の桜木修君が事務方を担当しています。北海道に興味を持つ在校生の諸君、「大志」を抱いて北の大地へ挑戦してください。

（文責：支部長　西見寿博（20回生））

東北OB会

2015年2月、当時の一瀬副会長（13回生）より東北支部を立ち上げてほしいとの要請が小川（20回生）にあり、同窓会事務室より東北6県在住の卒業生名簿と支部規約を頂く。しかし規定には会員50名以上とあり、東北在住者は23名で絶対数が不足。そして連絡が取れたOBは15名。この人数で委任状を取り総会を開催した上での役員の承認、監査など無理であった。そこで准支部として設立することで本部の承認をもらい、2015年12月18日に「准支部設立申請書」を発起人3名の連名で提出し、同月27日に初の懇親会を実施した。参加者は東北5名＋東京支部2名であったために、日帰りで開催できる仙台駅ビルの料亭で昼食会とした。

（同窓会誌23号より）「19回生までは工兵隊兵

舎が校舎だった」「東北には私立の進学校が存在しないため、私立高への評価が低い」「東北は自然豊かで暮らしやすい」「母校は共学化が進み合唱コンクールも開催されている」などの話題が出た。また今後の活動としては、

⑴　正式の支部ではなく、「准支部」として発足。

⑵　准支部は同窓生の連絡組織として機能させる。

⑶　活動内容

・年１回程度、懇親会もしくは歓迎会を開催する。

・東北地域への転入者（特に進学者）の把握に勤める。

・当面は東京支部の一部として活動する。

・「東北OB会」と称する。

東北OB会（第２回懇親会）

（同窓会報24号より）2017年４月22日(土)仙台駅隣接のメトロポリタンホテルで昼食会として開催。

この年は高校より東北への進学者の連絡先を頂き、東北大１年のＳ君（61回生）の歓迎会を兼ねる形で開催。川嶋同窓会会長にもご参会いただきました。参加者（東北５名、東京３名)、大学生参加費1000円。現役大学生の明るい話は附設生の東北での活躍を期待させるものがありました。彼からの希望で来年は大学新歓が終わる５月連休明けに開催する事になりました。

（文責：小川（20回生））

2017年東北OB会

東北OB会（これから）

小川様の帰郷に伴い、里村（19回生）が東北OB会の事務局を担当することになりました。個人情報保護の関係上、東北地区在住者・進学者の把握が難しく、また、その後の新型コロナウイルス感染症対策もあり、東北OB会の活動は休止しております。が、2023年秋に59回生の

2023年プチ同窓会

2023年吉開さんによる講演

大石裕太さんが仕事の関係で青森に転勤してこられたとの情報が入り、12月に青森市で歓迎会を開催。翌年１月には、私の勤務する学校で33回生吉開章様の「やさしい日本語」の講演会を実施し、その際に大石さんと３人でプチ同窓会を八戸で開催しました。

コロナも収束しましたので、これからは、東北在住者の把握に努め、東北OB会を復活し、OBによる講演会などを行い、東北の地にも附設の名を広めたいと思います。東北在住のOBの皆様、連絡をお待ちしています。

（文責：里村（19回生））

東京支部

当初本稿では東京支部の現在を記録としてご報告することが主だと考えましたが、その前にさて東京支部はいつから？　歴代の支部長は？主だったイベントは？　等々右から左に出てこないことばかりで困り果ててしまいました。

ところが救う神があるもので、吉田清隆現会長がかなり前から母校の同窓会室に保管されている備品や資料の整理を続けておられ、私も多少手伝っていますが、非常に献身的にまさしく頭が下がる作業を続けておられます。

そうした中で未完成ではありますが、同窓会の歩みが徐々に発掘されつつあります。

東京支部は1957年に同窓会本部が発足して20年近く経た1976年11月27日に全国で最初の支部として設立されました。

記録によれば、初代支部長豊田勝業先輩（１回生、在任16年）に始まり、渡辺望稔先輩（８回生、在任10年）、長縄雅夫先輩（14回生、在任11年）、小田惠介先輩（19回生、在任６年）に続きまして栗木康幸（21回生、在任６年経過）が現在支部長を務めています。

思えば東京支部が発足した年、すでに私は大学生として東京に住んでいました。

しかし先輩方から呼び出され「そろそろ幹事学年だから仲間を集めておくように」と言われる50歳少し前まで同窓会のことをまったく知りませんでした。

さらに幹事団に加わった後も海外赴任が続いたことで、同窓会へのかかわりが薄いまま支部長を拝命したのが新型コロナの蔓延が始まった2020年だったため、何も実践できずに時間だけが過ぎてしまいました。

反省や後悔をしても仕方がありませんが、もう少し若いうちから関わっていたらと思うことばかりです。

とはいえ現在の東京支部では支部総会をはじめとして、回生代表世話人会、附設塾、新人歓迎会、就職支援セミナーなど公式イベントに加え、久留米に本校を置く高校（９校）の親睦団体である「東京高牟礼会」、久留米市が主催する「くるめつつじ会」などの懇親会や様々なイベントに積極的に参加しています。

毎年他校の同窓会にも参加していますが、わが校より30年50年以上歴史を経られた高校ばかりで、ここでは老若がともに集う場をいかにして運営していくかに腐心されています。

幸いに現在のわが校では大学生世代も多くの参加がありますが、例えば高校100周年に向けての同窓会のあり方を模索していくことも我々に与えられた使命であろうと思います。

久留米大学附設高等学校創立75周年・中学校創立55周年を迎えにあたり母校の発展に力を尽くして来られた先輩方、関係者の方々に深く敬意を表しつつ、今同窓会の一員としていられることを心から嬉しく感謝しています。

（文責：栗木康幸（21回生））

中部支部

中部支部は2015(平成27)年12月に支部総会宴会と共に産声を上げました。発足時の支部長が石井三記さん（21回生)、その後の２代目が町田健現附設校長（23回生、当時、名古屋大学文学部教授）という由緒正しい(？)支部であると伝承されております。

その後、毎年年末（最近は11月第４土曜日）夜に、本部からの臨席も頂き、交通の便の良い名古屋駅付近で支部総会（支部総宴会？）を開いています。支部の活動は殆どこれのみに全力を注いで(？)いる状態ですが、例年20名ほどの同窓生（大部分はそれなりの高齢者、ごく一部20～40歳代）が集まって楽しく歓談するのが常です。

2020、2021年はコロナで中止となり、2024年11月23日の開催が第８回でした（＝もうすぐ10年選手です！)。この間に、支部長は石井三記→町田健→安井健三（14回生）→守瀬善一（29回生）と代替わりしています。支部長の回転は結構速いのですが、ほかの役員（現在、監事：末永哲康（16回生)、副支部長：権藤泰光（21回生)、荒巻卓博（29回生)）は足抜け出来ずに続け（させられ？）ている人が多く、荒巻君などは中部地区を遠く離れた京都方面から指令を飛ばしながら、宴会にやってきたりしています。

大学で中部地区に出てきた若手？　の会員もいますが、この地区はトヨタをはじめとした製造業が盛んなところで、支部会員もそのような様々な企業に就職されて中部地区を終の棲家に定めた人が多く、宴会では各メンバーの専門分野話で盛り上がり、久留米近郊の地元話で盛り上がっています。

中部地区には名古屋を始め多くの大学もあり、若手もひそかに生息しているはずだと勝手に思っているのですが、発掘される人はまれで、今後の発掘作業で（75周年を機に）有為な若者がメンバーに多く加わってくれることを支部会員一同心から祈念しております。11月第４土曜日に東海道新幹線に乗られた方は（“名古屋飛ばし”をせずに)、是非中部支部宴会にお立ち寄りください！

（文責：守瀬善一（29回生))

関西支部

関西支部の来し方～75周年記念誌に寄せて～

関西支部は５回生の友添郁夫先輩に多くを負っています。先輩は裁判官に任官後、弁護士に転じられ活躍されました。法律事務所を長年主宰する傍ら、関西支部の運営にも尽力されました。高名な弁護士であられたので、関西支部同窓会には毎回50名を超える参加者がございました。一方、2014年の関西支部総会で、「わしも74歳で、もう歳じゃから支部長を退任する。」と仰せられ私を含む数名に後事を託されました。在任中は色々の苦労があられたようで、「関西地区２府４県400名弱に往復葉書で支部総会開催通知をしても、返事も出さんやつがおる！東大に何人入ろうと立派な学校とは言えん！」と胸の内を吐露されたこともありました。本稿作成に際し、友添先輩にお会いする事は叶いませんでしたが、弁護士事務所事務長によれば元気で御過ごしの由を伺っております。

さてお引き受けしたものの参加者は漸減の一途を辿り、当時の小田惠介東京支部長（19回生）の助言もあり、学生参加者を漸増させるべく2014年６月関西支部初の新入生歓迎会を開催

しました。学生会員の増加により、2016年には「関西支部だより」が刊行され、関西支部の「同窓会則」も制定されました（61回生佐伯洋輔さんによる）。又、同窓会ホームページに関西支部のページも開設されました（64回生吉田龍弥さん、廣田律さん）。又この年、年末の総会で佐伯洋輔さんと廣田律さんを評議員に選任しました。

2018年６月初めて京都にて新入生歓迎会を開催致しましたが（学生46名、社会人15名、計61名参加）、出席予定であられたものの６月16日に逝去された川嶋文信会長（19回生）を悼む会ともなってしまいました。

2020年11月の総会を開催した折は、新型コロナが不気味な影を投げかけ始めておりました。ご承知の如く、その後は外出もままならぬ日々が続き、関西支部活動としては2021年９月11日のZoomでの支部総会に留まりました。２年半の空白後、初めての対面での支部総会（2022年８月。学生８名、社会人７名、計15名）、2023年12月の新入生歓迎会兼関西支部総会（学生８名、社会人15名、計23名）、2024年８月の新入生歓迎会（学生７名、社会人14名、計21名）、はいずれも小粒な会となってしまい、最盛期の計61名に及ぶべくもありませんが、参加者の漸次増加に向け老若男女手を携えて運営して参る所存です。

（文責：甲斐田郁夫（21回生））

中四国支部

附設高校同窓会中四国支部活動の歴史

中四国支部の歴史を振り返ると、諸先輩の方々のご苦労の跡を垣間見ることになる。そして、現在に至るまでの裏方の皆様のご苦労をも、改めて実感するに至る。

1984(昭和59)年11月25日、中四国支部の設立総会が開催された。当時の世良校長先生、西牟田会長、国武副会長のご来賓を迎え、森康支部長（２回生）が選出されて、支部が始動したのである。爾来、第13回支部総会が2023(令和５)年11月18日に開催されるまで、40年の重みを感じることとなった。支部長も７代を数え、美山靖（１回生）、麻上義文（１回生）、松田英毅（４回生）、森山弘行（３回生）、今田忠則（19回生）、現支部長近藤治幸（16回生）へと連なっている。

支部総会の開催は、２年毎開催の時代から今では３年毎の開催となっているが、年２回の懇親会（夏はビアパーティー、冬は忘年会又は新年会）の開催を継続してきた。

思えば、コロナ禍の三年余りには憾みを残している。支部総会も中止の憂き目、幹事会の面前打ち合わせも遠慮し、Zoomやメールを駆使しながら打ち合わせをしたのも、今や遠い過去になってしまった。ただ、総会等の案内を往復はがきに印刷したり、人海戦術で宛名書きをして発送していたのを、会員からメールアドレスを入手しメール配信にしたり、事務局も工夫を凝らしてきている。まだまだ、手紙案内に頼らざるを得ない面は残っており、今後の会員拡大の地道な努力も求められる。

支部長・理事・評議員会等で、各支部の活動状況等の情報を得、それを参考にしながら、支部活動が少しでも充実するよう努めてはいる。ただ、中四国支部の現況は、中国四国地域の広範囲に及ぶことからくる弱みを克服するのが課題でもあると思う。どうしても、広島市を中心の活動とはなる。試みに、2024.8.31松江地区懇談会を松江市にて開催し、島根（丸山達也知

事（36回生）も出席）はもとより、徳島、広島、岡山からの参加を得て、10名規模ではあったが、活発な交歓が出来た。このような地域拠点の会合が地元の有志の賛同を得て定着できればと思っている。

同窓会ホームページには、支部総会、懇親会等の開催案内や、会合内容の報告を掲載しているので、会員の皆様、どうか閲覧していただきたい。中四国支部の会合には、他支部会員の参加も大歓迎しているので、ご遠慮なく、事務局へ参加の問い合わせなど、ご連絡ください。

今、同窓生の皆さんの、各界でのご活躍を見て実に有難く思っている。少しでも、地域の中で同窓生のコミュニケーションが深まり、地域社会への何らかの貢献ができるよう、同窓会活動を地道に取り組んでいかねばと願ってやみません。

（文責：支部長　近藤治幸（16回生））

福岡支部

現在の福岡支部は、「都道府県を最小の単位」とする本部規約（支部設置基準）の改定に伴い平成22年に新規発足しました。

それ以前は、総会を司る幹事回生が運営する福岡支部と有明・久留米といった県内支部が並存しておりました。

現福岡支部の発足に伴い、旧県内支部はOB会と名称を改めましたが、お互いが補完し合い県内同窓生の親睦と交流を図っています。従って、福岡支部としての主たる活動は、毎年７月開催の総会並びに令和６年10月より年３回開催とした回生代表世話人会の運営と各OB会との連携となります。

回生代表世話人会では、各回生及び職域の代表世話人に参集頂き、支部総会をはじめとした諸活動・諸取組を共有し、代表世話人より各回生への伝達や総会出欠の取り纏め等をお願いしています。また、本部取組事項の共有化や学校行事等についてもタイムリーに共有化が図れるよう心がけております。

OB会は、現在、有明・筑後・久留米・朝倉・筑豊・北九州の６つのOB会が運営されています。旧支部の流れを汲むOB会に加え、現福岡支部発足後に発足・再開したOB会もあり、それぞれ特色のある活動を頂いております。また、各OB会からは副支部長を１名選出頂き、福岡支部とOB会の連携役を担って頂いております。

コロナ禍で停滞を余儀なくされた結果、総会・回生代表世話人会の出席者数は未だコロナ前の水準には戻っておりませんが、「集ってこその同窓会」であり、面と向かって話をするからこそ、年代を越えて知らない同士が打ち解け、同窓生としてまとまることができると確信しています。

そのような中、サロン・ド・附設が復活しました。

・多方面で活躍している附設卒業生とゆるやかなネットワークが作れる場所とする
・同窓生が定期的に集まって話ができる場を作る

をモットーに、２ヶ月に一度福岡市内で開催頂いており、まもなく開催300回を迎えます。

また、若手（といっても40代中心ですが）主体のサロン・ド・附設に対して、年配の同窓生が集う場として、放談会（附設を語る会）が立ち上げられました。未だ模索段階ではありますが、同窓会活動に新風を巻き起こすことを期待しております。

県内では各職域や学内或いは回生の集いも多々行われている次第ですが、福岡支部として

も、県内同窓生の連帯の輪を広げるべく、「集いの場」の提供に引き続き努めてまいります。

（文責：支部長　実藤光二郎（26回生））

佐賀支部

2020年より佐賀支部長および同窓会理事を拝命しております22回生の志田です。

佐賀支部では基本的に２月の第１金曜日に芙蓉医会（佐賀県に在住もしくは佐賀県内の医療機関に勤務している医師と佐賀大学医学部学生の同窓会）、８月の第４土曜日に全体同窓会を年間行事として毎年開催して来ましたが、2020年２月の芙蓉医会以降は新型コロナウイルス感染症の影響により、未開催が続き（私が、佐賀県医師会で新型コロナウイルス感染症対策の担当であったため、開催にかなり慎重になり過ぎたところがあったかと思います）、2024年３月にようやく芙蓉医会を再開しましたが、全体同窓会の方は、私が佐賀県医師会の役員を務めている関係で、７月～11月にかけての週末が毎年ほぼ、県・九州・日本医師会の行事で埋まってしまい、８月の再開が叶わず、大変申し訳なく思っております。私自身も全体同窓会には10年以上、顔を出せておらず、次回からは時期を変更して開催するか、もしくは、全体同窓会の担当者を別に置いて、同じ時期に開催を続けるかで検討しているところです。佐賀支部の同窓の皆さまには、決定次第、ご連絡を差し上げますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

佐賀支部同窓会では、例年、地元で活躍している同窓生の中から演者を選び、演者の専門領域のテーマで講演して頂き、参加者は飲みながら拝聴するという無礼講スタイルを続けておりますが、乾杯前に酔ってしまうこともあり、今回からは少し前菜を付け、食べながらの拝聴を可としましたので、皆さま、お気軽にご参加ください。また、膝を付き合わせての会合はやはり楽しく、最近は女性の同窓生にも多く参加してもらっており、当初は怪訝そうな顔つきであった先輩方も、最近は快く迎え入れてくださり、和気藹々とした雰囲気の中、定例となっている二次会の焼鳥屋にも、多数、来て頂けるようになっています。

佐賀支部では、この年２回の同窓会のみの活動ですが、他の地区では、コロナ禍でも、Webでの同窓会開催やWeb飲み会を開催されていたところがあり、今後は時代に合った開催方法も検討し、対応していかなければと考えております。

各地区の活動を参考に検討して参りますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

（文責：支部長　志田正典（22回生））

熊本支部

1982年、熊本大学に進学した28回生、29回生、30回生と一緒に、30人余りの先輩方の円陣に囲まれ校歌斉唱の大歓迎を受けました。そののちに正式に「久熊会（きゅうゆうかい）」と命名された附設卒業生の集まりの歴史は長く、参加者が社会人２人、学生数人という一時期の存続の危機も乗り越え続きました。

2009年６月、57回生（女子２回生）の熊本初の女子同窓会生２名を含む新入生歓迎会に参加した猪飼秀隆君（29回生）の提案を受けて、2010年５月20日、石川浩一郎さん（10回生、整形外科医）を初代支部長として、長谷川房生同窓会会長（13回生）にもご参加いただき、熊本支部設立総会を開催しました。評議員の故江頭

有朋さん（30回生、外科医）を中心として、６月総会及び新入生歓迎会（社会人20名、学生15名）、３月卒業生祝賀会（社会人10名、学生15名）を続けました。

2014年から総会及び新入生歓迎会は10月開催、会場は川﨑博社長（16回生）のホテル日航熊本とし、講演会を導入し、幹事の村上尚彌さん（33回生、建築家）が運営の要を今日まで担ってくれています。最初の講演は沢畑亨さん（28回生、愛林館館長）による「上流社会の20年森と棚田のめぐみ考」。参加者は社会人30名、学生23名でした。2015年は、社会人37名、学生24名。講演は、永芳友君（57回生、熊本大学医学科学生）による「精神遅滞の分子機能の解明を目指して」と柴垣正仁熊本市議（37回生）による「これでいいのか熊本？　ここはいいんだ熊本」。熊本地震後の2016年は、社会人35名、学生22名。講演は、高倉慶応さん（34回生、きもの蝶屋社長）による「KIMONO PROJECT」。女子学生の着物姿に賑わいました。2017年は、社会人32名、学生26名。講演は、立津央さん（40回生、血液内科医）による「ボストン留学記」。2018年は、社会人30名、学生16名。講演は高畠宏一さん（22回生、ミライト・テクノロジーズ社長）による「わが社における今後のサービス戦略」。2019年は、社会人31名、学生14名、講演は葉玉匡美さん（32回生、弁護士）による「コンプライアンス～真面目に働いているのに突然転落したケースを参考に～」。コロナ禍の2020年は、2021年３月に卒業生祝賀会兼新入生歓迎会を同窓会本部のZoomアカウントを使用したハイブリッド開催、リアル参加は社会人４人と学生５人。講演は片渕秀隆副支部長（22回生、産婦人科医）による教授定年退職記念講演「熊本大学の歴史を紡ぐ　矜持と覚悟の日々を終えて」。2021年もハイブリッド形式で、講演は谷口純一さん（29回生、総合診療医）による「医師養成、医療の在り方の今後」。2022年もハイブリッド形式で、丸山剛弘さん（37回生、三井住友海上火災保険）による「附設校歌のルーツ」。リアル参加は社会人17名、学生13名。2023年は、合原俊光先生ご夫妻をお招きし、社会人29人、学生９人。講演は堤裕昭熊本県立大学学長（23回生）による「熊本の干潟からアサリが消えた！　もう一度取り戻すためには？」。2024年は、社会人20人、学生14人。講演は社長を退任された前支部長の川﨑博さん（16回生）による「２つのサラリーマン人生」と東京支部副支部長（本部理事）の中村尚昭さん（22回生）による「当時の附設の思い出」。同窓会会長の吉田清隆さん、町田健校長先生にもご参加いただくなど、母校と母校同窓会の「新鮮なお話」が聞ける総会となっています。詳細は、例年８月頃、母校同窓会ホームページをご覧ください。

（文責：柳文治（29回生））

長崎支部

長崎支部の歴史

昭和40年代の早い頃に、長崎大学経済学部の合原俊光さん（９回生。その後、久留米附設高校で教鞭を振る）の卒業に際して、北里精司さん（４回生）、國崎忠臣さん（４回生）の声掛けで長崎在住の同窓生が集まり歓送会をしたことが長崎での附設高校同窓会の活動の黎明でした。その後、森康さん（２回生）や柿本末人さん（３回生）のもとで毎年同窓生が食事会をするようになっていきました。

昭和55年に28回生の私が長崎大学に入学した時には、長崎大学の卒業生・在学生を中心に、「附設会」という集いが常態化していました。春には新入生歓迎の「新歓コンパ」、秋には卒業生の送り出しと、国家試験への激励を兼ねた「追い出しコンパ（追いコン）」を長崎名物の中華料理や卓袱料理の店で行っていました。私が参加した頃の出席者の多くは医学部生と医者でしたが、工学部の先生もおられました。また、以前に附設で教育に携わり、その後、長崎総合科学大学の教授になられた先生がご参加なされたこともありました。高校卒業したての青二才が社会人と宴席をともにする緊張の機会でしたが「試練の揺籃地」をへた「男くさい」感覚で気軽にお話しができる会でした。この「新歓・追いコン」が長崎支部の年中行事でした。

その後、各地で同窓会支部が結成される中、長崎支部も平成５年に結成されました。初代の支部長は柿本末人さんでした。

長崎支部の活動状況

毎年11月前後の土曜日に長崎市内の中華街で支部総会を開催しています。大学生や社会人、リタイアされた方々も集まり、近況報告と昔話に花を咲かせています。附設高校の男女共学の流れを受け、長崎支部にも女性の同窓生が参加されるようになり多彩な総会になってきています。そして最後には校歌斉唱で終わります。歌詞を準備していないと途中であやふやになることもありますが、「築く不朽の真善美」の所はみんな力が入っています。なお、この会は、大学生は無料です。そして、翌日にはゴルフコンペ（附設コンペ）が行われています。

また、コロナ禍の影響で現在は休止状態ですが、毎年６月頃に新入生の歓迎コンパ（新歓コンパ）を行っていました。長崎大学への入学者が主になりがちですが、長崎大学病院関連の社会人が中心になり学生幹事が手足となって行っていました。令和７年から再開の予定です。皆さんも長崎で就学・就労する機会が訪れた時にはご参加ください。

（文責：川口　哲（28回生））

沖縄支部

１．沖縄支部の設立経緯

附設高校同窓会支部の中で最もフレッシュな沖縄支部の設立日は2024／04／14(日)。「附設高校同窓会沖縄懇親会」が開催された日です。

同窓会本部の呼びかけに応じて、那覇市のホテルJALシティ那覇に参集した県内外の同窓生

の数は総勢39名。

吉田同窓会長による「附設高校同窓会75周年記念行事として沖縄支部の設立を」という呼びかけに応じる形で、「沖縄支部の設立」について満場一致でご承認をいただき、沖縄支部の活動がスタートしたのでした。

「附設高校同窓会沖縄懇親会」はとても楽しい１日となりましたが、残念なのは、「集合写真」を撮るのを忘れたこと。ここでは、集合写真の替わりに、「参加者本人ひとりひとりが事前に提出した顔写真の集合体」を掲載させていただきます。

２．沖縄支部の活動状況：第１回定期総会を開催（2025／04／13）

沖縄県内外の関係者の皆様方に支えられて、2025／04／13(日)に、「第１回沖縄支部定期総会・懇親会」を開催することが出来ました。この紙面をお借りして、お世話になりました皆様方に心から御礼申し上げます。

なお、恒例になりつつあります「**前夜祭**」への参加者は19名（県内９名＋県外10名)、そして「**第１回定期総会・懇親会**」への参加者は37名（県内23名＋県外14名）を数え、盛大に挙行されました（注：ご参加者名一覧を最後に記載しております)。

そして、記念すべき「第１回定期総会」においては、４件の決議事項が上程・審議され、それぞれ満場一致を以ってご承認をいただきました。ここでは、その４件の決議事項の概要のみ記載しておきます。

３．沖縄支部の今後の予定

沖縄支部におきましては、①沖縄県が年間観

●第１号決議事項：「沖縄支部規約」制定の件

久留米大学附設高等学校同窓会 沖縄支部規約

第１条　本会は、久留米大学附設高等学校（以下、母校と略記する。）同窓会沖縄支部と称する。
第２条　本会は、一般会員（母校卒業生で県内居住又は県内に勤務）、在学会員（大学等在学中）及び名誉会員（総会にて推薦を受けた者）をもって構成する。
第３条　本会は、会員相互の親睦と交流を図り、母校の発展に寄与することを目的とし、そのために必要な事業を行う。
第４条　総会は、本会の最高議決機関であり、定期総会を年１回開催する。
第５条　本会は、役員として、支部長１名、副支部長若干名、監事１名を置く。
支部長は、支部を代表し、会務を総括する。
副支部長は、支部長を補佐し、支部長に差し支えがあるときはその職務を代行する。副支部長の職務分担に関しては、互選により定める。
役員の任期は、それぞれ２年とし、その再任を妨げない。
第６条　会計年度は定期総会が行われる年の４月１日から次の定期総会が行われる年の３月31日までとする。
第７条　本会の規約は総会において改正することができる。
第８条　本規約は、令和７年（2025年）４月13日より施行する。

●第２号決議事項：沖縄支部役員選任の件

役職名	候補者名	補足説明
支部長候補者	清水 明	23回生：沖縄県那覇市在住
副支部長候補者	江頭 重宏	21回生：沖縄県那覇市在住
副支部長候補者	島袋 昭彦	36回生：沖縄県浦添市在住
副支部長候補者	城間 有	39回生：沖縄県那覇市在住
監事候補者	玉元 宏志	39回生：沖縄県那覇市在住

●第３号決議事項：第１期支部活動および決算承認の件

沖縄支部活動報告
第1期：2024/05/25～2025/03/31

（組織・体制の構築）
・支部長および副支部長・監事を選定
・令和６年度同窓会理事会評議員会において支部設立をご承認(2024/05/25)
・「沖縄支部規約」案を検討
（財政基盤の整備）
・令和６年度同窓会報広告協賛を募集
（会員情報の整理・保管）
・個人情報取り扱いに留意
・最新情報へのアップデイト
（Group LINEの導入）
・2024/12末から順次「登録のご案内」
（役員会の開催）
・５回開催

第1期 収支決算書（単位：円）	
（収入の部）	
広告協賛金	37,500
寄付金	200,000
利息	71
当期収入合計：A	**237,571**

（支出の部）	
当期支出合計：B	**0**
当期収支差額：A-B	**237,571**
次年度繰越金	**237,571**

（財産目録）	
普通預金	**237,571**
沖縄銀行 本店営業部	

●第４号決議事項：第２期支部活動計画・予算承認の件

沖縄支部活動計画
第2期：2025/04/01～2026/03/31

（組織・体制の構築【継続】）
・第1回定期総会の開催
・支部の分科会活動を支援
（財政基盤の整備【継続】）
・令和７年度同窓会報広告協賛を募集
・支部の分科会活動への補助を開始
（会員情報の整理・保管【継続】）
・個人情報取り扱いに留意
・最新情報へのアップデイト
・分科会活動ネットワーク
（group LINEの本格導入【継続】）
・「登録のご案内」対象の拡大
（琉大新人歓迎会および卒業祝賀会の開催検討）
（役員会の開催【継続】）
・偶数月の第1月曜日18:00＜飛入り歓迎＞

第２期 予算案（単位：円）	
（収入の部）	
広告協賛金	37,500
寄付金	100,000
懇親会会費収入ほか	272,000
当期収入合計：A	**409,500**

（支出の部）	
総会・懇親会費用	272,000
謝礼等	40,000
分科会活動支援	100,000
雑費	5,000
当期支出合計：B	**417,000**
次年度繰越金：A-B	**▲7,500**

前期末繰越金残高	**237,571**
当期末繰越金見込み	**230,071**

光客受入数1000万人という「国内有数の観光地」であること、②沖縄県内に数多くの私立中学・高校が新設されたことによる附設高校受験者・入学者数が減少していること、③琉球大学医学部や沖縄県立病院等を中心とした県内医療関係従事者ネットワークが構築できる可能性があると考えられること、④2024年４月には附設高校同窓生２名が琉球大学医学部へ進学されたこと、などの環境変化を十分に考慮しつつ、「**同窓会会員相互の親睦交流**」というパーパスを実現できるよう、県内外の同窓生の皆様のご支援を賜りながら、沖縄支部活動を展開してまいる所存です。引き続き、何卒宜しくお願い申し上げます。

（文責：清水 明（23回生））

＜記録＞

2025／04／12(土)前夜祭の参加者名簿

県内居住者９名：

21江藤重宏、23清水明、32砂邊毅、36島袋昭彦、37安座間猛、38比嘉敬、38比嘉淳、39城間有、39玉元宏志

県外居住者10名：

19國友秀世、21栗木康幸、23吉田清隆、23町田健、23穐田宗隆、27中村和徳、31緑間浩市、31勝連治、36飯沼良介、38植木正光

2025／04／13(日)第１回通常総会・懇親会の参加者名簿

県内居住者23名：

21江藤重宏、21今山裕康、23清水明、28久高学、30當山潤、31長濱為一、32砂邊毅、33幸喜毅、36島袋昭彦、36長嶺知明、36金城靖則、37中山真、37安座間猛、38比嘉敬、39城間有、39玉元宏志、41嶺井政直、41喜友名裕、42川満正人、42又吉忍、42國吉真史、47石田織大、50金城清猛

県外居住者14名：

19國友秀世、21栗木康幸、23吉田清隆、23町田健、23穐田宗隆、23古賀善彦、23江藤宏、27中村和徳、31緑間浩市、33勝連治、36飯沼良介、36松浦愛二、36丸田雄三、38植木正光

同窓生寄稿

今　思うこと

野田隆昭（３回生）

私達３回生は、日中戦争・太平洋戦争の中で育ち、小学３年生で終戦を迎えました。また、旧植民地、満州や朝鮮から引き揚げて来て、１学年繰り下げて復学した学友もいるような戦時の影を背負った世代です。

その様な幼少期を過ごしたので、私なりに戦争を改めて考える為、戦争の傷跡が残るゲルニカ（スペイン）・アンネの家（オランダ）・ザクセンハウゼン強制収容所跡（ベルリン近郊）・ワルシャワ（ポーランド）・コレヒドール（フィリピン）・旧レニングラード（ロシア）・サラエボ（ボスニアヘルセゴビナ）等を訪ねました。

ボスニアヘルセゴビナの首都・サラエボは、第一次世界大戦の発端となったところでもあります。サラエボ空港に降り立った時、夥しい数の白い柱が目に入りました。それは、全て墓標でした。ユーゴスラビア連邦解体後の内戦により犠牲になった人たち一人一人の姿でした。

ガザやウクライナの犠牲者の数字を見るたびに、サラエボで見た凄まじい数の墓標が目に浮かびます。

また、ガザやウクライナで子供達が亡くなったり、傷ついたりしている姿を見ると、故郷久留米で米軍の空襲に会い、焼夷弾が降り注ぐ中、母が末弟を小脇に抱え、年子の弟の手を引き、その後ろから必死について走った私の恐怖の体験と重なります。

久しぶりに訪れたふるさと久留米は、空襲で旧旭屋デパートの建物だけがポツンと残った当時の焼け野原の風景を思い起こさせるものが全くない近代都市に生まれ変わっていました。しかし、人の命は、亡くなれば、永遠に甦りません。ウクライナ・ガザ等の紛争地の一日、否、一刻も早い停戦を願うばかりです。

（注：会報21号・25号の拙文も読んでいただければ幸いです）

ダイヤモンド状炭素膜のPETボトルへの成膜技術開発と実用化

鹿毛剛（６回生）

附設高校75周年おめでとうございます。

1962年に筆者は九大農学部農芸化学科を卒業してキリンビールに入社した。当初は醸造部門で、その後、容器包装部門で開発担当になった。1982年に食品衛生法が改正され、清涼飲料用にPET（ポリエチレンテレフタレート）ボトルの使用が認められた。現在、清涼飲料や醤油等に広く使用されている。しかしながら、硝子瓶と違って炭酸飲料ボトルでは、内側からの気抜け（二酸化炭素の損失）が起こり、外側からの酸素の侵入がある。当初、ビールにも使用されたが、品質維持の観点で使用中止になった。

1992年にキリンはプラズマ化学気相成長法を利用して、ダイヤモンド状炭素のPETボトルへの成膜技術を開発した。プラズマ化学気相成長法とは、高周波などを印加して原料ガスをプラズマ化させるのが特徴で、半導体素子の製造などに広く用いられる。また、ダイヤモンド状炭素はDLC（Diamond like Carbon）で、高硬度、耐摩耗性、低摩擦係数等の特長があり、切削工具、軸受け部品等の機械部品、磁気テープ及びパソコンのHDDに利用されている。このPETボトルへの成膜技術は画期的であり、酸素ガス

遮断性能は10倍以上である。実用化は鹿毛技術士事務所が行った。

2002年に米国食品医薬品局（FDA）へ上市前「食品接触物質の届出」を行い、受理された。2004年に大型ロータリ式成膜機が完成した。能力18,000本/時間、成膜時間２秒、膜厚は10-30nm。当初、炭酸飲料、加温飲料や日本酒等に使用されたが、現在では一部のビール、赤ワイン、醤油等にも使用されている。

工場閉鎖による余剰人員対策として、PETボトルの一部を自社製造した。容器メーカーの一端を担うことになり、PETボトルのリサイクルに取り組まざるを得なかった。30年以上前から、「リサイクルしやすいPETボトルのガイドライン」や「再生品の市場開拓」のために深く関わってきた。現在のリサイクル率は87％である。最近、Ｘ社はPETボトル再生品（ボトルtoボトル）の食品への使用を企画し、欧州食品安全機関（EFSA）へ申請した。筆者もサポートして認可された。

今後、化学リサイクルで省エネの低温・短時間法による技術開発が望まれる。

未知との出会い
～１年半のイスラム国・アフガニスタン生活～

藤木敏朗（７回生）

NHK在職中、ODAによるアフガニスタンのテレビ放送建設のため、JICAより専門家として派遣されました。気鋭の37歳、家族同伴、海外・異文化に触れる初めての経験、1978年３月の事です。現地での予見を超える体験は、人生の大きな糧、エポックとなりました。

直後４月に、左派による軍事クーデター、社会主義政権誕生。激しい銃撃戦、我が家にも銃弾が飛び込み、家族３名テーブルを盾に一晩過ごし、翌朝日本大使館に駆け込みました。TV放送はかろうじて開始されましたが、局指導層は一新、‘政権賛美’の番組一色、当初準備していた計画は練り直しでした。

日常生活は、住宅選び、息子のアメリカンスクール入学、バザールや国連コミッサリーでの生活必需品の確保等、生活基盤の多くを外国頼み、医師は英国人、娯楽なども米、独に頼りました。米欧の援助は、専門家と対で学校、教会、娯楽など日常生活が付いて来ます。日本は専門家身一つ、永続的・外国に伍する援助にはサポート体制の充実を実感しました。

政変後、イスラム勢力との摩擦、政権内部抗争は、1979年12月のソ連軍侵攻を招き、急遽家財を整理、任期中途でカブールを離れました。

ソ連軍は侵攻10年後撤退、社会主義政権崩壊、親米欧政権、一次タリバン政権、アメリカ軍介入、タリバン政権崩壊、再度親米欧政権、アメ

リカ軍撤退、二次タリバン政権。帰国以来40年、アフガニスタンは政変の連続です。

2002年１月、アフガニスタン復興支援会議が東京で開催。その際、カルザイ議長（後、大統領）がNHKを訪問、会長との会談に私も同席。議長は当時の支援に感謝を表しました。同行の技師長と20数年ぶり再会、当時初のTV放送に共に尽力した仲間でした。

アフガニスタンは東西文明の十字路、インドへのシルクロード回廊であり、文化遺産の宝庫です。バーミアン渓谷の仏像遺跡、その壮大な景観は今も脳裏に残っています。遠い存在から身近になったアフガニスタン、そこでの生活・異文化体験、文化との触れ合いは、私の世界を確実に広げました。アフガン人のゆったりと、百年スパンでものを観る国民性は、いずれ現状の混沌に光明を見出すでしょう。この焦らず、急がずの処世は今の我々にも必要な気がします。

母校に感謝

井手和英（８回生）

人の人生には、自分の力ではどうにもならない運、不運があり、自分でも予測もしなかった出来事によって大変な幸運に恵まれることがあります。私の場合も、新設間もない久留米大学附設高校への進学と云う予想だにしなかった出来事を機に、人生が大きく変わることとなりました。私の今日ある幸せな人生は、附設高校のお陰と深く感謝致しております。

私は戦時中の昭和十七年一月に満州の地で生まれ、二才の時に両親の故郷である福岡県浮羽郡吉井町に引揚げてまいりました。以来、地元の小・中学校を卒業するまでは、豊かな自然環境の中で一日中遊び廻っておりました。中学卒業後は近所の友達と一緒に地元の県立高校に進学するものと考えておりましたところ、高校進学を控えたある日突然に、久留米にある附設高校に行かないかと担任の先生に勧められました。その時はよく理解することもなく、周りの人々に勧められるまま附設高校への進学を決めてしまいました。この無謀とも思える決断が冒頭申し上げましたように私に幸せをもたらすことになろうとは当時は思いもよらぬことでした。

入学当初は、片道一時間程の汽車通学やレベルの高い授業についていくのに大変苦労致しました。半年程過ぎる頃になって漸く、先生方の建学精神（国家社会に貢献しうる誠実にして気概ある人物の育成）に燃える熱い指導で私の軟弱な心に火がつき、徐々に勉強に専念するようになってまいりました。心が折れそうになった時は、母校の校歌である「高良山下の学園に万朶の桜咲きそろい……」と口遊むことにより自分を励ましてまいりました。

附設高校での三年間は、勉学のみならず精神面でも強く鍛えていただき、私の人生にとって大変貴重な日々でありました。

卒業後は、東京大学から希望通り金融機関への道に進み、我国の高度成長を支える一員として産業の育成に全力で取り組んでまいりました。バブル崩壊後は故郷の地方銀行に転出し、地域企業の育成・支援に力を注ぐと同時に、母校の三代目同窓会会長として、附設高校の創立五十周年記念事業に積極的に取組み、些少ではありますが母校に恩返しが出来たことを嬉しく思っております。

母校は今や、日本有数の教育機関として全国に知れ渡り、各界に多くの優秀な人材を排出するに至っております。創立七十五周年を機に一段と飛躍されることを心より願っております。

学び舎は遠きにありて……

稲田昌秀（10回生）

私にとっての附設高校は、1959(昭和34)年４月から1962(昭和37)年３月までの、３年間の記憶の中にしか存在しません。それは、久留米大学商学部に併設され、高良山下の御井町にあった昔ながらの木造作りの校舎や、その中で同期生の仲間と過ごした濃密な時間、校庭に咲き乱れていた芙蓉の花や藤棚、今以て思わず口ずさんでしまう校歌、それに板垣・楢崎・大内校長を始め、熱く指導して頂いた多くの恩師の方々との、楽しかった思い出以外の何物でもありません。

卒業と同時に生活基盤を東京へ移したために、進路がバラバラで全国に散らばっていった同期生と会う機会も縁も絶えたまま、約半世紀を迎えてしまった頃、久留米を中心に同期会活動を活発に行っていた仲間にたまたま連絡を取る必要性があり、それが切掛けになって同期会の集まりに時々参加するようになりました。

高校とも同期生とも縁を保たずに疎遠に過ごして来た最たる理由は、社会人になって２年後の1968(昭和43)年に校舎が御井町から現在地へと移転したことにあります。卒業から僅か６年間で場所も変わり、校舎も環境も様変わりしてしまい、更には男子校から男女共学に変わったことも附設高校への愛着が薄れ、喪失感だけを抱き続けてきた大きな理由になっております。私にとって附設高校は、故郷から切り離されたデラシネという表現がピッタリという存在になっているのでしょう。年金生活に入ってから、東京地区の世話役と世話人会への参加を頼まれるようになりましたが、世話人会へ参加する度に違和感を抱いておりました。東京で数名の同期生と時々会合を持つようになってからかなりの時間が経過しましたが、毎回御井町に在った頃の附設高校の話で盛り上がります。これがデラシネの宿命なのかもしれません。

80歳を超えると何はさておき健康こそ第一で、同期生の繋がりを大事にしながら生きていきたいと考えております。

我ら傘寿の「同笑会」今宵も歌う“附設逍遙歌”

橋本雄二（11回生）

母校創立10年後、揺籃地御井旧校舎に入学した我ら11回生も、慎ましく逞しく優しく生きて60有余年、今年全員が傘寿を迎える。そして残余短き人生を謳歌すべく「どうしよるかい」と声掛け合いながら、笑顔で同志が寄る会「同笑会」を立ち上げ楽しんで20年が経過した。

特に関東地区では毎月のように親睦会を開き、年に４回の宿泊連チャンゴルフで年を忘れて野原を駆け巡るも、いつしか17回生～27回生の若手10数名を引きずり込み、寄る年波をパワーで補完してもらい今に至る。

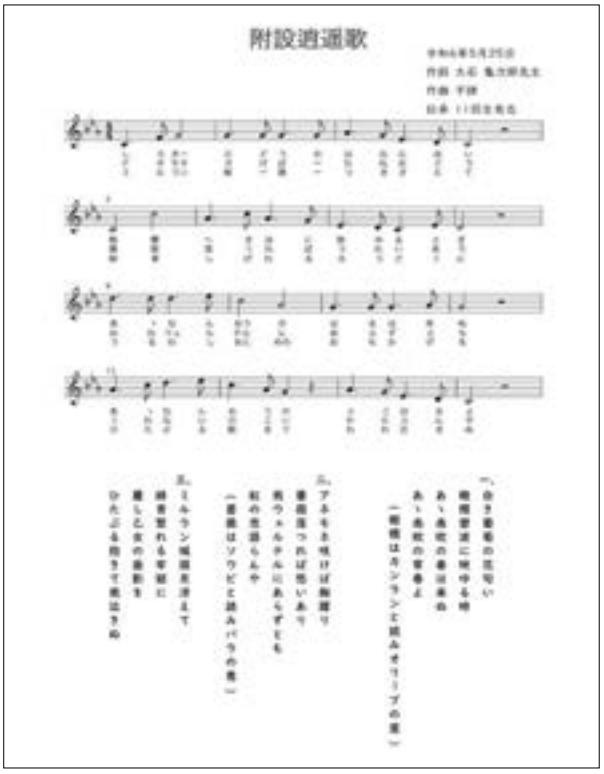
ある宴会の席で、誰ともなく「附設逍遥歌」なるものを口ずさんだところ、11回生はほぼ全員が聞き覚えあるも、17回生以下の若手は誰も聞いたことがないという。

嘗て、文化祭の後、ファイアストームで年長者から教わったものが、どこかで途切れているのに気付き、これを伝承すべく歌詞を再現し曲の譜面起こしをすることとした（添付参照）。そして、この歌のルーツも調べようと若手の皆さんにも手伝ってもらい、ググったりネットで探し回った。

つらつら考うるに、旧制高校が廃止された昭和25年に母校が創立されていることから、旧制高校の寮歌に郷愁を感じたおそらく大石亀次郎

先生、通称”亀ちゃん”が新入生らとあちこちの寮歌を参照して、逍遥歌として残したのではないかと推測される。特に二番の「アネモネ咲けば胸躍り……」は三高寮歌の18節にそっくりだし、三番の「ミルラン城頭月冴えて……」と似たものが拓殖大学の歌集「人を恋うる歌」29番として付け加えられている。しかし一番「白き葡萄の花匂い……」はどこを探しても見当たらなかった。

察するに“橄欖（オリーブ）碧波”“南欧の常春”とあるから、亀ちゃんが地中海を旅した



人から話を聞き、歌詞を作ったものの二番、三番は面倒になって既存のものを無意識に引用（要するに盗用）したのかも知れない。もし、経緯をご存知の方がおられたら是非教えて頂きたいものだ。また、曲もうろ覚えであるがこれから洗練されるべく譜面起こしを後輩に頼んだ。宴会の都度、若手への伝承と称して「附設逍遥歌」を歌っているが、11回生は譜面なしでも歌えるのに、肝心の校歌は歌詞がないと歌えない。

亀ちゃんからまた叱られそうだが、今更であり、母校創立75周年を記念して譜面付き「附設逍遥歌」を献上する。改めて、恩師に感謝し、亡き友を偲び、国を思い、後輩に未来を託し、「同笑会」の愛称と逍遥歌譜面が進化しつつ、永遠に残ることを期待して止まない。

現役をおえて

池松勢三郎（12回生）

卒業以来60年、ふりかえれば茫々たる思いです。学生時代から20歳代までは、いわば夢見る時代ではなかったか。妻をめとり、本を読み、音楽を聴き、登山を楽しみ、根拠はないものの、なにか将来に明るい希望をもっていました。

30歳代から60歳代までは、仕事に熱中した時代です。この時代を通じて、私の仕事の大半は、用地・立地といわれるもので、農・山・漁村を訪ね、事業への理解・協力と用地の提供をお願いする仕事でした。

人の家を初めて訪ねてあいさつをするのは、ドキドキするものですが、相手の方も大抵はビックリするとともに、事業への協力をいやがったり、ためらったりします。そこを根気よく通い、20回、30回の訪問はあたりまえでした。

玄関の前で立ち話してなかなか家には入れてもらえません。思い出すのは、ご主人が私に対していい顔をされないなかで、奥さんが、この人がこんなに訪ねてきているのだから、家の中に入れて話だけでもきいてやったらどうかと、そばから助け舟を出してもらったことが、幾度もあったことです。女性はおおらかで柔軟な考え方をされているものだと感謝しています。

今でも忘れられないのは、ハウス農業を営み、事業に強硬に反対し、何度通ってお願いしてもはねつけられる方と、必死にねばり強く交渉を続け、事業にギリギリ間に合ったことです。この方が６月頃ある日突然職場を訪ねてきて、私に大きなスイカを下さり、初なりが一番甘くてうまい、ご苦労様でしたと言っていただきました。私こそ感謝感激です。およそ40年間、用地・立地の仕事を続けましたが、結局、人と人との信頼を築くことが私の仕事だったと思っています。現在は、対面の交渉がなかなかむつかしいときでしょうが、信頼を築くという要諦は変わらないと思います。

70歳代後半、夢中になっているのは、歴史です。太宰府の九州国立博物館常設展の解説ボランティアをやっています。歴史の知識は、附設の授業以来で覚束ないところですが、このボランティアをやるなかで、日本の歴史を概観するとともに、古代からの大陸、朝鮮半島との深いつながりをあらためて勉強しているところです。

あったのか「生徒に校則」

長谷川房生（13回生）

私たち13回生は昭和21・22年生まれ。165名が、戦後ベビーブーム世代の第一陣として昭和37年に久留米大学附設高校に進みました。当時の学校も、まさにその状況に対応し、進学準備をしていたようです。

街にはビートルズの歌が溢れるなか、私たちには自由な校風と勉学の励みが共存していました。実は私たち13回生は、学校始まって以来の問題を発生させる悪童たちの集まりでした。一方、大学の合格実績もまた、建学以来最高の成績でした。その合格の記録は『附設高校25年史』の中に特筆されており、22回生（４クラス260名）に至るまで破られることはありませんでした。同誌には、私たちの入学前年に着任された大内校長が「ラ・サールに負けない高校を目指したい」と語られていたことが記されています。

ところでその当時、私たち生徒に対する校則があったのかどうか。私たちは誰一人校則のことなど頭に浮かべることはなかったと思いますが、学校には、

１．制服制帽の着用
２．住所変更の届出
３．遅刻早退欠席の届出

という、たった３つの校則があったのです。これは大石亀次郎先生と、父兄代表３名、生徒代表３名とが、開校当初に打ち合わせて、「生徒心得」として定めたもののようです。

当時の自由な校風は、先生方が崇高な建学精神に沿って、生徒たちへの信頼という大きな心をお持ちであったがゆえのものかと思われます。大石亀次郎先生はみごとなカイゼル髭の泰然とした方でした。その昔、大正・昭和の学生時代には、マントをなびかせる“バンカラ”な学生だったのではないかと想像します。私たちは先生方にそのようなイメージを抱きつつ信頼し、甘えていたようです。当時も今も、先生方は、生徒たちの本質を信じる、清く高く広い見識をお持ちの方々だと存じます。

私たち同窓生は、修羅道の世に使命感を抱くべく教育を受けた、戦後高度成長期の申し子で

す。猛烈に前向きに生き抜いてきました。来年には傘寿を迎えますが、これからもそれぞれがわが道を貫きつつ、命ある限り、授かった命を大切に生き抜いていくものと思います。

附設高校創立75周年に思う ～懐思・回想～

近藤治幸（16回生）

当時、附設高校進学を目指したのは、一歳上の従兄の附設高校進学に触発されたからでもある。地元の県立三池高校に通えば良いと思っていたのに、九州大学法学部を志し男子進学校に的を絞ったのだった。いや、単に、従兄の被る三本白線の制帽に憧れただけかもしれない。後に、男女共学を選べば良かったと後悔したのも事実であるからだ（半泣き（笑））。毎朝７時の電車に乗って大牟田から通学し、毎週土曜日の数学の試験結果に意気消沈し、身の不遇を嘆いたものである。

ただ、畏敬する諸先生からご薫陶を頂いたことを今でも有難く感謝している。漢文の大石亀次郎先生の講義に感銘を受け、先生の「人生観」を朗詠し、「前赤壁之賦」を諳んじ（スミマセン、途中までですが……）、嬉々としていた。そして「先憂後楽」「一貫仁義」はその後の人生の指針ともなっている。

思えば、75年の歴史のひとこまの勉学生活ではあるが、その時に培われたものが、今日の自分を形造っていることに疑いはない。木造の旧兵舎を教室にして、大石先生をはじめ、原校長先生、熊懐教頭先生（古文）、古田先生（数学）、世良先生（国語）、半田先生（英語）……お名前を挙げれば枚挙に暇なく、そのご薫陶を有難く思い出す。その思い出は限りなく、その懐かしい場面がフラッシュバックしてくる。嗚呼、何かしら情緒的に、感傷的になってしまいそうだが、齢75歳のなせる業なのかもしれない。

さて、振り返れば、今日の私は、附設高校同窓会中四国支部の裏方としての15年の活動にも負っている。広島の地に勤務した５年間、退職し岡山に住まいして10年、附設高校の校長先生をはじめ、諸先輩・後輩の皆様と交流を深めてこられたことを感謝している。

今、附設高校同窓生の活躍にはめざましいものがある。医療、行政、教育、企業、等々、各方面にわたり、それぞれの置かれた立場で、活躍・貢献されていることを実に有難く思う。個々人の努力もさることながら、附設高校３年間（中学からの人は６年間）の諸先生からのご薫陶があったればこそと、思い至る。

そして、学生時代の懐かしい想い出に浸りながら、古き良き時代のひとこまに思いを馳せ、現役当時の苦労（!?）が、果たしてどれくらい世の役に立ったのか……と静かに顧みる。

今後とも、附設高校の益々の発展と同窓生各位のご活躍・ご健闘を祈って、言い尽くせませぬが、感謝の思いと共に筆を擱きたい。合掌。

75周年に寄せて

橋本昭夫（17回生）

旧九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）専攻科卒業後、昔から興味があった潜水について勉強したいと思い、1976年９月に米国ウイスコンシン州立大学マジソン本校体育学部運動生理学科に１年間の予定で研究生として入学した。というのも、潜水を学問として研究している大学が日本にはなかったからだ。大学生の時に読んだ海女の素潜りを学術的に論じた論文集の著者の一人を頼って渡米した。研究中、もっと潜水について知りたいと思い大学院に進むことにした。博士課程修了後1984年10月に学

位を取得、ポストドクとして大学の研究所で潜水関連の研究に携わった。大学院在学中は、米国から支援金を得ることができ経済的に助かった。一方で院生の身分を維持し、資金援助を継続するには、毎学期の履修科目が上位成績である必要があった。そのため睡眠時間を削って勉学に勤しんだ。履修科目を終え資格試験を経て、博士論文のための実験研究にとりかかった。論文完成には数年を要した。自分の研究を発表するためのPhD Defenseがあり、それに合格してPhDの学位を授与された。論文の内容は水中での姿勢の違いによる呼吸機能の変化で、潜水に限らずリハビリの分野にも資すると信じている。その後1985年２月に帰国して海上自衛隊潜水医学実験隊に研究職技官として入隊した。海上自衛隊で約14年間、様々な潜水研究業務に携わった経験を、1996年10月の北海道屈斜路湖での遺棄化学弾揚収作業支援や、2001年夏、ハワイオアフ島沖合でのえひめ丸揚収作業支援など、実際の潜水業務に生かすことができたのは貴重な体験であった。1999年９月に防衛省旧技術研究本部に転属し、12年間、陸海空の装備品の研究開発に携わった。防衛省退職後は、民間企業に大深度潜水技術を普及したいとの思いで2011年７月に日本サルヴェージ（株）に顧問として再就職した。この潜水技術は、大深度圧気潜函工事での掘削機保守整備でも利用され、その方面での手伝いもするため、2014年７月に日本サルヴェージを退職し、個人事業主として高気圧作業支援事務所を開設、日本潜水協会の技術顧問の傍ら、潜水及び圧気潜函企業の支援を継続している。2022年５月、日本サルヴェージが知床で行った水深120mの海底に沈没した観光遊覧船の捜索・引揚潜水作業の支援、海外での潜水業務支援等を行い、自分の経験が少しでも社会に貢献できればと思っている。

高良山下の揺籃地～２つの附設～

18回生有志

18回生（1967年４月入学1970年３月卒）の徒然の思い出を書き連ね、当時の雰囲気を感じてもらえれば幸いです。

【御井校舎】1967年年４月、入学祝の腕時計と革靴と３本線の学帽（急に大人になったようで誇らしく）で附設高等学校に入学。当時は桜満開の時期だった。

ところが、御井校舎は旧陸軍被服廠建物を利用した木造校舎。上履き不要の革靴生活。掃除は水拭きするも、乾けば白い埃が目立った。でも住めば都。

【授業】先生を教官と呼んでいたが、各科目とも熱のこもった教官の授業。18回生入学と同時に７人の教官が赴任された。７人中３人が新卒の教官。ベテランの先生が多い中、まさにフレッシュ先生。歳が近く、生意気な生徒を相手に苦労されたと思うが、楽しい授業だった。

【ベル】授業の開始・終了の知らせは、用務員さんが鳴らして廻る鐘の音。のどか。

【休講】張り紙で休講の知らせ。早退できるよう時間割を調整してくれた。ありがたい。

【早弁】２時限から早弁食っているものもいた。

【試験】先生が問題・答案用紙を配り、最前列

の生徒に、「君、終わったら、答案を集めて、職員室の僕のところに持ってくるように。」と告げさっさと教室を後に。

【売店】パンと牛乳が置かれた売店は無人。横の箱に代金を入れる自己申告制。

【制服】厳格な規則は無く、黒または紺の学生服着用。暑い時期は上着を脱いで白のカッターシャツ、開襟シャツでもよいというユルイ決まり。12月でもカッターシャツだけというつわものもいましたね。

【内職】大学受験の科目を内職するのは大目に見てくれた。ありがたい。

【自主】規則で生徒を縛るのではなく、生徒が自ら考え判断していくことを尊ぶ校風だった。生徒が悩めば先生はよく相談にのり助言もしてくれた。受験勉強だけでなく、人格教育をもしてくれたと、いまさらながら感謝しております。

【野中校舎】２年生の７月29日、皆で持てる物を持って、学校の看板も担いでゾロゾロと民族大移動。新校舎は何もかもピカピカ。自由に使える体育館も運動場もある。自由にサッカーもできる。食堂もある。授業をさぼって食べたうどんは美味しかった。

【時代】当時、プラハの春の蹂躙、ベトナム戦争、学園紛争等々があったが、高度経済成長の時代だし、人類は月面にも降り立ったし。

明るい未来を信じて疑わなかった。

（石原義弘　藏守俊昭　栗野宏　古賀孝則　田中一裕　遠山茂幸　長野正登　三小田茂　宮本博幸　横溝立之）

君たちへのメッセージ

～附設創立75周年に寄せて母校の現役生に贈る～

小田惠介（19回生）

君たちの未来には、前途洋々たるものがあります。

優れた学校とは何だと思いますか。建学の理想を守り、それに共鳴する優れた教授陣を擁し、これに憧れた才能のある多くの学生が集い、巣立った人材が社会に優れた実績を築いて、多くの分野で高く評価されている学校といえるでしょう。適うことならその中に入り、多くの人々から啓発を受けて、お互い切磋琢磨しながら、豊かな人間として成長したいものです。

附設の今はどうですか。

学校を選ぶのはそのためですが、突き詰めれば、どんな職業人になって社会に貢献し、どんな家庭を築いて生きるかということです。

ところが、“将来何をしたい、何になりたい、何ができそうだ”を、自分で見つけることは大変むつかしいことで、すでに君たちは志望校を決めるときに悩んだことでしょう。そしてもう一度真剣に考える時が来ました。これからも次なる進路を決断するときが何度も訪れるでしょう。

いかに一度しかない人生を生き抜くか。

これが私たち一生の命題です。

人はひとりでこの世に生まれ、やがてひとりでこの世を去ります。職業がすべてではないことはもちろんですが、この世に生まれてきた以上、自らの職業を通じて、人々の役に立つ、納得のいく一生を生き抜いてください。

地球を想い地域で実践す

森山敦夫（20回生）

私は久留米大学病院で11年間勤務しました。現在の様な有給の研修医制度はなく、給料なし、保険証なし、残業無制限という職場でしたが、当時はそれが当たり前の世界でした。

総合病院で４年間勤務した後、1994年に故郷の杷木町（現在の朝倉市）で開業しました。以

来30年経ちましたが、入院と透析があるため旅行などはできない状態です。その間九州北部豪雨の被害にも遭いましたが、なんとか乗り越え、70歳で長男と交代予定でした。ところが、彼が大学医局の人事で２年間の米国留学となり、私は引退が出来なくなり青息吐息の状態で毎日なんとかやっています。

2023年10月に20回生古希同窓会があり、Ｃ組のグループラインを作り様々な分野の人の話が聞けて、その視野の広さに驚いています。一般開業医の私は、狭い自分の診療所の中で仕事をする毎日でした。

タイトルの“地球を想い地域で実践す”というのは、狭い範囲で暮らす私も気持ちだけは地域医療を通じて、地球全体のことを考えなくてはいけないと、自戒を込めて常に思っていることです。

附設の校是は“為他の精神を持った国家社会に貢献する人材を育成する”ですが、私たち20回生も終活に入っています。私も為他という言葉が心に染みてきて、最後に世の中に役に立つ事業をしようと準備しているところです。

以前、附設の田中博先生が久留米大学で特別講義をされた時、資料に附設のことを書いた部分がありました（当時『知的生産の技術』という本の影響でひらがなタイプライターを使うのが流行していました）。

『ところ で、ふせつ は いい ところ です。ここ に は ほんもの の“つきあい”が あります。おたがい が おたがい の にんげん を たかめあう、その はたらき が ここ で は まいにち のように なされて います。 わたし が いぜん いました いなか の ちゅうがく で は、みんな が みんな（ と いう ほど ）おたがい を こきおろす こと に よって“みんしゅか”を はかって いた もの でした。にんげん を おなじ すい じゅん に して しまう、それ も かんたんな“ひくめあう”と いう さよう に よって。』

田中先生が記された教員間の雰囲気を私も感じていました。志が高く優れた先生、また優れた奇人変人の友人と出会えたことが、私には附設に行って一番良かったことだと今でも思っています。

附設は附設にあらず、ゆえに附設という*

砂場泰浩（21回生）

75周年おめでとうございます。

開校してから様々な歴史を乗り越え75周年を迎えることができたことを心よりお喜び申し上げます。

私が附設高校に進学しようとしたのは、今から半世紀以上前になります。その頃は、小学校の時の恩師達が受験に絡んでの贈収賄事件で逮捕されたり、坐禅研修を行なってくれていた博多の名刹の和尚が強盗から刺殺される事件があったり、博多駅テレビフィルム提出事件があったりという騒然とした時でした。

附設を受験する時、附設はクラブ活動もなく、勉強ばかりさせられる高校という話を聞いていました。ところが入学したら私が思っていた附設高校と全く違っていたのです（附設は附設にあらず）。自由の雰囲気がありました。坊主頭でなくてもいいし、ズボンは黒であればいいということでした。なにより驚いたのは生徒手帳

に男女交際はチアフルにと書いてあったことです。私の中学校は１年生は男女同じクラスでしたが、２年生からは男女は別クラスで、男子クラスは３階、女子クラスは２階という徹底ぶりでした。男女７歳にして席を同じゅうせずでもあるまいし、今ではお笑いかもしれません。附設での授業はそれぞれの先生方で特徴あるもので、型にはまったものではなくこれまたびっくりでした。同級生間でいじめといったものとは全く無関係で、お前はお前、俺は俺という（和而不同）なんという住み心地のいい学校であったか。体育祭は、３日もあり、よくわからない20人リレーがあったり、球技もあったり、文化祭は自分達で勝手に変えたり、憩いの森にベンチを作ったり、自由で、素敵な学校生活と思いました。それに甘えたのか、成績は散々でした。

大学に入学して暫く不義理をして同期と会うことがありませんでした。こんな私でも卒業後40年経ち、同期会に呼んでもらい、50歳で東京支部総会の幹事学年をやってから毎月例会と称して飲み会が今でも続いています。私がメンタルが厳しくなった時も、何も言わず一杯付き合ってくれ続けた仲間には感謝しております。

こうした様々なことがあって、付き合いが続けられる附設という存在は、実にありがたい（有難し）。附設は私が思っていた以上の附設であり、附設という語に接頭語も接尾語もつけることができません。それゆえ、附設は附設というしかないのだと思えます。

これからは、附設は校歌にあるように、修羅道の世を救うべき活動を学校と同窓会が一丸となって行ってくれることを期待しております。

将来のお願いとして、各地区に同窓生がいつでもいけるような場所を作っていただければと思います。

＊金剛般若経の即非の論理に仮託したものです。

最初の男く祭と最後の全員高校入学生

安徳博樹（22回生）

みなさんこんにちは。私は母校がある久留米出身で大学は京大工学部へ行き自動車会社へ入社しました。技術系であることから国内では岡山、愛知、岐阜、海外ではオランダ、アメリカ、インドネシアなどの工場を転々とした後、2024年10月に退職し約半世紀ぶりに福岡に帰ってきました。

さて、表題の件ですが、われわれ22回生が大いに関わったエピソードについてご紹介したいと思います。

まずは、「男く祭」とは毎年春に開催される文化祭で現在も続いていると思いますが、各種展示やコーラス大会など各クラスが自由に企画、実行するため入学直後の知らないクラスメイトが一致団結する絶好の機会だったと思います。私は生徒会長として企画運営を担当していましたが、当時は特に文化祭のネーミングはなかったため、何かつけようという話になりました。他校では「あのく祭」などなかなか良いネーミングもあり、それに負けないまた附設らしいものはないかと生徒会のメンバーで色々考えていたところ誰からとなく「男く祭」はどうかという提案がありました。当時は男子校ということもあり「男の祭」と「男臭い」を掛けた良いネーミングだということになり全員一致で決定し、このネーミングがそれ以降引き継がれることになりました（現在、男女共学になったため変わっているかも知れませんが……）。

次の「最後の全員高校入学生」というのは、われわれの次の学年（23回生）から初めて中学からの入学生がいたため、高校から全員入学した最後の学年という意味です。当時の中学からの学年は１クラスだけだったと思いますが、そ

のクラスは中高一貫教育で皆優秀且つ中学で部活をやっていたこともありクラスマッチなどもほとんど優勝をさらっていました。われわれ高校からの学年としてはあまりいい気はせず生意気なクラスだと内々思っている人もいました。唯一、最後の体育祭のバレーボールのクラスマッチで劣勢を覆しそのクラスに準決勝で勝利した時は少し溜飲が下がる思いでした（その中学からの卒業生を含んだ学年から東大合格者30名を出し一気に附設の名が全国区になったのはご既承のとおりです）。

何年経ってもやはり学生時代の仲間はいいなと思いますね。それでは、次の100周年に向けてバトンを繋いでいきましょう。

75周年に寄せて、開局72年のテレビから

石澤顕（23回生）

久留米大学附設高等学校創立75周年・中学校創立55周年おめでとうございます。私は23回生で本稿執筆時も放送局経営の最前線にいますが、近年肌身に感じているのが、「不連続的大変化の渦中」です。

1980年に日本テレビ放送網入社、日テレは民放初のTV局として2023年に70周年を迎えました。TVビジネスはこの間、不変の商流で強大なメディアパワーを維持してきましたが、2007年に登場したiPhoneから始まったスマホの普及とGAFAMやNetflixの台頭、同時にSNSがライフスタイルを根底から変えました。今や生成AIが猛烈なスピードで力仕事以外全ての産業構造を変えようとしています。正に産業革命です。

この先どうなっていくのか？　誰も明確な未来像を持っていません。気候変動とともに、地球規模で従前の延長線ではない不連続な大変化に直面しています。

自らの取材に立脚して公共・公平性を追求する既存メディアの情報は、ネット上で偽・誤情報と玉石混交の状態のまま個々人の興味に沿ってレコメンドされ、その結果世論は分断し、細分化が進んでいます。好奇心を煽って再生数で金稼ぎするアテンションエコノミー、そして匿名・流動型犯罪が社会生活に混乱を引き起こしています。

兵庫県百条委員会でパワハラ疑惑を訴求され失職した前県知事の復活再選は、県会議員と県職員の陰謀説を信奉した人たちによるSNS推し活が引き起こしたとの分析があります。「事実は一つ、真実は沢山」の典型的な一例かも知れません。

こうした中でテレビ（日テレ）は、未来と夢の創造に果敢に挑戦しています。正確で迅速な報道は健全な民主主義に必須の機能です。エンタメにおいて良い例の一つがこの夏の24時間テレビ。お笑い芸人やす子さんのチャリティーマラソンを生中継し、児童養護施設への募金を画面のQRコードからキャッシュレスで募り、リアルタイムで残高を表示した結果、寄付は２日間で４億円超と関係者の予想を遥かに上回りました。放送・ネット・リアルを組み合わせた複合シナジーの創出です。

自己改革も急ピッチです。TV広告ビジネスにITアドテクを組み込んだイノベーションが2025年３月から稼働をスタートしました。労働集約型だった制作現場では、精度を要する手作業はAIが担い、制作工程をクラウド上で完結するシステムが省力化に大きく寄与しています。

さて、皆さんは将来何をもって社会に貢献しますか？　急成長分野に身を投じるか、社会生活になくてはならない分野を再生し、反転攻勢に寄与するか？　いずれの選択肢においても君たち若者のダイナミックでグローバルな活躍を大いに期待します。

因みに、世界的なアニメ工房スタジオジブリは2023年に日テレの子会社になりました。

誰一人取り残さない社会のために

八尋英昭（25回生）

附設高校75周年おめでとうございます。私が附設高校に入学して50年が経過します。入学式でかかっていたエルガーの「威風堂々」をつい最近のことのように思い出します。あれから半世紀、高校３年間、補習科１年間、受験の重みに押しつぶされそうになりながらも、友人や先生に支えられ、何とか志望大学へ進学できました。苦しかったけれど、あの４年間が今の自分を作ってくれたような気がします。本当にありがとうございました。

その後、大学卒業後、損害保険会社で36年間、東京、名古屋、大阪、シドニーと、転々と異動を繰り返し、会社のために働きました。転機となったのは、2014年国連グローバルコンパクトの日本の事務局へ出向、折しも2015年にSDGsが採択され、日本での普及に取り組みました。マスコミを集めての勉強会、企業へのプロモーション、各地でのイベント等々。ニューヨークへ出張し、国連本部での会議にも参加。環境や人権等、世界の課題を知り、その解決に取り組む多くの人との知己を得ました。パリ協定の採択もあり、世界が社会課題の解決のために結束した年になりました。

しかし、その後、世界は分断の時代を迎え、気候変動による災害が頻発、ウクライナやガザ等の紛争でも多くの方が苦しんでいます。アメリカファーストのトランプ再選に、SDGsの「誰一人取り残さない」のメッセージはかき消されそうです。それでも、世界を少しでも良くしたいとの希望は持ち続けたい。

私は、今、シェアというNGOで働いています。シェアは日本で生まれた国際保健NGOで、全ての人が健康に暮らせる世界の実現を目指し、現在、カンボジア、東ティモール、日本で活動しています。現地で保健人材育成に取り組み、いずれは自立してもらうことが目標です。日本では東京都で、在日外国人のための母子保健医療通訳派遣に取り組んでおり、現在17言語64名の通訳者に協力いただいています。全ての人が、優れた日本の保健医療サービスを適切に活用できる社会にする、それでこそ、皆保険と言えます。附設高校は多くの医療関係者を輩出しています。医療関係者もそれ以外の道に進んだ人も、多くの人が協力することで、「（日本に住む）全ての人が健康に暮らせる日本」を目指す、そのために微力ですが、頑張っていきたいと思います。

Que sais-je?　私は何を知っているのか？

田中法瑞（25回生）

私には年に一度、現代文の西原和美先生と

会って話をする幸せな機会がある。高校生の頃、小林秀雄、加藤周一、渡辺一夫、森有正、唐木順三などの日本の知性を、先生の授業で初めて知った。加藤周一の岩波新書『羊の歌』は、私の青春のバイブルになった。東京の山の手の知的エートスを、時代を超えて田舎の私たちに伝える本だった。先生の授業で伝わったのは、text「内容」というより、texture「肌触り」であった。

大江健三郎はリュックで卒論を運んだが、小林秀雄の卒論は原稿用紙一枚だった、とか、加藤周一は山手線の中で４ヶ国語を習得したとか。ヒーローを紹介することによって、大学入試のためだけではなく、教養と自分で考える力を身につける「端緒を作る」という意図が西原先生にはあったのだと思う。そして、この時代の附設の卒業生であるということは、西原先生の現代文の授業を受けたという青春の時間を共有していることを意味する。それほどのものだったと思う。今でも、歳の離れた職場の後輩が、自分の青春がいかに西原先生の影響を受けたかを熱っぽく私に語ってくれる。附設の教育の力の大きさを思う。

私が教授になった時に、西原先生から心理学者、霜山徳爾先生の直筆の書をいただいた。霜山徳爾は、ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』の訳者である。フランクルは医者で、また私の人生の紆余曲折をご存知の西原先生からの贈り物だけに、慈悲の深さを感じた。書には「五風十雨」とあった。

私は、西原先生の授業には懐疑の精神があったと思っている。「信念」をもって叫ばれる常識や正論に対して、ニヤッと笑って「それほんとうなの？」と懐疑する精神が育ったと思う。人々からの少しばかりの感謝と尊敬は、ただの錯覚であったことに気づき、「私は何を知っているのか Que sais-je?」という懐疑が押し寄せる。しかし時間が経つとその懐疑を忘れ、日常の諸事に忙殺され、懐疑の念は現実に埋没する。

私は柳川市の寺の長男として生まれ、慶應義塾で国際経済学を学んだ。卒業後は国立大学を再受験して医師となり、ジュネーヴ大学での臨床留学を経て久留米大学医学部教授となった。「志を立てるに遅すぎることはない」ことを後輩に伝えたい。我々附設25回生は久留米大学医学部で五人が教授となる稀有な学年になった。2024年４月から公立八女総合病院の企業長・院長として病院経営を任されることになった。経済学部出身の医者という変わった経歴が生きればいいのだが。いつの日か、本に囲まれた書庫で思索と信仰の日々を過ごせたらと思う。西原先生やモンテーニュのように。

「青春」と「牛丼」

古賀秀雄（28回生）

28回生の古賀秀雄です。熊本出身で高校からの入学です。現在64歳ですが、何だか歳をとった気がしないのです。諸インフラも整い、AIも人生の援けとなる環境のせいでしょうか。

振り返ると、自分ひとりで成長してはおらず、附設高校がまさに人生の「揺籃地」であったと思えます。失意も歓びもありましたが、全てポジティブに転化されています。

附設高校を志望したのは医師になりたかったからです。手塚治虫氏の『ブラック・ジャック』を読んで。それは中学生にとって正しい触発で受験勉強を頑張りました。果たして入学後、多感な高校生は様々な価値観に出会い、文系志望となりました。

同級には私を含め古賀姓が４人おり、名前で呼び合いました。少人数、寮生活も相まって生

徒間の距離は近く、先生方も友人との関係性の尊重と各自の自律を促されたと思います。最初の現代国語の授業で世良忠彦先生から「諸君！」と呼びかけられた時の新鮮な感覚もこれありです。

卒業で寮を出られる３年生の「追い出し会」は武道場を借り、全ての先輩が夜半まで想いを語るイベントでした。ある先輩の「辛いときに笑えるのが男だぜ、と先輩に云われたんだ」という話を、今も思い出します。

私は会社勤めを早期退職し、起業の道を選びました。生来の能天気さはあれ、大変な節目には今も先生や同窓の皆さんのことを思い出し自らを鼓舞しています。

自分の子供にも附設で学んで欲しいと思っていましたが、二人の娘を授かり、男子校であった当時は叶いませんでした。が、果たしてそれも親のエゴかと自戒しています。

同期の松村健君が自身のFacebookに「(誕生日を迎え）新しいスタートを命じられている気がする」とコメントをしていました。附設で学んだ時期はまさに「青春」であり、「青春とは人生の或る時期を言うのではなく、心の様相を言うのだ」とはサミュエル・ウルマンの詩の書き出しで、これも世良先生の授業で教わりました。

皆さん、「今日が人生で一番若い日」です。そして、不易流行（変わらないものと変わり続けるもの）とは松尾芭蕉の言葉ですが、附設高校の伝統を想い、佳き日本のために若き精神を持ち続けられますよう、皆様のご健闘を祈ります。

最後に。学食の肉うどんの「肉」が大好きだった私は、「この肉をご飯に載せてください」と厨房の方にお願いし、程なく「牛丼」メニューとなりました。私のたったひとつの青春の爪痕です。

「深海魚」と「親業」

柳文治（29回生）

小郡市から西鉄大牟田線で通う自宅生で、今はなき補習科から熊本大学に進学し、熊本市内で麻酔科の勤務医をしています。私の三男（65回生）は中学・高校と寮生活で、親子で合計10年間、中島健治先生にはお世話になりました。愚息は、学業不振での呼び出しはなんとか免れて卒業したものの、駿台福岡校で二浪してもどこにも受かりませんでした。三浪目が決まる頃、私は、行動変容を促すコミュニケーションスキルの一つ「動機づけ面接（以下MI)」に出会い衝撃を受けました。「MIには含まれないこと」を私はずっとやっていたからです。それは、警告、脅し、非難、ラベル貼り、評価、同情、保証、指示、説得、無許可の助言です。

MIを学ぶ以前の私なら、三浪目は無理やり別の予備校に入れていたところですが、もう一年、駿台に通いたいという愚息の希望を許しました。三浪してもどこにも合格しませんでしたが、MIのスキルの練習台として対話を続けたことで、愚息の「動機づけ」には成功していたようです。コロナ禍の四浪目は、北九州予備校熊本校に自宅から通うことになりました。

苦戦する愚息が高２の時から私が続けていた“お勤め”を、毎朝５：50からふたりで続けました。“お勤め”とは、瞑想10分に続いて、太陽礼拝（ヨガ)、体幹筋肉トレーニング、合計40分です。睡眠時間は、６時間半を確保していたので、四浪目がいちばん寝る時刻が早くなったそうです。愚息は附設で、岩松博史先生から「毎日、普通の生活を続けること。試験中も、家の手伝いを続けること」、どなたか分かりま

せんが「明日も続けられる負荷に抑えておく、慣れたら負荷を増やす」と指導を受けていました。これらを私は「努力を生活習慣にすること」と解釈しています。愚息を何とかしなければと読み漁った書籍は、『マインドセット』キャロル・S・ドゥエック著、『親業』トマスゴードン著などで、中でも、『精神療法の人間学－生活習慣を処方する－』井原裕（29回生C組）著は、生活習慣の大切さを説いてあり、感激しました。

愚息の苦戦がきっかけで始めた瞑想とMIは、私達の人生を変えました。大谷翔平選手を育てた佐々木洋監督は、「親がどんな言葉を子どもにかけているか、親の考え方や育て方で子どものマインドはかわり、伸びしろに差が出る」と。四浪の末、やっと附設高校の廊下に３枚の愚息の名札がありました。睡眠時間を確保して起床時刻を一定に保つなど、生活習慣を整えることは、心とからだの健康ばかりでなく、目標達成にも大切だと実感しています。

The Fool on the Hill
～丘の上の愚か者～

桑野啓（31回生）

昨年の還暦同窓会の折、新校舎の思考廻廊にかかる31回生の記念陶板「Fools on the Hill」を見上げつつ、私はあの頃の、新築のにおいのLL教室で聴いた曲を思い出していた。英語のM先生が録音してくれるカセットから流れ出す、地球の自転を独り見つめる「愚か者」の物語と、物悲しくもどこかおどけたメロディ。ぼくたちの根っこに、それらはいまも深く刻まれているようだ。

あの頃の教室には、演劇や歌、タイプライティング、作文、実験で学ぶ授業があった。だから遊びと学びの境界は小さな頃みたいに溶け合い、ぼくたちはゲームだって禁止された悪戯だってそれなりに真剣だった。青春の底から沸いてくる好奇心や葛藤が一気にほとばしるような、解放の学び。その余熱は、実は受験勉強へさらには仕事へも接続していたのではないか。ぼくたちは、一生の「宝物」を受け取ったのかも知れなかった。

その「宝物」を探し続けていたからか、企業人として20年働き「見るべきほどのことは見つ」と見栄を切り、私は大学院での学び直しの後、2008年に附設に戻り社会科教員になった。新人として迎えた１年目、私は中１冬の鹿児島校外研修のすべてを託され、計画には最新の学習科学を応用して臨んだ。研修では、就寝時間後も議論を止めない生徒もいて、教員部屋に突然現れ「アドバイスください」と訴えてくるほど、真摯な学びが自発していた。私は母校でつながった「宝物」のバトンに感動していた。

しかし、それとは別の光景もあった。友人の何人かは、私が母校の教員になったと聞いて入試突破のコツを真剣に訊ねてきたが「あの頃の宝物はまだあるか」、そう聞いてくる者はいなかった。こんなこともあった。かつて「宝物」を手渡してくれた恩師と差し飲みした夜、彼は学校で孤独に奮闘していたことを教えてくれた。誰よりも生徒のハートを掴んでいた恩師にしてそうか。巨大システムを前に自身の企てを蟷螂

の斧のように感じた。若気の至りもあり、私は５年で母校を後にした。

現在、私は首都圏の丘の上にある付属高校で、世界標準の国際バカロレア教育を教えている。「愚か者」として巨大システムの街を見つめながら、しかし今は世界中の仲間とともに「宝物」を手渡し続けている。いつかまた、宝物を追い続ける次の「愚か者」と丘の上で出会える、そんな未来を想像しながら。

附設OBプロジェクトとしての「やさしい日本語」

吉開章（33回生）

「やさしい日本語」とは、外国人住民などにも伝わりやすいよう語彙や文法を調整した日本語のことです。電通勤務だった私は、日本語学習者が多い韓国・台湾・香港からのリピーター観光客には英語ではなくやさしい日本語でおもてなしする「やさしい日本語ツーリズム」企画を立案し、2016年故郷柳川市の事業として立ち上げました。それまでの「防災減災」と「情報保障」の領域から「観光」への展開は全く新しいものと注目され、この成果で私は柳川観光大使を委嘱されました。柳川の事業をきっかけとして2024年末までの講演は450回を超え、メディアにも多数掲載されました。関連書として『入門・やさしい日本語』（アスク出版）・『ろうと手話　やさしい日本語がひらく未来』（筑摩選書）・『やさしい日本語３文トレーニング』（駒草出版）を出版しています。このプロジェクトは附設OBとの縁に支えられてきました。この企画が社内で通ったのは当時副社長の17回生中本祥一先輩のおかげでした。また電通から独立されたばかりの29回生横尾嘉信先輩に企画初期段階から映像制作に参画していただきました。同じ頃当時観光で博士論文に取り組む23回生の森直人先輩が同部署に配属となりアドバイスを受けました。福岡ではデザイン事務所を経営する同期萩尾裕二君が全面的に協力し、同じく同期で山口油屋福太郎現副社長山口智太郎君の事務所で外国人社員と日本人社員が学び合う研修を映像化しました。さらに横尾先輩の同期で当時セブン銀行勤務大口智文先輩の紹介でセブン-イレブン・ジャパンの多文化共生の取り組みと連携しました。2022年には附設の進路講座でやさしい日本語の話をさせてもらう機会を得ました。また42回生の楠田大蔵太宰府市長や19回生で里村智彦八戸聖ウルスラ学院高校校長他の招聘で講演もしています。『やさしい日本語３文トレーニング』の帯には同期で俳優・弁護士の本村健太郎君がコメントを寄せてくれました。私は電通を早期退職し、2023年に（一社）やさしい日本語普及連絡会を設立してやさしい日本語の普及に一生を捧げています。多様性のある社会でやさしい日本語は必須のアイテムです。さらに多くのOB/OGが集ってくれることを願っています。

75周年誌作成に寄せて

野原諭（34回生）

私は、現在、経済産業省の商務情報政策局長として、半導体、AI、蓄電池などのデジタル産業政策を担当しています。中央省庁では、１～２年ごとに人事異動する人事慣行が一般的ですが、今回は、４年目に入っています。

日本経済は、「自動車一本足打法」と呼ばれるように、自動車産業に支えられた産業構造でやってきました。しかし、次世代に豊かな日本を引き継ぐためには、産業面で自動車に続く基幹産業も必要です。我が国を支える柱となる産

業をもう一つつくりたい。その一心で、半導体政策を推進しています。

具体的には、世界一の半導体メーカーである台湾のTSMCを誘致し、九州を半導体産業の世界的な集積拠点にしようと取り組んでいます。雇用創出１万人、熊本県の一人あたり雇用者報酬が年38万円増加する、という雇用・賃上げ効果や誘致に要した財政資金（設備投資補助金）を、10年程度で国・地方の税収として回収できるという税収効果が見込まれています。人材育成にも力を入れています。

また、世界最先端の半導体の製造工場を北海道に建設している日本の半導体スタートアップ・ラピダスを、日本政府として全面的にバックアップしています。半導体・AI・蓄電池政策では、米国、欧州、カナダなど各国政府幹部や企業トップと、日々、協力・交渉しながら、様々なプロジェクトをすすめています。ラピダスのパートナーである米IBM社で、立ち上げ当初からともに取り組んできたダリオ・ギル副社長は、私の重要な友人ですが、トランプ大統領からエネルギー省次官に指名され、新政権でも、日米半導体協力を推進していこうと確認しています。

入省以来、20歳代後半で、家電リサイクル法（TV、エアコンなどの排出時にリサイクル料を徴収し、リサイクルする制度）を立案。30〜40歳代は、２人の大臣に秘書官として計５年間仕えました。経済財政諮問会議を舞台に羽田空港の国際化に取り組み、総理官邸に関係省庁の精鋭を集めた交渉チームを統括して、TPP・環太平洋パートナーシップ協定交渉妥結に取り組みました。国家公務員は、近年人気が低下していますが、国の針路を変えられる大きな仕事のできる、やりがいのある職業です。附設で学んだ自主自立の精神で、当時の世良校長先生がよく訓示されていた古典を判断の道しるべに、日本経済を復活させ、次世代に豊かな日本を引き継ぐために奮闘しています。是非、お力をお貸し下さい。

附設とバンドと音楽と

脇義典（36回生）

高校時代はまだ音楽はやっていませんでしたが当時流行っていたバンド活動に関連して思い出すことを一つ。実行委員の端役として学園祭の準備をしていたとき、講堂でのバンド演奏は今年から地下の技術室に移すと学校から通達がありました。父兄会からそんなものを講堂に出演させるとはけしからんと横槍が入った由。新入生の頃からそれを楽しみに待っていたバンドの連中が納得しないからこれは譲れないと委員で強く反発したところ、堀畑先生がそんなに大事なことならただ不平を言うだけじゃなくて誠意を以て学校を説得してみたらどうだと仰いました。そこで何度もミーティングを重ねたあと最終的に「父兄会が問題としているのはこれが受験結果に響くかどうかという一点なのだから、成績は絶対に落としませんという誓約文を生徒全員から集めてはどうか」とわたしたちなりに提案したところ、先生はそれで満足されたようで学校側に話を持ち込んでみようと仰いました。しかしながら結果は不首尾に終わり、次のミーティングで先生は「お前たちが諦めずに説得を試みたことを評価するし個人的にはそれを汲んであげたいと思っている。だが、事情があってそれがどうしても出来ない。だから目をつぶってここは学校の方針に従ってくれ」と言ってわたしたちに頭を下げてお願いされたのでした。学校にしてみれば取るに足らない些事にこだわっているわたしたちの話に辛抱強く耳を傾け最後まで真剣に相手をして頂いたことがとくに

印象に残っていますが、ちょっとした出来事の中にも当時の学校の気風が何となく表れているような気がします。わたしが音楽を目指そうと思ったきっかけはその学園祭が終わった後の夏休みに同級生と志賀島までジャズフェスティバルを聴きに行ったことです。マイルス・デイヴィスを聴いてこんなことをやって暮らしている人がいるならば自分もそれをやりたいと独り密かに思ったわたしは卒業後上京して実際に楽器を始めたのですが、それがちょうどバブル真盛りの頃で仕事に恵まれたのが幸か不幸かそのまま今に至っている次第です。思い返すとわたしの経歴はあのバブル景気なくしてはあり得ませんでした。馬鹿騒ぎだったとはいえあの自信に満ち溢れていた頃の雰囲気を大学生として体感できたことは自信を喪失した近年の我国の状況を考えたときある意味ラッキーだったかもと感じるこの頃です。

70年を経て蘇った幻の初代校歌と男女混声三部合唱校歌の誕生

丸山剛弘（37回生）

私は1989年３月に附設高校を卒業した後、同窓会世話人を務めることも、同窓会に参加することも殆どなく、三井住友海上という保険会社で淡々とサラリーマン生活を送っていたのですが、2019年夏に同期から依頼され、2020年度東京支部総会の幹事長を拝命しました。想定外の出来事でしたが、やるからには世代を繋ぐ心に残る同窓会を開催しよう、それには「校歌」をテーマにするのが一番だろうと思い立ち、2020年１月、１回生隈正之輔先輩へのインタビューを皮切りに、校歌の調査を開始しました。校歌制定から約70年も経過しており、調査は困難の連続でしたが、10回生の古賀暉人先輩や西原和美先生など過去の附設を良く知る先輩・先生方、作詞の大石亀次郎先生、作曲の滝田卯夫先生（初代校歌）、藪文人先生（現校歌）のご遺族・教え子など、校歌に携わった多くの方々からお話を伺うことができ、４拍子の初代校歌は歌われず僅か３週間で現在の３拍子の校歌に変更されたこと、現校歌の原譜が紛失し生徒の歌声から耳コピで楽譜が再現されたことなど、様々なことが明らかになりました。また、調査の過程で、藪文人先生の明善高校時代の教え子の作曲家田村徹先生に、楽譜紛失事件のお話が伝わったことがきっかけで、田村先生の編曲による、現在の男女共学の附設に相応しい混声三部合唱版校歌の誕生にもつながりました。そして2020年８月２日、石橋文化センターで開催された附設高校合唱部のコンサートにて、幻の初代校歌（作曲70年目にして初演）と、田村先生編曲による混声三部合唱の校歌が、40回生で附設教諭の兼行孝幸先生の指揮で披露されました。残念ながら、2020年度東京支部同窓会はコロナ禍で中止となったのですが、校歌を調査したことで、初代校歌にも光が当たり、校歌にまつわる様々なエピソードや混声の新たな校歌を後世にも残すことができたので、とても良かったと思っております。37回生同期をはじめ、調査・演奏にご協力頂いた多くの関係者の皆様に、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。詳細は「校歌のルーツを訪ねて」という文章を同窓会ホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。（掲載場所：附設高校ホームページ＞同窓会＞支部便り＞2020.10.10　70周年記念特集「校歌のルーツを訪ねて」）（「附設　校歌のルーツを訪ねて」で検索）

今、北九州市長という挑戦

武内和久（38回生）

思い返せば、過望だった附設中学入学から四十余年、私の礎が母校で象られたことは言うまでもない。校歌の『我等の大使命』という言葉に心たぎり、『和して同ぜず』の文字の前で拳を握り、世良校長（当時）の『感謝』の教えを反芻し、質朴な学び舎にて、恩師や学友たちの明朗さと団結に囲まれ、私は社会に船出した。

進学後、大東京に面喰らいながら、二十歳の頃、『鄙の論理』という一冊の本に衝撃を受け、「いつか必ず、九州の地から日本を変える」と志を固めた。その後、中央官庁（厚生労働省）、米国や英国への赴任、外資系企業、メディア、アカデミアなど、「挑戦」を繰り返してきた。志を成す為に必要な見識と胆力を獲得したかった。官と民、日本と世界、知れば知るほど、世の中の懐は広く深く、その度に自らの不明と浅慮を突きつけられるばかり。新たな世界に飛び込む度にゼロから学び直し、幾多の失敗も挫折も経験した。それでも常に、「もっと自分を向上させたい」「必ず世の役に立ちたい」と錬磨を重ねてこられたのは、附設時代に静かに培った「反骨」の精神ゆえではなかったかと、今なら、思える。

政治への途もまた険しかった。初挑戦の福岡県知事選では、再起不能と思しき大敗北。路上で幾度も唾棄され、罵倒された。しかし、その後、北九州市民はじめ皆さんの温情と励ましで、更に志は固まった。今、北九州市政を預かる身となり、少子高齢化や産業構造の転換など、困難な課題に体当たりで挑む機会をいただいた。まさに、大志を成すとき。人類の課題に先んじて挑める境遇に心を奮い立たせ、日本と世界の未来を明るく照らす街づくりを、北九州市からやっていく。また、それだけの地力と熱量を持つ街でもある。

今、若者や子どもたちは、我が国の未来を信じ切れず、虚栄心や嫉妬渦巻くＳＮＳに囲まれ、「一歩踏み出す勇気」を持てなくなっているとも聞く。夢を語れば笑われて、行動を起こせば叩かれる。若者が失望すれば国は必ず衰える。大志を抱き、挑戦し、挫折しても何度でも立ち上がれる、それを周りが応援する。そういう世の中を遺すために、私たちの世代が、その証を示し、バトンを繋ぎたい。私自身、最期は「空っぽ」になるまで全力で挑戦を続ける。母校や学友たちへの感謝を胸に。それが五十路を行く私の赤心である。

成功と失敗の彼岸

孫泰蔵（39回生）

「成功も失敗も、もうどうでもいい」――最近、そんな思いが心の中に強く芽生えています。かつては結果ばかり気にし、成功を追い求めたり失敗を恐れたりしていました。しかし今では、「大切なことは成功や失敗の彼岸にある」と感じるようになったのです。

これは、私が投資家兼エグゼクティブ・プロデューサーとしてサポートしている世界的なアニメーションスタジオ、Tonko Houseの堤大介監督とのある会話がきっかけでした。ハリウッドでの大作の制作が決まり、資金計画について皆がシビアな意見を交わし合う中、意見を求められた私は「作品の成功はおろか、究極的には、作品が完成しなくてもいいとさえ思っている」と口にしました。驚くかと思いきや、堤さんがその言葉に深く共感し、「ますます頑張ろうという気持ちになりました」と応じてくれたのです。これを資金提供者と制作者のやりとりとし

て聞くと非常識な会話かもしれません。しかし、このやりとりには、ものづくりの本質が宿っていると思っています。作品やプロジェクトに込められるべきものは、結果を越えた「無我夢中」の熱意なのです。

この感覚を端的に表しているのが、建築家・安藤忠雄さんの言葉です。

「人間にとっての本当の幸せは、光のもとにいることではないと思う。その光を遠く見据えて、それに向かって懸命に走っている、無我夢中の時間の中にこそ人生の充実があると思う」

振り返ると、私は成功に執着しすぎて、過程の躍動を見失っていました。しかし、経験を重ねるうちに「成功も失敗も、ある時点で時間をスライスして撮ったスナップショットにすぎない」と気づきました。

物理学者のアルベルト・アインシュタインは、相対性理論をユーモラスに例えています。「熱いストーブに触れる一分は永遠のようだが、可愛い子との一時間は瞬く間だ」と。時間の流れ方は人それぞれで、情熱を注いだ時間は飛ぶように過ぎ去ります。それゆえ、無我夢中で過ごす時間が多ければ多いほど、人生の時間は「無限」にも感じられます。人生は死ぬまで、いや、死してなお続いていく。そんな中、結果という「あるひとつの状態」に固執したり一喜一憂したりする必要はありません。

「成功も失敗もただの一瞬にすぎない」という考えに至った今、私は確信しています。状態の遷移こそが人生であり、無我夢中で挑み続ける姿勢こそが生きる意味なのだ、と。

ローカルはインターナショナルに通ず

中尾新太郎（40回生）

附設高校を卒業して33年、私は現在、順天堂大学で眼科医として勤務しています。順天堂の歴史は古く、江戸時代後期の1838年（天保９年）に両国橋の薬研堀に蘭方塾を開いたのが始まりとされ、医学校として180年以上の歴史がある大学です。「仁」を学是とし、その理念は司馬遼太郎著『胡蝶の夢』やテレビドラマ『JIN-仁-』にも見ることができます。さらには三無主義（出身校・国籍・性別による差別がない）を掲げ、医学教育への注力などから2024年世界大学ランキングでは我が国の私立大学で１位にランキングされました。

順天堂眼科学教室は、レーシックにつながる屈折矯正手術、わが国でのコンタクトレンズ開発、日本初のアイバンクなど、我が国の眼科の礎を築いてきた歴史があります。近年、眼科医療は急速に進歩していますが、不治の疾患もあり、超高齢社会を迎え眼の疾患は増加傾向にあります。これらアンメットニーズに対して、我々はResearch for Patientsを掲げ、患者さんに還元できる研究を目指し、医療機器や新規治療法のシーズ開発に約100名の若い医局員とともに取り組んでいます。眼科における手術ロボットは高い精度が要求されますが、私が開発に携わった眼科手術ロボット（OQrimo、リバーフィールド社）は既に臨床応用され、実際の手術で使用しています。また個別化医療に向けた眼科用スマホアプリ開発にも取り組んでおり、社会実装間近です。勤務する順天堂医院はお茶の水駅近く、外堀神田川に面した都心に位置しており、私の専門である網膜硝子体・白内障手術はじめ多くの患者さんをご紹介いただいています。また静岡、浦安、練馬、江東高齢者センターと、特色ある分院があり、日本で最も多い眼科手術を行っている大学病院の一つです。

北九州小倉生まれで久留米を経由し、大学は鹿児島、そして長らく福岡で眼科医として働い

ていましたが、ローカルはインターナショナルに通じることをモットーに今後も患者さんにとっての“最後の砦”として、眼科医療の発展に貢献したいと願う毎日です。

附設時代からつながる家庭医への道

草場鉄周（41回生）

附設を巣立って長い時が過ぎた。歴史や日本文化の濃厚な香りに誘われて、古都京都の地で充実した医学生としての生活を過ごし、不思議な縁で北海道にて医師としてのキャリアを歩み始め、ふと気づいたら四半世紀が過ぎた。ただ、思い返すと、附設中高6年間の経験の中で人間としての大切な成長の種は確実に蒔かれていたことに今気づく。

中学校では「太宰府防衛施設の研究」というテーマで太宰府を防衛する大野城、基肄城のフィールド調査を行い、文献と遺跡から過去が浮かび上がってくる楽しさを実感。高校では恩師が紹介する膨大な書籍の中から養老孟司の『唯脳論』に出会い、人間の心と脳の間の一筋縄ではいかない関係性の神秘性に引き込まれた。

私が今医師として実践する家庭医療は、医学の中でも最も現場、つまりフィールドに近い領域である。医学書に書かれた知識を病院の中で応用するのが多くの医療分野の基本姿勢だが、家庭医療は病院の中だけでなく患者の住まいや福祉施設にも出向いて、住民や患者の生活に近いところで診療を展開し、そこで見出した複雑な課題をどのようにして解決するべきか分析し理論を構築していく。これは歴史調査の姿勢そのもので実にスリリングだ。

また、家庭医療の現場では様々な症状を持つ患者が訪れるが、必ずしも狭心症や肺炎のような診断がつくとは限らない。時には家庭や職場、学校で生じたストレスがめまいや動悸といった症状として表出することもある。医学では伝統的に心身を分離して病気を分析する傾向が強いが、今や神経免疫学なども進歩し、心が脳を動かし、脳が身体を動かすことも当たり前の事実になりつつある。身体と心を分かつことのないアプローチは高校時代に培った心への飽くなき関心が原動力である。

ただ、こうしたつながりは決して意図されたことではなく、当時無我夢中で取り組んだことがもたらした結果に過ぎない。対価の見えないテーマに一生懸命に取り組めるのが若者の特権であり、それは後に大きな花を咲かせる肥料になるのだ。

北海道の附設会には大先輩や年齢の近い同輩だけでなく、20代、30代の若手の後輩も参加してくれる。先が見えず不安に駆られる彼らに「今を懸命に過ごしても大丈夫。いつかそれは糧になるから！」とエールを送る自分に、改めて附設で良かったと感じる。

附設での体験が今の私を形づくっている

孫大輔（42回生）

附設での中高6年間は、私の記憶の中で光と闇の双方を含んでいる。暗い青春時代。それとともに、確実に今の私を基礎づけるものがそこで培われた。中高を通じて基本的に帰宅部であった私は、集団行動が苦手で、人とうまく自分を合わせることが不得手だった。高校になり、『東大理三』という本に感化された私は、猛然と自分の勉学の方向性を見定めた。医師になるということであった。

高校時代、私に決定的に影響を与えた二人の教師がいる。国語教師の丹生秋彦先生と西原和美先生である。そのことは医師としての私の礎

が理数系の学問ではなく、人文学の知によって支えられていることを物語っていると思う。丹生先生が三島由紀夫の「花ざかりの森」の文章を紹介したときの授業や、西原先生がヘーゲルの弁証法（アウフヘーベン）を教えてくれたときのことは昨日のように思い出す。

平成12年に医師となり、腎臓内科医を経て、現在私の専門は家庭医療（総合診療）という領域である。家庭医療学（family medicine）はその基礎に人文学の知見を含んでいる。人間を単なる臓器・組織の集合体とみるのではなく、生物・心理・社会的な総合体とみる医学である。例えば、うつ症状を抱えてやってきた患者に対して、私たちはその患者に「うつ病」という実体があるかどうかという実証主義的アプローチではなく、どのようにその人に「うつ症状」が現象しているのかという構成主義的アプローチをとる。もちろん医療技術に大いに頼るところはある。しかし、医療の本質とは畢竟、人間の苦悩をいかに理解し癒すのかということであり、また人間存在の意味を共に考えていくところにあると考える。その意味で、私の基礎を築いたのは、やはり附設のあの暗く長い時代だったと思い返すのである。

医系技官のお仕事

諸冨伸夫（44回生）

霞が関で働く国家公務員で医師の資格を持つ、いわゆる医系技官は300人程度いて、約30万人いる医師の約0.1%を占め、いわば絶滅危惧種のような存在です。

久留米大附設高出身の厚生労働省職員は10人程度、霞が関全体では100人を超えますが、現役の本省採用（いわゆるプロパー）医系技官は、私の他は33回生で北海道厚生局長の重責を担っている一瀬篤さんだけです（もし他にいたら、御連絡ください）。

医系技官として日本の公衆衛生の向上及び増進に寄与すべく、日々微力ながら全力を尽くしているところですが、最初から医系技官を目指していたわけではございません。

まずは、他にも同様の例があるかと存じますが、父親が消化器内科医だったので、高校卒業後は内科医を目指して産業医大に進学しました。

産業医大は産業医の育成を主な目的としている大学ですが、入学直後に微生物学に興味を持ったこともあり、卒後10年間は臨床医、研究医（微生物学）、産業医を務めていました。

産業医大が政策目的大学だったこともあり、定期的な人事交流制度が確立していて、当初は人事交流者として労働衛生課に派遣されました。

大学に戻ることが既定路線でしたが、修羅道の世を救うべく、平和の偉業となることを信じて、採用試験を受け直して、本省採用者、いわゆるプロパーとして行政職員を続けることといたしました。

その後省内では医療安全、精神保健医療福祉、医療指導監査業務を担当し、地方自治体（大阪府と秋田県）にも出向しました。

特に秋田県庁では、世界最先端の少子高齢社会を目の当たりにし、また健康福祉部長として新型コロナウイルス感染症対策の陣頭指揮を執る等刺激的な日々を過ごしました。

2024年７月からは、法務省へ出向し、刑事施設等の医療である矯正医療を担当しています。刑法の改正による115年ぶりの刑罰の種類変更により、2025年６月から拘禁刑が導入されるという時代の変革期を迎え、志を新たにしているところです。

久留米大附設高と産業医大の建学の精神を胸に、為他の気概をもち、人間愛に徹し、生涯に

わたって哲学する医師となるよう、誠実に努力を重ねてまいりますので、久留米大附設の卒業生をはじめ関係の皆様におかれましては、引き続き御指導御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

パスケースの中の言葉

倉光徹治（46回生）

大学は建築学科に進んだ。

父親がインテリアの会社に勤めていたこともあり、小学生の頃から建築というものに惹かれていた。ようやく教養らしきものの吸収を始めた頃、附設の美術準備室で安藤忠雄の作品集に出会い、図書室ではコルビュジェの著書に感銘を受けた。大学では意匠を専攻した。指導教授は日本を代表する建築家だった。厳しかったが情に厚い知識人だった。そのまま建築の道に進むと思っていた。自分以外は。

私はコルビュジェに関する卒論を提出し、広告の道へと進んだ。

私の憧れた建築は二十世紀で終わっていた。そのことに気づいたのは二十世紀最後の年だった。大学三年生の夏。

同じ年、私は広告に出会う。社会を舞台に行われるイメージのゲームである。企業、商品、活動、個人、国家、あらゆるもののイメージコントロールを引き受ける。主に言葉と映像のデザインで実行され、時間とともに醸成してゆくものはブランディングと呼ばれる。メディアを通して人々の意識、無意識下に刻まれ、統計学的に評価される。人間の意識と関係する面白いデザインだと思った。建築に近しいものを感じた。

大手広告代理店に就職し、CMをつくる職種についた。七年を経て、独立した。日本で初めてクリエイティビティのみで対価を得る会社に参画。人との出会いに恵まれた。

四半世紀近く、国内外のさまざまな企業や組織の広告をつくってきた。それらは時代の泡沫として輝き消えた。いま、世界にはイメージが溢れ、残像も儚い。イメージをめぐる変動は激しい。これからも人は人を動かす言葉や映像を生み出せるだろうか。正直まったく分からないが、興味は尽きない。

うまくいくかどうか分からなくなった時、思い出す一節がある。それは大学受験に臨むとき、附設の先生から皆に配られたお札に書かれた言葉で、受験が終わってからもずっとパスケースの中に収まっている。

「きはまれば、またよみがへる力あり。附設はパワーだ。」

これから受験本番に挑む生徒になぜ「よみがへる」という言葉が贈られたのか、当時は謎だった。だがそれは受験に向けた言葉ではなかったのだと思う。

おそらくそれは、きっと、その後の長い人生に向けた言葉だったのだ。

感染症という小さな窓から眺めて

岡本耕（47回生）

2019年３月に米国シアトルで開かれたHIV（ヒト免疫不全ウイルス）関連の国際学会に参加した帰りの飛行機で「ボヘミアン・ラプソディ」という映画を見ました。イギリスのロックバンド・クイーンのフレディ・マーキュリーを描いた映画です。映画の主題ではなかったのですが、彼の人生とともに、HIV感染症が不治の病であった1980年代の様子が描かれていました。1981年に米国ロサンゼルスで複数の若者にカビによる稀な肺炎がみられたことが報告され

ました。謎の病は、あっという間に世界に広がった数年後に原因（のウイルス）が見つかり、その後10年余り経て初めて治療薬が開発されました。１日に１錠の飲み薬でほぼ生活習慣病に近い状況になるまでに約30年間でした。2013年から感染症を専門とする医師として米国で研修していた時、指導医だった先生はその30年を自分自身のキャリアと重ねて私に話してくれました。

中国で発生した原因不明の肺炎がニュースになった2020年１月、今振り返るとほぼ確実に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）であったろうという患者さんが私の勤務する東京の病院を受診されました。当時はまだ治療や予防はおろか診断のための検査もない状況で、感染症医の私も自分自身が感染する恐怖を感じながら診療にあたりました。COVID-19では、感染者や医療従事者への偏見や攻撃、原因となるウイルスの発見、診断検査・治療薬・ワクチンの開発・普及というHIV感染症（まだ有効なワクチンは開発されていませんが）では30年の間に起きたことが３年の間に起きました。指導医から聞いた話を自分の中で反芻しながら、感染症医として何をすべきか自問自答した時間でした。

COVID-19やエボラウイルス感染症、新型インフルエンザなど世界で流行する感染症があると一般の方の注目を集めますが、普段から感染症はもっともありふれた病気の一つです。全世界の人々が現在進行形で目撃している気候変動、都市化・人口動態の変化、人の往来の増加は、これまでとは異なる感染症の分布や頻度の増加につながると考えられています。医療現場の片隅で感染症という小さな窓から世界を眺めている今日この頃です。

自由と責任のバランス
―附設に学んだ「ちょうどいい」冒険心

宮田大督（48回生）

はじめまして。今はITベンチャー界隈、具体的にはNTTから楽天、メルカリ、現職の令和トラベルという旅行系スタートアップまで、興味の赴くまま渡り歩いてプロダクトマネージャーという仕事を楽しんでいる宮田といいます。附設75周年、本当におめでとうございます。心から祝福したいです。改めて振り返ってみても、やっぱりすごくいい学校だったなと感じます。

どこがかというと、「丁度いい自由さ」とでもいう雰囲気。当時「自主自律の上に立つ自由」と言われてて、当時は多分割と聞き流してた気もしますが、改めて振り返ると「自分で考えて、自分の価値観に従い自由に生きたらいい。ただし自分を律するのが前提」という厳しさと信頼を、押しつけがましくない形で注いでくれたことに気づきます。教訓じみたことを言う先生はほとんどおらず、どの先生もほどよく個性的で、「こういう生き方も面白そうだな」と自然に背中で語ってくれて影響をうけました。

また「どっちでもいいけど、やりたいならやってみたら」というぐらいの自治的な活動が多かったのも印象的です。私が所属していた済美委員会では、職員室の受動喫煙をなくそうと動き、わら半紙のビラを職員室で配ったりしてて、今考えるとなかなか大胆だなと思いますが、そんなに明確に止められた記憶もなく、かといって奨励された記憶もなく、不思議な距離感で生暖かく見守られていたような。

その後の人生は、冒頭で書いたように、自分の興味中心に、ただし冒険しすぎず、ふわふわ生きてきましたが、元をたどると附設のころの

「気になったら自由にやってみよう（ただし責任は取れるように）」という考えの延長線上な気がします。

最近は生成AI領域の新技術に触れながら仕事をしていて、世の中がガラッと変わる気配を感じたりしますが、こういう時は常識にとらわれることも、逆に反常識に走ることもリスクが高いと感じます。どんな状況でも、マイペースに「丁度よく自由」を保つのが一番強いんじゃないかと。

とはいえ、何かに心酔していたほうが楽な部分もあるのは事実です。でも附設で過ごしたあの時間が「それでいいんじゃない？」と支えてくれる土壌を作ってくれた気がします。今後も、自分に正直にほどよく自由に色々試しながら進んでいきたいなあと思ったりします。

附設75周年に寄せて

永田向生（51回生）

この度は附設高校75周年おめでとうございます。この度寄稿させていただきます51回生の永田向生と申します。久留米生まれで大牟田より毎日30分の電車＋バスで高良山下の学園に通学していました。現在は２年のアメリカ臨床留学を終えて、2024年10月から東大病院で脊椎疾患の手術をしています。

留学話を盛り込んでほしいと依頼が来ました。最初の手続きはall Englishで（当たり前）とても面倒でしたが、日本でやっていることと同様に回診して手術して、デスクワークして、論文書いて、と地味な事が多いのです。ネタになる話としては、銃創を診た、drug userで注射器から血行性に感染して背骨が溶けた人をたくさん診た、力士より太ったアメリカ人を手術した、そんなところでしょうか。

なんで留学したのか。自分はこの志望動機の言語化が苦手です。一言で言えばこのままの自分でいいのかという「焦燥感」を常に持っていたから、でしょうか。東京大学の整形外科という団体に属して、いくつかの病院を回ってたくさんの手術手技を学んで、大学院で基礎実験も行なって学位も取って、とステレオタイプの「あるべき医者像」みたいなものに取り憑かれていたのかもしれません。しかし決められたレールに居続けては決して先輩方を超えることはできないし、他とは違う環境に身を置く必要性を感じていました。

留学先だったKY州のルイビルという街は、脊椎外科では有名ですが、アメリカの中では田舎です。久留米も田舎ですが、東京大学だって学問の世界では田舎です。臨床医学界はアメリカや欧州のエビデンスで動いています。その中で日本からも研究を発信し、プレゼンスを高めていかないと、資源に劣る日本には未来がないのです。そうか、日本国民としての焦燥感が自分をアメリカに駆り立てたのかもしれないですね。そこに行くために、幾つもの英語の試験や論文作業があったのですが、眠い目を擦って努力できたのは、附設での鍛錬のおかげかもしれません。

附設最大の思い出はやはり男く祭でした。人と人がぶつかって。夜遅くまで準備して。お互いが切磋琢磨して。それはその後の人生の原動力になったと思うし、これから高３を迎える皆さんは、そんな熱い日々を過ごしてほしいと思います。そして附設の卒業生が、在校生が、さらに世界に向けて益々活躍することを願っております。

衆議院本館第一委員室から

神代康幸（53回生）

2024年暮れ、私は国会議事堂で衆議院予算委員会に陪席している。予算委員会に常に陪席される財務副大臣の秘書官として委員会全てにおいて私も座っている。時折、斜め前の席で本誌にも寄稿されている附設の大先輩が答弁者として準備している日もある。眼前では閣僚と与野党の議員が補正予算案を審議している。

つい半年前までは経営コンサルタントとして膝詰めで大企業・中堅企業の事業戦略支援をしていたわけで、実に大きな違いである。

その前も、お役所で法改正や各種政策立案、国際交渉、東京五輪やG7会合の裏方としてせっせと奮闘していた。

その隙間に、パリの大学院で学位を取得し、現地の研究機関で働いたこともあった。

久留米の片田舎を飛び出して色々経験させてもらっている。

今後もより広い経験をするだろう。

さて、この経験は何によってもたらされたのか。

おそらく野中町に自転車通学していた中学時代のぼんやりとした《直感》である。

今となっては当時の私に伝えたい、「その感覚・洞察は正しいよ。もっと自信をもって信じていいよ」と。

そして、より素質ある現在の中高生に一段と伝えたい。

若者に能力の片鱗が見えると周囲が色々と期待と少々の打算をもって、本人の心の声とは関係なく「将来はああいう方向がいい、こうなったらどうだ」とアレコレ勧めたり、それとなく仕向けたりする。まず無視してよい。

その理由はいくつかある。

・周囲より素質あるあなたの方が世の中の洞察に優れている可能性が高いこと
・これまで大人が生きてきた世界と若者が生きる今後の世界は、必ず経年変化が伴い異なるものであること
・国内外には知的刺激も、人との出会いも、経済的・社会的なインパクトもある仕事・生き方が多くあること
・一地方からでは、どれだけSNSで見ても肌感覚としてイメージがわく仕事の範囲に限りがあること

周囲の「親心」や「老婆心」から《直感》への反対や抵抗にあうこともあるでしょう。でも気にする必要なし。

考えを説明しても理解を得られないことも多い。これも問題なし。

周囲に気兼ねした結果、あなた自身が余計な苦労や遠回りを強いられることもあるはずです。やはりそっと聞き流してワガママになりましょう。

ぜひ《直感》と能力を信じて、エキサイティングな人生を共に送りましょう。

私もワガママになって更に新たな世界を切り開いていくつもりです。

魅力あふれるテレビの現場
～いまなお続ける財津和夫さんの取材～

川上雄三（54回生）

75周年おめでとうございます。様々な分野で活躍する附設生の姿を拝見しては、いつも刺激をもらっています。一方私はというとNHKでディレクターとして様々なテーマと向き合い、あっという間に13年が過ぎました。これまで『NHKスペシャル』や『クローズアップ現代』などの番組を制作、報道のディレクターとして阪神淡路大震災や九州北部豪雨などの災害や

「生理の貧困」などのテーマと向き合ってきました。苦しいことが大半でしたが、NHKの中にいる附設OBOGのみならず、附設時代のご縁にも助けられ、今の私があります。大阪、東京を経て、３年前にふるさと福岡に戻ってくることができました。

そんな私がいまライフワークとして取り組んでいるのが、TULIPのリーダーで同じ福岡出身の財津和夫さんの取材です。2017年のツアー中に大腸がんが判明した財津さん。「病から復活する姿を追いたい」と始まった取材は、今年で７年目に突入しました。その後もコロナ禍での闘いやTULIPのラストツアーなど節目に立ち会い、いまも丁寧に記録を続けています。毎年のように番組を放送させていただく傍ら、2022年にはこれまでの取材をまとめた新書『財津和夫～人生はひとつ　でも一度じゃない～』を執筆する機会もいただきました。附設時代は漠然と弁護士を目指していましたが、メディアへの憧れから選んだいまの道。普通に生きていたら手に入れられなかった体験の数々は私の人生の宝物です。一時期と比べ人気が落ち、社会の目も厳しくなっているテレビの世界ですが、たくさんの魅力が詰まっている現場です。

附設の学びが研究の原点に

橋本講司（55回生）

中学35回生、高校55回生の橋本講司と申します。現在、東京大学教養学部にて、教育と研究の両面で活動しております。

教育面では、東京大学の理系学部生が原則全員履修する基礎化学実験を担当しています。これから東京大学に進学される附設出身の後輩の皆さんへ――もし授業で私の名前を見つけたら、ぜひこっそり声をかけてください（ただし、成績に下駄を履かせることはできませんので悪しからず）。基礎化学実験は、一般教養用のキャンパスに設置される実験室とは思えないほど充実した設備のもとで行われます。毎回の予習は少し大変かもしれませんが、東大での新しい学びを楽しみにしていてください。

研究面では、遺伝子工学を活用し、生命システムを模倣しながらもそれを超えた新たなシステムを構築し、未来のバイオテクノロジーの創出を目指しています。この研究の原点となったのは、附設中学の生物の授業で出会った「セントラルドグマ」です。セントラルドグマとは、DNAという４種類の文字（ATGC）で書かれた生命の設計図が、細胞内の化学反応を司るタンパク質へと伝えられる仕組みを指します。現在では生物選択者が全員履修する基本的な内容ですが、私が中学生だった当時は、生物IIの教科書に記載され、大学受験で生物を選択する生徒だけが学ぶものでした。しかし、附設ならではの先進的な教育のおかげで、古賀直先生が中学生の私たちに、ほぼ全ての生物が有するこの精緻な生命プログラムについて教えてくださいました。当時の定期テストの問題内容や、この学期の定期テストで自分が105点を取ったこと（ボーナス点を含む）もよく覚えています。

現在、私はこのセントラルドグマの仕組みを人工的に拡張する研究に取り組んでいます。具体的には、DNAやRNAといった生命の設計図を、生物が通常利用しない新しい物質に置き換えながら、一方でそれらを遺伝子として機能させるための細胞のシステムをデザインしています。この技術を基に人工細胞を開発し、それを「細胞工場」として活用して薬やエネルギーを生み出せる未来を目指しています。いつか私が発見した新しい現象が、附設の授業で取り上げられる日を夢見ながら、これからも研究に邁進していきます。

附設高等学校での思い出

岩尾和紀（56回生）

この度附設高等学校が創立75周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。私が高校を卒業してから既に20年近く経過していますが、つい最近のように思えてきます。

私達の学年において、特筆することといえばやはり女子第一期生の入学でしょうか。といっても私は高校３年間男子のみのクラスで過ごしてきて、結局諸先輩方と同様に女性との接点は稀な高校生活を送っていました。同級生の女性に関しては一期生ということで注目度も高く、おそらく計り知れない苦労があったのだと思いますが、私はほとんど知ることなくのほほんと学生時代を謳歌していました。こうして筆をとると面白かった思い出が多く思い浮かんできましたが、大抵公序良俗に違反するような、とても紙面に掲載するのは躊躇われるエピソードばかりであり、これで私がどのような高校生活を送ってきたのかがとてもよくわかると思います。

その後私が教育実習で再び附設高校のお世話になっていたときも、特に雰囲気は大きく変わっておらずとても懐かしい空気で、心地よかった思い出があります。わずかな期間ですが教師の立場にたつと、授業もですがその前後の準備、試験やその採点など、先生方の苦労もしのばれ、多分自分もそれなりには迷惑をかけていたなと反省するばかりでした。教育実習以降は附設高等学校と関わる機会も減っていき、その当時の先生方もご挨拶が十分できないまま何人かは退職されてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいです。

結局その後教師にはならず、再受験し現在は医師として勤務をしていますが、学生や研修医にも多く同窓生がいて時々話をする機会があります。附設の話題で話が弾むこともしばしばで、今の学生もとても伸びやかに高校時代を過ごせていたことが伺い知れてとても嬉しく思います。

現在は校舎も建て替わり流石に私がいたときと雰囲気は多少なりとも変化していると思われますが（というより変わっていないと色々と問題でしょうが)、大元の精神は変わっていないものと思います。今後も附設高校が、更なる発展を遂げることを祈念して、結びの言葉といたします。

人工知能研究の最前線にあるもの

川上和也（58回生）

人工知能研究をはじめて10数年。当時は誰も興味を持ってくれなかったDeep Learning、言語モデルが生活や仕事の至るところに組み込まれていくのを目の当たりにして、嬉しいような不安なような、不思議な気持ちです。2024年は人工知能の理論的な研究と、たんぱく質の構造解析という応用的な研究にノーベル賞が贈られ、科学や社会への貢献が認められた意味のある一年になりました。

10年ほどでこれだけ広がった業界をみていて改めて感じるのは人の力、つながりの力です。人工知能開発というとコンピューターの裏で静かに行われているような印象もあるかもしれません。確かに人工知能そのものは数理モデルなのですが、実際の開発現場は色んな人が関わるとても人間的な場です。力量を証明したい研究者、起業家、次の Google / Facebook を逃したくない投資家たち、新興にリードを許さない大企業。たくさんのプレイヤーの野心が渦巻いて急速な技術の進歩と社会への応用の原動力になっています。

研究においても人のつながりの大切さにはいつも驚かされます。どの研究室の出身か、誰と仕事をしていたかは新しい仕事の機会をもらうときにとても重要ですし、新しいアイデアがでてくる場所に身をおくことができているかどうかは最新の研究をするのにとても重要なことです。みな同じように賢いはずなのに、新しいアイデアがでてくるのは同じような場所になってしまうのは、新しいアイデアの創発には人間的な要素が大きく影響しているからではないかと思っています。

アメリカのような起業、研究環境を日本に作ろうというような話がなかなかうまくいかないのは、こういった人間関係は一朝一夕にはできないからだと思いますし、これだけオンラインで勉強できるようになっても留学する意味があるのは人間関係にあるのだと思います。どんなに技術が重要なビジネスや研究も人間のやる気とつながりによってできているし、逆にいえばそういう関係に飛び込んでいくことで技術も身についてくるように感じます。

同窓会にもまだ知らない先輩、後輩がたくさんいらっしゃるので、久留米の懐かしい思い出をきっかけに繋がっていけたらと思っております。

孤独を楽しむ

鷲見久美子（59回生）

私は20歳で防衛医科大学校に滑り込み、現在は海上自衛隊で医官として勤務しております。この度、附設高校75周年記念誌に寄稿の機会を頂き大変光栄に思います。

附設で個性豊かな同級生とのびのび育った私にとって、防衛医大でのキャンパスライフは衝撃の連続でした。ラッパの音と共に６時半に起床し、５分で宿舎前に整列。点呼と体操から１日がスタートします。その後も掃除やゴミ捨てなど寮の雑用に追われ、なんとか教場に到着。指導官や上級生の目がない教場での時間が唯一の癒しでした。当時は体力向上のために運動部に所属することが義務付けられており、私は合気道部に所属していました。授業が終わると急いで武道館に向かい、みっちり稽古。稽古が終わると、次の日の授業の予習をして気を失うようにベッドに倒れ込む生活でした。20年の人生で避けてきた全てのことを履修し直したような６年間でしたが、おかげさまで窮地に追い込まれても「まぁ、なんとかなるだろう」と思えてしまう根拠のない自信はつきました。

医官という職業をご存じでしょうか？ 「医師たる幹部自衛官」と定義され、約1000名が全国津々浦々、時には海外にも飛びながら働いております。全国で自衛官が約22万人、医師が約34万人ですから自衛隊内でも医療業界でもレアキャラとして扱われています。私は今年で医官６年目になりますが、海外赴任、緊急出航への同行、他国軍との合同訓練など多様なミッションに参加しました。前述の通り医官はレアキャラですので、仕事現場に着いてみると医師は自分一人だけという状況が度々発生します。私は耳鼻科医ですが、外傷から生活習慣病、公衆衛

生管理まで仕事の９割が自分の専門外の案件です。海外で重症患者の受け入れ先を血眼で探したこともありました。時には医療の常識が通用しない現場で孤独を感じることもありますが、国語科の西原和美先生が仰っていた「孤独を楽しみなさい」という言葉を反芻し自分を奮い立たせています。思い返せば、人生で躓く度に高校時代の思い出と附設高校関係者の皆様に助けて頂いてきました。この場を借りて心から感謝申し上げます。これからも附設高校とのご縁を大切にしつつ、微力ながら平和な日常のために精進してまいります。

時代の変遷、附設の千変、私の原点

鄭麗嘉（60回生）

久留米附設高校が75周年を迎えますこと、誠におめでとうございます。また、この機会に歴代附設生の声がずらりと連なるのは素晴らしく心躍ることであり、その一端を担えますことを光栄に思います。私は附設高校60回生、女子５回生でした。附設は男子校としての歴史が長く、先輩たちの中では附設が共学になったことが最大の変化だと感じられている方が多いと思いますが、私が在校中の間も、新校舎が立ったり、女子の制服にズボンの選択肢が増えかけたり、附設中学も共学になったり、卒業後訪問したら階段に覗き防止のすりガラスが増えてたり（我々の代はこれが必要な経緯を特によく知っています）と、まさに附設は千変万化といっても過言ではない、時代の変遷を率先するような変化を遂げてきました。今思い返してみても、旧校舎の臭いトイレとわちゃわちゃした環境で過ごした前半の２年間と、新校舎の清潔なトイレとスタイリッシュな環境、特に中庭の謎の錯視タイルを受験勉強の合間に眺めながら過ごした後半の１年間で、過ごした時間がまるで別物で、まるでどちらかが現実でどちらかが夢だったような不思議な感覚を覚えます。

私が入った当時、附設高校は中学から持ち上がりで入った男子が150名、高校から入った男女が各25名といった環境でした。当時女子が行ける進学校は本当に少なく、高校になってようやく挑戦的な環境で勉強が出来るのが嬉しかったです。入学１週目に数学の城戸先生の小テストでサインコサインの意味が分からず打ちのめされたものの、対策すればするほど点が取れる定期考査が楽しく、同期の才女と夢中になって競った結果、最終的にはお互い教科平均95点超えというデッドヒートな争いをしていました。その時培った根性が、研究者となった今も私のエネルギーの源泉となっているように思います。今でもたまに高校時代の夢を見ますが、城戸先生の授業をちんぷんかんぷんのまま受け続け、次の定期考査どうなってしまうんだろう……と不安が募ったところで目を覚ましては、じわじわと湧き上がる安堵を噛みしめています。

ちなみに、この度同じく附設60回生の方と結婚しました。卒業後何年もたって久しぶりに連絡を取ったことがきっかけです。人生何が起こるか分からないものですね。

自由意志中心主義の先の真心へ

冨永晃輝（62回生）

自分で心を動かせると信じる「自由意志中心主義」は、近現代文明の原動力である。しかし、脳科学は、脳で行われる確率計算が人間の心を動かしているという「脳決定論」に収斂しつつある。脳決定論には、自由意志の入る余地はない。脳のアルゴリズムを（近似）計算できるAIが出現し、本人よりも個人を知り、その言

動を操れるようになるかもしれないとさえ言われる。これは、人間疎外なのだろうか？

脳の大統一理論と称される脳科学理論「自由エネルギー原理（以下FEP)」は、脳は「過去の経験と学習をもとに生き残るために何をすべきかを予測する臓器」であると主張する。私は、FEPの知見に照らして心を分析し、個人や組織の成長をデザインする会社を起業し、学校や塾、スポーツクラブなどに展開させていただいている（株式会社Lyapunov)。多様化の表裏として文化的同質性が希薄化する資本主義の弱点は、個々人の人生経験が狭くなり、新たな境遇に適応する予測が育つ保証がないことにある。しかし、経験・学習と脳の予測を見直すことで、その人の能力を発揮させる道筋を浮かび上がらせることができる。

昔も今も附設の友人との会話は刺激的だ。それを支えているのは、熱心な教育、豊かな知識・経験、思考力の鍛錬というインプットである。FEPによれば、環境に適応できていることが自己主体感をつくるという。そうならば、自分らしさは、「環境と調和するための予測をできる脳」に基づく感情と捉えるべきだろう。ライフステージの変化に適応するために、脳も変化しなければならない。自分らしくあるために、自分を変化させるという逆説性が興味深い。自分であり続けようとするほどに、自己主体感が低下する構図に自由意志中心主義の限界が露呈して見える。

日本には、真心（まごころ）という言葉がある。真心は、独立した自分の意志によってではなく、ある状況にもっとも取るべき行為や感情が自然に立ち上がってくることを尊ぶ境地である。脳は、自分の過去の経験と学習から最適な予測を立てる。脳は決して敵ではなく、38億年の生命の原理として私たちが生きることを支えているのだ。脳決定論と自由意志中心主義を調停する主客合一の概念として真心を捉えたい。FEPの知見を活用し、文明の未来に貢献したい。

米国にて問い直す「自己と社会」

月岡航一（63回生）

中学41回生、高校63回生の月岡です。2015年に附設高校を卒業後、大学ではシステム工学を専攻し、その後経済産業省に入省して６年弱が経過しました。これまでのキャリアとしては、通商政策（経済連携協定）や原発事故からの復興のための広報政策、デジタル政策として民間企業や政府内でのDXの推進に携わってきました。特に、デジタル政策については昨年より、生成AIを省内で導入して効果的な活用方法を議論するなど、政府内の業務改革プロジェクトを推進していました。

そして2024年の８月よりハーバード大学のケネディスクールに留学しており、米国はボストンで修士課程として公共政策を学んでいます。授業としては、エネルギー政策やファイナンスといった個別の政策分野に関する科目を選択できるほか、経済、統計、Negotiation（交渉術）などが必修で、そしてそのほとんどは講義に加えてディスカッションを重視しており、良くも悪くも日本の教育との差を感じていますが、全体として「リーダーシップとは何たるべきか」について、米国目線を中心として実学的に学ぶことに主眼が置かれている印象です。

学生の平均年齢は25歳程度ですが、クラスメートも外交官やコンサルタント、軍出身者など、これまで属したどのコミュニティよりも多様なバックグラウンドを持つ人々に囲まれて、刺激の多い生活を過ごしています。彼らと話していて、附設生の使命である「修羅道の世を救

う」とは何なのか、そしてその意義について世界規模で再認識することになりました。

実際、教授陣の中には国防総省の元幹部がいたり、イベントのゲストとしてシンガポール前大統領や台湾の元デジタル大臣が来校したりと、世界レベルの「すごい」人たちと身近に接する機会があるのは純粋に驚きですが、同時に彼らから何を得るのか、この２年間で自分の強みとしたい、深めたい分野とは何であり、誰と深いネットワークを築いてどのように自分の価値を最大化するのか、自分の将来に関しても難しい問に直面するようになりました。これまで以上に世界の中での日本、そして自身のキャリアを意識するとともに、慣れ親しんだ場所を離れて違った環境に身を置くことの重要性を実感しています。自身と社会に関するこれら２種類の問への回答を模索しつつ、視野と興味関心、交友関係の拡大・深掘りを追求する有意義な留学にしたいと考えています。

人と企業の縁結びという仕事について

安藤有瑠聡（64回生）

『タルムード』というユダヤ教の聖典にこんな話があります。ある人がラビ（律法学者）に「万物の創造主は天地創造の後に何をされているのか」と問うたところ、ラビは「縁結び（matchmaking）を行っている」のだと答えます。そして、それは「紅海を割るのと同じくらい難しい」と続けます。

ここで言う「縁結び」とは男女の婚姻についてらしいのですが、他にも求職者と求人、研究室と学生、保育所と子供など、マッチング問題と言われるようなケースはそこかしこに存在しています。

申し遅れましたが、中学42回生・高校64回生の安藤と申します。高校卒業後は東京大学文科Ⅲ類に入学し、入学時は哲学か宗教学でもやろうかと思っていたのに気がつけば看護学を専攻しておりました。修士課程修了後は大手人材サービス業に就職し、データサイエンティストとして「どんな推薦アルゴリズムなら求職者と求人のよいマッチングを生み出せるだろうか」と頭を悩ませています。

人材紹介サービスのプラットフォームを持つ、開発する立場というのは、ある意味では縁結びの神になる、ということです。とはいえ出来ることは場のルールを決めることくらいで、そこで人と企業がどのようにマッチするかを決めることは出来ないし、ユーザーに見限られて力を失うこともある弱いカミです。

縁結びの神としてどうあるべきだろうか……と考えてみると、例えば「ユーザー間・企業間の公平性」という概念があるのですが、ビジネス的にも数学的にも一筋縄ではいきません。さらに「公平性」が企業としての利益にもつながるという仮説を実証するのも大変です。

ただ、こういう民間の仕事も「修羅道の世を救う」一助になればよいな……とぼんやり思っています。

さて、そのような１：１のノードとエッジからなる二部グラフ的なマッチングとは別に、同窓会のようなゆるく繋がっているネットワーク、これも「縁」です。

先日東京の64回生で集まって同窓会を行ったのですが、卒業から十年経っても一堂に会すると学生時代の雰囲気に戻るのだなあ、と懐かしくまた嬉しくなりました。

この素晴らしいご縁に感謝しつつ、同窓生の皆さまが健やかで幸せに過ごされることを願ってやみません。

理不尽な判断が正解になる時

迎健太（65回生）

附設の校舎をあとにし、大学進学を機に上京したばかりの頃、都内でも名の知れた学習塾のアルバイトの面接に足を運んだ。当時の私には“大人”としての礼儀作法など知る由もなく、スニーカーにパーカーというあまりに気負いのない装いで出向いてしまった。そのとき面接官がほんのわずかに声を落として「パーカーにスニーカーなんですね……」と漏らした瞬間の微妙な空気感を、今でもはっきりと覚えている。

面接の日に行われた技能試験には、かなりの手応えがあった。しかし、三日後に届いた通知には、あっさりと「不合格」の文字が並んでいた。それを目にしたとき、正直に言うと心の内では「せっかく応募した東大生を落とすなんて、なんて愚かな判断だろう」と思った。もっとも今になって思えば、そうした傲岸不遜な感情を抱いてしまう性分こそが、落とされた理由であったことは明白である。

大学生活が始まると、同じような“理不尽”と思える出来事をいくつか経験し、次第に「社会とは思いのほか非合理的に動いているのではないか」という考えに至った。私はずっと、社会というのは学者たちの丹念な研究や統計的な理論にもとづいて効率よく運営されているものだと信じていたのだが、いざ社会を目の当たりにすると、人間の場当たり的な直感や好悪の感情によってあっさり決まってしまう事柄があまりにも多いのだと知り、幻滅した。

それ以来、他人の感覚的な判断基準に自分の人生を預けることに嫌気がさして、就職活動にも背を向けたまま、自分の力で事業を起こす道を選んだ。今はまだ道半ばであるが、世の中の歯車を逆回転させるような感覚を、少しずつ掴み始めている。事業家は天職であったと思う。

これまでの決断を振り返れば、たとえ周囲が定める常識から外れていても、自由な発想を受け入れてくれる附設の環境だったからこそ、自身の本当に望むことを理解することができたと思う。そうして、自分なりの道を切り拓いていく勇気を持てたことを、心から感謝している。

仕事とは知ること
～平和の偉業、果てまでも～

石川惣一朗（66回生）

附設を卒業して６年、今も心に残る校歌の歌詞があります。それは、３番の「修羅道の世を救うべく　平和の偉業任として　築く不朽の真善美　見ずや我らの大使命」です。戦争の傷跡の中に生まれた附設が、平和日本を建設する人材の育成を目指した心意気。私が防衛省で勤務するに至った一つのきっかけでもあります。

防衛省といっても、私は自衛官ではなく事務官という、平たく言うと戦略や制度の面から平和を支える仕事をしています。１年目の所属部署は防衛産業の維持・強化のための制度設計をしていました。私の仕事は、部署に届いた仕事の作業依頼を適切に割り振る等の交通整理であり、あらゆる情報が集積していました。正直単調な仕事だと思う場面もありましたが、全部勉強だと受け止めてみると、知的好奇心がくすぐられる感覚がありました。同じ感覚は、２年目に新卒採用担当だった折、説明会で特定の政策のプロと言える職員の話を学生と一緒に聞いているときにも感じました。自分も先輩のように活躍したいという希望、安全保障に広がる未開の地平、どれも胸が高鳴るばかりでした。そし

て、これは現在の所属でも全く変わりません。防衛省本省を離れて陸上自衛隊東部方面総監部で働いていますが、空挺とかレンジャーとか、誰もが噂に聞く厳しい訓練を乗り越えた人もたくさんいます。聞く話のすべてが驚きの連続です。

何が言いたいかというと、防衛省での毎日は刺激的で、日々成長を感じられる職場だということであり、そして、知識を吸収していく過程はこれ以上なく楽しいということです。（きっと来ないでしょうが）安全保障のすべてを知り尽くす日まで、この領域で走り続けたいと思っている今日この頃です。

米国ゾンビタウン旅行記

園田竜一郎（67回生）

高校卒業後に渡米し、現在私はコロンビア大学の修士課程に在籍している。先日、附設時代の友人Kとフィラデルフィアへ日帰り旅行に出かけたので、それについて書く。旅の最大の目的地は、ケンジントン通り、通称「ゾンビタウン」。麻薬の副作用で動けなくなった人々が多数集まることからそう呼ばれる。近年、米国ではフェンタニルという薬物が深刻な問題となっており、10〜40代の死因第１位が薬物の過剰摂取とされる。米国に来て６年目になるが、あれほど異様な光景を見たのは初めてだった。

朝６時、NYC発の車内では爆音のHip-hopが鳴り響く中、米国人用の座席は私たちには広く快適で、眠っている間にバス停に到着していた。そこから通りまでは電車一本で15分。零下の寒さに震えながら電車を待つ間、友人のＫと財布の中身を確認し合う。「襲われそうになったら渡そう」と現金を分ける。電車が動き出すと、風景は急速に荒む。二駅前からグラフィティが増え、崩れかけた家々が目立つ。一駅前の線路には大量の注射器と橙色のキャップが散乱していた。「マジでやばいな」と呟きつつも、引き返すことは頭にない。

駅を降り、階段を下ると、目の前に広がったのは、圧倒的な破壊の風景だった。屈伸した姿勢のまま静止する男。分厚いコートに身を包み体を縮こまらせていた彼からは命の鼓動すら感じ取れなかった。足元を埋め尽くす注射器とゴミが、ここが「人間らしさ」を完全に剥ぎ取られた場所であることを告げていた。通りには点在する無気力な人々。円になって集団で完全にキマって動けなくなった者もいれば、薬の取引を進める者もいた。彼らの空虚な表情が、この場所が時間と希望を失った空間であることを語っていた。これほど異常な光景が年単位で放置されている現実が、この国の時に過剰な自由・資本主義が抱える冷酷な闇を浮き彫りにしていた。

住宅街に足を伸ばすと、家々はすべて鉄格子で覆われ、まるで監獄のようだ。少し歩いた先で、視界に飛び込んだのは、水色に塗られた壁。その中央には白い大きな文字でこう書かれていた。

"Hope Lives Here!"

あの街に希望が息づいているのか。それとも、それを信じることで辛うじて前に進めるのか。答えは見つからないまま、その場を後にした。

どんなことをやってきたか

坪山倫（68回生）

この度は附設高校75周年、誠におめでとうございます。「どんなことをやってきたかにフォーカスして」と寄稿を託されましたので、1,000字弱の限られた紙幅でこれまでの自らの

生活について綴るのは些か野暮だと感じつつも、卒業を間近に控える身としても有難い機会と存じ、学部足掛け５年の日々を振り返ってみます。

68回生が附設高を卒業した2020年３月、合格発表後の慌ただしさの中に時が滑り落ちるのを横目に、世間では新型コロナウイルス感染症が魔の手を伸ばしはじめていました。新生活も儘ならぬうちに、入学式を筆頭として４月の大学行事が殆ど中止となり、授業も暫くはZoomを利用したオンライン形式で行われると発表されました。周囲の東大生がどのような人種であるかも不確かなまま、画面の向こうの同級生とディスカッションをしたり、時には寝転んで講義を受けながら眠ってしまったりする日々が続きます。期待に胸を膨らませていたキャンパスライフとは程遠く、精神的に参ってしまう友人も少なくない中で、自分自身は各地に散らばった附設の仲間と時々 Zoomを繋ぎ、孤独に陥りそうな心を食い止められていました。

と、紙幅を余りにも贅沢に費やした結果、56ヶ月のうち最初のひと月について語るだけで目安の半分を割いてしまいました。以下、要約的に述べます。

一年次は、附設高23回生の大先輩である高山博先生が主宰されていた国際政治・経済のゼミや、米ハーバード大の学生や韓国・インドなどアジアの他大生と交流するためのサークルに参加し、自分が入学前に空想していた文系東大生の理想像を必死になぞるように過ごしました。二年次には、コロナ禍で希薄になった学生間の交流機会を増やす目的から多くの読書会を主催し、社会科学、人文学に留まらず、数学や生物学に至るまで幅広く文献を漁りました。この時の縁で多様な分野を専攻する優秀な友人に恵まれたことは、学生生活における収穫の一つです。三年次の夏から四年次の夏にかけてドイツ、フランスに11ヶ月間の留学をし、欧州23カ国を巡って見聞を広げました。附設中バスケ部時代の先輩とブダペストで再会し、一緒にサウナで整ったのは良い思い出です。帰国後に自主留年して院試に合格し、来年度からは東大社会学研究室の修士課程生となります。目下卒論の執筆に追われ、四苦八苦の師走です。

さて、後半は電光石火の走馬灯のようでしたが、ここまでの内容で寄稿の主題である「どんなことをやってきたか」は満足しているものと独断します。改めて、この度は創立75周年、誠におめでとうございました。

デジタルゲームと娯楽性と生き方

中嶋伶（69回生）

今回の寄稿にあたり、「何をやってこられたか」にフォーカスを当てて欲しい、とご依頼を受けました。しかし現在22歳、未だ社会を知らぬ私めとしては、むしろ今後やっていきたいことを書く方が楽だと思いましたので、そちらにもフォーカスを当てながら書かせていただきたいと思います。

さて、私は大学でデジタルゲームの美学を中心に学び、今まさに「ゲームは面白いなあ」という感慨のみを携えて卒業し、某ゲーム制作企業へ就職する予定です。

ゲームは第一に娯楽であって欲しいというのが私個人の考えですが、同時にゲームは優れた表現媒体でもあります。『Fursan al-Aqsa』というゲームは2022年発売ですが、パレスチナ問題について明確にパレスチナ擁護の立場を取り、戦争ゲームの形式の中で表明していることから、最近英国で購入が規制されたとのことです。政治的意見の「暴力的な」形式による表現は20世紀後半あたりからずっと行われていますし、今

さら悪だとは思いません。しかし、ゲームは他の表現媒体と比較して「没入感」などが特徴とされ、そんな媒体の中で政治的意見を「経験させる」ことに危機意識が向けられるのは、自然なことにも思われます。

ゲームは娯楽であると同時に表現媒体として「優れすぎている」ことを、遊ぶ側も作る側も、もう少し意識すべきなのかもしれません。

しかしこうも不安定な世情の中で、前にもまして「より娯楽である娯楽」「純粋に娯楽である娯楽」が求められているようです。とはいえ、娯楽でありながら娯楽的ではないイメージを表現することは不可能ではないでしょう。最近だと『Metaphor』というゲームは「王選」というモチーフを用いて現代民主主義を風刺するような表現が全体を通して見られましたが、あくまでも楽しく遊びやすいRPGです。

逆風ばかりの当世において逆風自体をメタ的に見る、ある意味では「斜に構えた」感じが、附設卒業生としての理想像だと勝手に考えております。そして、ゲームはメタ的視点の提供も、逆風の助長も可能な媒体なのでしょう。

私としては、斜に構えた心と童心とを共に忘れずに、今後社会で活躍していきたいという抱負を述べて、寄稿を締めさせていただきたいと思います。

新時代、天才報われたし

藤村康平（70回生）

海外の大学では履修登録した科目を完遂できずに終わる生徒は多く、科目によっては中間テストを境に履修生の過半数がドロップアウトする状況も珍しくない。生き残った生徒は翌月の更なるふるいがけに備えて勉強する。そこには何の競争もない。教室の最前列に座る一部の熱心なヨーロッパ各国出身の生徒は度々教授の話を遮っては質問し、教授は更なる質問の余地がなくなるまで具体的な説明を補い続ける。

あるモルドバ人はいつも教室の２列目に座る生徒だった。彼は頻繁にではないが、的確なタイミングと文脈で質問する。秀才が「既知を答えるプロ」だとすれば、天才は「未知を問うプロ」であり、彼の質問はどれも後者の才を呈していた。少数の秀才なる勲章は大勢の凡人との比較により担保されるが、天才はテスト無くして天才であり続ける。だから中間テスト返却日、彼が自信満々に他の友達たちの点数を聞き回っているのを見た時は悲しかった。神童が点数制という序列に従わされた結果、持ち前の頭の良さで他人を見下してしまうのは実に嘆かわしい。僕は天才が秀才よりも優れているとは思わない（そのような比較こそ優劣二元の枠に拘束される）が、過酷な競争は前者をして我は後者なのだと勘違いさせる暴力たり得ないだろうか。どんなに主体的に生きていても、他人の行為が自分の所業に対する想いを強制する場面は必ずある。その強制力が、自己確立がままならない子どもたちに対して干渉しすぎる社会では「努力は報われる」などの薄っぺらな喧伝は通用しない。「努力は優れた者から順に報われる」のであって、天才が競争に勝つのは同時に彼が秀才でもある場合に限られる。

僕は高校卒業後からブダペストの大学で情報工学を学んでいる。ベクトルや微分積分の知識基盤が薄いまま線形代数・統計学を必死に勉強している友人たちを見るにつけて、我が母校は数多くの凡人を教養ある秀才に育て上げる先進的な教育機関だったのだと確信する。同時に、未完の天才児たちを優劣比較の闇に葬り去る広大な荒野でもあったのではないかとの疑いもまた捨てきれない。競争に執着することの効用が

いかに限定的かを（彼らの健全なライバル意識を阻害しない形で）生徒に力説する先生と、それを理解する生徒が増えれば、附設は真に調和のとれた天才集団を作り上げると思う。

母校創立75周年を祝して

宮﨑莉子（71回生）

母校が創立75周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

私が在学中で特に忘れられないのは「卒業論文・制作」です。「醤油醸造と音楽振動の関わり」というテーマで研究を行った私は、幸い高校でも機会に恵まれ、5年ほど研究を続けていました。酵素や発酵が持つ力に魅了された私は現在東京大学農学部生命化学・工学専修で微生物学や生化学を中心に学んでいます。まだまだ知らないことばかりで、日々知識が増えていくのが凄く楽しいです。

東京に来てから約3年、私が一番印象に残っているのは「iGEM」という「合成生物学」分野のコンテストへの挑戦です。このコンテストには世界中から400以上のチーム、8000人以上が集まり、1年間実行してきたプロジェクトの発表を行います。環境保全、治療、診断などの部門が存在し、参加者はプロジェクト考案から始め、実験とシミュレーションを繰り返すのですが、単に研究成果を競うのではなく、専門家や利害関係者との対話、合成生物学を広めるための教育活動など、1年間の活動全てが評価されます。私たち東大チームは、緑内障の早期検知デバイスの開発を目標とする研究を行い、診断部門で参加しました。10月にはフランス・パリで行われた大会に参加し、審判団からの質問に答えたり、参加者同士で成果を説明したりしました。結果は、診断部門での相対評価でNominee（入賞）、プロジェクトの完成度の絶対評価ではGold Medalを獲得することができました。研究内容については学術論文化する予定で、これからもチームメンバーと頑張っていきます。

附設で夢中になれるものを見つけられたこと、たくさんの人とのつながりを得られたことのありがたさを強く実感しています。私も、卒業生として誰かの力になれるように、そして夢を実現できるように、努力を続けたいと思います。母校がこれからも、生徒たちにとって「夢中になれる何か」を見つけられる場であり続けることを願っています。

卒業後に続く附設生活の影響

福山月（72回生）

中学50回生・高校72回生の福山月です。2024年12月現在、私は東京大学教養学部理科一類に所属する一年生でございます。卒業してからまだ1年も経っておらず、現役附設生気分が未だに抜け切れない中でこの文章を書いております。

私は現在、iGEM UTokyoという団体のチームリーダーを務めております。これは、他の生物の遺伝子を導入するなどして、新しい機能を持った生物を創り、社会に役立てていこうという合成生物学を研究している、東京大学の団体です。毎年10月に開かれる国際大会に出場しており、ここ数年は常に附設の卒業生が所属しています。現在は新しいプロジェクトを立ち上げるべく、案を練っては論文を読むことに勤しんでおります。

私は高1春の時点で生物への関心はさほどな

く、科目選択も物理にしようと考えていました。しかし坂田先生の生物の鬼授業によって私は生物に魅せられ、気付いたら理科は生物を選択しており、高２の授業では専門書を読まされる生物に「洗脳」されていました。その影響は現在も続いており、このような生物を研究する団体に自主的に所属し、チームリーダーまでやるほど熱心に取り組むようになってしまいました。

また、私は現在、富木合気道という実践試合のある合気道の稽古に励んでいるのですが、この富木流は柔道と深いつながりをもった流派でございます。中１の３学期、体の大きかった同級生の鶴丸君を小倉先生が柔道部に引き入れたことで、仲の良かった私も一緒に入部したのですが、中高４年も柔道を続けていると忘れられなくなったようです。柔道部にこそ入部しませんでしたが、実戦形式で人を投げることができるこの合気道を大学から始めてしまいました。

大学で新しいことを始めようといくつかのサークルの新歓に行ったのですが、結局続けているのはこの２つだけ。附設時代、必ずしも自分の意志で始めたことではなくとも続けてきたことが、大学に入っても私の活動の芯を形成しています。附設を卒業して日も浅いためこれからの人生がどうなるかは分かりませんが、きっと附設で過ごしてきた６年が人生のいろいろな場面で影響を与え、私の人生をより充実したものにさせてくれるのだと思います。現在と未来の附設生にとって、附設が将来の希望の揺籃地であり続けることを願い、また信じています。

Ad 人類の幸福のために
Felicitatem
Humanam

各界で活躍する附設生たち

「あの人附設らしいよ」
「本当に？　えー、知らんかった」

「あの先輩、元〇〇の社長だったらしいよ」
「凄い!!　今度同窓会にいらっしゃるのかなあ」

　こんなやり取りを聞くたびに、本当にこの学校は１学年200人しかいないのによくこれだけ著名人や各業界で活躍している方々を輩出しているなと感動し、同窓の方々に敬愛の念を感じます。恐らく、どんな附設生がいるのか興味がある方も多いと思います。もちろん、メディア等で有名な方もいますが、こんな分野にこんな人がいるのだなと、ぜひ紹介したい先輩、同級生、後輩を推薦という形で募集し取り纏めてみました。推薦方法は附設同窓会グループのFacebookでご案内し、そこから推薦していただいた方々となっています。当然全てを今回網羅できたわけではありません。今回のこの取り組みについては、賛否のあるところだとは理解していますが、75周年記念ということもあり敢えてチャレンジしてみました。同窓生を誇りに思いそして若い方々の励みとなる機会に少しでもなれば幸いです。今後は、この75周年記念誌を手に取り、ぜひ紹介したい、推薦したいという方も出てくることと思いますので、続きは同窓会ウェブサイトにてご案内し追加していくことにしたいと考えています。

政治家として活躍されている同窓生

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
14	江藤義行	大川市長	77歳で初めて立候補し見事当選を果たした。これから4年、真の市民生活の向上に向け働いてくれるものと期待します。
34	大家敏志	参議院議員	叩き上げで培った強さと優しさをあわせもつ次世代のリーダー。
36	丸山達也	島根県知事	高校時代はわたり大きめの学生服を履きこなしていた。広川が生んだ超正義感溢れる政治家。
38	武内和久	北九州市長	北九州市長！　北九州が変わる予感！！
39	古賀　篤	衆議院議員	まじめで大人しい印象なのに、附設中学の生徒会長に立候補して、孫泰蔵を破って会長就任したのには驚いた。あの「当選」経験が今に活きていると思う
42	楠田大蔵	太宰府市長	お父様は元筑紫野市長。民主党時代に議員浪人を経験するも現在は太宰府市長の二期目を務められています。
57	蓑原悠太朗	八女市長	全国最年少市長。遠慮せず、前例にとらわれず大きなことに挑戦して欲しい。

学問の世界で活躍されている同窓生

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
23	高山　博	東京大学名誉教授 中世シチリア島の歴史研究で紫綬褒章を受章	同級の町田校長は天才肌なれど、高山くんはコツコツタイプ。
29	田村俊夫	一橋大学　商学部教授	超理論派のM&Aのプロ。みずほ証券時代は時事ニュースの解説を自ら全社員にメール配信されていたとか。

ビジネス業界で活躍されている同窓生

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
8	井手和英	第一勧業銀行（現みずほ銀行） 元常務取締役 筑邦銀行　元頭取 元同窓会長	温和で優しいおじさま。信義に厚く、福岡県内の同窓会懇親会にはどこでも出かけてくれる。
11	古賀　啓	飯野海運 元取締役副社長執行役員	いつも周囲に気配りされている素敵な先輩です。附設ゴルフコンペで初めてご一緒させていただいてから約８年、幹事力や細やかな配慮について多くを学ばせていただきました。2023年はエイジシュートおめでとうございました。
11	田中稔一	三井化学　元代表取締役社長 元日本知的財産協会会長 2023年４月旭日重光章受章	お忙しい中でも時間を割いて後輩の人生相談に乗ってくださる素敵な先輩です。食事の席でいただいた貴重なご助言は今後も忘れません。2023年は旭日重光章のご受章、誠におめでとうございました。
13	長谷川房生	お仏壇のはせがわ 元代表取締役社長 元同窓会長	同窓会愛は右に出る者なし。発想力もピカイチ。日本一の同窓会を目指そう！
17	中本祥一	電通　元代表取締役副社長	とにかく温かい懐の深い大先輩、こういう方になりたいと思う先輩です。
19	井上　治	住友電気工業 代表取締役社長	豊かな海外経験を背景に“繊細、かつ、大胆”に社会貢献を推し進める経営者。
21	栗木康幸	東京エレクトロンデバイス 元代表取締役社長	超ジェントルマン。バランス感覚素晴らしく、敬愛する先輩です。声もいい！！
22	高橋精一郎	三井住友銀行 元代表取締役副社長	故安倍元首相は親友で、八女のご実家（繁枡）にも安倍さんは何度か来られたらしい。早めに国債運用を止めたことで、メガバンクでリーマンショックの影響を最小限にとどめた功績がある。運用の国内第一人者。
23	河村浩明	シマンテックジャパン　元社長 DropboxJapan　元社長	とにかくパワーあふれる先輩です。毎回熱い議論を頂き、気づいたら終電になることも。人として惚れてしまいます。
23	吉田清隆	商船三井　元常務執行役員	マネジメントのプロとして同窓会を引っ張っておられます。
23	清水　明	協和キリン株式会社 元常勤監査役	華の中学１回生。冷静沈着、作業の緻密さは折り紙付き。柳川出身ながら縁あって那覇在住、初代沖縄支部長を引き受けてくれた。
23	石澤　顕	日本テレビホールディングス株式会社　取締役副会長 読売中京FSホールディングス 代表取締役社長 読売新聞グループ　本社取締役	日本を代表するメディアカンパニーのトップ！　同窓会でお会いした時に気さくにお話していただきました。
23	長田忠千代	三菱UFJ銀行 元代表取締役専務 東京急行電鉄　元常勤監査役	大手企業退職後も数十社におよぶベンチャーを支援するスーパーマン。
28	石井光太郎	コーポレートディレクション 元代表取締役	日本初の独立系戦略コンサルティングファームの元代表。日本における戦略コンサル黎明期から活躍する先輩です！

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
28	江崎俊介	菊美人酒造社長 （福岡県酒造組合会長）	菊美人酒造社長で福岡県酒造組合会長として活躍中。
29	木下宏太郎	喜多屋社長 （福岡県酒造組合副会長）	喜多屋社長で福岡県酒造組合副会長として活躍中。
33	原口達哉	大樹生命保険 代表取締役社長	在校時より寡黙だが言うことは言う芯の強さが際立つ。校訓「和而不同」を地でいく硬骨漢。新卒時から日本生命一筋。ラグビー部OB。
36	筒井俊英	英進館　代表取締役社長	英進館社長として多くの附設生を輩出。いつも寄付や広告有難う。
39	三木雄信	トライオン　代表取締役社長	元ソフトバンクの社長室長。そこで学んだ経営手法をダイエットにも応用し、最近22kgの減量に成功した鉄の意志の持ち主。
39	孫　泰蔵	起業家、投資家	いつも笑顔で朗らか。その穏やかで情熱的な姿勢は、附設時代から連続起業家となった今でも変わらない。彼の書く文章を読めば、その温かさや人となりが伝わってくる。
39	堀江貴文	起業家、投資家	「ホリエモン」の作られたイメージと本人の中身は全く別。超多忙のはずだがLINEはすぐに返信くれる気さくさがあり、自分のやりたいことや信念にまっすぐな人柄。
40	福田久也	エイジス　代表取締役社長	うちの投資先を買収したのが高校の後輩だったとは!?　売却するまで知らなかったけど、縁を知りとても感動。
41	富永泰輔	福岡運輸株式会社 代表取締役社長	運輸業界のリーダー。
43	鍵本忠尚	株式会社ヘリオス 代表執行役社長CEO	上場起業家。
43	柳瀬隆志	株式会社グッデイ 代表取締役社長	ホームセンター業界のリーダー、IT化が凄い。
45	高田旭人	株式会社ジャパネットホールディングス 代表取締役社長 兼 CEO	ジャパネットたかた社長！　長崎スタジアムシティを創る。
45	田村篤司	株式会社ポピンズ 取締役COO 株式会社ポピンズエデュケア 代表取締役社長	高校時代は生徒会長を務め、リーダシップやチャレンジ精神が抜群。運動神経にも優れ、彼のウインドミルは誰も打てませんでした。
51	福島智史	グロービスキャピタルパートナーズ　パートナー	若き日本を代表するベンチャーキャピタリスト!!　ぜひ、グロービスのpodcastをご覧下さい。
59	城戸祐亮	リーガルスケープ 共同創業者＆CTO	附設出身ベンチャーの星に!!　東京－福岡自転車走破の根性で。
61	與島仙太郎	ACES　共同創業者 兼 COO	AI国内の代表格東大松尾先生一押しのベンチャー!!　との評判。

医療業界で活躍されている同窓生

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
21	松浦　弘	社会福祉法人恩賜財団済生会 福岡県済生会　福岡総合病院 院長	福岡県下の医療の中核として、病める人をすべて受け入れ、医療活動、福祉活動を推進している病院のリーダー。
23	原口　勝	公立八女総合病院企業団みどりの杜病院　院長	八女筑後医療圏の「がん難民」を救うべく、赤ひげ先生を地で行く緩和ケアの第一人者。
24	筒井裕之	高木病院院長 （前九州大学循環器内科教授）	九州の雄、九大病院教授を経て、国際医療福祉大学で有名な高木病医院院長を勤めている。
25	安陪等思	久留米大学理事 （元久留米大学放射線科教授）	久留米大学放射線科教授を経て、2025年度より久留米大学理事。
25	田中法瑞	八女公立病院院長 （元久留米大学放射線科教授）	久留米大学放射線科教授を経て、八女公立病院院長。
25	山下裕史朗	柳川療育センター施設長 （元久留米大学小児科教授）	久留米大学小児科教授を経て、柳川療育センター施設長。
27	江藤正俊	九州大学医学部泌尿器科教授 日本泌尿器科学科理事長	ご尊父は久留米大学教授、ご自身は九大教授。二代続けて泌尿器科の権威。九州大学病院キャンパス附設会の会長も！　ご年配の男性、お困りの際はご相談を！
27	田中　守	慶応義塾大学医学部産婦人科教授 一般社団法人日本周産期・新生児医学会　理事長 附設三四会代表	女性にとって(?)頼りがいのある産科教授。慶応大学の附設OBOG会である「三四会」代表もやられています。附設OGの方お困りの際はご相談を。
30	外間　昭	琉球大学病院　元診療教授	琉球大学医学部2期生。2000年から米国ハーバード大学マサチューセッツ総合病院に2年間留学。2014年から2022年まで琉球大学病院診療教授。まさに沖縄の医療を切り開いてきた「ファースト・ペンギン」。
31	岩崎浩己	独立行政法人国立病院 　機構理事 九州医療センター　院長	最新・最適な医療を提供する福岡の中心的な病院のリーダー。いつも笑顔で病む人に寄り添う優しい先生です。
33	岡本　勇	九州大学呼吸器内科教授	九州大学呼吸器内科教授で、附設卒業生を部下に数名率いている。
36	高山義浩	沖縄県立中部病院感染症内科	沖縄県立中部病院で感染症内科や在宅緩和ケアに取り組む。新型コロナウイルス感染症におけるオピニオンリーダーのひとり。現在は規制改革推進会議（内閣府）の専門委員として制度改革にも取り組んでいる。
36	野田英一郎	九州医療センター　広域災害・救命救急センター長	福岡県新型コロナウイルス感染症調整本部副本部長として活躍した。救命救急・災害医療のプロとして活躍中。

士業で活躍する同窓生の方々

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
9	松尾憲一郎	MATSUO知財総合事務所　会長 元日本弁理士会　副会長 勲五等旭日双光章	「日本弁理士会の元副会長松尾」は同期のリーダーです。
32	葉玉匡美	TMI総合法律事務所 パートナー	2006年の改正時に会社法立案担当者として、会社法の作成に寄与。現在のわかりやすい会社法を作ったのは葉玉先輩です！
37	田邊晴康	PwC有限責任監査法人 福岡事務所長	PwC有限責任監査法人の前身のあらた監査法人の発起人社員として監査法人の立ち上げ業務に従事！

芸術・芸能で活躍する同窓生の方々

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
33	本村健太郎	俳優・弁護士	「行列のできる法律相談所」で全国区の人気者になった健太郎君、高校演劇部を初めて全国大会に導いた名部長でした。
36	脇　義典	JAZZミュージシャン グラミー賞受賞	数年に一度帰国公演してくれるブルーノート東京での彼の演奏は格別。ぜひNYのライブハウスに行って彼の演奏を聴きたい。
52	谷口　崇	アニメクリエーター	アニメ業界の鬼才。おしり前マンで有名。Wikipediaに受章内容多数。
52	松居大悟	映画監督	『アフロ田中』面白かったよ！！　映画『バイプレイヤーズ』もナイスでした！！
68	松延　希	芸人	芸名、友田オレ。『R-1グランプリ』史上最年少優勝者（2025年３月時点）！ 歌のうまさとネタが調和していて、独特の抜き（This Manなど）もツボでした。男く祭ではステージで米米CLUBの『Sure dance』を歌っていたそうです。

その他の同窓生

回生	お名前	ご勤務先／役職	推薦者コメント
47	西高辻信宏	太宰府天満宮　第40代 宮司	サッカー部と美術部を掛け持ちしていて、サッカー部でのポジションはディフェンダーでした。今はアートコレクターとしても有名なようです。

後援会の出来事
――1994(平成6)年～2024(令和6)年

今般、記念誌への寄稿にあたり、後援会事務室に保管されている1994(平成６)年度以降の後援会総会の『討議資料』及び『附設後援会だより（2001(平成13)年度以降は、「附設後援会便り」に名称変更)』を用い、後援会にて歴史をまとめてみました。そこには歴代後援会の皆様が、附設を良くするために活動を続けてきて下さったご様子がしっかりと記録されておりました。そこで、その結果を「後援会の出来事：1994(平成６)年～2024(令和６)年」と題してご紹介いたします。ご紹介部分の文責は後援会役員の中川智治（高校38回生）です。

1. 現行規約への改正

後援会の規約が、現在の形に改正されたのは1994(平成６)年11月に開催された後援会平成６年度秋季総会でした。

当該総会に提出された『討議資料』及び同年12月発行の『附設後援会だより』No.2によると、規約の主な改正点は、①役員会の機能を強化したこと、②理事会の役割を明確化したこと、そして、③活発で機能的な後援会活動を目指して、学年理事会、地域別保護者会の支援を明確にしたことであったとあります。また、『討議資料』中にある改正内容の説明によると、例えば、規約第10条に規定されている総会における会員の議案提出権の設置は、「誰にでも開かれた会、自由な討議をし、民主的な運営をすることと、もしかすると混乱するかもしれないという危惧を比較した場合、議長の議事運営能力に期待して、混乱を回避し、自由な討論と民主的な運営を重視し」た結果である事が説明されています。

一方、なぜ規約改正が必要とされたのかについての説明は、後援会総会の『討議資料』及び『附設後援会だより』にはありませんでした。この点、翌年の1995(平成７)年７月発行の『附設後援会だより』No.1にある荒木志朗会長（当時）の「後援会会長あいさつ」が、参考となるのではないかと推察されますので、長文とはなりますが、引用します。

「……そ（後援会）の活動は、必ずしも順風満帆とは言えない時もございました。進学校としての久留米大学附設のあり方と教育のあり方をめぐって、意見の対立が起こり平成４年から５年にかけての２年近く、後援会は大変な混乱の中にありました。平成５年秋の総会は混乱のため、遂に開かれませんでした。昨年春ようやく、後援会は正常に機能する状態に戻りました。それから１年を経た今、この後援会の混乱は何だったのか、振り返って整理しておくことは、その歴史を今後に生かす上で、とても大切であると思います。それぞれの人が、附設の為に良かれと思ってしたことが、よけいに混乱を生じさせる事となり、そのために多くの誤解を生み、相互不信と対立を生じることとなりました。このことは、実に不幸な事態でありました。この事態を生み出した原因は、情報の不足とコミュニケーションの不足であったと思われます。情報不足の状態は正確な判断を狂わせ、互いのコミュニケーションの不足は、誤解と対立を生み出す原因となっておりました。さらにその背景をたどっていきますと、情報不足とコミュニケーション不足は、『全てお任せしますので、後はよろしくお願いします』という保護者の態度に由来していたと思います。子供の教育の場に対して無関心であることは、無責任であることと同じでありましょう。新しい後援会の規約が出来上がり、後援会が再出発した今、皆様にお願いしたいことは、子供の教育環境に目を向けていただきたい、ということです。親として子供に何をしてやれるかを考えること、それは

とりもなおさず、親として子供の教育環境を支援する上で何ができるのかを考えること、に通じるものであります。どうか今後とも、附設の教育環境の充実と後援会の活動に、皆様のご協力と積極的な参加をお願いするものであります。」（引用にあたり、一部文字を補い、また改行を削除しています）

2. 学年別保護者会（学年理事会）

学年別保護者会は、各学年の保護者が、一堂に会して、情報共有や意見交換を行い懇親を深める重要な後援会活動の一つです。この学年別保護者会は、現行規約への改正後に始まった新たな取り組みでした。

学年別保護者会の補助が、後援会予算案に初めて計上されたのは、1994（平成６）年度春季総会でした。そして、この春季総会の段階では、後援会の規約は旧規約であり、学年別保護者会を運営する学年理事会（第24条）について規定する現在の規約はまだ起草すらされていませんでした。

予算案が承認された平成６年度春季総会後の６月に発行された『附設後援会だより』No.1を見てみると、佐川公矯会長（当時）の以下のようなメッセージがあります。「附設の中心である生徒と先生方をサポートできる機能的な後援会を作り上げる事…（中略）…のために、①先生方と父母との意見交換の場を設ける　②規約の見直し、規約改正を行いたい。①については、学年別に、理事や有志が中心になり、開催してほしい。…（中略）…また、必要に応じて地区別後援会も開催されるだろうが、後援会はこういう会を公的に援助したいと思う。費用の面も予算計上している。②について、現規約は実情に合わなくなったので、見直したい。規約改正委員会を設けて、11月の秋の総会までに改正案を提示したい」（引用にあたり、改行を削除しています）とあります。このことから平成６年度以前には、学年別保護者会は後援会組織において位置づけられていなかったことが推察できます。

学年別保護者会の実施は、まず中１の学年が、春季総会直後の同年７月に各クラス懇談会を実施しています。なお、平成６年度の中１の学年理事は、６月開催の春季総会後に決定したばかりでした（『附設後援会だより』No.1参照）。中１のクラス懇談会が逸早く開催された経緯については、同年12月発行の『附設後援会だより』No.2に、「中１理事会において、保護者の方々それぞれにいろんな不安をお持ちで、保護者間の交流が必要であり、附設６年間の礎は中１にありという思いにかられ、独自に学級懇談会を行う事になりました」と、その経緯が説明されています。一方、同年11月に開催された秋季総会において、学年理事の規定及びその役割（「理事は所属するクラスの担任と協力してクラスの親睦と連絡協調を図る」）を含む現行の規約が承認された後には、中学２年から高校２年までの学年懇親会が、それぞれ開催されています（註：理事としての選任は４月に行われていました）。その結果、平成６年度は、高校３年を除くすべての学年において、懇親会が開催されることになりました。同年の『附設後援会だより』No.2及びNo.3に掲載された懇親会の開催報告を見ると、高校１年及び高校２年の学年懇親会では、各学年の父母間の懇親だけでなく、卒業生の保護者を招いて体験談を聞くなど、工夫が凝らされていました。

翌1995（平成７）年度には、学年別保護者会について、「各学年理事の皆様に活発な活動をしていただき数多くの懇親会等を開催していただ

けました。結果的には、すべての学年（但し、高３は謝恩会）…（中略）…が開催されました。…（中略）…先生方と父母、そして保護者間の連携もでき、子供達の学校生活における生活態度への関心も高まり、附設の子供達を取り巻く教育環境がより一層充実したものになってきているようです」と評価されています（1996(平成８)年３月『附設後援会だより』No.3参照)。

その後、高校３年以外の学年懇親会は、秋に保護者会に併せて開催されることが定例となり、高校３年の謝恩会は、卒業式後に開催されるのが定例となっているようです。

3. 地域別保護者会

地域別保護者会は、各地域の保護者が学年を超えて懇親を深める、中高一貫校たる附設を特徴づける後援会活動といえるでしょう。

『附設後援会だより』に、現在の地域別保護者会に関連する言及が初めて登場するのは、先に引用した1994(平成６)年６月に発行された『附設後援会だより』No.1の会長メッセージです。しかし、その時点において、後援会規約には地域別保護者会に関する規定は存在しませんでした。

同年11月に開催された秋季総会では、地域別保護者会及び寮生保護者会についての規定（第37条及び第38条）を含む規約改正案が提出され、その改正の意図について、「規約改正の経過及び改正内容の説明」では以下の様に説明しています。「これは、現在既に地域によっては、保護者の方々が会合を持っていらっしゃるのを、後援会としても何らかの形でとり入れようとしたものです。そして、これらの地域別の会が後援会全体としてかかわりを持つのは、後援会からの資金的な援助と、その会の中で出た意見を後援会として取り上げることができる方法を設定することだと考えております。そして、それ以外の点は、それぞれの地域で集った方々が自主的に設定してゆけばよいことで、何もお仕着せの規約を作って介入することではないと考えております」（引用にあたり、改行を削除しています）　そして、同年12月発行の『附設後援会だより』No.2によると、議長からの規約改正の説明として、「活発で機能的な後援会活動を目指して、学年理事会、地域別保護者会の支援を明確にした」と報告されています。改正案は満場一致で可決されたとのことです。

地域別保護者会の開催報告は、同年12月発行の『附設後援会だより』No.2に掲載されており、佐賀地区（参加者51名)、熊本地区（参加者20名）及び北九州地区（参加者43名）の開催が報告されています。その中で、佐賀地区の参加者の感想・内容には「佐賀地区の保護者会は例年、高２の保護者の当番、すったもんだがありましたが……気がつけば盛会の内に終了」との感想が紹介されており、当初から開催にあたってはご苦労があったことがわかります。当初、地域別懇親会の開催は、熱心な一部の地区や各地区の学年毎の単位で開催され、また人数の多い地域では開催が難しいなどの問題がありました。

これを受け、1997(平成９)年11月の秋季総会において、各地域の区割りが提案されました。当時の各地区の区割りと会員数は以下の通りでした。第１区（福岡市西区、早良区、城南区、中央区、前原市、糸島郡、その他：176名)、第２区（福岡市博多区、東区、宗像市、宗像郡、古賀市、糟屋郡、その他：127名)、第３区（福岡市南区、春日市、大野城市、筑紫野市、太宰府市、那珂川町、その他：226名)、第４区（久留米市、小郡市、甘木市、朝倉郡、三井郡、浮羽郡、三潴郡、その他：200名)、第５区（筑後

市、大川市、柳川市、八女市、八女郡、山門郡、その他：42名）、第６区（大牟田市、荒尾市、三池郡、その他：28名）、第７区（北九州市、飯塚市、直方市、豊前市、行橋市、中間市、田川市、田川郡、遠賀郡、嘉穂郡、築上郡、京都郡、その他：90名）、第８区（佐賀県：70名）、第９区（熊本県：29名）、第10区（大分県：11名）、第11区（長崎県：10名）、第12区（山口県：15名）、第13区（遠隔地：30名）。

翌年の1998(平成10)年度春季総会の討議資料では、「新しい地区割りによる地区別保護者会及び学年保護者会の開催」が活動の重点項目として掲げられ、同年12月発行の『附設後援会だより』では、「地区別の保護者会は、高２の方々に担当していただくことになり、すでに５つの地区で開催され、また学年別の保護者会も活発に行われています」と報告されています。

倉田正平会長（当時。高校13回生）は、1999(平成11)年３月発行の『附設後援会だより』において、「地区別後援会は、地区毎の保護者の皆様がお互いに知り合い親睦を深めていただくことで、学校や教育に関する情報不足を少しでも補うことを目的としており、ご参加いただいた保護者の皆様には、おおむね好評であったと報告を受けています。ただ、一部の保護者の方、特に理事の方に大変なご負担を掛けたことや、地区割りが必ずしも実情にあっていなかったことなど、ご指摘も多く、今後より実情にそう、有意義な地区別保護者会となるように改善を致したいと思います」と各地区での地域別保護者会の開催状況を報告しています。なお、規約第５章（第37条から第41条）に定められている地域別保護者会は、総会の『討議資料』や『附設後援会だより』では、地区別保護者会としており、一般的にはこの名称が定着していったようです。

地区割りについては、2012(平成24)年度に第13区が解散、そして、2020(令和４)年度から中央区が第１区から分離し単独区となっています。また、令和５年度時点の各区の会員数は、第１区（157名）、中央区（129名）、第２区（121名）、第３区（178名）、第４区（252名）、第５区（22名）、第６区（11名）、第７区（85名）、第８区（59名）、第９区（50名）、第10区（14名）、第11区（15名）、第12区（21名）でした。第１区と中央区を併せた旧第１区及び第９区の会員数の増加が大きな変化といえるかもしれません。

4. 食堂委員会

食堂委員会及び寮食委員会は、1996(平成８)年５月に開催された理事会において、「給食のあり方を検討する委員会を設立して欲しい」との声を受けて設立されました。同年12月発行の『附設後援会だより』No.2によると、食堂委員会は、保護者代表委員（各学年代表及び通学生代表：計９名）、食堂運営会社側委員（３名）、学校側委員（校長、中高教頭を始めとした学校関係者９名）から構成され、一方、寮食委員会は、保護者代表委員（各学年の寮生代表６名）、食堂運営会社側委員（３名）、学校側委員（寮監長、副寮監長を始めとした学校関係者５名）から構成され、同月に発足しました。

『附設後援会だより』に繰り返し掲載される食堂委員会の活動は、食堂のメニュー等についてのアンケート結果の報告と一ヶ月分の献立予定表の掲載です。最初の掲載は、1999(平成11)年11月に発行された『附設後援会だより』でした。以後、毎年12月に発行される『附設後援会だより』における定例の報告となっていったようです。

その後、食堂の運営は、2015(平成27)年度か

ら変更となっています。この変更は「後援会側の強い要望が発端」となり議論が始まり、「意見や要望内容の検証及び（食堂運営）業者変更の是非に対する討議を行った結果、運営の抜本的な改善を行う必要があるとの判断にいたり、業者変更も視野に入れた上で検討を進めていくこと」となったそうです。そして、「入札対象食堂運営業者に対して、附設の要望を取りまとめた仕様書等を配付し、提案書の提出を依頼」した上で、「後援会による独自の試食調査も」行い、「各社が提案書を基にプレゼンテーションを」が行った結果の変更とあります（2014(平成26)年12月発行『附設後援会便り』参照)。この点、島添隆雄会長（当時。高校25回生）は、2015(平成27)年７月発行の『附設後援会便り』において、「昨年来学校にお願いしていた食堂の改善につきまして、吉川校長、鹿毛事務長が中心となられて学校側に早急に対応していただき、本年度より食堂が一新されました。私も早速何度か利用させていただきましたが、提供される料理の質と味など、多くの面で随分と改善されたと思います」と感謝の言葉を述べています。

5. その他

その他、1994(平成６)年から2024(令和６)年の30年の中で起こった大きな出来事としては附設の共学化があります。共学化は、2005(平成17)年４月から高等学校の共学化が始まり、2013(平成25)年４月から中学校の共学化が始まります。2003(平成15)年12月発行の『附設後援会便り』では「平成17年度からは高校の男女共学化という大きな変化が起こります」と記されていましたが、実際には自然な流れとして捉えられていたようです。木下明会長（当時。高校37回生）は、2018(平成30)年７月発行の『附設後援会便り』において「今年の３月に高校66回生が卒業し、いよいよ附設は中１から高３まで全ての学年が中学から共学化した学年となりました。…（中略）…久しぶりに学校に来た最初は学内に高校からの女子生徒がいることに驚き、次に中学の女子生徒が１年、１年増えていくことに驚いていましたが、今では男女比がそれほど変わらない状況について何の違和感も感じなくなりました」と記しています。

また、もう一つ大きな出来事としては、2019(令和元)年12月から世界的大流行となった新型コロナウイルス感染症の影響です。特に、2020(令和２)年度及び2021(令和３)年度の後援会活動は、その影響を大きく受けました。この点につき、井本浩樹会長（当時。高校33回生）は、2022(令和４)年３月発行の『附設後援会便り』において「今年度もコロナの影響が多方面にわたり、飲食を伴う懇親会等は中止せざるを得ませんでした。しかし、役員会や理事会の会議等は、出席者全員のマスク着用、手指のアルコール消毒、短時間での迅速な進行、窓を開放しての室内の換気など、最大限の感染防止策をとりながら行いました。現場で協力していただいた役員・理事・保護者の皆様に、厚く御礼申し上げます。」と述べています。

過去30年の『附設後援会便り』を読み返してみると、その時々の会長のリーダーシップのもと、役員、理事、保護者そして学校関係者が緊密に協力し合っている様子がよく分かります。今後もこの流れが続くことを切望いたします。

（文責：中川智治（38 回生））

附設の保護者として

附設と三姉妹

秋吉さおり
（高校69回生 優佳／高校71回生 美佳／高校73回生 里佳　母）

2025年３月に三女が附設高校を卒業します。長女が中学47回生として附設中に入学したのが2015年４月のことですから、一家として足掛け10年間お世話になったことになります。

長女は一見した雰囲気とは異なり、三姉妹の中でも特に自分の好きな分野に強いこだわりがあり、母として心配していましたが、そんな娘のことを細野先生を始めとする学年団の先生方に温かく見守っていただいたおかげで、良いところを失わず伸び伸びと育った印象を抱いております。

次女は、三姉妹の中でも特に内向的な性格で、入学前から新しい環境に馴染めるか心配しておりました。しかし学友にも恵まれ、先生方にも支えていただいたことで娘なりにゆったりと着実に力をつけ成長していくことができました。大学でも自分のペースでじっくりと勉強に取り組むことができております。

三女は唯一高校からの入学ということで、私自身も初心に戻ったつもりで三女に寄り添ってまいりました。外交的な性格も持ち合わせており、文化祭でのダンス披露や体育祭での応援団への参加など、充実した生活を送ってくれていることにとても安心しておりました。これから大学受験本番を迎えますが、本人なりに納得したよい結果になってくれることを切に望んでおります。

そして三人全員とも高校では合唱部に所属しました。性格が異なる三人ですが、それぞれが合唱部での充実した活動をとても楽しんでいる様子に接すると、これまで多くの生徒が合唱部での活動を通して充実した毎日を送れているのは、顧問・兼行先生の、全員の手をとって等しく導いてくださる、素晴らしい包容力の賜物なのだろうと感じております。

2024年１月に開催されました第13回合唱部定期演奏会では、長女を客演の伴奏者としてお招きいただきましたが、附設での学校生活では交わらなかった二人が一緒に立つステージを観ることで大変感慨深く感じました。

一家として10年間お世話になり、どの思い出も附設だからこそ得られた素晴らしいものだと思います。母として私自身も素敵な日々を過ごさせていただきました。

附設校と先生方に大変感謝申し上げるとともに、今後のさらなる発展をお祈り申し上げます。

世界を広げる

田代桂子（高校56回生 夕貴 母）

娘の夕貴は、附設高校56回生として入学しました。同じく附設高校卒業生である夫（29回生・田代英樹）が語っていた「自由な校風」に憧れ、女子第一期生としてその門をくぐりました。全校生徒の中で女子はわずか21名。「動物園のパンダみたいに教室を覗かれた」と娘が笑って話していたのを、今でも覚えています。

当初、女子が入れる部活動がなかったことや、女子トイレが校舎に一つしかなかったことなど、環境には様々な制約がありました。それでも、担任の堤先生・田中先生をはじめ先生方が親身になってサポートしてくださり、生徒側からも活発な議論があり、女子生徒が学校の一員として活躍できる場が広がっていきました。そのおかげで、娘は部活動や生徒会活動、学園祭、合唱大会、体育祭でのチアリーディングなど、様々な行事に積極的に参加し、高校生活を存分に楽しむことができました。家にも、学園祭の

準備や日々の交流のために夕貴の友人たちが訪れ、私や私の母（夕貴の祖母）と一緒に楽しい時間を過ごしました。

附設高校での三年間は、恵まれた環境の中で質の高い教育を受けられる貴重な時間だったと感じています。先生方や友人、多様な分野で活躍する卒業生から刺激を受けながら、娘は新しい世界を広げ、努力を重ね、希望する大学に進学しました。そして現在では、スイスにある国連の人権高等弁務官事務所で、小学生の頃から抱いていた「人の役に立ちたい」という夢を彼女なりの形で実現しています。

できれば九州の大学に進学して医療系の資格を取り、一緒に暮らしてほしいという親心もありましたが、私は娘の夢を応援することを心がけ、いつも一番の応援隊でいるよう努めました。高校時代、娘は大反抗期で、仕事の繁忙期も重なり、大変な時期もありましたが、娘も母になり、今では感謝や労りの言葉をかけてくれる良い相談相手です。１歳になる孫と毎週欠かさずビデオ電話をかけてくれるおかげで、遠く離れていても不思議と距離を感じることはありません。むしろ、彼女の活躍を通じて私自身も世界を広げることができたと感じています。

これからも、附設中高が多くの生徒たちにとって「世界を広げる場」であり続けることを願っています。附設中高の益々の繁栄を祈念いたします。

附設の保護者として
～男女共学化について感じたこと～

木下　明（高校66回生 快／高校69回生 理央奈 父）

私は、平成元年に37回生として附設を卒業しました。縁あって、長男が66回生として、長女が69回生として母校にお世話になりました。長女が中学に入学したのは、中学が共学化して３年目の学年でした。学校としての大きな変革期ではありましたが、長男が入学した後、後援会役員として関わらせていただいていたこともあり、安心してお任せすることが出来ました。

附設の先生方には大変お世話になり、長男に続いて長女も無事に志望校に合格することができ、充実した大学生活を送っている様子です。附設の同級生たちは、全国に散らばっていますが、最近でもあちらこちらで集まって楽しそうに過ごしている様子を見聞きすると、附設のおかげですばらしい友人達と出会えていることに、親として感謝しかありません。

以下は、長女が在学当時、後援会会長として平成30年の同窓会報に掲載せていただいた挨拶文の一部です。当時、私が感じていた附設の雰囲気として、ご紹介させていただきます。

今年の３月に長男が無事に卒業しましたが、長女が現在高校１年生であり、引き続き後援会役員の職を続けています。今年３月に卒業した66回生が中学最後の男子校学年であり、今年度から中学１年生から高校３年生まで完全共学化となりました。

同窓生の皆様で、卒業後あまり母校を訪ねられてない方は、久しぶりに母校に行かれると驚かれるかもしれません。向学心に富んだエネルギーのある女子生徒が、半数まではいきませんが校内にあふれており、「男くさい」男子校のイメージは過去の遺物となりつつあります。高校演劇部は女子のみとなってしまい、男子生徒を募集しているそうです。女子生徒が生徒会長を務めるようになるのも、もう間もなくのことかもしれません。

校舎も新しくなり、男女共学化し、母校は大きく変化しています。ただ、それでも母校に流

れる空気、雰囲気があまり変わらないように思えるのは、同窓生としても保護者としても非常にうれしく感じています。男女問わず向上心のある生徒たちとそれに向き合う熱心な先生方が作り出す空気というのは、非常に素晴らしいものです。

幸せな子離れ

柳　彩（高校73回生 琉太／高校76回生 環太 母）

朝、最寄り駅の構内に入っていく際、決まって長男は３回、次男は２回、こちらにむかって「行ってきます」と手を振ります。私はその度にジーンとしてしまうのです。制服姿の彼らを送り出す毎日の作業は子育ての集大成。幸せな時間です（欲を言えば、鹿児島で寮生活をしている三男もここに居てくれればなあ、と考えないこともないのですが）。

私は今「子育て」を楽しめています。

それは、どの子もそれぞれに個性的で、自分と自分の好きなことを大切にし、自信にあふれ、青春を謳歌しているように見えるからです。日々の勉強については、ツワモノ達と対峙し、打ちのめされているはずですが、苦しそうにはしていません。むしろその実力の差を飲み込み、上には上がいると思い知らされながらも自暴自棄になることもなく、日々淡々と学びを続けています。『勉強すること』は自分にとって比較的得意なことであり、将来生きていくための最大の武器になるものだととらえているからだと思います。

どこかで私はすでに自分の子育てに納得しています。

小さかった彼らに私達家族は精一杯向き合い、そして彼らも精一杯付き合ってくれました。入学受験時は迷ったり悩んだり、苦しいこともたくさんあったと記憶していますが、振り返ればとても素晴らしい時間でした。だからこそ彼らの人生のこれからの選択に、母親の希望や意見が入る隙など無くたってかまいません。彼らの人生ですから。

「あなたがどんな進路を選び、どんな仕事に就きどんな夢を追いかけようが、わたしの知ったことではない。あなたがどんな人と結婚し、どんな家庭を築き、どんな子育てを選ぶのか……実はそれもわたしにはあまり関係ない。あなたが今努力しているのは、要するに自分自身とあなたの将来のパートナーと築く家族のためでしょ」と冗談を言い放つのです。

『幸せな子離れ』が完了した瞬間ですね。

息子達のおかげで、わたしにも素晴らしい出会いがあり、たくさんのお母様達とお友達になることができました。

高良山ハイキング中や、よく集まるコーヒーショップや、時にはお酒の席だって、似た環境で同じような苦労をしてきた私たちの話題は未だに子どもたちのあれこればかりです。かつて一心同体同然だった子どもたちは日々の学校生活の中ですっかり逞しく成長し、今では、子どもたちに起きている日々の出来事は子どもたちのものであり、母親である私達はそれを垣間見て楽しませてもらっているだけなのだと、理解できるようになってきました。母親である私たちも、久留米大学附設高等学校・中学校の保護者となれたことで、日々成長させていただいているのだと思います。

最後になりましたが、この度は75周年おめでとうございます。このような大きな節目を在校生・保護者として迎えられることを喜ばしく思っております。先生方には常日頃よりご丁寧な指導を賜り心より感謝申し上げます。この素晴らしい歴史を久留米大学附設高等学校・中学

校の更なる発展に生かし、より良い未来となりますよう願っております。

息子の高校生活の３年間

櫻井亜紀子（高校73回生 大聖 母）

私たちの息子は、独立心が強く、常に自らの進路を選びながら成長してきました。久留米附設への入学は高校からです。彼は医学部への進学を目指していましたので、医学部への進学に強い附設高校を選び、入学しました。しかし、高校生活を通じてさまざまな経験と出会いを重ねた結果、また自らの意志で進路を変更する決断をしました。その背景には、久留米附設高校での貴重な寮生活や、多くの友人や先生方、先輩たちとの出会いによる大きな影響があったのだと思います。

寮生活をし、親元を離れて生活する中で、息子はテニス部や器楽部に所属し、多様な活動に積極的に取り組みました。スポーツや音楽といった異なる分野に触れることで、単に学問だけでなく幅広い視野と経験を積むことができました。

さらに、生物オリンピックの日本代表に選ばれるという快挙も成し遂げました。親としても驚かされるほどの努力と結果を見せ、これは彼の「有言実行」の姿勢があったからこそだと思います。どんなことにも全力で向き合い、着実に目標を達成していく姿は、私たちにも大きな刺激となりました。

しかし、そんな彼にもユニークで微笑ましい一面がありました。提出物の期限に「〇〇日必着」と記載されていた際、「〇〇日ぴったりに相手に届かないといけない」と勘違いし、必要以上に焦ったり、「ご覧のスポンサーでお送りしています」というテレビのフレーズを聞いて、「ゴラン」という企業があり、たくさんの番組のスポンサーになっていると思い込んでいたりしました。少し抜けているところもありながら、一生懸命な姿勢が息子らしく、私たちもそんな彼を温かく見守ることができました。

高校生活で出会った友人や先輩との交流を通じて、息子は多くのことを学び、人間的にも大きく成長しました。そして、私たち親もまた、彼を通じて新たな気づきや成長の機会を得ることができました。息子が選んだ新しい進路に対して、私たちは心からのエールを送り、彼の未来が、そして附設高校みんなの未来が明るく充実したものであるよう願っています。

Ad 人類の幸福のために
Felicitatem
Humanam

組担任一覧（高等学校／卒業回生別）

久留米大学附設高等学校組担任一覧（卒業回生別）

卒業年	西暦	回生	高校1年					高校2年					高校3年				
			A組	B組	C組	D組	E組	A組	B組	C組	D組	E組	A組	B組	C組	D組	E組
平成12年	2000年	48	古賀直	徳永	藤吉	小林		小林	藤吉	古賀直	徳永		小林	藤吉	古賀直	佐々木健	
13年	2001年	49	堤	白水	木村	堺		堤	白水	堺	中島健		堤	白水	栢岡	中島健	
14年	2002年	50	岡村	吉川	藤吉	森上		岡村	森上	龍	吉川		岡村	森上	龍	吉川	
15年	2003年	51	佐々木	原田裕	中村一	轟		藤吉	轟	佐々木健	槌本		藤吉	轟	佐々木健	槌本	
16年	2004年	52	郡	原田裕	木村	岩松		小林	岩松	原田裕	郡		小林	岩松	原田裕	郡	
17年	2005年	53	檜垣	松﨑	木村	今村		木村	檜垣	松﨑	今村		木村	檜垣	松﨑	今村	
18年	2006年	54	古賀直	大藪	兼行	佐々木健		兼行	大藪	佐々木健	古賀直		兼行	大藪	佐々木健	古賀直	
19年	2007年	55	藤吉	中嶋	家中	轟		中嶋	轟	家中	藤吉		中嶋	轟	家中	藤吉	
20年	2008年	56	堤	龍	吉川	末永		末永	堤	龍	吉川		末永	堤	龍	吉川	
21年	2009年	57	緒方	槌本	岡崎	城戸		森上	緒方	城戸	槌本		森上	緒方	城戸	槌本	
22年	2010年	58	藤吉	中村喬	原田裕	行正幸		中村喬	藤吉	古賀直	原田裕		中村喬	藤吉	古賀直	原田裕	
23年	2011年	59	田中し	郡	家中	岩松		岩松	田中し	家中	郡		岩松	田中し	家中	郡	
24年	2012年	60	緒方	大藪	吉川	木村		木村	緒方	大藪	吉川		木村	緒方	大藪	吉川	
25年	2013年	61	中嶋	轟	赤池	鍋内		赤池	中嶋	轟	鍋内		赤池	中嶋	轟	鍋内	
26年	2014年	62	堤	吉田	岡崎	辻田		岡崎	山口	堤	辻田		岡崎	山口	堤	辻田	
27年	2015年	63	緒方	久藤	池ノ都	吉川		池ノ都	緒方	細野	吉川		池ノ都	緒方	細野	吉川	
28年	2016年	64	藤吉	鍋内	行正幸	原田裕	阿部健	鍋内	藤吉	阿部健	原田裕	行正幸	鍋内	藤吉	阿部健	原田裕	行正幸
29年	2017年	65	山口	岩松	池田	轟	森山	森山	山口	池田	轟	岩松	森山	山口	池田	轟	岩松
30年	2018年	66	久藤	渡邊	辻田	高平	木村	久藤	渡邊	木村	高平	辻田	久藤	渡邊	木村	高平	辻田
31年	2019年	67	池ノ都	兼行	田中し	福田	郡	福田	池ノ都	郡	田中し	兼行	福田	池ノ都	郡	田中し	兼行
令和2年	2020年	68	岡崎	家中	中西	轟	吉川	中西	森山	家中	轟	吉川	中西	森山	家中	轟	吉川
3年	2021年	69	久藤	緒方	梅野	中嶋	細野	久藤	中嶋	梅野	槌本	高平	久藤	中嶋	梅野	槌本	高平
4年	2022年	70	藤吉	酒井	長津	古賀沙	繁木	酒井	藤吉	古賀沙	長津	繁木	酒井	藤江	古賀沙	長津	繁木
5年	2023年	71	福田	伊藤	坂田	岩松	中西	福田	伊藤	坂田	中西	尾倉	福田	伊藤	坂田	中西	尾倉
6年	2024年	72	辻田	藤木	渡邊	原田裕	家中	久藤	渡邊	藤木	原田裕	辻田	久藤	渡邊	藤木	原田裕	辻田
7年	2025年	73	岡崎	吉形	小倉	小川	古賀沙	吉形	古賀沙	小川	山口	小倉	吉形	古賀沙	小川	山口	小倉
8年	2026年	74	森山	福田	堀川	中西	吉川	福田	森山	堀川	中西	吉川	福田	森山	堀川	中西	吉川
9年	2027年	75	細野	久藤	岩崎	佐々木雄	中嶋	久藤	細野	辻田	佐々木雄	中嶋					
10年	2028年	76	鍋内	藤江	原野	家中	古賀沙										

組担任一覧（中学校／卒業回生別）

久留米大学附設中学校組担任一覧（卒業回生別）

卒業年	西暦	回生	中学1年				中学2年				中学3年			
			A組	B組	C組	D組	A組	B組	C組	D組	A組	B組	C組	D組
平成12年	2000年	29	中島文	柳　瀬	轟		中島文	柳　瀬	轟		轟	西　山	安　永	
13年	2001年	30	阿部逸	岩　松	郡		阿部逸	岩　松	郡		郡	堺	岩　松	
14年	2002年	31	松　﨑	檜　垣	木　村		松　﨑	檜　垣	木　村		松　﨑	檜　垣	木　村	
15年	2003年	32	安　永	大　藪	赤　池		安　永	大　藪	赤　池		安　永	大　藪	岡　崎	
16年	2004年	33	名　和	柳　瀬	中村喬		中村喬	名　和	柳　瀬		轟	中村喬	名　和	
17年	2005年	34	堤	龍	吉　川		堤	龍	吉　川		堤	龍	吉　川	
18年	2006年	35	緒　方	岡　崎	槌　本		槌　本	緒　方	岡　崎		岡　崎	槌　本	緒　方	
19年	2007年	36	中村一	原田裕	中村喬		中村一	原田裕	中村喬		中村一	原田裕	中村喬	
20年	2008年	37	郡	檜　垣	岩　松		郡	檜　垣	岩　松		郡	檜　垣	岩　松	
21年	2009年	38	大　藪	赤　池	木　村		大　藪	赤　池	木　村		大　藪	吉　川	木　村	
22年	2010年	39	轟	兼　行	中　嶋		轟	兼　行	中　嶋		轟	兼　行	中　嶋	
23年	2011年	40	辻　田	龍	堤		辻　田	龍	堤		辻　田	龍	堤	
24年	2012年	41	安　永	中村一	秋　吉		安　永	中村一	桑野啓		中村一	池ノ都	久　藤	
25年	2013年	42	藤　吉	原田裕	行正幸		藤　吉	原田裕	行正幸		藤　吉	原田裕	行正幸	
26年	2014年	43	岩　松	田中し	池　田		岩　松	森　山	池　田		岩　松	森　山	池　田	
27年	2015年	44	木　村	高　平	安　永		木　村	高　平	渡　邊		木　村	高　平	渡　邊	山　口
28年	2016年	45	兼　行	田中し	國　吉	郡	兼　行	田中し	國　吉	郡	兼　行	田中し	國　吉	郡
29年	2017年	46	岡　崎	太　田	梅　野	龍	岡　崎	太　田	大　藪	龍	中　西	龍	岡　崎	大　藪
30年	2018年	47	細　野	緒　方	梅　野	中　嶋	細　野	緒　方	梅　野	中　嶋	細　野	緒　方	梅　野	中　嶋
31年	2019年	48	鍋　内	酒　井	國　吉	繁　木	鍋　内	酒　井	國　吉	繁　木	藤　吉	酒　井	國　吉	繁　木
令和2年	2020年	49	大　藪	吉　形	坂　田	太　田	吉　形	岩　松	坂　田	行正幸	堀　川	岩　松	坂　田	福　田
3年	2021年	50	原田裕	藤　木	渡　邊	江　田	原田裕	藤　木	渡　邊	江　田	辻　田	藤　木	渡　邊	江　田
4年	2022年	51	赤　池	堤	吉　形	小　倉	國　吉	堤	吉　形	小　倉	國　吉	高　平	吉　形	小　倉
5年	2023年	52	森　山	堀　川	田中し	吉　川	森　山	堀　川	田中し	吉　川	森　山	堀　川	田中し	吉　川
6年	2024年	53	細　野	江　田	岩　﨑	中　嶋	細　野	江　田	岩　﨑	中　嶋	細　野	江　田	岩　﨑	中　嶋
7年	2025年	54	鍋　内	原　野	藤　江	家　中	藤　江	鍋　内	原　野	家　中	鍋　内	原　野	長　津	家　中
8年	2026年	55	岩　松	尾　倉	阿部健	池　田	尾　倉	原田和	阿部健	池　田	尾　倉	原田和	阿部健	池　田
9年	2027年	56	原田裕	渡　邊	工　藤	藤　木	原田裕	渡　邊	工　藤	上　原				
10年	2028年	57	兼　行	吉　形	小　川	岩　﨑								

志願者入学者数推移

附設高等学校

入学年度（西暦）	入学年度	入学回生	志願者数（男・女）	入学者数（男・女）
2000	H12	51	438	58
2001	H13	52	393	63
2002	H14	53	456	51
2003	H15	54	477	62
2004	H16	55	531	50
2005	H17	56	683 (478・275)	57 (36・21)
2006	H18	57	718 (471・247)	52 (30・22)
2007	H19	58	655 (429・226)	61 (29・32)
2008	H20	59	640 (420・220)	65 (43・22)
2009	H21	60	591 (384・207)	53 (26・27)
2010	H22	61	626 (401・225)	54 (32・22)
2011	H23	62	599 (391・208)	63 (40・23)
2012	H24	63	620 (410・210)	53 (36・17)
2013	H25	64	460 (236・224)	57 (27・30)
2014	H26	65	421 (214・207)	52 (28・24)
2015	H27	66	430 (226・204)	52 (26・26)
2016	H28	67	538 (349・189)	51 (32・19)
2017	H29	68	499 (329・170)	51 (38・13)
2018	H30	69	453 (294・159)	40 (26・14)
2019	H31	70	302 (155・147)	40 (24・16)
2020	R2	71	313 (159・154)	50 (34・16)
2021	R3	72	279 (128・151)	54 (27・27)
2022	R4	73	289 (154・135)	63 (38・25)
2023	R5	74	412 (248・164)	47 (36・11)
2024	R6	75	404 (238・166)	52 (28・24)
2025	R7	76	265 (148・117)	48 (34・14)

附設中学校

入学年度（西暦）	入学年度	入学回生	志願者数（男・女）	入学者数（男・女）
2000	H12	32	676	151
2001	H13	33	608	156
2002	H14	34	615	157
2003	H15	35	605	159
2004	H16	36	629	150
2005	H17	37	647	151
2006	H18	38	706	153
2007	H19	39	590	157
2008	H20	40	557	153
2009	H21	41	520	156
2010	H22	42	514	152
2011	H23	43	519	152
2012	H24	44	448	159
2013	H25	45	584 (380・204)	164 (119・45)
2014	H26	46	612 (374・238)	164 (109・55)
2015	H27	47	645 (374・271)	172 (106・66)
2016	H28	48	642 (374・268)	170 (127・43)
2017	H29	49	805 (539・266)	162 (108・54)
2018	H30	50	852 (569・283)	166 (108・58)
2019	H31	51	629 (342・287)	166 (107・59)
2020	R2	52	654 (375・279)	162 (98・64)
2021	R3	53	684 (359・325)	166 (108・58)
2022	R4	54	660 (375・285)	169 (100・69)
2023	R5	55	879 (582・297)	166 (110・56)
2024	R6	56	845 (573・272)	171 (101・70)
2025	R7	57	654 (371・283)	169 (117・52)

歴代同窓会長・副会長

年月日	会長	副会長
H12年6月24日	井手和英	根城　堅・平澤宏太朗・長縄雅夫
H14年6月15日	井手和英	大神　甫・倉田正平・長縄雅夫
H16年6月6日	井手和英	大神　甫・渡辺望稔・倉田正平
H18年6月25日	古賀暉人	渡辺望稔・重永征廣・伯川志郎
H20年6月15日	古賀暉人	中村　晃・重永征廣・小田惠介
H22年7月3日	長谷川房生	中村　晃・一瀬徹夫・小田惠介
H24年7月1日	長谷川房生	一瀬徹夫・伯川志郎・小田惠介
H26年7月21日	長谷川房生	古澤生敏・川嶋文信・田中利美・中村和徳・吉本幸治
H27年7月26日	川嶋文信	古澤生敏・高橋友作・田中利美・中村和徳・吉本幸治
H30年7月29日	高橋友作	砂場泰裕・栗木康幸・岸　哲司・中村和徳・吉本幸治
R1年7月14日	高橋友作	砂場泰裕・栗木康幸・岸　哲司・吉田清隆・古賀善彦・吉本幸治
R2年9月26日	吉田清隆	砂場泰浩・古賀善彦・田中英治・島添隆雄・中村和徳・勝連　治
R4年7月17日	吉田清隆	古賀善彦・田中英治・島添隆雄・中村和徳・勝連　治・飯沼良介
R6年7月28日	吉田清隆	古賀善彦・江藤　宏・島添隆雄・中村和徳・高尾野健・飯沼良介

歴代後援会長・副会長

年度	会長	副会長
H12年	津田　彰	永野周志・永田榮子
H13年	田中義廣	永野周志・伊藤咲子・武下善則
H14年	田中義廣	武下善則・金山甲仙
H15年	田中義廣	武下善則・橋本　栄
H16年	古賀幸久	武下善則・橋本　栄
H17年	古賀幸久	笠弘　佳・島田久三江
H18年	古賀幸久	笠弘　佳・後藤仁美
H19年	眞名子文男	笠弘　佳・後藤仁美
H20年	眞名子文男	緒方徹志・後藤仁美
H21年	眞名子文男	緒方徹志・柳田国彦
H22年	緒方徹志	古屋勇一・斧田穂隆
H23年	緒方徹志	古屋勇一・森　明彦
H24年	緒方徹志	藤﨑敬介・森　明彦
H25年	藤﨑敬介	森　明彦・恒吉佐知子・島添隆雄
H26年	島添隆雄	森　明彦・松岡昌子・木下　明
H27年	島添隆雄	緒方徹志・立花悦子・木下　明
H28年	島添隆雄	木下　明・有馬多美・的場哲哉
H29年	木下　明	島添隆雄・有馬多美・的場哲哉
H30年	木下　明	江口了文・安西宏美・的場哲哉
H31年	木下　明	江口了文・木原千春・井本浩樹
R2年	井本浩樹	江口了文・安増雅史・崎原智恵子
R3年	井本浩樹	江口了文・安増雅史・松尾貴代美
R4年	藤本剛史	射場裕美子・安増雅史・松尾貴代美
R5年	藤本剛史	横倉義典・前山泰彦・松尾貴代美
R6年	藤本剛史	横倉義典・前山泰彦・今泉裕登
R7年	今泉裕登	藤本剛史・前山泰彦・樋口桂子

歴代事務室長

氏名	任期
平川三男	1998年4月1日～2001年3月31日
真子　勝	2001年4月1日～2006年3月31日
今村吉宗	2006年4月1日～2014年3月31日
鹿毛　巌	2014年4月1日～2018年3月31日
山本弘幸	2018年4月1日～2019年3月31日
穴井陽一	2019年4月1日～現在

新体育館・特別教室棟紹介

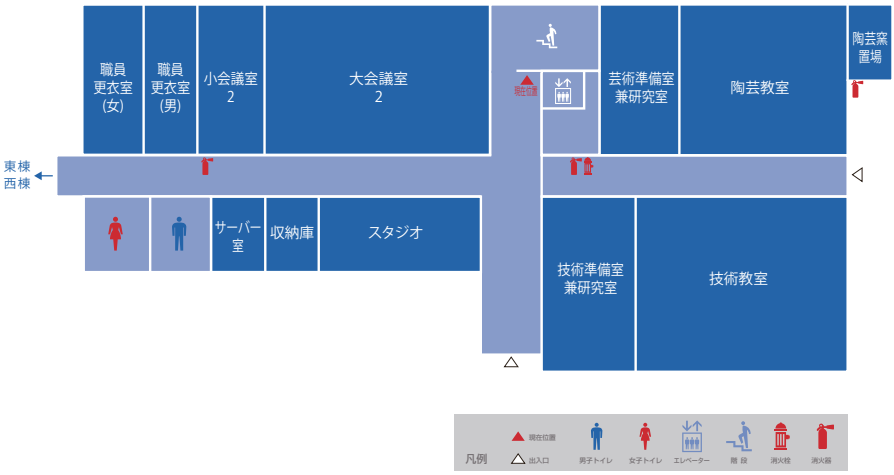
新体育館内観パース

新体育館外観パース

特別教室棟・新体育館鳥瞰パース

【特別教室棟配置図】

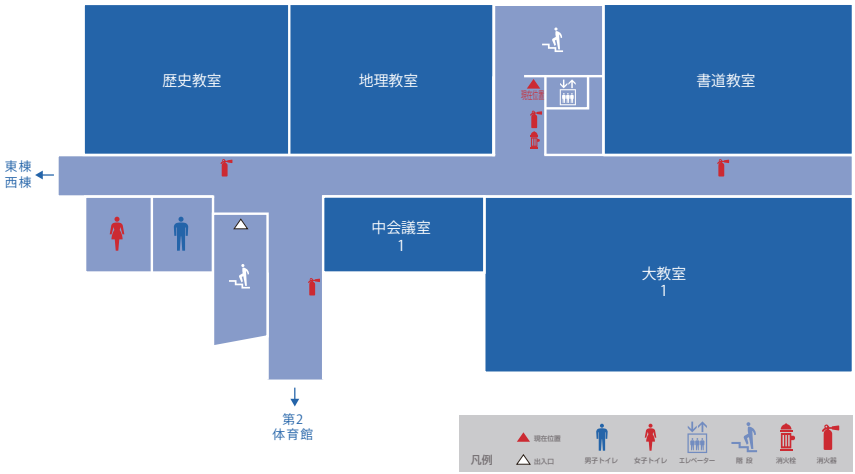
2F



職員更衣室(女)(男)	技術教室
小会議室2	技術準備室兼研究室
大会議室2	スタジオ
芸術準備室兼研究室	収納庫
陶芸教室	サーバー室
陶芸窯置場	

【特別教室棟配置図】

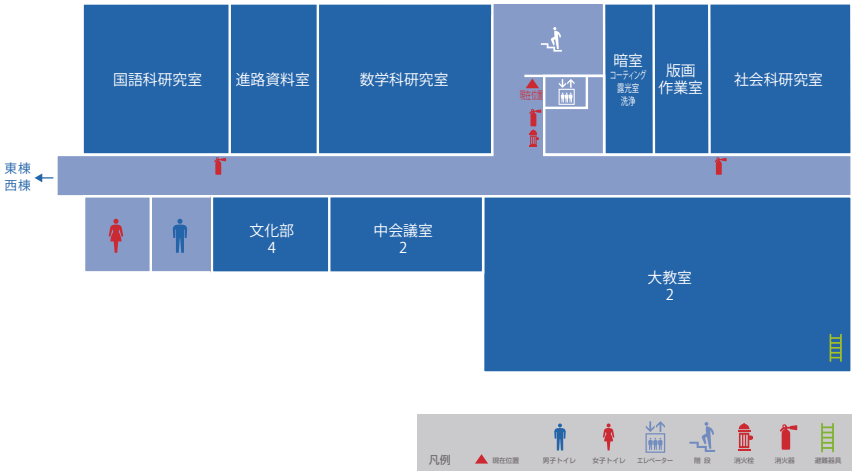
3F



歴史教室	大教室1
地理教室	中会議室1
書道教室	

【特別教室棟配置図】

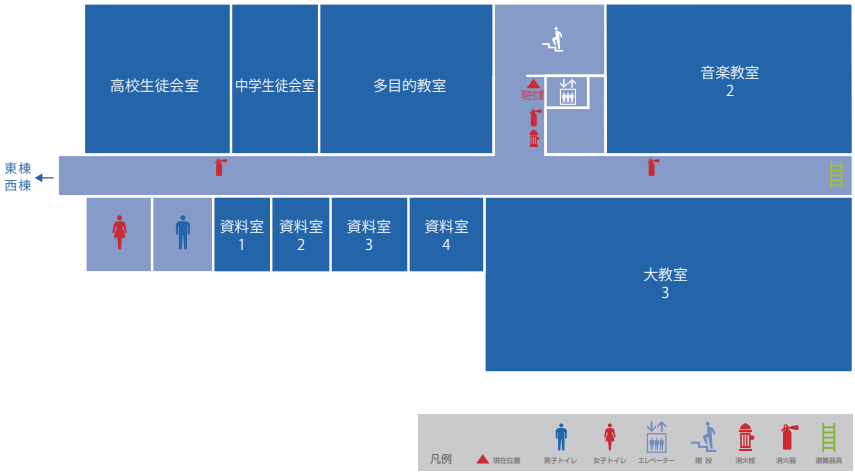
4F



国語科研究室
進路資料室
数学科研究室
暗室(コーティング・露光室・洗浄)
版画作業室
社会科研究室
大教室2
中会議室2
文化部4

【特別教室棟配置図】

5F



高校生徒会室
中学生徒会室
多目的教室
音楽教室2
大教室3
資料室1～資料室4

記念事業の実施概要

◎記念講演会・記念シンポジウム

2025(令和７)年11月２日(日)
９：30～15：30

会場：久留米シティプラザ　ザ・グランドホール

スケジュール

９：30
　進路講演会
　講師：青沼隆之氏（高校21回生）・草場鉄周氏（高校41回生）・堀江葵氏（高校60回生）
13：00
　記念シンポジウム
　１）開会の辞
　２）「附設の75周年を振り返る」
　３）講演：上田泰己氏（高校42回生）
15：30
　閉会

◎祝賀会

2025(令和７)年11月２日(日)
17：00～19：30

会場：萃香園ホテル

スケジュール

　１）ご挨拶
　２）乾杯
　３）スペシャルコンテンツ
　　ゲスト：友田オレ氏（高校68回生）
　４）校歌斉唱
　５）閉会挨拶

ポスター画デザイン・萩原芽衣（69回生）

附設年表

2000年の附設高等学校・中学校

2000年度	第８代校長・樋口忠治先生 第30回男く祭『極祭覚悟』(4/28・29) 中１歓迎遠足(4/29)　＊2014年度まで 高１キャンプ(7/25・26) 　＊九重。2001年度まで 高校体育祭(9/14・15)　＊２日間開催 中学体育大会(9/22・23)　＊２日間開催 中１校外学習(10/17・18)　＊平戸 中２校外学習(10/16～18)　＊鹿児島 中３研修旅行(10/15～18)　＊奈良・京都 附設高校50周年・中学校30周年記念行事(11/3) LL教室改装(11/3・４) 高２スキー研修(1/10～13)　＊北海道 中１・中２校内実力テスト(2/3)

21世紀の附設高等学校・中学校

2001年度	中２～高１芸術総合選択授業開始 ＊絵画・木工・陶芸・書道・声楽・器楽 生徒相談室で中学１年寮生の全員面接を開始 第31回男く祭『21世紀“しよう”』(4/28・29)
2002年度	２学期制(前後期制)導入　＊2011年度まで 定期テストが年４回に変更(前期２回･後期２回) 　＊2004年度まで 第32回男く祭『迫衆活祭』(4/28･29) 秋季休暇(10/8～14) 中１校外学習(11/14～16)が１泊２日～２泊３日に延長、鹿児島へ 中２の校外学習が中止 中３・高１進路講座(11/16)　＊当時は年１回
2003年度	第33回男く祭『男戦』(4/29・30) 中学体育大会(5/24)が２日開催から１日開催に短縮 高１調理実習(3/9～12)
2004年度	第34回男く祭『雄衆の美』(4/29・30) 高１上海中学との交流(7/26～29) 　＊2010年度まで 中１・中２校内確認テスト(2/5) 　＊校内実力テストから変更
2005年度	高校共学化 　＊高校56回生高１Aに女子21名が入学 定期テストが年６回に変更(前期３回･後期３回) 　＊2011年度まで 生徒相談室がカウンセラー２名体制に増員 　＊高１女子の全員面談を開始 第35回男く祭『男女響楽～ Boy Meets Girl ～』(4/29・30) 高校体育祭(9/10)が２日開催から１日開催に短縮
2006年度	第36回男く祭『附設の概念は変わります。』(4/29・30) 第８代校長・樋口忠治先生退任
2007年度	第９代校長・古田智信先生着任 第37回男く祭『響楽歓声』(4/30・5/1) 中１校内確認テスト(2/2) 　＊中２は外部模試受験に変更 田中雅邦くん(中学38回生)歌会始入選(題「火」) 第９代校長・古田智信先生退任
2008年度	第10代校長・吉川敦先生着任 第38回男く祭『Z超～限界の向こうへ～』(4/29・30) 北川光くん(中学39回生)歌会始入選(題「生」)
2009年度	第39回男く祭『我今要祭』(4/29・30) 中学入試(1/27) 　＊国語で聞き取り問題の出題開始 岸川滉央くん(59回生)国際数学オリンピック金メダル
2010年度	第40回男く祭『四十而附湧』(4/29・30) 旧高校寮・旧補習教室棟解体開始 　＊跡地には新高校校舎建設(2011年度完成) 中３・高１進路講座(10/30・12/11)が年１回から２回開催に増加 岸川滉央くん(59回生)国際数学オリンピック金メダル
2011年度	保健室が養護教諭２人体制に増員 第41回男く祭『附輝自由』(4/29・30) 新高校校舎(東棟)完成 　＊10/13より使用開始・２号館の全施設を仮移転 ２号館解体開始 　＊跡地には新中学校舎建設(2012年度完成)
2012年度	３学期制導入 　＊定期テストが年６回から年５回に 第42回男く祭『～黎明～』(4/29・30) 新中学校校舎(西棟)完成 　＊10/29より使用開始 臨時学校閉鎖(10/27) 　＊27・28日(土・日)で新中学校校舎への以降準備
2013年度	中学共学化　＊中学45回生に女子が45名が入学 40人学級導入　＊高校入試の定員数変更 クラス数増加　＊中学は40人４学級160人、高校は40人５学級200人 生徒相談室で中１女子全員面接を開始 第43回男く祭『維新伝心』(4/28・29)
2014年度	第44回男く祭『奮惚祭心』(4/27・28) 第60回全国高等学校演劇大会で演劇部『女子高生』が最優秀賞(7/30) 高３大学入試センター試験(1/17・18)の文系理科が基礎科目２科目選択に変更
2015年度	食堂の運営が愛恵会からコンパスグループ・ジャパン株式会社に変更 第45回男く祭『～礎～』(4/29・30) 中学歓迎行事(4/29) 　＊遠足から校内レクレーションに変更

2016年度	生徒相談室がスーパーバイザー１人、カウンセラー２人体制に増員 第46回男く祭『Riot ～うる祭やつら～』(4/29・30) ＊市民会館最後の年 第10代校長・吉川敦先生退任
2017年度	第11代校長・町田健先生着任 中学理科科目再編成 ＊中学２年生に総合科学を開講 生徒相談室がスーパーバイザー１人、カウンセラー３人体制に増員 第47回男く祭『不易流行』(4/30・5/1) ＊シティプラザ最初の年
2018年度	第48回男く祭『一新附嵐』(4/21・22)
2019年度	第49回男く祭『Re:set』(4/27・28) 中１校外学習（11/1～２）が２泊３日から１泊２日に短縮 中２校外学習（11/7～９）が再開、鯛生金山へ　＊翌年からは鹿児島 コロナ禍に伴う休校（3/3～15・20～22・24）
2020年度	コロナ禍に伴う休校（4/1～5/31） ＊学習指導は郵送物往復 生徒へのiPad支給開始 中学・高校時差通学 ＊堀川バスより通学のためのバスを手配 20分休み・40分休みを、前半30分休み・後半30分休みに変更　＊2025年度現在も継続 第50回男く祭『DayBreak』　＊休校に伴い中止 高３授業開始（5/25～） ＊この日以降、各学年５月中に１日ずつ登校日あり 始業式・入学式・入寮式（6/1） 高３大学入試共通テスト（1/16・17） ＊大学入試センター試験より変更。数学ＩＡの試験時間が60分から70分に延長。英語の配点がリーディング100点・リスニング100点に変更 高２スキー研修が中止（2/9～12）
2021年度	第51回男く祭『Torch』(4/25・27) 高１英語研修（11/14～16）　＊2022年度まで 高２スキー研修（2/8～11・中止） 楠元康生くん（70回生）国際物理オリンピック金メダル
2022年度	社会科科目再編成 ＊高１地理総合・歴史総合必修化、23年度より高２公共必修化 芸術総合選択授業に映像メディア表現が追加 第52回男く祭『Cuneum』(4/30・5/1) 中学入試（1/21）の社会・理科の試験時間が40分から45分に延長
2023年度	寮内預金制度廃止 第53回男く祭『Strivers』(4/29・5/1) 山之内望花さん（72回生）国際化学オリンピック金メダル 井上紗綺さん（72回生）国際生物学オリンピック金メダル
2024年度	校舎内全館Wi-Fi完備 第54回男く祭『さいは投げられた』(4/29・5/1) 高校体育祭（9/6） ＊久留米アリーナにて初の屋内開催 高３大学入試共通テスト（1/18・19） ＊情報必修化。国語に実用文が追加され、試験時間が80分から90分に延長。数学ⅡBが数学ⅡBCに変わり、試験時間が60分から70分に延長
2025年度	第55回男く祭『Re:birth』(4/26・28) 特別教室棟完成　＊9/1より使用開始 １号館解体開始 ＊跡地には第２体育館建設（2027年度完成予定） 中１校外学習（10/31・予定）が１泊２日から日帰り日程に短縮 附設高校75周年・中学校55周年記念行事（11/2・予定）

編集後記

編集担当

今回、高校75周年・中学55周年の記念誌を作るに際しましては、前回の高校50周年記念誌以降、即ち21世紀の附設を記録することを編集の軸に据えることに致しました。この間の最も大きなトピックは中高の共学化及び新校舎建設で、この二つが附設全体に及ぼした変化が見えるような冊子作りを心がけたつもりであります。昔の附設を知る方々がお読みになれば、その変化の大きさに驚かれることと思われます。

また、同窓会・後援会のご協力を得て、多くの卒業生や保護者の方々から文章を賜ることが出来ました。変化する附設ではありますが、その中でも、創立以来の気風・校風が変わらず受け継がれていることが、それらの文章を読む若い卒業生に伝わることを願っております。

編集担当は国語科から森山・池ノ都の２名が選ばれましたが、「授業が命」の学校業務の合間を縫っての作業は、不慣れや力量不足のために多くの方々にご迷惑をおかけするものとなってしまいました。ここに、お詫びを申し上げます。

最後になりましたが、永田見生理事長・内村直尚学長を始めとする大学当局の皆様、吉田清隆会長を始めとする同窓会の皆様、藤本剛史会長を始めとする後援会の皆様、吉川敦前校長を始めとする旧教職員の皆様、高尾野健社長（高校35回生）を始めとする粂川印刷の皆様、及び今回の記念誌を編集するに当たってご協力を賜りました全ての皆様にあつく御礼を申し上げます。

令和７年９月

国語科教諭　森山　淳一
池ノ都辰也

国語科集合写真より。森山、下段右端。池ノ都、下段右から２人目

編集委員

同窓生の皆さんには附設の思い出ではなく、敢えて卒業後のお話を寄稿頂くようにお願いしました。附設生が社会人（学生を含む）になってからの活躍の物語をこれからの若い世代の励みにしたいと考えたからです。あっ、同窓会クレカも保有していただき附設生である誇りとして頂ければ幸いです！　（36回生　飯沼良介）

１回生から30回生を担当させて頂きました。各先輩から素晴らしい寄稿文を頂き、ご協力いただいた諸先輩皆様に御礼申し上げます。私自身も大変良い機会を頂き大変勉強になりました。最後になりますが、皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。　（38回生　植木正光）

31回生から45回生を担当いたしました。2025年現在、40代中盤から50代後半にあたる世代で（いろんな意味で）脂の乗り切ったエネルギッシュなOBが勢揃いです。在学中にはあまり感じませんでしたが、今回あらためて附設の凄さを実感しました。次は100周年ですね。皆様に元気でお目にかかれますように願っております。　（39回生　金城順之介）

46回生から72回生まで担当させていただきました。40代の同世代～卒業後間もない大学生を含む若い世代の寄稿文からフレッシュなエネルギーを感じ、附設の将来が益々楽しみになりました。皆様と同窓会等でお会いできるのを楽しみにしております。　（47回生　淺枝謙太）

活躍している先輩方の記念誌への掲載の承諾、推薦メッセージのお願いを担当いたしました。企業のトップや自治体の首長など、各界で活躍されている皆様には、お忙しい中、迅速かつ丁寧な連絡を頂き、この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。今後、活躍する附設同窓生（と、同窓会クレカホルダー）が益々増えていくことを祈念しています！（47回生　下澤善之輔）

OBの皆様には、共学化後も変わらぬ附設の良さを、少しでも文章を通じて感じていただければ幸いです。

（写真：本人46回生当時）

（久留米大学附設中学校・高等学校後援会
森　龍祐（75回生保護者　自身46回生））

後援会の皆様には「附設の保護者として」をテーマに、通学生男子・通学生女子・寮生男子に区分、保護者の視点から見た最近の生徒の生活の一端がわかる内容をご寄稿いただきました。近来の附設の画期的な変化、共学化第一期の保護者の方のお話も大変貴重かと存じます。また後援会自体としては、50周年誌以降の25年間を総括、寄稿しております。共学化を通して大きく変化した「附設の今」を感じていただける事を祈念しています。

（久留米大学附設中学校・高等学校後援会
大神久美子（76回生保護者））

久留米大学附設高等学校75周年・
久留米大学附設中学校55周年記念誌

令和７年11月２日　発行

発　行　久留米大学附設中学校・高等学校
〒839-0862　福岡県久留米市野中町20-2
TEL 0942-44-2222㈹
FAX 0942-44-8257
https://fusetsu.kurume-u.ac.jp

印　刷　株式会社粂川印刷
〒112-0012　東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811
FAX 03-3943-9813

附設